

インフィニットストラトス ～空から降ってきた白銀と少女～

鉄血のブリュンヒルデ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、本来交わる事の無い2つの物語が何の偶然か、幾つもの運命が交差して「生まれてしまった」物語。

僕、ルアン・フォレストの親友ブレン・ターナーの娘と、とある星の少女少女達が巻き起こす騒がしく、慌ただしく、そして甘酸っぱい恋と波乱と戦いの物語。

「ギンギラ一番星を私は目指す!」

※1章と2章の名前を変更しました。

# 目次

## 大気圏突入ガール

新星少女 Episode Start | 1

新星少女 First Episode | 4

新星少女 Second Episode | 10

新星少女 Third Episode | 19

## 大冒険の始まり

始まりの始まり First Episode | 26

始まりの始まり Second Episode | 31

始まりの始まり Third Episode | 37

始まりの始まり Fourth Episode | 42

始まりの始まり Fifth Episode | 47

始まりの始まり Sixth Episode | 53

始まりの始まり Seventh Episode | 63

始まりの始まり Eighth Episode | 74

始まりの始まり Ninth Episode | 82

始まりの始まり Tenth Episode | 87

始まりの始まり Eleventh Episode | 92

始まりの始まり Twelfth Episode | 97

始まりの始まり Thirteenth Episode | 108

始まりの始まり Fourteenth Episode | 112

始まりの始まり Character introduction | 115

n | 115

## 入学！ギンギラ一番星

混乱と出会い First Episode | 119

282	混乱と出会い	Twenty fourth Episode	
277	混乱と出会い	Twenty third episode	
269	混乱と出会い	Twenty-second Episode	
	混乱と出会い	Twenty first Episode	261
	混乱と出会い	Nineteenth Episode	254
	混乱と出会い	Eighteenth Episode	248
	混乱と出会い	Seventeenth Episode	239
	混乱と出会い	Sixteenth Episode	232
	混乱と出会い	Fifteenth Episode	226
	混乱と出会い	Fourteenth Episode	217
	混乱と出会い	Thirteenth Episode	209
	混乱と出会い	Twelfth Episode	204
	混乱と出会い	Eleventh Episode	195
	混乱と出会い	Tenth Episode	188
	混乱と出会い	Ninth Episode	182
	混乱と出会い	Seventh Episode	174
	混乱と出会い	Sixth Episode	166
	混乱と出会い	Fifth Episode	160
	混乱と出会い	Fourth Episode	149
	混乱と出会い	Third Episode	139
	混乱と出会い	Second Episode	129

混乱と出会い Character introduction

確かな歪み

295

海上の激戦 First Episode 299

海上の激戦 Second Episode 307

海上の激戦 Third Episode 315

海上の激戦 Fourth Episode 320

海上の激戦 Fifth Episode 324

海上の激戦 Sixth Episode 331

海上の激戦 Seventh Episode 339

海上の激戦 Eighth Episode 344

海上の激戦 Ninth Episode 353

海上の激戦 Tenth Episode 359

海上の激戦 Eleventh Episode 364

海上の激戦 Twelfth Episode 368

海上の激戦 Thirteenth Episode 376

海上の激戦 Fourteenth Episode 384

夏休み! G i n G i r a S u m m e r t i m e

反撃! ステラの告白返し 393

何故の愛 399

舌に残る甘酸っぱさ 404

姉妹の事情 413

真夏の特訓 | 越えようとする者 | 418

ステラ、なんだかんだ初デート | 426

メガネの日！	431
大人の覚悟	435
そうだ、お祭りに行こう	439
愛が故に	444
終わり、そして始まる日	453
剣鬼と悪魔と復讐の騎士	464
後悔の中で	469
終わりの始まり	
赤き瞳 First Episode	473
赤き瞳 Second Episode	477
赤き瞳 Third Episode	479
赤き瞳 Fourth Episode	486
赤き瞳 Fifth Episode	489

# 大気圏突入ガール

## 新星少女 Episode Start

「ふんふんふーん♪後3ヶ月でつくくんも中学生かー。制服姿楽しみだなー♪」

大きなディスプレイの前で高速でキーボードを叩きながら言う少女は、ファンタジーから出て来た様な独特な格好をしていた。

機械的な兔の耳に、ドレスを纏った少女。

その名前は篠ノ之 束。

現在、この星で知らない人は殆どいないと言われるマルチパワースーツ『インフィニットストラトス』、通称ISの開発者である。

そしてここは、束の数ある秘密ラボの1つである。彼女はISの動力源のコアを467個製造し何故かそこで製作を止め、行方を眩ませた。故に彼女は世界の全ての国から絶賛逃走中なのだ。

そして、彼女がキーボードでディスプレイを操作していると

キーーーーーキーーーーー

と、空気を切り裂く様な音が周囲に響いた。

「おや?・レーダーに反応だ。ISの反応じゃないし、そういえば外に監視カメラあるんだっけ。えつとー、え?!空から何か落ちてきてる?!えとえと、取り敢えず逃げるんだよオオオオオ!」

ドカーンッ

束が猛ダツシユで逃げると、先程いた場所にはクレーターが出来ていた。

「ええ?!何、あれ?」

そしてそこには、人の形をした白いロボットの様な物がクレーターに背中を預けていた。そして、そのロボットの胸部が開き、中から――

「え?!女の子?!ええつとおー、くーちゃん!取り敢えず今すぐ来てえー!」

束が大声で叫ぶと、近くのドアから銀色の髪の少女が入ってきた。

「束様、どうかしましたか?.....何ですかこれ」

「束さんもわからないよ!それよりほらほら!あそこにドカーンッ!って落ちてきたあれの胸の所がパカーンッって開いて女の子がでてきたんだよ!」

束は必死に自身の助手や家事等を担当している『クロエ クロニクル』に状況を説明しようとしているが、混乱して擬音ばかりになりクロエも混乱しだしている。

「取り敢えず見た方が早いよ!ほら!こっち!」

そう言つてクロエの腕を引き、クレーターの中心へ向かう。そしてそこには、透き通る様な白い髪の少女が倒れていた。

「ねえ?!いるでしょ?!」

「ええ、居ますね。しかし運ばなくていいんですか?怪我をされている様ですが」

「あつ、そうだった...取り敢えず寝室に運ぼうか。うんしょつと、うわあーこの子かるーい!ねえ!くーちゃんほらほら、一人で担げるよ♪」

少女を背負いながらぴよんぴよん跳ねて束がはしゃいでいると突然後ろのロボットの様な物の2つのカメラアイが十字型に光った。

『待ってください!』

「え?今の声、くーちゃんじゃないよね?」

「はい、違いますが」

クロエからの答えを聞いて束はゆっくり後ろを振り向いた。

『その人をどうするつもりですか?』

「うおー!ロボットが喋った!ねえ、くーちゃん今の見た?!喋ったよー!」

『質問に答えて下さい、その人をどうするつもりですか?』

束が興奮するのを白いロボットは冷静に眺めながら声を出す。そして、その声にも束も落ち着いて少女をクロエに預けてロボットに近寄った。

「別にどうもしないよ、ただ怪我してるみたいだからこのラボの寝室に運んで手当てしようと思つて、それと君つて名前あるの?」



『開発者より付けられた機体名はウッドベルネクスト、そしてマスタ―が付けた私の名前は『ギンギラ』です』

「ふむふむ、ギンギラかあー。うーん……よし！今日から君はギンギラちゃんだー！」

東はそう言ってギンギラを指差した。

『わかりました。すみません、名前をお伺いしてもよろしいでしょうか』

「うん！私はこの星で一番の大天災、篠ノ之 東さんだよー♪」

腰に手を当て思いつきり胸を張ってどや顔で東は自己紹介をした。

『わかりました、東さん。とにかく現在の状況を説明して頂けるとありがたいのですが』

「うん！いいよ、と言いたいたいけどあの娘の事も気になるし、君もボロボロだし。あの娘の手当てと君の修理が終わったらでいいかな？」

『はい、構いません。ですが私の構造は自分で言うのもなんですが最新鋭の物です。あなた一人で直せる物では無いと思いますが』

「まあまあ、この大天災の東さんに任せなさい！」

そう言って東はギンギラを大きな機械に乗せて、施設内のもう一つのラボに向かった。

そんなこんなで、これが全ての始まり。東と少女とギンギラが出会ってしまったが為に起こる、世界を、いや、2つの星を揺るがす大事件の始まり。

## 新星少女 First Episode

『束さん、1つ質問よろしいでしょうか』

体の装甲を外されながら、ギンギラは束に話しかけた。すると束は作業を一時中断して整備用のマシンを起動させて、汗を拭いながら顔を上げた。

「うんうん、何かな？」

『あなた方からすればおかしな質問だと思いますが、この星の名前を教えてくださいませんか』

「……………え？ちよつと待って！その言葉そのまま受けとるなら、君とあの娘はこの星の外、つまり宇宙から来たの?!」

僅かに間を置き束は驚いた様な声を上げた。それもそうだろう、急に宇宙から来ましたと言われても誰しも疑うだろう。

『はい、私とマスターは少なくともこの星の外から来ました。私達は、ここから遠く離れた入植実験惑星『EDN—3rd』から来ました』  
すらすらと話すギンギラに対して、未だ頭が追い付いていない、地球最高峰の頭脳。

「えっと、聞きたい事はいっぱいあるけど何から聞けばいいかわかんないから、取り敢えず確認するけど。嘘はついて無いんだよね？」

『はい、私達二人は先程言った通りこの星の住人ではありません』

「うん、ごめんねギンギラちゃん、既にそこから取り残されてるんだ、束さんは」

苦笑混じりにギンギラにそう告げると、ギンギラは自分が作られた時から、『あの戦い』の話、そして

今に至る『とある事件』の事を束に語った。

「そんな…そんな事って……………それでギンギラちゃん達はその、EDN—3rdから『逃げて』来たの？」

「そんなのソイツらの勝手な都合じゃん！」

東は目頭に少し涙を浮かべながら怒りを込めて叫んだ。  
。そして、それと同時にギンギラの修理が終了した。

『はい、確かに彼らは自分達の目的の為に行動を起こしました。しかし、彼らにはあの軍勢を覆す程の武力は無いはずです。恐らくは、裏で手引きした者がいるのではないかと』

そう言われ、東が考え込んでいるとドアからクロエが入って来て、少女が目覚めた事を伝えた。そして、ギンギラに通信用の機材を繋いでクロエの後を歩いて行つた。

「……………」

「んっ、んん、ん？あれ?!ここどこ?!えっ?!ギンギラは?!」

慌てて現状を確認する少女の元に、扉から入って来た東とクロエが歩みよつた。

「落ち着いて下さい。」

まずは挨拶と自己紹介を、私はクロエ・クロニクルと申します、こちらの東様のメイドをしております」

クロエは丁寧にお辞儀をすると、東に自己紹介をするように促した。

「やあやあこんにちは♪皆のアイドル東さんだよ♪」

「えっと、もしかして…」

「うんうん、私が君をたす「反NEVEC勢力の人?!」そーなんだよー、東さん達は反NEVEC勢力の…って違うよー!」

東が乗り突っ込みをかましていると、クロエがベッドの横にあるディスプレイを起動させて、画面にギンギラを映し出した。

『マスター、彼女達は反NEVEC勢力の人間ではありません。私達を助けて下さった方々です。』

「ええ?!あ、あの、そのええと、すみません!早とちりしちゃって!」

「いやいや、全然いいよ。それと付け加えておくけど、ここはEDN—3rdじゃないよ?」

「えっ?…そうなの?ギンギラ」

『はい、東さんの言葉は事実です。私達は脱出後、攻撃を受けてそのまま宇宙を漂つたと考えられます。更に追っ手が無いことから、この星

はEDN―3rdから遠く離れていると推測されます」

二人の言葉を聞いて、少女は暗い顔をして目から涙を溢した。

「私達だけ、逃げて来たの？父さんと母さんを置いて、ルアンさんやクリスさん、ジュリイさんを置いて、私だけ逃げて来たの?!私は、また守られたの？私も皆と戦いたくてアカデミーに入って必死に訓練して、それなのに、私は、『また』何も出来なかったの?!」

少女は感情のままに嘆く様に叫んだ。

すると束は再び涙を流しながら少女に抱きついて、優しい口調で語りだした。

「辛かったね。私はギンギラちゃんから聞いただけだから、説得力とか無いだろうけど…でもね、親が子供を守ろうとするのは当然だと思っただよ。それに、君はまだ子供なんだよ？その年で戦いなんて、君のお父さんとお母さんもさせたく無いんじゃないかな？

私には子供はいないし、君の境遇も、私達の星からしたら現実離れしてるし私は君の助けにはなれないと思う。

でもね、一緒に泣いてあげる事は出来る」

「束、さん。わ、私…私！」

「うん、泣いていいよ。束さんもその分一緒に泣くから」

「う、ひぐつ、うう…うわああああん！うう、ううううう、うわああああん！」

「うん、うん…辛かったね。ぐすつ、づらがっただね…」

「うわああああん！」

それから約一時間後、少女はすっきりしたような顔で束達を見つめて、頭を下げた。

「私とギンギラを助けて頂いて、本当にありがとうございました。それに、ギンギラの修理に私の手当て、なんてお礼を言えば良いかもわかりません。でも、取り敢えずこれだけは言わせて下さい。ありがとうございます」

「うん、私は全然構わないよ？ね？クーちゃん」

「はい、私も構いません」

束とクロエが微笑みながら少女に言葉を返すと、ディスプレイが光りそこに映るギンギラが語りだした。

『マスター、私から提案があるのですが。この星に一時身を置くのはどうでしょうか』

「えっ？どうして？」

『理由は、

まず、マスターは戦闘経験が低いので今戻っても恐らく敗北します。

そして2つ目は、束さんとクロエさんへの恩返し。

最後に3つ目、この星で、サーマルエナジーT-ENGの反応を感知しました』

「えっ？嘘でしょ？だって…『スブリマトウム』は父さん達が止めたはずじゃ」

「あ、そうだ。ギンギラちゃん、まだそのサーマルエナジーの詳しい話聞いてないんだけど」

『では、サーマルエナジーT-ENGについて説明しましょう。

サーマルエナジーT-ENGとは、EDN-3rdエイクリッドに開拓者達が移り住む前からその星に生息していた原住生物のA Kエイクリッドの体内に蓄積されているエネルギーの事です。その特性は、消費が通常の化石燃料より遥かに少なく、入植初期から比べると、作業等の効率は飛躍的に良くなっています。

しかし、もう1つの特性が体内から排出された後、すぐに霧消しやすく、当時は研究が困難とされてきました。しかし数年前に発見されたA Kエイクリッドの化石により研究は急激に早くなっています。

そして、『ハーモナイザー』と言う装置を通じて、人間の体内にサーマルエナジーT-ENGを循環させる事で、身体機能を活性化させる効果もあり、体力の回復等も行えるので開拓やA Kエイクリッドとの戦闘で大いに役立っています。

更に、人間の体内で循環させ、高める事により発動するエクスサーマルEX-Tブラストと言う技もあります。

しかし、これは個人差があるのでまだ研究は不完全です。

これが私から話せるサーマルエナジーT-ENGの全てです』

ギンギラの話が終わり、少女は少し前に習った予習の様な感覚で

所々考えながら聞き、束は目を輝かせ全力でノートに、聞いた内容とそこから考えられる考察等を書き込みながら聞き、クロエは静かに寝息をたてていた。

「凄い、凄いよ!!これが地球の外の…EDN-3rdの技術!これを私のISに搭載出来れば、ちーちゃんといつくんと箒ちゃん、そして私の夢が叶う!ねえギンギラちゃん、その技術を教えて!私にはその技術が必要なの!」

興奮気味にディスプレイに寄る束に対してギンギラは冷静に、そしてなだめる様に登録された音声で声を発した。

『それは出来ません』

「どうして?!少しぐらいいいじゃん!」

「束さん、私も教えたい気持ちがありますけど…でも、それはNEVE Cの規則で禁止されてるんです。

「サーマルエナジーT-ENGの情報は、基礎知識以上の事に関係者以外には決して口外してはいけません。」

もしこのルールを破ったら、私は本当の意味でアカデミーに戻れなくなる。

束さんには本当に感謝してます…でも、これだけはダメなんです。もしこの技術が悪用でもされれば、この星も危険なんです。サーマルエナジーT-ENGはそれ程までに危険性を孕んでいます。だから、ごめんなさい」

申し訳なさそうに頭を下げる少女を見て、束は我に返った。そして急に慌て出して全力で手を振り誤魔化しながらもう一度口を開いた。「ああ、ごめん!別に、好奇心とかが抑えられなくなっただけだから!ごめんね?…えっと、そういうえば名前聞いてないような?」

「あっ」

束の声で目が覚めていたクロエと少女は声を合わせて心の中で「完全に忘れてた」と思いながら声を出した。

『私の自己紹介は先程終わらせました。後はマスターだけです』

ギンギラの言葉を聞いて、束とクロエが少女の方を向くと少女は多少たじたじしながら、口を開いた。

「えつと、紹介が遅れました。私は『ステラ・ターナー』です！」

## 新星少女 Second Episode

ここは太平洋上にある、東の秘密のラボ。

衛星等の監視網から逃れる為、ステルスが施されている。

そしてこの整備室の様な場所で、東とギンギラがお互いの情報交換をしていた。

「そういえばさ、この前なんだかんだ話せなかったこの星に関する事をギンギラちゃんに話そうと思うんだけど、いいかな？」

『はい、それで構いません』

「うんうん、それじゃ始めるね。」

まずはこの星の名前、地球って言うんだよ。この星には196の国があつて、それぞれの国で違った文化や宗教に基づき政治を行ってるんだよ。全部説明していると時間が足りなくなるから、私が選んだ主要国だけって事で」

そう言いながら、ディスプレイに世界地図を複数表示して、そこに信仰している宗教を色つきで示している物など、様々な地図を表示した。

「まずはここ。私の生まれ故郷の日本！」

ここは他国から一目置かれる位の特殊な文化があるんだよ。食文化もそうだし、日本のおもてなしの精神とかも評価されてるらしいよ。ちなみに量産型ISの打鉄で有名だね。

お次はここ。世界最大の国、アメリカ！

ここは世界でも特に影響力のある国で、ちよつと過激な発言をする和世界中のニュースで取り上げられるよ。

今のアメリカの大統領は色々言つて世間を騒がせてるよ」

『東さん、大統領とはなんででしょうか』

「それはねえ、アメリカの政治のトップを示す言葉だよ。色々な国で色々な言い方があるけど、大統領が一番多いかな」

『なるほどありがとうございます』

「うんうん、それじゃ再開するね。」



お次はイギリス！飯不味で有名だけど、あれは結構美味しかったなあ。

イギリスは経済・文化共に先進的で、19世紀から20世紀前半までの間、世界最高位の大国だったんだよ。現在も列強であり続け、経済、文化、軍事、科学、政治で国際的な影響力を持ってるよ。

後は、色んな映画やゲームの舞台になってるね。

次の国はフランス！

フランスは食文化が有名だね。特にワインは国内外で親しまれているよ。一回飲んで見たけどあれはヤバイ。

そして、私の大好きなリズムゲームの舞台でもある！

この国も量産型ISのラファール・リヴァイヴで有名だね。

最後はドイツ！

ここも色々な映画の舞台になったりしてるよ。それと、有名な独裁者がいたりね。軍事的にも世界で有数の国だよ。確か人工生命体の研究やISの適合率を上げたりする研究を行ってるのかなんとか。

…こんな感じかな。さて！次はギンギラとの番だよ！

東に促されて、ギンギラは自分の記憶メモリのデータを読み取り説明を始めた。

『はい、ではEDN-3rdの説明をしましょう。』

まずは、マスターの通う『アカデミー』の説明です。

アカデミーとは、NEVECがEDN-3rdの入植活動の原動力となる次世代の人材育成と先進技術研究を目的に設立した教育機関です。EDN-3rdの3ヶ所にベースを設立しており、地域ごとにベースの教育方針や理念が異なります。

まずは、マスターの所属していたアドバンスベースです。

アドバンスベースは、EDN-3rdに設置された最新のベースです。大気圏外との行き来も可能であるシャトル発着場を持ち、EDN-3rdの玄関口としても機能しています。他のベースと積極的に交流カリキュラムを行いながら、隊員の自助努力を促す校風を持っています。ベース全体の管理はA Iオペレーターの「W. I. Z-Y」が務めています』

「ねえギンギラちゃん、ういずって何？」

『各ベースの情報を管理する運営AIシリーズの事です。全て眼鏡をかけた女性の姿にデザインされています。そして、開発者の意向でベースごとに人格が異なります』

「え？人格が違う意味ってある？」

『恐らく、開発者の趣味と思われれます』

僅かな沈黙の後、ギンギラがこのままでは空気が重いままだと思い説明の続きを始めた。

『それでは説明を再開しましょう。』

続いてはフロンティアベースです。

アカデミー設立当初から運営されている最も古いベースで、森林・海洋地帯の開拓事業を行いながら、エイクリッドや雪賊の勢力分布調査や、周辺環境の研究なども活発に行われています。ベース内には発掘作業中のエイクリッドの化石が横たわるエリアがあり、登る事も出来ます。力仕事が多いため、豪快・タフを売り物にしている隊員が多いのも特徴ですね。ベース全体の管理はAIオペレーターの長女「W・I・Zー $\alpha$ 」が務めています。

そして、最後がテックベースです。

最新のシミュレーターを用いたVSの教習に力を注いでいて、ベース対抗で毎年開催される戦技大会では好成績を残しています。砂漠や火山といった厳しい環境での開拓任務を担当しているので隊員たちの能力が高く、NEVEC本体へエリートを多く輩出しています。ベース全体の管理はAIオペレーターの次女「W・I・Zー $\beta$ 」が務めています』

東は先日と同様にギンギラの言葉をノートにメモしながら、ギンギラの説明で感じた疑問点を聞くことにした。

「そのウイズって、長女とか言ってるけど姉妹なの？」

『はい、人格にもそういう風に互いを認識するようにされています』

「それ考えたのも……」

『……恐らくは開発者だと思われれます』

本日二度目の沈黙を破ったのは、クロエと共に料理をしていたステ

ラだった。

「はあ、クロエさんの強烈料理を見てからなんとかしようとはしたけど丸2日掛かるとは…あ、束さーん！ご飯出来ましたよー！」

「うん！すぐに行く！ギンギラちゃんも燃料の補給を…って、ねえギンギラちゃんは何で動いてるの？」

『主にTサーマルエナジー—Eエンジン—NエンジンGエンジンですが…そうですね、次は『私達』の話をお願いしますよか』

「おお！凄く聞きたい！」

『はい。ですが時間も遅く、マスターとクロエさんの料理が出来た様なので、説明の続きはディナーの後でという事にしましょうか』

ギンギラがどこかで聞いた事のあるような台詞で説明会の中止を促した。

「うん！それじゃあスーちゃんの手作り料理を楽しみにいきますか！」

束は整備用具を片付けると、全速力で食卓へと走った。

「あーもう、束さん！廊下は走っちゃダメ！」

「だってスーちゃんの手料理早く食べたいもん！」

「それは嬉しいですけど、廊下は走っちゃダメです！」

「もー！スーちゃんのケチ！」

互いに一步も引かずに意見を述べ合っているので埒があかないと思ひ、クロエが二人に近付き声をかけた。

「そんな事をしていては、ご飯が冷めますよ？」

「え？！」

ぐるる…

「あっ…／＼」

二人で揃って食事の事を忘れていたので急激に腹が空き、腹の虫が鳴るのだった。

そしてその二人を可愛い小動物を見るような目でクロエが見ている。

「さあ、ご飯にしましょう。今日はステラ様に手伝って頂いたので、出来栄はとても良いですよ」

「はい！」

全員が食卓につくとクロエが号令をかけた。

「それでは」

「いただきます」

「いただきます！」

「いふあふあひまふ！」

「東様、号令をする前から食べ始めないで下さい」

「て言うか食べながら喋らないで下さいよ」

「ごくつ、だつて美味しいんだもん！」

「東さん(様)？」

「ごめんなさい……」

ビーッ！ビーッ！ビーッ！

東達が日常的な会話を繰り返していると、突然アラームが鳴り響いた。

「東様、これは！」

「うん、ここもバレたね……」

東とクロエの会話について行けず、ただ緊急事態という事しか理解出来ないステラが状況を確認するために東に未だ困惑した声で質問をした。

「東さん、バレたつて一体……て言うかこのアラームは？」

「私とクーちゃんはね、世界中から逃げ回ってるんだよ。今まで色々回って、ここでステルスを張ってやっと安定したのに……」

三人が状況確認していると、ラボが大きく揺れた。そしてディスプレイにギンギラが映し出され、現状の確認を済ませて1つの答えに行き着いた。

『恐らくは、私達がここに落ちた事が原因でしょう。大気圏突入の際にどこかの国の人工衛星の監視網に掛かったものと思われます』

「それじゃあ……私達のせい？」

「違うよスーちゃん！これは私がステルスの補強してなかったからだよ！」

「でも、私達が落ちて来なければこんな事にはならなかった！」

二人が言い争っていると再びラボが大きく揺れ、天井が陥落してきた。辛うじてそれを避けると、ラボの中で一番頑丈な整備室に向かった。

「束様、いくらここが頑丈でもいつまで持つかわかりません。開発中のIISを貸して下さい。私が殿を勤めます」

「ダメ！それじゃあクーちゃんが危ないよ！それに、開発中だから出力の制御がまだ終わってない、とても危険だよ！」

「背に腹は変えられません！早くご決断を！」

「でも…クーちゃんは私の大切な家族だもん。傷付いて欲しくないだよ…」

「束様…」

今度は束とクロエが言い争い始めて、その近くでステラは何かを決断したような表情になった。

「束さん、クロエさん、私が出るよ」

「「え？」」

「ギンギラ、行ける？」

『はい、いつでも』

「何言ってるの?!ダメだよ！いくらギンギラちゃんでも、あの数は無理だよ！さつきレーダーの反応調べたけど、15機もいるんだよ!？」

「その程度こなせなきゃ、一番星なんて夢のまた夢です」

「え？どういう事？」

「昔父さんが言ってたんです。」

『例え離れる事になっても、一番星みたいに強く輝いてれば、その回りには沢山の人が集まる。そうやって光を繋いで大きく輝け。そして、いつでも俺達はお前を見守ってる』

「って…だから私は一番星を目指す。だから、こんな所で立ち止まっていられないんです。束さん、約束します。絶対死にません、絶対ここを守ります。だから、私を…いや、私達にやらせて下さい！」

「…クーちゃん、カタパルトと束のデスク繋いで」

「束様?!」

「わかってる、スーちゃんにとっても危険を背負わせてる事ぐらい。大

人失格だよね…でも、子供を信じるのも大人の仕事、って言ったら言い訳かな。ははっ…でも、あんな強い目で見られたら、断れないよ」  
「ありがとうございます！ごさいます！ギンギラ、行こう！」

『はい！マスター！』

各自がそれぞれの仕事を開始し始めた。準備の最中度々ラボが敵の攻撃に揺れたが、構わず作業を続けた。

そしてギンギラがカタパルトに乗ると、整備室のギンギラ達がいる部分が切り離された。

『スーちゃん、聞こえる？』

「はい、聞こえています」

『一応聞くけど、操縦経験は勿論あるとして…実践経験、ある？』

「実践経験？ふう……………」

一切無い！悪いか！

ステラの言葉に束とクロエが驚いていると、ギンギラがステラの言葉の意味を理解した。

『マスター、その言葉は』

「うん、父さんがギンギラに始めて乗った時の言葉の改良版だよ」

『フフツツ、ハハハハハハツツ！いいねえ、いいよスーちゃん！それじゃあ私とギンギラちゃんですサポートするよ！ギンギラちゃんはそれでいい？』

『はい。ギンギラ、サポートします』

「よし、それじゃあ…」

「ステラ・ターナー！」『ギンギラ！』

『出ます！』

その言葉と共にギンギラの乗るカタパルトに稲妻が走り、そしてカタパルトはレールの上を加速し火花を散らしながらギンギラをラボの外へと運ぶ。

そしてカタパルトがレールの上で止まると同時にギンギラは最大出力で飛び出した。

ギンギラは飛び出した後、まるで自分の姿を見せる様に拳を腰あたりで構え胸を張った。その姿に束とクロエだけでなく、敵すらも息を

飲んだ。だが敵はすぐに意識を戦闘に戻した。

『スーちゃん、ギンギラちゃん、来るよ!』

「了解!」

ギンツ!

ギンギラは空気を切り裂くようなスピードで一瞬の内に敵の懐に入ると、その勢いに任せて敵の胴体を殴った。

「なんなのあのISは?!サイズが明らかに大きいし、それにどうして殴っただけで『シールドエネルギー(以下:SE)』がここまで減るの?!」

SEとは、ISのバリアーやビーム等の武装の使用時に使われるエネルギーでISの最大の特徴『絶対防御』を発動するのに使用される。

ISの操縦者の命は、この絶対防御によって”ほぼ”保証されている。

『ギンギラちゃん、絶対防御については話したよね?』

『はい。あれがある限りは私達に勝利は有り得ません』

『違うよ、ギンギラちゃん。絶対防御はSEを大幅に使用する。そしてSEが無ければISは強制解除される。つまりわざと絶対防御を発動させればいいんだよ!ギンギラちゃんの力ならそれが簡単に出来る!』

『わかりました。マスター』

「ん?どうしたの?」

『とにかく敵に攻撃すれば良いそうです』

「オツケー、それじゃあ一気に行くよ!」

加速、打撃。加速、打撃。それをずっと繰り返して敵を撃破していると、流石に相手も対応してきてギンギラも多少ダメージを負っている。

そして、挟み撃ちにされて敵もこれを決め手にするつもりなのか、顔が少しニヤリと歪んだ。

その時

「準備体操はこのくらいかな?」

『マスター、流石に長かったと思われます』





## 新星少女 Third Episode

あの襲撃から数分が経って、ギンギラ達は瓦礫の処理などをした後に束達の元へと戻った。

「スーローローちゃーローん！」

「ん？ごはっ?!」

コックピットから降りたステラは束からの突然の襲撃、もといジャンピングハグを腹部に食らいそのまま仰向けに倒れた。

「凄い！凄いよスーちゃん！」

「わ、わかりましたからちよつと退いて下さい！痛いです！」

「あ、ごめん」

二人が話をしていると、クロエが二人の元へと歩み寄りステラを抱き締めた。

「ステラ様、良かった。よくご無事で」

目頭に涙を浮かべながら、包み込むように抱かれたステラは赤面した。

「え、えっと、クロエさん、出来れば離して貰えると嬉しいです…その、恥ずかしいですし…」

「フフツ、ごめんなさい」

ステラを離れたクロエは、零れそうになっていた涙を拭い冷静どころか優しさを感じる様な表情に戻った。

「……………ねえ、スーちゃん、ギンギラちゃん」

「束さん？どうしたんですか？」

二人の会話に区切りがついた所で、束が緊張したような表情になりながら話し始めた。

「さっきのISに付いて無かったのは確認したけど、これから先に戦闘のデータを残すためのカメラとかが付く可能性は凄く高い。そしてその時にギンギラちゃんからISの反応が無かったら、向こうはまた私が新しい兵器を作ったって判断すると思う。だから、ギンギラちゃんをISとのハーフにするってのはどうかな？」

勿論無理には言わないよ。でも、ISの力はスーちゃんとかギンギラちゃんやEDN-3rdに帰るときにもきつと役に立つ。それに、今の世界はISの『兵器』としての力を信じきってる。だから、その考えを壊す手伝いをして欲しいの」

『私は構いませんよ。恐らくマスターも』

「うん、東さんがそう言うならきつとそうだしね」

「…ありがとう二人とも。その為にも、少しでもギンギラちゃんの事を教えてくれないかな？」

『そうですね。それに、元々そういう約束ですからね』

『私の様なロボットの事を、『VS』と呼びます。正しくはバイタルスーツと表記されますが、頭文字を取ってVSと呼ばれています。』

元は入植作業用に開発された作業ポッドだったものが、対AKに改良されたものです。

次は私の説明です。

私は、入植実験候補第二番惑星『EDN-2nd』で開発されました。ウッドベルネクストは開発時の名称です。

大気圏内外での運用を目的とし搭載された次世代AIは高度な学習機能があり、戦闘の度に相手を解析して対応する事が出来ます。

VSドライバーとの双方向コミュニケーションを目的として、VSでは初の思考し、喋る能力が搭載されています。

戦闘のメインは格闘ですが、サポートとして腕部にレーザーシューターがあり、私の後ろに浮かぶ二つのリングは投げて相手への牽制や投擲武器にも使えます。勿論自動で手元に帰ってきます。

そしてそのリングを前に配置して、腕を出してEX-Tを大砲やキャノン砲をイメージしながら放つて、リングの中でエネルギーを変換して撃つTCNもあります。

燃料は基本的にTENGですが、他の燃料でも動けます。しかしその場合は燃費が悪くなります。

こんな所でしょうか』

「ふむふむ、成る程。後はISコアとの適合の高さを調べようか。」

そう言うとう束は何もない空間から白く光る蒼いラインの入った球体を取り出した。

「ギンギラちゃんの戦闘データを解析しながら作った、ギンギラちゃん専用のISコア！多分、これなら適合する筈だよ」

「束さん、それどうやって出したんですか？」

ステラが驚きながら束の行動を確認しようとした。まあ何も知らないステラとギンギラが見ると明らかに驚愕物なのは確かだ。

「今のはね、ISの拡張領域バースロットに保管していたギンギラちゃんのコアを取り出したんだよ。ISの種類や装備によつては要領を殆ど持つてかれてしまうけど、殆どはほぼ無限に物を収納出来るよ！」

『成る程、それは便利ですね』

「うん！お腹空いた時に直ぐにご飯食べられる！」

二人が同じ様な、そしてどこかずれてる様な反応を示してそれに満足したのか、束は楽しそうな顔をしながらクロエに配線の指示を出した。そしてクロエもこんな束を見るのが久しぶりだからか、どこか楽しそうだった。

そして、あれこれして既に一時間。

「さてと、適合率は問題無いね。それじゃあ次はISスーツのデザインを決めよう！」

「ISスーツ？」

「はい。ISスーツとはISを効率的に運用するための専用衣装です。」

バイタルデータを検出するセンサーと端末が組み込まれており、体を動かす際に筋肉から出る電気信号などを増幅してISに伝達する機能がありますがISの運用に必ずしも必要ではありません。

多数の企業からさまざまなスーツが発表されており、ISに関わる女性はたいてい自分専用の物を用意しています。

パーソナライズされた専用機では量子変換された状態でISのデータ領域に格納されています。ISを起動させると自動的にスーツも展開されるようになっていますが、エネルギーの消耗が激しいた

め、緊急時以外はスーツを着用してからISを展開するのが一般的です」

「あー！クーちゃんそれ私が言いたかったのに！ちよつと久しぶりの台詞だからって長い台詞を！」

メタい事を……

「フフツ、すみません束様」

束のメタい発言に、クロエはイタズラが成功した様な顔で謝罪した。

「まあそういう事、それで！デザインを決めよう！なるべく可愛いので！」

「ギンギラ、アドバンスの隊服のデータある？」

『はい、ありますよ』

「おお、どれどれ？」

ギンギラが空中にホログラムで隊服のデザインを表示し、それを少し楽しみに束とクロエが覗きこむとそこに表示されていたのは……

「……何これ？」

「アドバンスベースの隊服ですけど」

「これを着ていつも戦場に？」

「はい。あ、ちゃんと下着は着てますよ？」

「……………」

「？」

「これはダメ！」

「え?!」

僅かな沈黙の後に大声がラボの中に響いた。

「なんで?!動きやすいのに?!」

「普通に考えてよスーちゃん！こんな体のラインがくつきり出るような服着たら、見た男子がみんな欲情しちゃうでしょ！」

「そうですステラ様！ステラ様の胸はその体に対しては少し大きいんです！そんなの見たら盛った男子に食われますよ！」

急に詰め寄られ怒号の勢いでそれぞれ違う事を言われ困惑していたステラに、ふと疑問が浮かんだ。

「えつと、欲情って何？」

「えつ……」

「え？」

このラボにステラが来てから何度目かの沈黙の後に束とクロエはニヤニヤしながら、ステラの腕を引いて暗い部屋に連れていった。

「ちよつと勉強が必要だねえスーちゃん」

「ええ、ISの勉強のついでにちよつと性の勉強も教えましょうか」

「えーとお、なんか束さんとクロエさん怖いよ？」

「さあ、授業を始めよう」

……そしてその後、一時間経過

「……………／／／／／」

頬を赤らめたステラが先程の部屋から出てきた。

「子供って、あーやって出来るんだ…結婚したら自然と出来るのかと思ってた…まさか男子のあれと女子のあれが…あく／／」

「あー、可愛いなあもう」

「まさかここまで無知だったとは、可愛いですね」

はてさて一体ステラが何を聞いたのやら。

「さてと、あれ？そういうえばスーちゃんって何歳？」

「え？12歳ですよ？9月18日生まれの」

「えーと、クーちゃん」

「はい、束様」

「やらかした……」

二人は年齢確認を怠った事を全力で後悔した。そして、束があることを思い出した。

「あ、よく考えたらISって女しか動かせないんだから別に体のラインが出てても問題無くない？」

「あっ」

またしても確認を怠った事を後悔する二人だったが、気を取り直して次の話を始めた。

「んんっ！さてさて、スーちゃんはギンギラちゃんの新機能についてはどう思うっ？」

「え？新機能？」

「うん、私が考えているのは

まず、ギンギラちゃんに掛かっているリミッターを一時的に解除して、出力を普段の数倍に跳ね上がらせる『リミットブレイク』。

二つ目、ギンギラちゃんは全ての能力を均等に設定されてる。強いと言うならスピードがちよつと高いかな。そして、そのエネルギーの割り振りを変えて機体の性能を変化させる『シフト』。

三つ目、安定しているサーマルエナジーTEENGの安定地を下げたわぎとバランスを崩して一定時間能力が倍加し続ける『バランスブレイク』。ただこれはエネルギーの消費が他の二つに比べて激しいよ。

こんな感じだけど、どれがいい？思いきって全部とかやつちゃう？」

「そうですね、ギンギラは大丈夫？」

『はい、問題ありません』

「え？いや、ちよつ」

「それじゃあよろしくお願いしますー！ああ、新しいギンギラ楽しみだなく♪」

目を輝かせながら生まれ変わったギンギラを思い浮かべ、興奮するステラ。冗談半分で言った言葉で今後の方針が決定してしまい、困惑する束。そしてそれを苦笑いしながら眺めるクロエ。おかしな絵面だ。

「こうなったら仕方ない！全力でやるよ！クーちゃん、スーちゃん、サポートお願い！」

「はい、わかりました」

「了解！」

その夜から、ギンギラの改修作業が開始された。

その時、三人と一機は知るよしも無かった。

この星に邪悪な意志が存在し、宇宙<sup>そら</sup>からもう一つの流星が降ること  
を。

# 大冒険の始まり

## 始まりの始まり First Episode

「出来たー！ー！ー！」

『マスター、束さん、クロエさん、お疲れ様です』

ステラとギンギラが地球に来てから、既に7ヶ月が経っていた。ギンギラの新機能の搭載、リミッターの調整、コアの適合率の調整、それらを兼ねてのシミュレーションを何度も繰り返して遂にギンギラの調整は終了した。

「やっと終わった。もっと早ければ良かったけど流石にこれが限界かな…今までお疲れ、スーちゃん、クーちゃん」

「ギンギラの整備とかはやったことあったけど、ここまで本格的な物は初めてだよ…」

「やはり、未知の技術が使われている事もあり作業は難航でしたね。それでも早い方かと思われまます」

全員が疲労と睡眠不足で今でも倒れそうな時に、束はフラフラしながらデスクに向かった。

「スーちゃん。一つ提案があるんだけど」

「なんですか？また新機能とかだったら嫌ですよ？」

「流石に束さんでもこれが限界だよ…ってそうじゃ無くて、スーちゃんにはここを出て貰いたいんだ」

「……………え？」

突然の束からの提案に思考が追いつかないステラは、やがて理解し始めて困惑した。

「え？どうして!?!私何か、悪い事しました!?!」

「あつ、違う違うー！ごめん、疲れすぎてて言葉のチョイス間違えた。あのね、これから私とクーちゃんはギンギラちゃんの改修と同時進行で建造した移動型ラボで色々な場所を転々とする予定なの。だから、スーちゃんはここじゃない場所、出来れば私の親友に預けたいって思うんだ」



「どうしてですか？私がいたら邪魔なんですか？」

「だから違うって！私とクーちゃんはまだ慣れてるからどうって事無いけど、スーちゃんにはこんな生活を送って欲しくないんだ。普通に学校に行って、友達作って、そうやって生きて欲しいんだ。だからね？」

「でも…」

「大丈夫ですよステラ様。ステラ様は沢山の人と繋がって、一番星を目指すと言いました。ならこれはその為にも必要な事です」

「クロエさん…」

「決めるのは、スーちゃんだよ」

「私は……………」

その後ステラは東達と新しく作った自室に行き、布団にその顔を埋めた。

「私は…どうすればいいの？」

ステラはこの7ヶ月の事を考えていた。

あの日、ここに落ちた日。私は東さんに手当てをしてもらった。ギンギラの修理もしてくれた。

4日目の日、私を家族って言ってくれた。私の為に色々考えてくれた。

今日までの7ヶ月、ギンギラの改修と調整、そしてこの星で生きる上での基礎知識とI Sの基礎知識を教えてくれた。

そして今日、私の将来を心配してくれた。

……その夜、ステラは部屋から出る事は無かった。

「…束さん」

束達が朝食をとっていると、心を決めた様な表情のステラが立っていた。

「私決めました。ここを出て、束さんの親友の所に行きます。そして、前に言ってたIS学園に入学出来る歳になったら、IS学園に入ってもっと色々な事を学んでここに帰ってきます。そして、束さんの夢の手伝いをする」

「スー、ちゃん？それ本気で言ってるの？」

「はい、本気です」

ステラの言葉に束は感激のあまり少し涙目になっていたが、直ぐに涙を拭い満面の笑みをステラに向けた。

「わかった！それじゃあ今から私の親友に連絡取るね！」

「束様、親友とは千冬様の事でしょうか？」

「そうだよ、て言うか束さんが親友と呼ぶ人間はこの世に三人だけだよ？」

「千冬様？それって前の話に出てきた世界最強の織斑千冬さんですか？」

「うん！ちーちゃんは私の大親友なのだ！ちよっと待っててね、直ぐに繋げるから」

そう言うと束はポケットからスマホを取り出した。少し前にステラの日用品をかうついでにステラの物を買ひ、束は機種変更した物だ。わざわざ変装までして。

なんでも「これが個人的に一番カメラと画像処理が高性能で、何より画面が広くてゲームがより一層楽しめる」との事だ。購入した際にステラは「エクスマーマル？」と聞き間違えていた。そしてクロエは初めて束から買って貰ったガラケーをこれからも大切に使うていくと言つて束を泣かせていた。

p r r r r p r r r r p r r ガチャツ

『なんだ、東。お前から電話とは珍しいな』

電話口から凜々しく、威厳を感じさせる様な声が聞こえた。

「うん、実はちーちゃんに折り入ってお話があるんだけど、今度いつ日本にいる?」

『明々後日には日本に着くぞ、て言うかお前出歩いて良いのか? 噂ではまたお前の捕獲に失敗したとどこかの国の官僚がぼやいていたらしいぞ』

「ふふーん、私を捕まえようなんて事に I S を使ってる内はこの大天才東さんは捕まえられないよ! ハハハッ!」

東が高笑いをしてしているとスマホから今度はため息が聞こえた。

『天災の間違いだろ。で? 話とはなんなんだ』

「とつても大事な話だよ。だから直接会って話すよ」

『?...まあいいさ、それで? いつ来るんだ?』

何時もなら出さないような東の真剣な声に戸惑いながらも、千冬は質問を変えた。

「明々後日!」

『:...まあ、私は昼頃には帰る。今は夏休みだ、家には一夏がいるだろうから茶ぐらい出すだろ』

「わかった、じゃあまた明々後日ね〜♪」

『ああ』

ブツツ、プー プー プー

電話を切ると東は急にどっと疲れた顔になった。さっきのテンションはどこへやら。

「はあー、ちーちゃんと話すの久しぶり過ぎて緊張したー...。て言うか、もう限界...」

東はそう言いながら近くのソファーにもたれ掛かった。

「とりあえず、今日はもう寝よ。あとスーちゃんとクーちゃんはこっち来て」

「え? 良いですけど、なんですか?」

「わかりました」

二人が束の元に行くくと、束は二人を抱き寄せた。

「このままここで寝ちやおうよ」

「え、いや、寝るならベッドに…」

「やだ、ここがいい」

「しかし、私達は…」

「三人一緒に寝るの」

「はい…」

二人はそのままされるがままになってそこそこ大きめのソファア  
の上で瞼を閉じた。

「ねえ、スーちゃん。私はスーちゃんと離れ離れになってもスーちや  
んの事見守ってるし、大好きだよ」

「…ステラ様、私も同意件です。これから大変かも知れませんが、そん  
な時はいつでも連絡を下さい。いつでも励ましますよ」

二人にそれぞれの言葉を聞き、今まで自分が大切な人間と思われて  
いた事を嬉しく思いながら迫ってくる眠気に身を任せた。

「うん。私も、大好きだよ…束、さん…クロ、エさん…」

そしてやがて全員が眠りについた頃にギンギラは静かに自分達が  
落ちてきた時に開けた穴から、夜空を見上げていた。

『今頃、EDN-3rdではまだ戦闘が行われている。あの戦いはそ  
う簡単には終わらない筈。どうかご無事で、』

……ブレン』

## 始まりの始まり Second Episode

やあやあ、おはこんにちこんばんわ！皆のアイドル東さんだよー♪ 私達二人はただいまとある組織の人間と会う為に、ここ無人島に来ているよー！何で無人島？って思った？フフツ、それはね…

私の趣味だ！いいだろう？なんちって笑

ちなみにクーちゃんはお留守番だよ。この後ラボで食事するから準備してくれるらだって！楽しみだなあ。

……本題に入ろう。

『No name monster』。全てのトレジャーハンター達が憧れる、伝説の宝があると噂される島だ。

その周辺には濃い霧が蔓延しており、島に入るのは基本的に不可能だ。そして島から発せられる磁場によって方位磁石もレーダーも機能を停止する。そして人工衛星から見ようとしても霧に加えて磁場が上空の空気を歪ませているので不可能だった。

そして、この島の呼称の由来は『あるのはわかっているが島には怪物がいて、初めて入った海賊以外は誰もその島の全貌を知らない』からである。

そして、今日のステラは織斑家に行くにあたって購入した服に、見慣れないゴーグルをつけていた。

「ここにラボ作ってもいいんだけどなあ。絶対電波こないしなあ」

「世界中から追われる身だと言うのに相変わらず呑気ね、東」

東がそう呟くと、後ろから金髪の女性が話しかけて来た。

「ん？おお！久しぶり！スコール！」

彼女の名前は『スコール・ミューゼル』。

裏の世界で暗躍する秘密結社、亡国機業ファントムタスクのメンバー。亡国機業は第二次世界大戦中に設立して以来、50年以上もの活動をしている。組織は「運営方針を決める幹部会」と「実働部隊」の2つに分けられる

ものの、組織の目的や存在理由や規模などの詳細が一切不明の謎が多い組織である。

「おい、俺も忘れんなよ?」

そう言っつて物陰からロングヘアの女性が出てきた。

「え?オータムも来たの?」

「悪いかよ」

彼女は『オータム』。スコールと同様に亡国機業ファントムタスクのメンバーだ。

「ううん、全然。でもどうして?」

「一応は護衛だな。で?今回も戸籍の取得か?」

『今回も、とは?以前にこのやり取りはあったのですか?』

束とオータムが話していると、何処からともなく声が聞こえた。

「つ?!何者?出てきなさい!」

スコールは瞬時に腰のホルスターから拳銃を抜き取り、構えた。だが、何処にも姿見えず混乱していると束が急に笑い出した。

「ハハハッ!スコール、その声の出所教えようか?」

束はそう言っていると、ステラのゴーグルを指差した。

「え?」

『初めまして、スコール・ミューゼルさん。私はギンギラと申します』  
「え?!ゴーグルから声が?!どうなってるの?」

「ふふん、それはねえ…このゴーグルは、さっき名乗ったギンギラちゃんの待機状態なんだよ!」

「ああ、ISだったのね。ビックリしたじゃ…喋ってる?!」

「あー!これ楽しい!」

束が満面の笑顔で楽しそうに言っていると、今まで喋って無かったステラが口を開いた。

「束さん、あんまり人をからかっちゃだめだよ?」

「ごめんごめん。まあ用事は普通に戸籍作つて欲しいんだけどね」

「そんなんだろうと思っただぜ。で?その子供のか?」

オータムはそう言っつてステラを指差した。するとステラは少しおどおどしながら前に出た。

「ス、ステラ・ターナー、12才でしゅっ!……………/」

「ねえ、束」

「何かな？」

「何よ、この可愛い生き物は」

自己紹介で噛んでしまい頬を赤らめるステラと、なんか和んでるその他四名。

なんだこれ。

「ま、まあ改めてよろしくな。ステラ」

雰囲気に戻そうと気を利かせたオータムが手を差し出すと、ステラは慌てて手を取った。

「こちらこそよろしくお願いします！」

「ハハッ！元氣いいな。改めて名乗っとくか。俺はオータムだ」

「私はスコール・ミューゼルよ。よろしく」

それぞれの自己紹介が終わった所で、束はとある事を思い付いた。

「ねえ、オータム。今IS持ってる？」

「は？いや、あるけど。なんだ？」

「いやねえ、スーちゃんと模擬戦してくれない？」

「え？」

束の急な提案に驚き疑問の声をあげるステラとオータム。そしてスコールも驚きながらも束に文句を言い始めた。

「束、あなた何を言ってるの?!オータムはもう数年乗ってるのよ?そんな子供と戦わせて、怪我でもしたらどうするの!」

「大丈夫だよ。だってこの前、私の捕獲に来た15機のISを全部倒してほぼ無傷だったもん」

束の言葉に顎も落ちそうな二人だったが、オータムがいち早く正気に戻り束に自分の感じた疑問をぶつけた。

「はあ?!いや、この前束のラボを襲ったのはアメリカの機密部隊って聞いたぞ?!アイツらのISはコアネットワークから外れてるから何をしても証拠が残らないって噂の「待って」え?」

「どういう事?全てのコアは私のISで管理してるけど、私のとギンギラちゃん以外でコアネットワークから外れているISは無いよ?」

「は?いや、でも情報源は確かだ。一体どういう事だ?」

オータムの言葉に反応した束が思考を巡らせていると、スコールが話を始めた。

「私の知っている情報は、初めて聞いた時は一瞬冗談かと思ったわ」「え?」

「束。貴方の他に……ISのコアが製造出来る人間がいるという噂」

「ええ?!」

「……………」

スコールの言葉に二人は驚いたが、束だけは反応が違った。その反応を見たスコールは話を続けた。

「ISのコアはその構造も使われている素材も全て謎。言わば完全なブラックボックスよ。普通ならあり得ないって思ったわ。けど、この噂には続きがあるの」

ドカーーンッ!

それは、とスコールが言おうとした瞬間に突然近くにあつた崖が急に崩れ落ちた。

「危ない!」

咄嗟にISを展開したオータムとステラは、それぞれ近くにいたスコールと束を庇った。

束達が顔をあげるとそこには黄色と黒色の蜘蛛の様なISと、白銀のほぼステラの全身を包み込んだISがいた。

「ねえ……あれ、何?」

そこには、無数の謎の生物がいた。そしてそれは。

『マスター、あれは!』

「どうなってるの?どうしてこの星にA Kが!」

「あれが、スーちゃんの言ってた。A K?」

「おい!話してるのを待つ気は無いみたいだぞ!」

オータムの言葉に全員がハツとした瞬間、数体のA K『セパイア』が飛びかかってきた。それをギンギラを纏ったステラが回し蹴りで吹き飛ばし、アラクネを纏ったオータムが背面についている八本の足から糸を出して複数のセパイアを捉えて岩壁に叩き付けた。



「ちっ！キリがねえ！コイツらどんだけ居るんだよ！」

「何処かに巣がある筈です！それを潰せば！」

「それなら貴方が行きなさい。ステラ」

いつの間にかISを纏っていたスコールがステラに迫っていたセパイアを両肩に付いているプロミネンスという炎の鞭で敵を風呂敷った。

「……わかりました！それと、これ使ってください！」

そう言つてステラはスコールとオータムに武器を一つずつ投げ渡した。

「それは対 エイクリッド A K 用の武器、ホライゾンミサイルとプラズマガンです！ロックは解除しましたからそのISでも使える筈です！」

「サンキュー！」

「ありがとう」

それぞれ渡された武器を巧みに使いセパイアを殲滅していく。すると武器は弾薬が切れたのか、カチツカチツというトリガーの引いた音だけが響いた。

「クソツ！威力が強いが弾数が少ないな！つ?!」

弾切れした事に気をとられていたので、オータムはセパイアの攻撃をまともに喰らい転倒してしまった。その隙にセパイア達に取り囲まれていた。

「クソツ！こうなったらISのコアだけ抜いて装甲を自爆させるしか」

その時、オータムの目の前に音声と共に文字が表示された。

『サーマルエナジ T—E N G 補給完了。 弾薬補充』

『サーマルエナジ T—E N G ? なんだそれ?』

「オータム！その事は後で二人に聞くとして、今は目の前の敵に集中しなさい！」

スコールにも同じ事が起こったのか、多少の困惑が見られるが今は戦いに集中する事を促した。

『マスター。セパイアの巣、ジエネツサを発見しました。マップに表示します。』

「了解！……っ！見つけた！ギンギラ！急降下するよ！」

『了解しました』

ステラの掛け声と共にギンギラは空気を切り裂いてジエネツサへ向かい急降下した。そして、その勢いのままにジエネツサを拳で叩き潰した。

『マスター、お疲れ様です。マテリアル反応がありますが、回収しますか？』

「うん、回収したら戻ろ」

この時ステラとギンギラは、この星にいる筈の無いA K<sup>エイクリット</sup>達について考えていた。

## 始まりの始まり Third Episode

あの島での戦闘が終わり三時間が経った頃、東達は東のラボで食事をとっていた。

「それで？あの生物はなんだったの？」

スコールが口に含んだ物を飲み込んでから突然話を切り出した。ステラは慌ててその質問に答えようとしたが。

「んぐつ?!んんんー!ゴホッ!ゴホッ!」

「あーあー、何やってんだよ」

当然こうなる。

「あ、あの生物はA K エイクリッド について、体内にT | E N G サーマルエナジー というエネルギーを持っている……

「この星には本来存在しない生物なんです」

「ちよっ!スーちゃん?!」

「その言い方じゃ、貴方はこの星の人間じゃないみたいね」

突然ステラが自分の身の上を語り出し、東とスコールはそれぞれで驚きの反応を示した。しかし、ステラはそれでも話を続けた。

「はい。私は、この星の人間じゃありません。私はこの星から離れたEDN | 3rdという星から来ました」

「へえ、面白いじゃない。聞こうかしら？」

「私は、いや……私達はEDN | 3rdで起きた反乱に巻き込まれてここに逃げてきました。私達の星は昔、その星の運命を決める程の戦いが起こりました。それから15年経った程の時にそれは起こりました……」

『マスター、ここからは私が』

「うん、ごめん……」

話が進むに連れて顔が辛そうになっていくステラを見かねて、無人モードで展開されたギンギラが静止した。

『反乱の原因は、A K エイクリッド 達を殲滅しろと主張する入植作業に資金援助をする貴族と、生態系の崩壊を良しとしないNEVEC上層部と先住民族の対立によって始まりました。彼らは互いの意見交換もしない

まま、戦闘を開始させました。

それには、マスターの属するアカデミーという入植者育成を目標とする学校の訓練生も参加を命じられました』

「何だよそれ…ふざけてんのか！ソイツらの勝手な都合で、こんな子供に戦わせたつてののか？とことん腐つてやがる…！」

「そうね。例えどんな理由があろうとも、子供に戦いを強制させる理由にはならないわ」

オータムは怒りを露にし、スコールは表には出さずとも心の底ではふつつつと煮えたぎる感情を抑えていた。

『戦線は数の力もあり、徐々にNEVECが優勢となっていました。しかし、突如起こった先住民族の一部の裏切りと、反乱軍の謎の戦力増強により戦闘は膠着状態になりました。そして、突如EDN-3rdに出現した謎の巨大A KとVSは戦線を混乱に叩き落とし、急遽私達二人でVSの方の迎撃に向かいました』

「待って！スーちゃんのお父さんは？元々の乗り手はスーちゃんのお父さんなんですよ？」

『はい。私は元々マスターの父、ブレン・ターナーの専用機体でした。ですがその時ブレンは別の任務、謎のA Kの調査と討伐に出ていましたので、私達が出撃しました』

「そっか、それでそのA Kはどうなったの？」

「消えたんです」

「え？」

今まで黙っていたステラが急に口を開き驚いた束だったが、今の言葉聞き違ふ驚きを示した。そして、ステラの言葉を聞くために自分の疑問を押し込んだ。

「私達が宇宙空間でVSと戦っている時に通信が入って、その時突然敵の力が跳ね上がって、私達は大きなダメージを負って」

「ここに着いた、という訳ね」

「はい」

「…でも、変なんだよね」

「え？」

ステラの話が終わった時に、東は今まで気になっていた一つの謎を打ち明けた。

「少なくとも太陽系に生物の住める星は地球だけだし、太陽系の外から来たとなると数年かけなきやここには来れない。スーちゃんが年を重ねていないのを見るにせいぜい数日の間で地球に来たって事がわかる。ねえ、ギンギラちゃん。これもEDN―3rdの技術なの？」

『……15年前の戦いの際には惑星間航行を可能にする『メビウスシステム』が存在しました。ですが、15年前の戦いの際に余剰エネルギーで崩壊しました』

「余剰エネルギーで崩壊って……どんな戦いしたんだよ」

「その後、数年経ってから再建が始まりましたが、私達の戦闘の時にはまだでした。それにメビウスシステムの反対側に位置する場所でしたし」

「それぞれが考察を始めて数秒、突然オータムが「あー！」と言いなから頭をかいた。

「とりあえずこの話は終わりだ！とにかくステラの戸籍を作って織斑千冬の家に残ける段取り考えようぜー」

オータムの言葉に、わからない事をいつまで考えても仕方ないと思いい全員が賛同した。

「それもそうね。やり方はクロエの時と同じで良いとして、問題は織斑千冬の方ね」

「そっちは私でやるよ。私が行くってちーちゃんに言っちゃったし」

「全く……少しは全世界で指名手配中っていう自覚はないの？」

「全く無いー！」

笑顔で否定され肩を落としたスコールは「仕方ない」と、次の話題を持ちかけた。

「私とオータムの使った武器、あれは何だったのかしら？」

「あれはEDN―3rdで開発された、対A K用の武器なんです。

エイクリッド

A Kには3つの属性、『炎、氷、雷』があつて、それに対応する為に武器にも属性を持たせているんです。

例えばオータムさんが使ったホライゾンミサイルは炎の属性で、スコールさんが使ったプラズマガンは雷の属性を持っています。

生息する地域によって属性が変わるので、特に特徴の無い所だとあの島にいたセパイアみたいに属性を持たない個体もいます」

「そう。A K<sup>エイクリッド</sup>についてはまたいつか詳しい事を教えて頂戴。それじゃ私達は帰るわ」

首からかけていたナプキンを無造作に置いて立ち上がりクロエに「美味しかったわ」と告げて出口に歩いて行き、オータムは料理を名残惜しそうに見つめて同じ様に言葉を残してスコールに駆け寄った。

「さてと、二人が帰った事だし準備しよっか」

スコールとオータムが出口から出て外に止めていたステルス機能付きの小型船でラボを離れて行くのを見届けて、束は近くにあった棚から衣類や小物等を取り出してバックに詰めた。そしてそれらは全てステラの物だった。

「そうですね。明日から、離れるんですからね…」

「スーちゃん……」「ステラ様……」

「大丈夫ですよ、束さんクロエさん。迷いが無い訳じゃ無いですけど、もう迷いが追いつけない位の所で決断しましたから！」

ステラが笑顔でそう言うと、束もクロエも表情を明るくして明日の準備を始めた。

一方、その頃。とある研究所の屋根の上に、黒く赤い光のラインが入ったIS…否、VSがいた。

「面白い。ヤツの息子の娘か…。フツ……」

殺し甲斐がある………フフフツ、ハーーツハツハ！」

周囲には男の声が響き黒い霧がVSを包み込み、霧が晴れるとそこには既にVSも男の声も無かった。

そして、その下の研究所には：  
多くの人の死体と、多種多様で無数のA K<sup>エイクリッド</sup>達<sup>リット</sup>がいた。

## 始まりの始まり Fourth Episode

皆さん初めまして！織斑一夏です！今日は東さんが家に来ると千冬姉から聞いて、昼食の素麺を湯がいています。

え？なんで俺がナレーションしてるかって？初登場だからですよ！

なので今回は作者に変わり俺がナレーションをしていきます。

ピンポーンッ

あ、東さんが来たみたいですね。

「はーい、ちよつと待って下さいーい」

ピンポーンッピンポーンッピンポーンッ

「ちよつと待って下さいーい」

玄関の扉独特の重みを感じながら扉を開くと、そこには東さんと見慣れない女の子がいた。

「ヤッホー♪いっくん久しぶりー♪」

「確かに久しぶりですね。とりあえずどうぞ上がって下さい」

「うん♪ん？これは麺つゆの匂い？やったー素麺だあー♪」

麺つゆの匂いってそんなに強いっけ？あ、東さんだからわかったのか。

東さんがノリノリで家に入ってきて来ると、後ろからおどおどしながら女の子もついてきた。なんなんだ？あの子。

「あ、そうだ。ねえいっくん」

「はい？」

「この子はステラ・ターナーっていうの。後でちーちゃんが帰ってか  
らしか話せないんだけど、この話はいっくんにも聞いて欲しいの」

「え？いや、いいですけど」

その時、玄関の方からガチャツツという音が聞こえた。

「今、戻った…」

少し気だるそうだが声の感じでわかる。我らが世界最強、織斑千冬だ。  
だ。そこには奇妙な光景が広がっていた。



「お帰り、千冬…姉？」

なんと、歩きながらうとうととしていた。あの千冬姉が。

「どうしたいんだ？千冬姉」

「ん？ああ、一夏か…気にするな。ただの時差ボケだ…」

この時、「全世界の女性にこの姿を見せてやろうか」と思ったのは秘密だ。

その時、リビングから東さんが飛び出してきた。

「ヤッホー！ー！ちーちゃん久しぶりー！」

「騒がしい」

「ぎゃあああああ！ちーちゃん、アイアンクローはだめええええ！」

加速をつけて飛んで来た人を片手で止めて更にきっちりアイアンクローを決めた。もはや人間じゃないな。

「一夏、今失礼な事を考えなかつたか？」

「うええ！<sup>何も</sup>まりも！」

俺は焦るとたまに滑舌が悪くなる。非常に不便だ。

「ちーちゃん！早く降りして！頭蓋骨が！」

バキッ！

「あ、これ割れた。ハハッ、割れた」

バタッ

「東さん?!え?!ちよつ、ええ?!」

割れましたか。頭蓋骨が割れましたか。

そんなこんなで一時間が経った頃。

昼食と東さんの回復が終わり、今は座敷で向かい合って座っている。真剣な話をするならやつぱりここが落ち着く。

「それじゃあ本題に入るね……この子を、預かって欲しいの」

「……………はっ。」

東さんに突然そんな事を言われ、間抜けな声を出してしまった。まあいきなり子供預かってって言われて困惑するなって方が無理が

ある。

「東、きちんと最初から説明しろ」

「あのね、詳しくは話せないんだけど。この子は今親の所に帰れないんだ。あ、虐待とかじゃないよ？本当なら私が面倒見たいけど、この子に逃亡生活なんてさせたくないし。だからお願い！ここでこの子を預かってくれないかな？お願いします！」

すると突然東さんが土下座をした。あの東さんが、だ。

「お前がそこまでするとはな。おい、ステラと言ったか。お前は どうしたいんだ」

急に話を振られ女の子、ステラさんはあたふたした後今までほとんど閉じていたその口を開いた。

「私は東さんと一緒に居たいです。でも私が居る事で東さんに迷惑がかかるなら私は東さんの元を離れようと思いました。でも織斑さんの迷惑なら、私は一人で行きます」

「そうか、なら一人でどうにかしろ」

「え？ちーちゃん?!」

「おい千冬姉！いくら何でもそんな言い方ねえだろ！」

「……分かりました」

そう言うステラさんは立ち上がってお辞儀をして部屋から出ようとした。しかし、その時。

「合格だ」

「「え？」」

千冬姉の謎の言葉にまた俺は間抜けな声を出してしまった。そしてそれは今度は東さんとステラさんもだった。

「ここで変に食いついたりせずに、自分の発言に責任を持てるのか。それを試したんだ」

その言葉を聞くと、ステラさんと東さんは力が抜けた様に座り込んだ。

「もー、ちーちゃんびっくりしたよお……」

「すまない事をしたな。それに、一夏の反応も見なかったからな」

ニヤリと笑いながら千冬姉はそう言った。その言葉に反応して、ス

テラさんの方を見てから俺は話を始めた。

「今まで家族は千冬姉だけだったから少し複雑だけど。でも出来る限りの事はするよ」

「良かったな束。一夏がこんなで」

「うん！いつくんありがとう！」

そう言いながら束さんは俺に抱きついた。いくら天才って言ってもこういう無邪気な所は子供と変わらない。

「さてと、なら空き部屋を片付けるか」

「え？千冬姉が片付け？」

スウツ：

「ごめん千冬姉。謝るから無言で構えるの止めてくれ」

そして、部屋の片付けを始めて三時間。

何故こんなに時間がかかったかと言うと、その部屋にたまたまアルバムが仕舞っておりそれを見て束が幼い千冬姉を見てはしゃいでそれを恥ずかしそうにアイアンクローで誤魔化して、また頭蓋骨割ったり。

束が時間削減の為に作った超強力掃除機を作ったが暴走してブラックホールが出来そうになったのを千冬姉が自力で止めたり。

俺が作るの忘れてたプラモを見てステラさんが目を輝かせてたから「いる？」と聞いたら思いつきり首を縦に振って、そこから色々教えて若干時間使ったり。

あ、ちなみにこの時に「さん」はいらないと言われて呼び捨てと普通に喋っていいと言われたのでやつと楽になった。

そして貯まったごみをゴミ置き場に束が持っていこうとして全員で必死に止めたり。

あれ？ほとんど束さんのせいだ。

……まあ！そんなこんなで三時間。

「ふいー。疲れたー」

「本当だ全く」

ゴキツ（首が折れる音）

「いやいやちーちゃん。これは不味いよ」

「お前なら大丈夫だろう」

バコツ（首がはまる音）

「いや大丈夫だけどさ」

うわお、ここに人外が二人も。

そんな人外トークが繰り広げられている時に。

ぐうー

「あ……………／＼」

ステラのお腹が鳴った。

「ふつ、そうか腹が減ったか、丁度いい。一夏、今日は豪華な料理でも作れ」

急にそんな事言われても……………なんて言えば何をされるかわからない。

仕方ない。飛びっきりの料理を作って驚かせてやる。

「あ、料理なら私も手伝います」

「良いつて、今回は祝いなんだし。それと、敬語は無しな。俺が普通に喋っていいならステラも普通じゃないと落ち着かねえよ」

「あつなら、その…一夏、手伝う」

「いや、だから良いつて。ステラがうちの家族になることの祝いの料理なんだから、祝われる側が作っても仕方ないだろ？」

「いや、でも」

「ステラ、ここは一夏に任せておけ。コイツの料理の腕はそこらのレストランにも引けを取らん」

「そうそう、いっくんの料理は絶品だよ！」

「なら…一夏、お願い」

「おう、期待して待つとけ」

そうして俺は有るだけの材料で料理を始めた。

## 始まりの始まり Fifth Episode

「え？中学校？」

ステラが織斑家の一員となって初めての晩御飯。その最中にステラが疑問の声をあげた。

「そうだ。生年月日的には一夏と同年だから中学一年の途中からの転入という形になるな」

ステラから「いずれはIS学園に入りたい」という話を聞いて、千冬は少しでも義務教育を通過させてからの方がいいと思い今の話に至った。

「そうだね。試験を受けるのも中学生の方がスムーズに手続き出来るしね」

「でも、私学費払える程のお金持っていない…」

「何を言う。私が払うに決まってるだろ」

千冬の言葉に一瞬ほかんとした後に、急に驚き慌てながら話し始めた。

「ええ?!いや、いいですよ!そこまでお世話になるわけには」

「保護者が子供の面倒を見るのは当然だろ?それにお前は既に私の家族だ。遠慮も敬語もいらない」

「いや、でも」

「お前を中学に入れる、学費は私が払う。これは既に決定事項だ。いいな?」

「は、はい!」

少し怖い感じの声で言われステラがびくびくしながら返事をする。と、千冬はそれが可笑しかったのか不意に「フツ」と笑った。

「それにしても、一夏の料理は美味しいね。一体どこで覚えたの?」

「いや、千冬姉が家事出来ないから自然と俺がやるようになったんだよ」

「一夏」

「ん?」

「後ろ」

「後ろ?.....あつ」

ゴゴゴゴゴゴツ

「一夏、覚悟は出来たな?」

「ごめん千冬姉がいるの忘れてつい本音を「ほう?」あ、今は違う! あーそのー。仕方ない.....命、燃やすぜ!」

ギヤアアアアア!

その日、一夏の断末魔が住宅街に響いたが周辺の住民は「ああ、またやってるよ」と思い全く気にしなかったと言う。

「ま、まあ他にも家に母さんのレシピ本があつたからなんだけどな」

「一夏の両親って今どこにいるの?千冬さんが保護者って言ってたけど」

「さあ?千冬姉知ってる?」

「知るか。今頃どこかの研究所でこき使われているんじゃないか?」

「研究所って事は、科学者とかなの?」

「父親は天才生物学者、母親は基本無所属のIS開発のエキスパート、そして姉は世界最強<sup>ブリュンヒルデ</sup>。遺伝子の配分間違えてね?」

「あははっ.....」

一夏の言葉に千冬はため息混じりに答えた。

「好きでこうなった訳ではない。それに私に無いものはお前が持つてるだろ」

「え?家事の事か?」

ゴゴゴゴゴゴツ

「あーもうごめんつてば!」

「はあ...とにかく、死んではいけない事は確かだ。死んだら何かしら連絡があるだろ」

ピンポーンッ

会話が一段落すると、インターホンのチャイムが突然鳴った。

「あ、俺出てきます」

そう言うで一夏は手に持っていた食器と箸を丁寧に置き、リビングを出て玄関へと向かった。

「どちら様で…ホントに誰？」

一夏が扉を開けると、そこにはクロエが荷物を持って立っていた。初めまして、クロエ・クロニクルと申します。ステラ様の忘れ物を届けに来ました」

「という事は、東さんの所の人ですか？」

「はい。東様も此方にいますか？」

「居ますよ。あ、今ご飯食べてるので一緒にどうですか？」

「よろしいのですか？なら頂きます。東様に伝える事がありますので」

「はい、どうぞ」

一夏がクロエを連れてリビングに入ると、千冬が不信そうな目をして、東達は驚いた顔をした。

「一夏、誰だソイツは」

「ああ、東さんのラボの人だって。ステラの忘れ物を届けに来たらしい」

「スーちゃん、忘れ物した？」

「え？いやー、そんなはず無いんだけどなあ」

そう言いながらステラは荷物の中を探りだした。そしてバッグの中にあるはずの物が無かった。

「あ、ISスーツ無い」

「ステラ様、せっかく作ったんですから忘れないでください」

「待て。ISスーツを持っているという事は、ステラは既にISを所持しているのか？」

「うん、そうだよ？」

「馬鹿者」

「いだっ?!」

東が当たり前の様に答えると、千冬の拳が真上から東の頭に落とされた。そして千冬の顔には多少怒りが見えた。

「子供にISを持たせる馬鹿があるか！代表候補生ならまだしも、ステラはまだ12歳だぞ！『あの日』と同じ過ちを繰り返すつもりか！」「ちよっ、千冬姉落ち着けて！」

「千冬さん！私は大丈夫ですから落ち着いて！」

「……………わかった。だが、後できつちり話を聞かせて貰うぞ」

「は、はいい！」

「あつ、そう言えばクロエさん束さんに伝える事があるって言っ  
てましたよね？」

場の雰囲気を変える為に一先ず話題を変えようと先程玄関での会話を思い出した。

「はい。束様、『白兔』のチューニングが終了しました」

「え?!本当ですかクロエさん！」

「流石クーちゃん！手際が良いね！」

『白兔』それは束の持つISコアを自身の身の安全を考えて、戦闘も  
行える様に改造したものだ。ちなみにギンギラの調整中と同時に進行で  
制作されていたので、初期の計画より遥かなオーバースペックになっ  
ている。

「それで、ステラのISってどんなのなんですか？」

「これだよ」

そう言うのとステラは、首から下げていたゴーグルを手で持ち上げ  
た。

「待機状態だけどね」

「あ、そうだ！ねえちーちゃん！ちよつとスーちゃんと戦ってみない  
？」

「は？」

「え!!」

「いや、束さん？」

「はあ…束様、流石にそれは」

束の突然の提案に四人それぞれの反応を示したが、そんなのお構い  
無しと、束は話を続けた。

「大丈夫だよ、スーちゃんそんなに弱くないから」

「いや！いくらギンギラのサポートっていうハンデがあっても相手は  
世界最強の千冬さんですよ!?!絶対勝てませんって！」

「大丈夫だって！なんなら私がサポートに入るから！」



「そういう問題では無い、馬鹿者」

ゴンツ

「フギヤツ！いい”だあああ！あ”だま”がああああ！”」

今日ここに来てから何度目か分からないこのノリに、一同がため息混じりに苦笑していると、束は頭を押さええて目に涙を浮かべながら話を再開した。

「もう！ギンギラちゃんからもなんとか言つてよ！」

『束さん、今のは致し方ないかと』

「え？今どこから声が？」

「ここだよ」

ステラはもう一度首から下げていたゴーグルを手で持ち上げた。

それに、千冬も一夏も目を丸くした。

「ステラ、それはISの待機状態と言っていたな。そして会話する機能がある。まさか束が作ったのか？」

「いやいやちーちゃん、いくら天才束さんでもISのコアと人工知能の併用はまだ出来ないよ」

「そうか……っ?!まさか『アイツ』か？」

「千冬姉、アイツって？」

「あ、ねえ！ちーちゃん！結局どうするのか?!」

一夏が千冬の言葉に疑問を抱き質問をすると、束が明らかに不自然な誤魔化し方をして話題を逸らした。千冬はあからさまに怪訝そうな顔をしたが、一先ずは束の話に付き合う事にした。

「そもそも、私のISはここには無い。それに使える状態でもない」

「それなら問題ないよ。私が作った擬似ISコアで一時的に本物の体を拡張領域に保存して、エネルギーの体を形成するシステムを使えばほぼ生身と変わらない動きやすさでISと同じ位のスペックが出せる、ちーちゃん専用のこれを作ったから！まあ、完全じゃないからISには劣るけどね」

そう言つて束はポケットからグリップの様な物を取り出した。

「なんだ、そのワールド○リガーみたいな設定と見た目は」

「フフツ、それもその通り。それが元だからねえ！ちなみに名前は弧

月だよ！」

「はあ…それは良いが、場所はどうするんだ」

「それなら問題ないよ！近くに私の作った人工島があつてステルスもバッチリだから！」

「はあ…気軽に人工島を作るな」

千冬の呆れた様な顔を見ると、何故か東は照れながら「エヘッ」と笑つた。そして千冬は心で、褒めてない。そう呟いた。

「仕方ない、付き合つてやる」

「ほ、本当ですか?!ありがとうございます！」

「じゃあ行こうか！」

「えっと…俺は？」

「ご覧になりたいのならどうぞ。人工島にはどんな攻撃も阻むバリアの張つてある場所がありますので、安全は保証しますよ?」

「あ、はい」

かくして五人は、人工島へと東の移動用ミニロケットで向かった。

「あ、あの!東さん!一つ聞いて良いですか?!」

「ん?いいよ?」

「何でこんな小さいロケットに全員積めるんですか!」

二人乗りのロケットに乗つて

## 始まりの始まり Sixth Episode

「でりやあ!!」

ブンッ!

「一撃で終わりか!ステラ!戦闘において初手はまず当たらないと思え!攻撃は二手三手用意して初めて完成だ!」

「くっ!はい!」

ドガンッ!

「束!お前の機体のスペックは本来一対多を目的としたものだ!少なくとも誰かと共闘するなら出力の調整を忘れるな!」

「わかつてる、よ!」

ゴオオオオ!

ドガンッ!

ガキンッ!

ギギギギッ!

「す、すげえ…」

この、地形さえも変えてしまう程の戦闘から三十分程前。

「さて、着いたよ♪」

「二「殺す気(です)か!」三」

「おわ?!ま、まあまあ皆落ち着いて、ね?」

「全く…それで?ここでやるのは良いが、一つ聞こう。私のこのIS

擬き……トリガーでいいな。トリガーは飛べるのか？」

「いや？飛べないけど？」

「……………」

数秒の沈黙の後、千冬がため息をつきながら口を開いた。

「まあいい。どうせ武器は弧月一本だろ」

「追加する？」

「必要ない……………いや、弧月をもう一本だ」

「了解」

「それじゃ、始めましょうよ！」

「楽しそうだな、ステラ」

「そりゃあもう！だって世界最強の千冬さんだよ?!最高に心が踊るよ

！」

一夏の問いにとびきりの笑顔で応えると、クロエが三人の前に出た。

「試合の形式は二対一。束様、ステラ様ペアと千冬様。制限時間は一時間程でしょうか。何かハンデは付けますか？」

「いや、必要無い」

「わかりました。それではルールを決めましょう。基本のルールは、どちらかのシールドエネルギーがゼロになった時点で試合終了です。なので千冬様のシールドエネルギーは2倍に「1.5倍で十分だ」…それではそのように」

「試合開始の合図五分後に致します。それまでは自由に移動して下さい」

クロエの説明が終わると、三人はそれぞれ移動を始めた。

「一夏様、少し後ろにお下がりがり下さい。バリアに近すぎて危ないです  
ので」

「あ、はい。わかりました」

そうして三人が散ってから4分強程経った頃。

『それではカウントを始めます』

『5』

『マスター、展開の準備を』

「了解」

『4』

「よしっ！白兔の初乗り、おもいつきり飛ばそうか！」

『3』

「ふう……そう易々と負けんぞ。ステラ」

『2』

「3人の戦い……どれくらい凄いんだろう」

『1』

「行くよ、ギンギラ！」

『はい、マスター』

『0』

「ギンギラ、起動！」

「行くよ白兔！」

「トリガー、オン……」

3人の掛け声と同時に島の3ヶ所が光った。

「ギンギラ、束さんの場所は？」

『ここから南西200メートルの所で監視用のビットを放っています』

「了解、千冬さんは？」

『試合開始から一歩も動いていません』

ステラは少しギンギラと話した後、東の元へと向かった。

「レーダーオン……やはり合流を優先するか。ならば、妨害あるのみだな」

「ダッ！」

「ビービービービー」

『っ?!マスター、千冬さんが高速で此方に接近中!』

「え?!」

「はあー！」

「ザシユッ！」

「きやあ?!」

『マスター?!くっ、は!』

「なるほど、人工知能に加え自立稼働も出来るのか。だが」

『なにっ?!』

「機械的動きならどうとでもなる」

ガキンツ!

『ぐわっ!』

「うわあ?!」

千冬との圧倒的な実力の差の前に、なす術も無く攻撃をくらい続けていると、木々の間を潜り抜けて、光る兎が千冬とステラの間に入り千冬に触れた瞬間に爆発を起こした。

「スーちゃん、大丈夫?」

「危うく巻き込まれそうでしたよ…」

「ごめんごめん、でもこれならちーちゃんでも少しはダメージ入ったかな」

「甘いな」

「うえ?うわあ?!」

「きやあ?!」

東がステラに声をかけている途中で、突然斬撃が飛んできた。

「ちーちゃん、適応力高すぎでしょ…」

千冬が使ったのは『旋空』、シールドエネルギーを消費して瞬時に刀身を拡張できる弧月の能力だ。振り回されるブレードは先端に行くほど速度と威力が増す。

射程アップの性能は効果の持続時間と反比例し、発動時間を短くするほど射程が伸びる。剣のスピードと旋空のタイミングを合わせないと効果が十分発揮できないのだが。

「ちーちゃん完全にタイミング合わせてるよ…」

東が千冬の適応力の高さに驚いていると、ステラからのプレイヤートチャンネルが開かれた。

「こうなったら…:東さん!私が攻撃したらすぐに兎を千冬さんに放って下さい!」

「え？でもそれじゃスーちゃんに」

「私はすぐに避けます。だからお願いします！」

「わかった、ちゃんと避けてね？」

「分かっています！行くよギンギラ！」

『はい、マスター』

ギンツッ！

「でりやあー！」

そして時間は始まりに戻る。

「一撃で終わりか！ステラ！戦闘において初手はまず当たらないと思え！攻撃は二手三手用意して初めて完成だ！」

「くっ！はい！」

ドガンツッ！

「束！お前の機体のスペックは本来一対多を目的としたものだ！少なくとも誰かと共闘するなら出力の調整を忘れるな！」

「わかってる、よ！」

「束さん！避けて！」

「うん！」

『『サーマルキャノン！』』

ゴオオオオ！

ドガンツッ！

「これで！」

「まだだ！」

『マスター！シールドを！』

「わかってるよ！」

ブオンツ

ガキンツッ！

ギギギギツッ！

ピキッ

「え?!嘘?!」

サーマルキャノンを回避した千冬が弧月で斬りかかり、それをステラはEX-Tで作ったバリアで防御した。だが、千冬は同時にもう一本の弧月をバリアに突き立て、無理矢理バリアを抉じ開けようとした。

『マスター。危険ですがここはサーマルキャノンを出力をセーブして撃って牽制を』

「わかった!」

『サーマルキャノン!』

バリントツ!

「っ?!くっ!」

ギンギラとステラの二人で作り出したコンボ技。しかしそれすらも回避して反撃を仕掛けてくる千冬。必殺技を連発して動きに遅れが見え始めたステラ。それをカバーする為に接近戦に切り替えて千冬の攻撃を受け止める束。

さながら世界大会の様な戦いに、三人は夢中になっていた。そんな中で観戦サイドは。

「す、すげえ…」

三人の壮絶な戦いに魅力されていた。

「流石は世界最強織斑千冬、ですね。いくら擬似ISと言えどプロトタイプ。それで二人のISを圧倒するとは」

「あの、ステラのIS…ギンギラでしたっけ?あれって普通のISと比べてどのくらい強いんですか?」

「量産型のISなら余裕で越えてます。しかしステラ様も経験が少ないので、ギンギラ様のサポートに依存しがちですね」

「そうなんですか…あ、そういうえば、クロエさんと束さんってどういう関係なんですか?」

「親娘です。義理ですが」



「あ、すみません…なんか、変な事聞いちゃって」

少し気まずい雰囲気になりつつあり、クロエが苦笑しながら、されどにこやかに話を続けた。

「今は幸せですから、何も問題無いですよ。気にしないで下さい」

その顔に、一瞬魅入りそうになった一夏だったが、再度響いた爆音に二人は再び視線を戻した。

「いつけえ！」

ステラはそう言って肩の上に浮くサブ武器【ISに改修されたことでカスタムウイングとなった】を千冬に向かって投げつけてそれを追いかける様に加速した。

ギギギギッ！

「残念だったな。こういう武器は勢いを殺さなければ、こういう使い方もある！」

千冬はそう言つて、弧月で受け止めていたリングをそのまま遠心力に任せて回転してステラに投げ返した。

『マスター、このまま！』

「うん！」

ステラとギンギラは、投げ返されたリングを操作して自分たちの前に止まらせて。

『サーマルキャノン！』

拳を突き出してサーマルキャノンを放った、が。

「なるほど、ギンギラにはエネルギーの限定的な回復能力があるのか。だがしかし、使いすぎた様だな」

元々ダメージの蓄積で動きが遅れがあったが、それに加え先程からのサーマルキャノンの連発。ギンギラの動きは更に鈍っていた。

『マスター！Tサーマルエナジー—EエネルギーNダメージGダメージ残量が僅かです！』

「くっ、でも……………」

ギンギラに言われた言葉でステラは初めて気付いた様で、その顔には焦りが見え始めた。

しかし千冬はそれを待つてはくれなかった。

「はあ！」

ガキンツ！

「束さん?!」

「大丈夫大丈夫！このくらい ビービービービー」[警告、シールドエネルギー残り僅かです]

「あちやー、エネルギーもう殆ど無いよ」

「ならば互いに最後の一発だ。いいな？」

「良いですよ！さあギンギラ！ギラギラに行くよ！」

『はい、マスター』

そしてそれぞれが構えをとって、次の瞬間。

その辺り一帯は光に包まれた。

「負けたあ…完全に負けたあ」

「やっぱりちーちゃんは強いねえ。まさか旋空を一瞬でマスターするとは」

「いや、今回ばかりは苦戦したぞ。二対一とはいえここまで追い込まれたのは初めてだ」

「三人方とも凄かったですよ。ステラ様も気を落とさないで下さい。最初から世界最強ブリュンヒルデに勝てないなんて別に気にする事でもありません

よ」

「そうだって、千冬姉に一発で勝てたらそれこそガチの化け物だぜ？」

「ハハハッ、化け物って……」

五人は島からの帰路の中でそんな話を話していた。

そして、家に着いて1日の疲れや先程の事もあり一夏とステラは直ぐに眠りに付いてしまった。

そしてクロエは帰りの準備をして、千冬と束は縁側に腰かけていた。

「束、私にトリガーを渡した理由はなんだ？」

「……………ちーちゃん、あの日の事覚えてる？」

「私達が犯した罪が多過ぎてあの日ではわからん」

「白騎士事件の日「忘れろ」でも！」

「アイツの事は忘れろ。あの日の罪は絶対に拭えないが、少なくともお前の罪では無いだろう」

「でも……………今でも思うんだ。私がISを作らなかつたら、幸福に生きられた子供達はいっぱい筈じゃないかって。私一人の夢の為に、何人の夢を犠牲にしたかとか。今でも夢に見るよ、あの日の全ての始まりの夜の事を……………ビギンズナイトの事を」

「そうだな。あの罪だけは永遠に拭えないだろうな。だが、そうだな。

「庄吉の言葉を借りるが、『人は生きる限りは必ず罪を犯す。だがその一つ一つの罪を数え、その数だけ人を幸せにすればいい』ってな」

「そうくん、か。懐かしいね」

「それに、お前の夢は私の夢だ。もしそれが罪なら、私も背負ってやる」

「ちーちゃん……………」

二人の間に沈黙が流れる。しかしそれは決して重くなく、二人は先程より清々しそうな顔をしていた。

「束様、帰りの支度が出来ました」

沈黙を破ったのはクロエだった。そしてその声を聞いて束は立ち上がると、千冬に向き直り満面の笑顔で別れの言葉を告げた。

「またね、ちーちゃん。これからは余り会えなくなるけど、また何時か

来るからその時はよろしくね♪」

「ああ、いつでも来い」

二人はそれ以上言葉を交わす事は無かったが、二人は暗黙の了解だったかの様に拳と拳をぶつけた。

『見つけたぞ。目覚めの兆しよ……私の片割れ達よ』

その頃、宇宙を漂う黒い霧の中で、黒い『ナニカ』が目覚めた。

そしてそれは、ゆっくりと地球に迫っていた。

## 始まりの始まり Seventh Episode

バタンツ

「ただいまあ!」

「一夏、戻ったぞ」

洗濯等を一段落させ、夕食の仕込みを始めた一夏。その最中玄関から元気な声と多少気だるげな声が聞こえた。

「あ、おかえり。千冬姉、ステラ。入学申請終わったのか?」

「ああ。だが、何故あの担当の教師はあそこまでヘラヘラしていたんだ?」

「え?あ、もしかして津上先生?」

「そうだ。しかも途中途中で挟んでくるギャグもだ。クオリティが微妙過ぎて苦笑すら出来なかったぞ」

「仕方ない、そういう先生だから」

千冬は頭を押さえながら、一夏は苦笑しながら会話をしていると、ステラが目を輝かせながら一夏の腕にしがみついた。

「ねえねえ一夏!今日のご飯は?」

「豚カツだぞ」

「やった!」

「うるさい」

コツツ

「いてっ」

(うわあ、俺の時と対応全然違う。でもまあ、二人とも楽しそうだな) 一夏が二人の微笑ましい、まるで本物の姉妹の様な雰囲気醸し出しながら話しているのを見てみると千冬が思い出した様に一夏に向き直り話し始めた。

「そういうえば、ステラは両親の転勤で海外に出ると言う事で私の所に預けているという事になった」

「え?あー、確かにその方が色々面倒くさくなさそうだな。でも無理矢理じゃないか?」

「あの……津上とか言う教師も納得してたぞ」

一時間前

『え？でもステラ・ターナーさんって名前的に外国人じゃ……あ、お母さんが日本人でお父さんがアメリカ人とかなんですか？』

『え？あ、そういう事、です……』

(この教師がこんなで助かった)

そんな事を千冬が考えているとは知らずに、担当の教師はステラに話しかけていた。

『じゃあ、ステラさん。転校の時に何かあったら、俺に相談してね？俺が力になるから』

『あ、はい！ありがとうございます！』

『大丈夫大丈夫！俺教師だから。そんな緊張しなくてもいいよ？ほら、チャチャつとお茶でも飲んで』

『……………』

『あはは……………』

『あれ？面白く無かったですか？おつかしいなあ……』

……………

「何て言うか、津上先生らしいや」

「それはさておき、二日後の準備はもうしたのか？」

「いや、まだだよ。ステラはどうだ？」

「いや、私も……」

「全く、二日なんて直ぐに過ぎるぞ。今夜の内にでも準備しておけ」

「明日で大丈夫だろ？後38時間もあるんだぜ？」

そして二日後

「あれ？なんか一瞬で過ぎたような感覚なんだけど？」

「ステラ、気にすんな」

「私も今月からまた仕事だ。帰って来るのは冬休みかそれまでに様子見程度にしか戻れないが、二人とも生活リズムを崩さぬ様にな」

「ハハッ、それは俺らより千冬姉の方が「二夏それ以上は！」あー、まあ千冬姉も気を付けてな！」

「はあ…それより、ステラ」

「はい、なんですか？」

千冬はそつと頭に手を置き、いつもの冷静な喋り方ではなく、優しい口調で声を掛けた。

「不安もあるだろうが、しつかりな」

「はい！わかってます！」

「フツ、それじゃあ行ってくる。元気だな」

「おう、いつてらっしゃい」

バタンツ

「さて、それじゃ俺らも行くか」

「うん。あ、白帯忘れてた。ちよつと待ってて」

「よしっ、行こうよ」

「おう、行くか」

そうして二人は家を出た。

道中、ステラと一夏が一緒に歩いている姿に驚いた生徒が道で固まると言う事件があったが、それはまた別の話。

そして時は流れ始業式。

「なあ一夏」

そう話しかけて来たのは、一夏が中学に入って出来た友達の『五反田 弾』。赤い髪に黒いバンドナがトレードマークだ。実家は食堂を営んでいるが、弾はあまり手伝おうとしない。本人曰く「俺はYDだからな」と言っている。

「あの白い髪の子外国人だよな？転校生とかか？」

「え？あー、ど、どうだろうな？」

（やっべえ、弾達に言うの忘れてた。あ、サプライズって事にするか）  
「おい、静かにしろ。説教くらうぞ」

そういったのは『御手洗 数馬』。弾と同じく中学に入って出来た友達だ。性格はクールで、ハードボイルドに憧れている。数馬の事を知るものは数馬の事をハードボイルドだと認めているが、本人は「俺はまだただのハーフボイルド」と評している。

「おお、サンキュー数馬」

ちなみに、学年主任の教師がこちらに睨んでいたのを数馬が気付き説教というワードで合図を送ったと言うのが今の状況だ。

「ええー、これにて始業式を終わります。誰か連絡のある先生はいらっしゃいますか？」

……………

「ええーいらつしやらない様なので、先生方は担当のクラスを先導して教室に戻って下さい」

「ほらほら、皆は早く立って。今日は皆に大事な連絡あるから」

『はい』

「一夏、何か隠しているだろ」

「は、は？何の事だ？」

教室に行く廊下を並んで歩きながら、数馬が一夏に話しかけた。体育館での弾との会話を聞いて、明らかに変な返し方に疑問を抱き、今の質問をした。そして基本的に嘘をつくのが下手な一夏は、その言葉に動揺を隠せずにまた変な返し方になった。

「はあ…まあ、後でいいさ」

「お、おう」

そして全員が教室に入り、着席した所で津上が教卓にたった。

「さてと連絡だけど…：…なんとこのクラスに転校生が来ます！」

ザワザワザワザワ

(あ、このクラスなんだ)

「じゃあ入って」

ガラガラガラッ

「それじゃあ自己紹介を」

「あ、はい。えーと…………」

ジーーーーッ

クラス全員の視線を浴びながら、ステラは声を出した。

「ス、ステラ・ターナーです！まだ色々慣れない事や分からない事もあり皆さんに迷惑をかけないように頑張ります！」

パチパチパチパチ



「ああそれと、ステラさんは一夏の家でホームステイの様な感じで今居候中だそうですね」

『ええー……!』

「はあ…そういう事か」

「へえー、あの娘このクラスだったのか」

「ちよ! どういう事よ一夏!」

「おわ?! 鈴、なんだよ!」

「あれで気付かないからビックリだよなあ」

周りの喧騒の中で一人だけ一夏に掴みかかって来た少女。彼女の名前は『凰<sup>ふあん</sup> 鈴音<sup>りんいん</sup>』一夏とは小学生からの付き合いで、昔中国から引越して日本の小学校に転入した際に虐めを受けたが、一夏に助けられた。その為、一夏に惚れている。ちなみに愛称は『鈴<sup>りん</sup>』。

「ホームステイって何よ! あの娘と一緒に住んでんの?!」

「それ以外にホームステイって言葉が意味する言葉無いだろ! て言うか痛い痛い!」

「はい! ねえ、ステラさんって呼んでいい?」

一夏と鈴は完全に無視して、クラスの女子がステラに話しかけてきた。

「あ、はい。全然良いですよ」

「あ、私もしつもん。織斑君ってステラさんと付き合い合ってるの?」

「あ、いやそれは無いですよ。確かに一夏は好きですけど、あくまでも家族的な意味ですから」

「痛い痛い! いた…くくない?」

その言葉を聞いた瞬間、鈴は既に席に座っていた。

「なーんだそういう事ねえ」

「はいはい、それじゃあ今日は始業式とちよっとしたクラスで一時間集会的な事をしたら終わりだから。特にしなきゃいけない事は無いし、何か意見ある人」

「あ、せんせーい。じゃあステラさんの歓迎会でもやろうよ」

「えーと、今の意見なんだけど賛成の人いる?」

ザツ!

「おおつ、皆賛成？なら……やろつか！」

「と言う事で司会よろしくね、一夏」

「なんでですか津上先生！」

「ほら、数週間一緒にいたんだろ？なら一夏が適任だと思うなあ」

「ええー……。もうわかりましたよ！」

「えっと、何する？」

「ガタツ！」

一夏の発言と共にクラスの大半がずっこけた。

「織斑君考えて無かったの?！」

「逆に今の数分で思い付くわけ無いだろ！」

若干口論になりかけている女子生徒と一夏を見兼ねて、鈴が口を開いた。

「あのさ、無難に自己紹介とか質問とかでいいんじゃない？」

「あ、もうそれでいいんじゃないよ！よし、それにしよう！」

クラスの生徒が出した意見に強引に引っ張っていく一夏を呆れ顔で見る数馬と鈴だった。

「さてと、それじゃあステラに質問ある人」

「はーい！ステラさんの白い髪って染めてるんですか？」

「いや、産まれた時からこの色でしたよ」

「次私！じゃあその青い目も？」

「そうですよ」

「んじゃ次俺！ステラさんの親って何の仕事してんの？」

「え？あー、それは……」

（あれって何て言えばいいの?!「NEVECで兵士やってます」なんて言える訳無いし……あーそうだ!」

「えっと、環境の調査員、かな？」

ある意味間違えてはいないが、多少強引な誤魔化し方だ。だが事情

を知らないでクラスの生徒はそれで納得したようだった。

「おい皆、そんなに連続で質問したらステラが困惑するだろ。今度は逆にステラから皆に質問するとかどうだ？」

「おおつ、一夏にしてはいいこと思い付いたな」

「おい弾テメエ一回ぶん殴るぞ」

「落ち着け一夏、事実だろう」

「数馬、お前もか」

「仕方ないんじゃない？一夏だし」

「おい、勝手に人の名前を悪口の為の言葉にすんじゃないよ」

弾、数馬、鈴の順番で罵倒される一夏。その様子を見てステラが少し微笑んで口を開いた。

「四人とも仲がいいんだね」

「今の会話でどうしてそうなるんだよ…」

「ほら、喧嘩するほど仲が良いって言うし」

「あーもう！とりあえずステラは何か質問あるか！」

「え？あーそうだなあ。あ、ここら辺で一番美味しいご飯食べれるお店とか？」

「それなら弾の所でいいんじゃない？」

「確かに旨いよな。なあ、どうなんだ？」

「ZーZーZー…」

ゴスツ

「ゲボア?!」

「え、今の凄い声何？」

「気にすんな、いつもの事だから」

一夏の言葉に、クラスの全員が小さく首を縦に降った。そして攻撃をくらった弾は、

「なんだよ！またかよ！」

そうやって数馬に抗議して

「いつもの事だろう」

と、数馬が返す。

これがこのクラスの日常のようだ。

「まあ、じいちゃんの料理は普通に旨いぞ」

「じゃあ今度行こうかな。ね？一夏」

「ん？おう」

「それじゃあもう一つ質問なんだけど、この学校でまだやってない行事とかあるの？」

「やってない物って言われても、行事何もしてないよな？」

「本当に?!やった!」

そう言ってステラは満面の笑顔を浮かべた。

その笑顔にクラスの殆どが見入っていた。

「あ、そろそろ時間だね。それじゃあそろそろ終わろうか。まだ質問がある人は個人的に聞いてね。それじゃあ帰る準備して」

『はい』

そんなこんなで、ステラが学校に転入して六日目の土曜日。

弾の祖父が経営する『五反田食堂』に一夏、弾、数馬、鈴、ステラの五人が集まっていた。

「さてと、それじゃあ自己紹介ね。私は凰 鈴音。皆から鈴って呼ばれているわ。よろしくね」

「はい、よろしくお願ひします」

「あ、敬語は無しね。同い年なんだから」

「あ、わかった。よろしくね、鈴」

「俺は御手洗 数馬。俺も敬語は無しでいい。よろしくな」

「うん、よろしく数馬」

「えっと、次俺？俺は五反田 弾。敬語無しで下呼びオツケーだぜ」

「うん、弾もよろしく」

「おい弾。自己紹介終わったなら料理出すの手伝え」

そう声をかけてきたのは、弾の祖父『五反田 巖』だ。だが、その言葉に対し弾はため息をつきながら答えた。

「手伝わねえよ。俺Y Dだから」

「……その言葉を使うなど言った筈だぞ、弾」

その言葉に反応して、敵は威敵のある声からドスの効いた声を発して、弾は負けじと敵を睨み付けた。

二人の間に流れる空気は他の四人にも伝達して、その場の空気は最悪な物となった。

「こんのーっ、馬鹿兄い！」

「うえ？ゲボア?!」

その空気を破ったのは、店の奥から突然飛び出して来た少女の弾へのドロップキックだった。

「な、何すんだよ蘭！」

「何すんだよじゃない！何お客さん来てるのに喧嘩してんの！」

「いや、だってじいちゃんが俺に働けって言うんだぜ?!」

「ただの正論でしょうが！」

少女の名前は『五反田 蘭』。弾の妹で、小学六年生だ。

「あ、一夏さんに数馬さんこんにちは！それと、鈴さんも」

「何よ、私はおまけな訳？」

「違いますよ、ただ邪魔なだけです♪」

「あーら、言ってくれんじやない♪」

バチバチバチバチッ

二人の間に火花が飛び散るが、そんな物は知らん顔して厨房から一人の女性が料理を持って出てきた。

「ごめんね、一夏君に数馬君。毎日うちの子供が騒がしくて」

彼女は『五反田 蓮』。弾と蘭の母親で五反田食堂の自称看板娘だ。

「ちよつと、自称は余計よ」

「母さん、誰と話してんだ？」

「ん？ああ、気にしないで♪」

「そう言えば貴方は？」

蓮の言葉に、蘭も思い出したかの様に振り向いた。

「そうだ、私もそれ気になってたんです」

「あ、私ステラ・ターナーって言います！今一夏の家でホームステイし

てします！」

自己紹介にも慣れてきたのか、ステラはハキハキと喋りそう言った。しかし、その言葉に蘭が凍りついた。

「ホームステイ？って事は、まさか一夏さんと一緒に住んでるんですか?!」

そう、蘭も一夏の事を恋愛対象として意識していたのだった。故に初日の鈴と同じく驚愕している。

「あ、大丈夫だよ？私一夏に対する好きは家族的な意味だから」

「あ、なーんだ。そうだったんですね！ステラさん、これからよろしく願います！」

「うん、よろしくね」

「それで、料理置いても問題無いかしら？」

「あ、はい。どうぞ」

一夏の返事に、にこりと笑って答えて蓮は机に料理を並べていった。

「はい、蘭の分」

「え？どうして？」

「皆さんとお話してきなさい。店は私とお義父さんでやるから」

「うん！」

それから、蘭も交えた六人は日が暮れる前まで話したりゲームをしたりして仲を深めていった。

そして、それを見守りながら蓮は、とある人物と連絡を取っていた。

「もしもし。久しぶりね、束」

「本当に久しぶりだね、れーちゃん。どうしたの？」

「あの娘。ステラちゃんは貴方が千冬に預けたんだってね」

「……誰から聞いたの？」

「千冬よ。もしもの時は頼むって言われてね」

「そっか」

「ねえ、束。もしかして、またアイツが何かしようとしてるの？」

「分からない。でも、もしそうだとしたらどうするの？」

「殺すわ」

先程ステラ達と話した時とは別人の様な声で蓮は即答した。その言葉に束は悲しそうな声で答えた。

「そうだね。れーちゃんは大切な、じゅんくんをアイツに…」

「そうよ、だからアイツは私が殺す」

「ねえれーちゃん。じゅんくんを殺された恨みを忘れるなんて言う気はないけどさ、それは私に任せてくれない？ 全ては、私がアイツと一緒にI Sの開発をしたりしたから」

「束は悪くない。悪いのは全部……あ、お客さん来たから、切るわね」

「あ、うん。またね」

「ええ、貴方もね」

ピッ

「純、貴方の仇は私が……」

「……………母さん」

その様子を、弾は影から見ていた。

幼き頃、父が死んだと聞いた日からずっと。

## 始まりの始まり Eighth Episode

12月に入り、クリスマスシーズンということもあり街は多くの人で溢れていた。

そしてそんな街を歩く二人の少女。ステラと鈴だ。

「寒いわねえ…ねえステラ、カイロない？」

「ん？あるよ。いる？」

「マジで？サンキュー」

今夜は一夏の家に集まりパーティーを開こうという事で、二人は皆に渡すプレゼントを買って帰る所だった。

二人は五反田食堂で食事をした後からすぐに仲良くなり、たまにステラが鈴の恋愛相談（殆ど愚痴）を聞いたり、二人で遊びに行ったりと親友と呼べる程の仲となっていた。

「ねえ鈴、『一夏』にはどんなプレゼント買ったの？」

「は、はあ?!なんで一夏の部分強調すんのよ!」

「いや、だってプレゼント選ぶ時にずっとぶつぶつ言ってたじゃん」

『一夏ってどんな物貰えば喜ぶかな。一夏の喜ぶ顔…フフツ、驚かせてやるんだから』

「っ?!／／／／」

「あー、顔真っ赤だ。へへっ、可愛いなあ」

「う、うっさい!と言うか、あいつの家でパーティーするんだからそりゃ違う物じゃないとダメじゃん!」

「誤魔化す必要がある?私は鈴の恋心も知ってるし一夏の鈍感さもわかってる。その上で言うけど、そんなんで大丈夫?」

「分かってるわよ……」

そんな時、数人のチャラそうな男が近寄ってきた。

「ねえねえ君さあ、ちよつと俺らとご飯食べに行かない?」

「俺ら奢っちゃうからさ。ほら、一緒に行こうぜー」



「え？いや、今日友達とパーティーするので、ごめんなさい」

基本的に誰に対しても礼儀正しいステラは、自分をナンパしようとしている男達に丁寧な断りの言葉を告げた。

「ええー、いいじゃん。絶対俺達と遊んだ方が楽しいって。だからほら、ね？」

今の世の中、ISの存在により世界には男尊女卑ならぬ女尊男卑と言う風潮が蔓延している。

そして、そんな中で顔や財力等で女からちやほやされて調子に乗っている男もいる。ステラの前にいる男達が丁度そういった輩だ。

「いや、ですから私は！」

「ちっ！いいから来いって言ってんだろ！」

一人の男がステラの腕を掴んで無理やり引っ張ろうとした。その時鈴がその男の腕を掴んで明らかに怒りながら叫んだ。

「ちよつと、離しなさいよ！ステラが嫌がってんでしょ！」

「うるせえ！貧乳に用はねえんだよ！」

ドンッ

「きゃあ！」

「鈴！…あ、ああ……」

「さてと、それじゃあ」……「てる、は？」

「私の…私の友達に、何してるって言ったんだよ！」

「うわっ！なんだよこいつ！」

「覚悟は出来たかなんて聞かない。」

もう、それを待てる程の余裕は、私には無い」

その頃、一夏の家では一夏、弾、数馬、弾について来た蘭（目当ては一夏）、そして年末年始で長期休暇を取って帰って来た千冬が飾り付けをしていた。

「それにしても、ステラと鈴おせえな」

「ああ、いくら何でも遅すぎる」

その最中に弾と数馬は、なかなか帰ってこない二人の事を話していた。

「五反田、御手洗、話すのは良いが手も動かせ」

「しかし、確かに遅すぎる。トラブルに巻き込まれたりしてなければ良いが」

「早く帰って来ねえとご飯冷めちまうぞっての」

（（主婦かお前は））

「いくら何でも遅すぎます！私ちよつと探しに」

P r r r r P r r r r

「ん？おお、タイムリーだな。鈴からだ。どうした？」

『一夏！今すぐ来て！』

「っ?!どうしたんだよ鈴！」

「おい、鈴に何かあったのか？」

「とにかく、今何処だよ！」

『弾の家から一番近い公園！お願い！今すぐ来て！ステラが、ステラが！』

「わかった、待ってる！」

「おい、結局どうしたんだ！」

「わからねえよ！でも行ってみるしかねえだろ！」

鈴からの電話を切つてすぐに家を飛び出した一夏を追って、四人も家を出た。

それから五分程走って公園に着くと、一夏達は目の前の光景に驚愕した。

「ま、待て！もうやめてくれ！」

「まだ、まだまだだよ？まだ喋れる体力あるなら十分でしょ？」

地面には、数人の男が呻き声をあげながら倒れ込んでいて、先程声

がした方を見るとそこには、男の胸ぐらを掴み片腕だけで体を持ち上げる少女の影があった。

「おい…ステラ、なのか?」

「え?」

千冬の声に反応してその少女、ステラは振り向いた。そしてその目はいつもの澄んだ青色では無かった。赤く、そして中心に行くほど黒くなっている。

まるで獣の様な目だった。

「千冬、さん? あ、あれ? 私、何して…え? 何で、この人達倒れて…あ、え、どうして皆、そんな目で私を見るの?」

「これ全部、お前がやったのか?」

「わからない。何もわからないよ! うっ、こんなの私じゃない。こんな事、私は! 私は…」

バタツ

「お、おい! ステラ!」

突然倒れ込んだステラに全員が駆け寄ると、その顔には泣いたような跡が複数あった。

「……………おい、貴様ら」

「は、はいいい!」

「何故貴様らはこんな状況にある。説明しろ」

「お、俺達はただあいつにナンパしようとしたただけ! そしたらあいつが急にキレて殴りかかってきて「違う!」は?! 何が違うんだよ!」

「おい鳳、説明しろ」

「ステラがナンパされて、それで何度も断ってたのにそいつらが何度も何度も絡んでくるから私が止めようとした。でもそしたらそいつが私を突き飛ばして、その時からステラの様子がおかしくなったんです!」

「は?! それはお前が邪魔を「ほう?」ひいつ!」

「今から2つの選択肢をやる。今すぐそこに転がっている粗大ゴミを持ち帰るか、それともまた同じ目に合うか。後者を選ぶのなら言うておく、命乞いはするな。時間の無駄だ」

「す、すみませんでしたあ!」

男はそう言うのと周りの男を起こして、全員を連れて逃げて行った。  
「一夏、五反田兄、御手洗、ステラを家まで運べ。嵐、五反田妹は先に家に戻りタオル等の準備をしろ」

「わかった、でも千冬姉はどうすんだよ」

「束を呼ぶ。どんな医者よりあいつの方が頼りになる」

P r r r r P r r r r

『はいはい、もすもすひねもすー♪どうしたの?ちーちゃん』

「緊急事態だ、今すぐ来い」

『ええ?!いきなり無茶振り?!と言うかちーちゃんが私に頼るほどの緊急事態って……まさかスーちゃんに何かあったの?』

「そのまさかだ。今すぐ来い」

『うん、わかった!本気で飛ばして数分だから、待ってて!』

千冬は電話を切り、その瞬間から身体は加速しだしていた。

(一体ステラの身に何が起こった。束ですら予測不可能だった今回の騒動、ステラのあの目。いや、今は)

「考えても仕方ない、か」

千冬はそう言って、一夏達の後を追った。

「どうだ束、ステラの容態は」

「発熱があるね。それ以外は特に何も無いかな。外傷も見ただ感じは全く無いし、あつたとしてもかすり傷だよ。でも、ずっと苦しそう……ごめん、私じゃここまでしか……」

「あの、篠ノ之博士」

「ん?君はいつくんとスーちゃんの友達の子だったね。名前は?」

「えつと嵐 鈴音です」

「そっか、ならリンリンでいいね。それで?何かな?」

「え?あ、えつと、ステラが暴れてる時に目が赤かったのは話しましたが、実は凄く苦しそうな顔だったんです。それに、涙も流れてました」

急にあだ名をつけられた事に驚き、少し動揺しながらもあの時のステラの状態を伝えた。

「え?.....そうになると、やっぱりスーちゃんの意思じゃないってこと?でも、それじゃあどうしてスーちゃんは.....?」

『束さん、私と解析機器を接続して下さい。あの時のデータが残っています。あの時マスターを止められなかった私に出来るのは、これだけですが.....』

「ううん、ギンギラちゃんありがとう。よし!始めるか!その男子二人と女の子!名前は?」

「え?俺ら?えっと、五反田 弾です」

「五反田 蘭です!」

「御手洗 数馬です」

「五反田に、御手洗?.....そっか、じゅんくんとそうくんの..」

うん!決めた!ダンクんとランちゃん、それとカズくんがいいね!今からちよつと作業に移るから手伝って!リンリンはスーちゃんの容態見てて、クーちゃんとランちゃんもその手伝いよろしく。いっくんはお粥とかの軽く食べられる物を作ってね。ちーちゃんは、ちよつとこっちにきて」

そして束と千冬は、玄関から家の外に出た。

「なんだ束。ステラを放っておいて良いのか?」

「うん。良くはないけど、ちよつと話したい事があってね。出て来ていいよ、れーちゃん」

「久しぶりね、千冬」

束の呼び声と共に影から蓮が出て来た。

「蓮か?どうしてここに」

「二人に話そうと思ってね。今のアイツの事を」

「っ?!見つけたのか?!」

「そう、それで?何処にいるの?」

二人の言葉に、束は首を横に振った。

「違うよ。居場所はまだ特定出来てない、でも、今アイツがやってる事はわかった」

「生物兵器の製造」

「なんだと？アイツ、今度はそんな事をしているのか？ふざけるなよ……」

「それで、それを私達に言っただうするの？」

「これ、れーちゃんに預ける」

束はそう言っつて、懐から千冬の物と全く同じ形状のトリガーを取り出した。

「おい、束。お前」

「これは？」

「トリガーって言っつて、ISのコアの技術を応用して作ったの。ちーちゃんも持つてる」

「おい束！どういうつもりだ！」

「多分、アイツは今から数年の内に何か大きな計画を実行する筈。だから、その時に私達でアイツとの決着をつける。二度と誰かを巻き込まない為に、私達で」

「そうね、確かにもう誰一人として巻き込む訳には行かないわ。あの日の様に」

3人の中に緊張が走るが、その緊張も玄関から飛び出して来た一夏によつて破られた。

「束さん！千冬姉！ステラが目を覚ました！つてあれ、蓮さん？どうして」

「ちよつとステラちゃんのお見舞いにね」

そう言っつて蓮は微笑み、千冬達に向き直り冷静な顔で一夏に聞こえないように声を出した。

「話は今度聞いわ。今はステラちゃんの事を見てあげないと、ね？」  
「うん…」

「わかって、いる」

## 始まりの始まり    Ninth    Episode

「んん、あれ？私なんで家に、ん？なんで皆そんな顔してんの？」

『マスター、気分は如何ですか』

「え？別に問題無いけど」

「ステラ、お前はパーティーの途中で倒れたんだ」

千冬にそう言われ、ステラが周りを見回すとリビングにはクリスマス  
スの装飾がされていた。

「そうだったんですか？すみません、迷惑かけて」

（あれ？でも私、鈴と一緒に買い物してた様な…）

.....

『嫌だっ、助けてくれ！』

『もう許して下さい！すみまゴアツ?!』

『ハハハッ！アハハハッ！まだ、だよ？』

.....

（え？これ、何？）

「ステラ、どうかしたか？」

「え？あ、いや何でもないよ」

「しつかりしなさいよ、ステラ。パーティーはまだ続くのよ？」

「ていうか、なんで束さんとクロエさんに蓮さんがいるの？」

「いやあ、ちーちゃんに会いに来たらまたまパーティーしてたから  
参加しちやっただけ♪」

「私は束様が行かれる様でしたので、ステラ様のお顔を久しぶりに拝  
見しに来ただけですよ」

「私は弾と蘭の様子を見に来たのよ。そろそろ帰るわ」

蓮の言葉にステラは残念そうにして、先程の違和感を振り払うよう  
に笑顔で蓮に向き直した。

「え？蓮さんも一緒にパーティーしましょうよ」

「いいの？ならお義父さんに連絡しなきゃ」

ステラと蓮の会話が終わった所で、一夏がソファから立ち上がり



ステラの肩に叩いた。

「さて、ステラ。あと少し料理残ってるからちやつちやと作ろうぜ」  
「うん！わかった」

二人はそう言ってテキパキと調理の準備を始めた。

「なら、私もお礼にうちの今度出そうと思つてた特別メニューを作るわ。厨房借りるわね」

「それなら私も手伝う！」

蓮はどこから取り出したのか大きなフライパンを使って料理を始め、蘭はそのサポートを。

「なら俺はコーヒードでも入れるか。弾、手伝え」

「ういーす」

「それじゃあクーちゃんとりんりん、私達は持つて来たケーキ飾り付けでもしようか」

「そうですね」

「はい！」

「なら、私は皿でも出すか」

そうやってそれぞれパーティーを楽しむ為に準備を始めた。

まるで心に残る不安を掻き消すように。

しかしその中にステラは含まれていなかった。

「最後の料理完成！」

「イエーイ！」

「こっちも出来たわよ」

「久しぶりに良い汗かいた！一夏さん！いっぱい食べて下さいね！」

「どうだい！この束さん達特製盛り付けケーキは！」

「ふいー、疲れたー」

「二人ともお疲れ様です」

7人がそれぞれ準備を終わらせリビングに集まって来た時、リビングにはコーヒートの香りが部屋を包んでいた。

「こっちは後少しで淹れ終わる」

「数馬ってコーヒート作るの上手いんだね。初めて知った」

「あれ、そうだっけ？なら飲んでみた方がいいわよ。数馬のコーヒート

マジで美味しいから。弾も美味いけど二人とも癖があるのよねえ」

「まあ、数馬は無糖派で弾が甘党だからな」

「二人とも、そこまで二人にそっくりなんだ…」

「束さん、何か言いました?」

「へっ? あ、いや何でもないよ」

「そんな事より、早く始めないと時間も無いぞ」

「え? あ、ホントだ! 皆始めよ! 料理が冷めないうちに!」

「そうだな」

そう言つてステラ達はパーティーに興じた。

そして、パーティーが終わりそれぞれ帰路についていた時に全員が心の底で一つの事を思っていた。

あの事をステラに気付かれていないか、だ。

そして、織斑家の庭には千冬、東、蓮の3人が集まっていた。

「弾と蘭には少し遅れて帰ると言つたから大丈夫よ。それよりこれの使い方を教えて」

「ちーちゃん、お願い」

東に促され、蓮の前に出た千冬はポケットからトリガーを取り出して胸のあたりで構えた。

「トリガーオン」

千冬がそう呟くと、千冬の足先から順に変化して行き、そこには黒いコートを羽織り両腰に弧月を1本ずつ携えた千冬の姿があった。

「これがトリガーの使い方だ」

「ありがとう、それじゃあ」

「トリガー、オン」

蓮のその一言で掌の中のトリガーは起動した。

その姿は千冬とは違い、黒いコートでは無く赤いパーカーだった。へえ、これが。それで武器は?」

「そのトリガーはちーちゃんの戦闘データを元にして作ったの。サイズも形状も自由自在で、体のどの部位からも出せるよ。でも弧月より強度は落ちるけどね。名前はスコープオン」

「それと、射撃武器も付けておいたよ。ハンドガンタイプだけど、威力

は保証するよ。オプションで鉛レッドバレット弾っていうシールドエネルギーに反応してそれを重りに変える能力も射撃武器に付けたから」

蓮はその言葉を聞いて、静かに拳を握った。

「ありがとう。これでアイツを殺せ」それはダメ」…どうして？その為の力でしょ？」

「違うよ。これはアイツを止める為の力だよ。

れーちゃんはじゅんくんを殺された恨みで選択が極端になってるんだよ！」

「じゃあ何!?復讐出来る力があるのに、貴方はそれを使わずにいられるの?!」

「違うー!そういう事じゃ無くて!」

「そうよね!貴方には分からないわね!間接的にも貴方が殺した様なものだからね!」

「…え?」

「そうでしょう?貴方がアレを完成させなければ…」

貴方が『ベリアル』なんて作らなければ純も荘吉も『あの子』も死ななかったのよ?!貴方が殺したも同然よ!アイツの研究に協力した貴方も人殺しよ!」

「黙れ」

蓮が束に対する尚も糾弾の言葉が止まりそうにないと感じ、千冬は腰の弧月を引き抜き蓮の首に突き付けた。

「お断りよ」

「っ?!」

そして、それと同時に蓮は手を横に振り上げ指の先端からスコープオンを出して千冬と同様に首に突き付けた。

「ここでやり合ってもいいわよっ」

「二人ともお止め下さい。ここは市街地ですし、それに、お二方の内どちらかでも傷つけば少なくともお二方の家族が悲しみます」

二人の間に殺伐とした空気が流れたが、そこに現れたクロエがひとまずその場を鎮めた。

「…………ごめんなさい、冷静さを欠いたわ。東、言い過ぎたわね。ごめんなさい」

「私もすまない。咄嗟とはいえ友に武器を向けるとは」

「れーちゃん、その…」

「復讐は当然見送りね」

「え？」

「私にはまだ実戦経験が少なすぎるわ。ある程度使いこなせる様になるまで『私達の』復讐は始めない。それでいいかしら？」

「うん！ありがとう！」

蓮の言葉に東は理解を得たと思いき嬉しくなって抱きつこうとした。しかし、蓮はそれを受け流した。

「でも、貴方の事を許した訳じゃないから」

「…………うん、分かってる」

「そう、それならいいわ」

蓮はそう言ってトリガーを解除し、その身を翻し夜の街並みの中に一人帰路についた。

そしてその背中を3人は視線で見送った。

## 始まりの始まり Tenth Episode

クリスマスのステラの暴走から1年と数日が過ぎて、今日は1月1日。ステラ達6人に加え千冬、蓮、東、クロエの計10人は三社参りをしていた。

ちなみに東は変装している。トリガーのシステムを応用して別人の姿をコピーしている。

「さて、一件目はやっぱりここだろ」

一夏はそう言いながら、格式ある門をぐぐり後から他の9人も後について行った。

「篠ノ之神社か、懐かしいな」

「うーん！久しぶりの我が家！ここの空気はやっぱり美味しいねえ！」

「あら、こんな早くから初詣ですか？」

そう言つて神社から一人の女性が現れた。

「雪子さん、ご無沙汰しております」

「あら、千冬ちゃんに一夏君じゃない。久しぶりね」

女性の名前は『篠ノ之 雪子』。東のおばにあり、現在要人保護プログラムで日本各地を転々とさせられている本来の管理人の『篠ノ之柳韻』に変わり現在管理人兼仮神主として篠ノ之神社を支えている。

「それに、東も久しぶりね」

「えっ？」Σ∴(；；。、ω。、)∴ギクッ

「幾ら姿を変えても分かるわよ。貴方の話し方には独特の波と癖があるもの」

「ふえ〜∴相変わらず雪子さん化け物だよオ∴」

どの口が言うか。東はバレた事にブツブツと不満をこぼしながら変装を解いた。

「こんな所で立ち話なんてつまらないわね。さあ上がって、そちらの皆さんもどうぞ上がって下さい」

雪子に声をかけられ全員が会釈をしてその後について歩きだした。

.....

「それにしても、蓮ちゃんも大きくなったわね。さつきは誰か分からなかったわ」

「そうですか？けど雪子さんは昔と変わらずお綺麗ですよ」

「あら、相変わらず口がうまいのね。フツツ」

あれから数分経ち、先程まで緊張していたクロエを含めた初対面組は、雪子のその雰囲気のおかげで既にその場に溶け込んでいた。

「君達が蓮ちゃんと純君の子供なのね。うん、やっぱりそっくりだわ」

「この子ったら「俺はYDだ」って、そんなところまで似ちゃって困ってるんですよ」

「あらあら、確かやりたい事しか出来ない病だったかしら？懐かしいわね。千冬ちゃんの所は何か変わりある？」

「私の所にはこの子が新たに家族に加わりました。東が逃亡生活させるくらいなら預けたいと言ってきて。最初こそ戸惑いましたが、今ではもう本当の家族同然です」

「そう、でも東が家族とあの頃の皆以外の事を心配するなんて」

「まあ色々事情があるんだよ。でも、私もスーちゃんの事は本当の家族みたいに大切だし、私の第2の家族みたいな感じかな」

「そうなのね、フツツ。それで、貴方達は……まだ名前聞いてなかったわね」

「はい！一年半前から千冬さんと一夏の家でお世話になってます、ステラ・ターナーです！」

「元気が良いのね。それに可愛いし、いい子そうじゃない」

「へへん、そうでしょう！」

「凰 鈴音です。両親が近くで中国料理店をやっています」

「あら、あそこの娘さん？あそこの料理は本当に美味しいわ。たまに行くのだけどサービスも凄く良くて、好きよ、貴方のご両親のお店」

「ありがとうございます！」

「御手洗 数馬です」

最後になる数馬が自己紹介を終えると雪子は驚きの表情を見せた。

「御手洗？まさか荘吉君の？」

「親父を知っているんですか？」

「ええ、荘吉君は子供の頃千冬ちゃん達と一緒にここで遊んでいたのよ。確か探偵をしてたわよね？それで恵美ちゃんと結婚したのよね？純君も8年程前から3人とも見ないけど」

「そ、それは……」

何も知らない雪子の素直な疑問が束と千冬、そして蓮の表情を曇らせた。

「じゅんくん達は……」

「親父はとある事件を追って、この街を離れています。母さんは自分の進めているプロジェクトを進めるために日本を離れました。母さんは行った先で純さんと会ったと手紙に書いてあったので、今旅でもしてるんじゃないかもしれませんか？」

「そうなの？蓮ちゃん」

「え？あ、はい！そ、そうです……」

唐突に話を振られて一瞬困惑した蓮は心で数馬に感謝しつつ、怪しまれない様になるべく自然に言葉を返した。

「そう、良かったわ。元気そうで」

「そ、そうだ！三社参りなんだから余り悠長にしてられないよ！早く行く？」

「そうだな。雪子さん、お邪魔しました」

「いえいえ、それじゃあまたね」

「また今度来ます！」

「うふふ、ありがとう」

……

ステラ達は篠ノ之神社を出て近くの神社で二件目の参拝を済ませて、数馬と弾の提案で五反田食堂から徒歩15分程度の場所にある、御剣神社に来ていた。

「ねえ、お兄い。どうしてここにきたの？」

「あれ？蘭は知らないんだっけか？ここって10年くらい前からパ  
ワースポットって有名なんだぜ？」

「それに、俺と弾が初めて会ったのもここだ」

二人は懐かしそうな顔をして、その神社を見上げた。

「そういや俺達が出会ったのも10年前だったよな？」

「ああ、でもあの日の記憶は断片的にしか無いんだよな」

「まあ、その時4歳だったしな。覚えて無くても仕方ないだろ」

「その時、数馬君の家に招かれて初めて数馬君の親が莊吉と恵美って  
知って驚いちゃったわ」

二人の会話に蓮が加わり、更にその話を聞いてどんどんそれぞれの  
出会いの話で盛り上がっていた。

ステラがその話に混ざろうとした時、ステラは突然立ち止まり首か  
ら下げているギンギラの待機状態のゴーグルを少し手で持ち上げた。

「…………ギンギラ、周囲のTサーマルエナジー—ENGの濃度を調べて」

『何故ですか？』

「良いからお願い」

『わかりました』

『っ?!…………マスター、測定が完了しました。この神社の敷地内だけ  
ですが、Tサーマルエナジー—ENGの濃度がEDN—3rdの濃度と変わらない程で  
す』

「そっか、ありがとう」

ステラは険しい表情をして、御剣神社を見た。

ギンギラにもステラの考えが分かっていた。恐らくこの星に  
Tサーマルエナジー—ENGが流れ着いた時、エネルギー流はここに飛来したのだと。  
しかし、ギンギラには一つ疑問が浮かんだ。

何故、ステラが測定器等を使わずにここのTサーマルエナジー—ENGが特別濃度が  
高いと分かったのか、だ。

「おーい！ステラこっち来てお参りしようぜ！」



「うん！今行く！」

表情を一変させて一夏達に駆け寄るステラの首元で、ギンギラはその疑問の答えに辿り着きつつあった。

そして、三社参りを済ませてギンギラはステラに言わないまま束に連絡をして秘密裏に二人で調査すると決めたのだった。

そしてステラの近辺で少しずつ、だが確かに異変が起こっている中でとある家庭にも、異変が起きていた。

「え？中国に、帰る？」

それは、とある恋する少女の家庭だった。

始まりの始まり    Eleventh    Episod  
e

「えっと、今日は皆に大事な話があるから聞いてね？実は、今学年いっぱいで鈴ちゃん中国在国に帰国することになりました。」

帰る前のHRで2年1組の担任の津上 翔一が唐突に告げた言葉に、クラスは時が止まったように静まり返った。

そして、数秒後にそれぞれの反応を示しだした。

「え?」

「何?」

「はあ?!」

「おい、鈴!どういう事だよ!」

「どういう事も何も、そういう事よ」

驚き、現状が理解しきれていない一夏は、隣の席でいつもと変わらず飄々とした態度で座っている鈴に問いたただそうとしたが、鈴の返しに何を言えば良いのか分からなくなった一夏は黙ってしまった。

「ま、まあとりあえず帰りの号令しよ?ほら、放課後なら自由に質問していいから」

翔一の言葉に一先ずはそれを優先させようとクラスの殆どはすぐに納得し、鈴と親しい者達はその事をとにかく早く問いただしたいという思いから若干渋ったが、流石に関係無い者を巻き込むわけにも行かないので一先ずは翔一の言葉に従った。

「気を付け、礼」

『さようなら!』

礼が終わった瞬間にクラスの殆どが鈴の元に集まった。

「ねえ、鳳さん。どうして帰国するの?」

「家庭の事情って奴よ」

「お別れ会しようか?」

「別に良いわよ、そんなの」

「ねえ、凰さん」

「あーもう、うるさいわね！私もう帰るから退いて！」

クラスの殆どからの質問攻めを鬱陶しく感じたのか、鈴はクラスメイトを押し退けて教室から出ていった。

「おい！待てよ鈴！」

「待って一夏！ここは私が行く」

「でも！」

「一夏、女同士の方が話しやすい事もあるだろ」

「…分かった。ステラ、頼む」

「任せて！」

ステラはそう言うと、鈴の後を追って走って行った。

それから約10分後、ステラは学校の敷地内で人気の無い場所に居た。

「鈴って、何かあるとよくここに来るよね」

ステラはそこでうずくまって座っていた鈴の隣に座った。

「ねえ、鈴。ここに一夏は居ないよ？だから強がらなくてもいいんだよ？」

「ステラに嘘はつけないわね……」

実はね、父さんと母さんが離婚するの」

「え？」

「父さんと母さんはまだちゃんと仲良いのよ？でもその親、つまり私のおじいさんとおばあさん達が揉めててね。それで仕方なく」

「でも、それと帰国って何の関わりがあるの？」

「とりあえず揉め事を収めるためにつて。それを言われた時凄く謝られたなあ」

「そっか。ねえ鈴、こんな時に言うことでも無いと思うけど、一夏に告白したら？」

「はあ?!なんでそうなるのよ！」

急に変な話を振られ、少し怒鳴り気味に鈴はそう言った。

「思いを伝えなままサヨナラなんて、悲しいじゃん」

「いや、それもそうだけど……」

思いの外ステラが真面目に言っている事に気が付くと、鈴は急に気恥しくなった。

「ねえ、行こ？今一夏教室に居るから」

「ああ、もう！分かったわよ！告白すればいいんでしょ?!」

「そうそう、その意気だよ♪」

「あんた楽しんでるでしょ」

「エエ、ナンノコト？」

「片言じゃん…はあ……」

そんなこんなで、二人は教室に向かった。

しかしそこには一夏だけでは無く、数馬と弾もいた。

「ちよつとステラ！話が違うじゃない！」ヒソヒソ

「大丈夫だよ、私が連れ出すから」ヒソヒソ

「おい、鈴を連れ帰ったと思ったら急に二人で内緒話とはどういうこった」

「そんなことより、弾と数馬はこっち来て」

「ああ、分かった」

「え？ちよい数馬了承早くない？」

「察しろアホ」

「は？……ああ、そういう」

困惑していた弾だったが、ステラの表情と鈴の顔の赤さで察したのかニヤリと笑い数馬とステラを連れて教室から出て行くのだった。

「えつと、ねえ一夏」

「おう、どうしたんだ？」

この状況で察せない辺りで一夏の鈍感さが誰でも感じ取れる。

「その、さ……私の話、聞いてくれる？」

「別にいいけど、何だ？」

「次に会った時に私が料理上手くなったら、毎日酢豚食べさせてあげる！」

「え？おう」

「それじゃあ！私帰るから！」

「お、おい！……行っちゃまった」

鈴は急いで教室を飛び出して走ったが、途中で廊下の影から伸びた腕に捕まった。

「ちよつと鈴こつち来い」

「わっ?!ちよつと何よ!」

そのまま使われていない教室に連れ込まれると、そこには先程教室を出て行ったステラと弾と数馬の3人が居た。

「あのさあ、鈴。あれは無くね?」

「ああ、一夏があれで気付くと思うか?」

「多分タダ飯食わせてくれるとかそんな感じだろうね」

「し、仕方ないでしょ!」

「まあ、いいんじゃないかね?鈴がそれでいいなら」

「いや、良くはないけどさ……」

「ねえ、鈴。私ね、また鈴と色々な事で競ったり協力したりしたい。だから絶対帰ってきてね!こんな事言ったらダメかもしれないんだけどさ、ここは私達のホームなんだからさ」

「ステラって、よくそのバンドの歌詞使うわよね。どんだけ好きなのよ……ねえ、ステラ。あんたってIS学園に入りたいんだよね?」

「うん、そうだよ?」

「なら、IS学園に入る一番最速の方法って何?」

「普通に受験するのが無難だけど、それだと試験で数百人と競わなきゃいけないから、国家代表候補生か国家代表、または企業代表になって受けた方が確率的には高いかな。そもそも代表候補生や企業代表になる事が難しいんだけどね」

「そっか、専用機持てるのってそういう人間なの?」

「うん、そうだね」

「なら、私中国の国家代表候補生になる」

「はっ!」

「え?」

「あんたが言ったんでしょ?競いたいって。だから代表候補生になって専用機手に入れてあんたと戦う」

「……………そっか、分かった!じゃあ私も頑張って合格しないとね!そ

の時は負けないから！」

「こっちのセリフよ！」

ステラと鈴は笑いながら、お互いの拳をぶつけた。

「さてと、そろそろ帰るか」

「そうだな、さっさと帰ろうぜ」

「あ、待ってよ二人とも！」

「待ちなさいよ！」

「あ、おーい皆ー！一緒帰ろうぜ！」

「あ、ごめん一夏！忘れてた！」

「忘れんなよ！」

私達は、こんな平和な日々が続くと思っていた。

そう、これから半年後のあの日まで。

## 始まりの始まり T w e l f t h E p i s o d e

『第2回モンド・グロッソ準決勝！勝者は、第1回の優勝者であり未だに公式戦無敗記録を更新し続ける絶対的強者！日本代表！織斑 千冬選手！』

今では彼女の祖国が運営するIS学園で教師を務めているとの事です！

そして、1時間程前に行われた同じく準決勝の勝者は、アリーシャ・ジョセスターフ選手！イタリアの国家代表で、織斑 千冬選手とはライバルの間柄であるとお互いに認め合い、今でもたまに模擬戦をするとの事です！

さあ、遂に一時間後となった決勝戦！これは絶対に目が離せないぞお！

以上！第2回モンド・グロッソ会場のドイツからの中継でした！』

「いやあ、凄かったね！」

「ああ、流石千冬姉だ！」

大きなガラスの前でステラと一夏は、館内アナウンスで流れていた実況を聴きながら千冬の勝利に大喜びしていた。

ここはドイツ。第2回モンド・グロッソが行われる国だ。

何故ステラ達がここにいるのか。それは、千冬の晴れ姿を一目見たというステラの言葉がきっかけだった。

それは遡ること2週間前。

.....

「おい一夏、ステラ。後1週間は一緒にいられるはずだったんだが、急遽現地での調整とかで出発が早まった。すまないが、家の事は頼んだぞ」

「了解」

リビングで、自分のスマホに届いたメールを確認した千冬がそう言うのと、一夏がキッチンから顔を出してそう言った。

「モンド・グロッソかあ。1回生で見えてみたいなあ、千冬さんの戦う

姿」

「生も何も、一度戦っただろう」

「違いますよ。あの時は私は戦いの中にいて、千冬さんの動き方や戦い方をじっくり見る暇が無かったし、それにあの時は千冬さんトリガーだったじゃないですか」

「そうか……ならば、来るか？」

「え？」

千冬の突然の言葉に一夏とステラは間の抜けた声を出したが、すぐにその言葉を理解したのか、ステラの顔が明るくなって行った。

「いいんですか?!」

「え?でも家の事はどうするんだよ」

「まあ、2週間程度なら大丈夫だろ」

「ダメだろ、埃とか溜まるし。なあステラ」

「埃なんて掃除すればいいじゃない!そんなことより、私はモンド・グロツソ見に行きたい!」

普段なら今ので済むのだが、今のステラには全く効果が無かった。それを見て一夏は1回だけため息をつき、少し苦笑しながらステラを見て口を開いた。

「分かった分かった、行くよ」

「ホントに?!やったあ!」

『ですがマスター、1週間後は束さんとのご食事の予定では?』

「……………あつ」

「まあ、あいつには私から言って日付をずらして貰えばいい」

「すみません、ありがとうございます千冬さん」

「いいさ、この位」

……………

そして現在に至る。

「それにしても、千冬さんまだ1回も零落白夜使ってないね」

『これを言うと他の選手に失礼ですが、彼女らは全員それを使わせるに至っていないのでしょう』



「それって千冬姉の必殺技みたいなもんだろ？それ無しの剣1本で決勝戦進出ってすげえな」

コンコン

「誰だろ」

ステラ達が千冬の戦いっぷりについて話していると、突然ドアからノックをする音が聞こえた。

「俺が出るよ」

「うん、分かった」

ガチャ

「はい。どなたで、うつ?!」

「っ?!一夏!」

ドアを開け、訪ねてきたのが誰かを確認しに行った一夏の呻き声の様な物を聞き、ステラはすかさず立ち上がった。

「はいはい。そこ、動かない」

「……誰?ていうか、一夏を離して!」

部屋に入って来たマスクを着けた何者かの腕の中に捕まっていた一夏を見て、咄嗟にステラはギンギラを展開しようとした。

「あれ?いいの?あなたがISを展開する一瞬の間でも、この子頭をぶち抜けるわよ?嫌なら、それをテーブルに置いて腕を後ろに回しなさい」

「卑怯もの……っ!」

ステラはそう言いながらも、ギンギラの待機状態であるゴーグルをテーブルに置き、腕を後ろに回した。

「それでいいのよ、それじゃあ

おやすみなさい」

ステラの意識は、そこで途切れた。

.....

「んんっ.....ここは？」

自分の見知らぬ場所で目覚めた事に違和感を感じつつ辺りを見回すと、そこには縛られた一夏と複数のIS、そして先程ステラ達を拐ったマスクを着けた女が立っていた。

「あら、目覚めた？」

「ステラ、大丈夫か！」

「うっ...大方、どっかの廃工場って所かな」

「あら、冷静な判断ね」

「目的は何？」

「さあね？何かしら」

「ふざけて無いで教えて！何の為にこんな「ちよつと黙りなさい」があっ?！」

自分達を拐った理由を聞こうとしたステラの腹を、女は思いつき蹴り上げた。

「ステラ?!おい！ステラに何しやがる！」

「何って、うるさいハエを叩いただけだよ？」

「ふざけんな！」

「待って一夏！これ以上突っかかると、一夏もやられるよ？」

「へえ、この状況で他人の心配をしてる余裕があるのね」

「え?...がっ?!うっ?!ごはっ?!」

「おい、おいやめろよ、やめろお！」

「うっ!こんのお！」

「きやあ?!」

先程から一方的にやられていたステラだったが、突然ステラの腕を縛っていたロープが千切れて、その勢いのままマスクの女を殴り飛ばした。

「あーら、痛いじゃない！」

バンツ

「え？」

突然響いた乾いた音にステラと一夏は呆然としたが、女の持つ銃の銃口が向く方を向いたステラの顔が徐々に驚愕と痛みに歪んだ。

「あ、ああ……いい、いたいよお、いたい……いい、たいっ！」

そう言いながらうずくまるステラの右腕は血に染まり、傷口からは血が重力に従い地面に向かって腕を滴り落ちていた。

「痛いっ、痛いよっ助け、て……一夏あっ！」

「ふふふっ、小賢しい真似するじゃない」

地面に落ちていた小さな折り畳みナイフの様な物を手に取った。

バンツ、バンツ、バンツ、バンツ

「うあっ！ぐっ！はあっ、ああ！」

「おい、何やってんだよ……何やってんだよお！」

バンツ

「父、さん……母さ、ん…………助け、て」

バンツ

「やめろ、やめてくれえ！」

バンツ

「うっ！うっ！………………」

発砲の度にステラの体が揺れ、その度にステラの顔からは血の気が引き、その目はどんどん焦点が合わなくなっていた。

ガシャー……ンツ！

ステラの命が一步一步死に向かう中で、突然廃工場の壁の一部が吹き飛んだ。

「一夏！ステラ！無事か！」

それは千冬だった。そしてその後には複数のISが並んでいた。

「ドイツ軍から連絡があつて、お前達が誘拐され、たと………………ステラ？」

千冬の目に飛び込んだのは、四肢をだらんと下げて柱にもたれ掛かる、血塗れのステラの姿だった。

「嘘、だろ？ステラ！おいステラ！」

千冬はそう叫びながら近くの敵を切り倒し進み、ステラの元に一瞬で飛び込んだ。

「ステラ！目を開けろステラ！」

「ち、ふゆ………さん？」

「そうだ、私だ！待っている、今すぐゴイツらを殺して「だ、め………つ！」何故だ！」

「千冬、さんは……人、殺しになっちゃ、ダメ！うっ……ゴホッ、ゴホッ！一夏を連れて、にげ、て……」

「ふざけるな！お前を置いて逃げれるわけないだろ！」

「死ねえ！」

「千冬姉危ない！」

「っ！ぐあっ?!」

後ろから斬りかかって来た誘拐犯の内のIS乗りの攻撃に反応しきれず、千冬は背中に切り傷が入った。

(シールドエネルギーが機能しない、だと?!)

「ぐっ！はあ！」

「きやあ?!」

その時、千冬は自分のミスに舌打ちをした。ドイツ軍のIS部隊は既に半壊滅状態にあり、ドイツ軍が倒せなかった誘拐犯のISに囲まれている。

「そうか、そうだな。普通に考えればそうだ。幾ら軍用機と言えど、搭乗者の事を考えてリミッターが付いている。しかし誘拐をする為にISまで持ち出す様な輩が、リミッターなど付けるわけが無いな」

そう言いながら、自身唯一の武器の雪片を構えた。

だがその時、千冬や一夏の間をすり抜けて黄色く光る兎達が誘拐犯達に飛びつき、そして爆発した。

「ちーちゃん！今の内に！」

千冬は廃工場に響いた声に従い、ステラと一夏を抱えて天井に空いた穴から飛び出した。

「束、何故ここに」

「スーちゃんのピンチを見逃すわけじゃないじゃん！とにかく今は逃げよ

！」

「まずは病院だ！ステラが撃たれている！」

「いや、私のラボに行くよ。その方が技術も設備も整ってるし、緊急でもオペできる」

「分かった、急ぐぞ！ステラの血が足りているうちに！」

「千冬姉！ステラ、大丈夫だよな?!」

「大丈夫だ、間に合わせる。絶対に！」

千冬と束はその言葉を区切りに会話を止め、担いでいる二人に負担がかからない様に、しかしそれでも最高速度に近いスピードで束のラボに向かった。

.....

コトツコトツコトツ、コトツコトツコトツ、コトツコトツコトツ

「おい、落ち着けよ千冬姉」

「落ち着いていられるか。私が駆けつけるのが遅かったせいでステラは.....クソっ！」

「今そんな事言っても仕方ないだろ」

「そうだよーちゃん。それにあまり動くと背中 of 傷口が開くよ？」

ラボの客室の様な場所に束が入って来ると、千冬は束の肩を掴んだ。  
だ。

「ステラは無事なのか?!」

「大丈夫、そろそろ意識も回復すると思うよ」

「そうか、よかった.....」

「ねえ、ちーちゃん。どうしてスーちゃんを連れて行ったの？」

「どういう事だ？」

「どうしてスーちゃんをドイツに連れて行ったのって聞いてるの！」

束の言葉が理解できずに困惑していた千冬に、束は掴みかかった。  
「ちーちゃんがスーちゃんをドイツに連れて行かなかったら、スーちゃんはこんな事にはならなかったんだよ?!」

「なっ?!私はステラが見たいって言ったから連れて来たんだ！」

「何?そうやってスーちゃんのせいにするの?!」

「違う！私はただ！」「二人とも止めて下さい！」……ステラ？」

二人が口論をしていると、先程束が入って来た入口から車椅子に乗ったステラとそれを押すクロエが出てきた。

「束さん、千冬さんは悪くありません。私があの時下手に抵抗したから撃たれたんです」

「そんな！違うよ！」

「そうだ！お前は悪くない！」

「……………」よかった」

「え？」

「二人とも、息ピッタリですね」

「いや、それは……」

「そうかもけど……」

「私の事で二人が言い争うなんて、嫌です。それに私にはハーモナイザーがあるので回復力だけは自信あります！」

「いや、でも！」

「千冬様、とにかく落ち着いて下さい」

自分の責任だ、と自分を責めようとする千冬にクロエは一先ず落ち着く様に促すと、ステラの乗る車椅子を千冬の前に止めた。

「ただ、少しお互いに強がらずに本音で話してみるのも良いものだと思いますよ」

「ステラ……私が遅かった事を、恨むか？」

「そんな、まさか」

「怖かったか？」

「……………はい。凄く怖かった、です」

「痛かったか？」

「はい……痛かったです」グスン

「辛かったな……本当に、良く頑張った」

「うん、怖かったあつ、怖かったよお！どうして私ばかりこんな目に遭うの?!うう、ひっぐ……本当に死にそうで、体が冷えていくのが、感覚が無くなって行くのが怖かった！怖かったのお！うわああああ！」

ステラは、今まで溜め込んでいた恐怖を吐き出すように大声で泣い

た。そして泣き疲れたのか、数分後には眠りについた。

「ギンギラ、1ついいか？」

『千冬さん？何故ここに。どうかしましたか？』

整備の為に無人状態で展開されたギンギラに、泣き疲れ眠ってしまったステラをベッドまで運んだ千冬が整備室に1人現れた事に驚きつつ、いつもの冷静な口調で千冬に返事を返した。

「いや何、さっきのステラの言葉が気になってな」

『さっき言葉？』

『どうして私ばかりこんな目に遭うの』

『っ！』

「ギンギラ。深く聞くつもりは無いが、過去ステラに何があった」

『……いつか、頃合いを見て話すつもりでした。ですが、早いうちに話しておいた方が良いでしょう』

『私とマスターは、この星の生まれではありません』

「何？」

ギンギラの急な発言に千冬は驚いたが、ある意味そう考えた方が合点がいった。

『この事はいずれ詳しくご説明します。本題はここからです。マスターが元いた星でその身に、心に深い傷を負わせた事件が起きたのは』

「ギンギラちゃん。その話、私も聞いて良いかな？」

ギンギラがステラの過去を語ろうとした時、束が整備室の入口で立ち声をかけた。

『構いませんよ』

「ありがとう」

束はその答えを聞くと、千冬の隣に歩いて行き近くに置いてあった椅子を2つ取り片方を千冬に渡し、もう片方を自分の近くに置いて腰をかけた。

『この事はブレンとティキさん、マスターの両親の苦渋の決断でマスターの記憶からその記憶を抜き取ったので、恐らくマスターも先程は感情のままに思いを吐き出したので、その記憶が一時的に戻ったので』

しよう。それを踏まえてお聞きください。あれはまだマスターが8歳の時の話です』

ギンギラはそう言っ、かつてステラに起きた2つの出来事を語った。

「嘘だろ？そんな事が…人を、人の命を何だと思ってる！」

「それじゃあ、スーちゃんは……」

『千冬さん、1つ聞いてもよろしいですか？』

「なんだ？」

『この話を聞いて、マスターをまだ家族として扱って下さいますか？』  
「当たり前だ。むしろ、尚更その気持ちが増した。私が、私達大人が守らないとな」

そう言っ、千冬は拳を強く握った。

『しかし、1つ疑問も残ります』

「なんだ？」

『暮桜のシールドエネルギー、そして絶対防御も無視して千冬さんに傷を負わせたあの攻撃。零落白夜とも違うあの力、束さんは何かご存知ですか？』

その言葉と共に、千冬とギンギラの視線が束に注がれた。

「残念だけど、それは分かってないの。個人的にも、零落白夜を超える能力は『作れない』っていうのが結論だよ」

「お前なら作れなくても、アイツならどうだ？」

「っ?!ちーちゃん、何が言いたいの?」

『お二人が希に口にするその『アイツ』というのはいったい誰なのか?』

ギンギラの純粋な疑問が、二人の心には重く押し潰すような物に感じた。

そして、その質問に答えたのは千冬だった。

『『デストロ・デマイス』。奴は悪魔の科学者だ。そして、



もう一人のISの開発者だ」

## 始まりの始まり Thirteen Episod e

奴は、デストロは転入生として私達の学校に現れ、私達の物理研究部に入部してきたんだ。

物理研究部は束が自らの悲願である『宇宙に行く』為の研究に使う、いわば仮の研究所の様なものだった。当時から私と束は周りから化け物扱いを受け、溢れていた者同士で不思議と惹かれあつた。そこに、やりたい事があるからと純が入り、吊られるように蓮、荘吉、恵美が入部した。そして、いつの間にか私達の憩い場となっていたんだ。

最初は奴の入部に全員が難色を示したが、束が態度を変えて奴の入部を推して来る様になった。そこで私達は奴の入部を許してしまつた。

「それじゃあ、よろしくね！」

入部したての時の奴は明るく振る舞い、人懐っこい様な人格をしていた。

束が惹かれた理由だが「自分を理解してくれたから」との事だった。普通こんな事で心を許す程人の心は単純では無い。だが、弟と二人だけの家庭で弟を守る為に周囲の大人を退ける様に成長して人格を育てた私と違い、束はこの頃まだその心は純粹、悪く言えば単純その物だった。

束をはじめとして奴が友好関係を広げて信頼を得るのと並行し、私達はデストロに対する疑念は増していった。

そんなある日の事だった。

「デストロ、お前の目的って何なんだ？」

痺れを切らしたのか、全ての部員が揃っていた部屋で純がそう言つた。そう、全ての部員がだ。研究の一部のデータを閲覧させる程デストロを信頼している束がいる前でその言葉を口にした。

「何のことだい？純」

「そうだよじゅんくん。目的って何のこと？」

「束には悪いが、俺達はコイツの事を全く信頼していないし、お前がただ束を理解している訳じゃないって事もだいたい分かっている」

純に続く様に荘吉も口を開いた。その言葉を聞いて束は驚愕し、デストロはその明るい笑いを怪しい笑いに変えた。

「やっぱりか。まあ、初めから君達の：いや、誰の信頼なんて欲していないよ。僕が欲しかったのは束の宇宙に行く為に作り出している力だ。まあ、動かせるのが女性だけで少数の特異体質の男性だけがISを動かせるってのは計算外だったけどね」

「嘘だったの？デストロは私の事を理解してくれてるんだよね？私の、友達なんだよね?！」

「嘘じゃないさ。僕はちゃんと理解してるよ」

「そうだよね。デストロは「君が作っているそれに兵器としての可能性が充分含まれているって事をね」…え？兵器?」

「やめろ！それ以上言うな！」

私は奴を止めようと叫びながら黙らせる為に走り出そうとした。しかし、普段のISの試験運用のダメージが溜まっていたのか、私はその場で膝を着いてしまった。

「何故千冬程の人間が試験運用の後に体をよく痛めるのか。何故ISの出力が一定以上上げると稼働自体が出来なくなるのか、何故稼働に新たなエネルギーを使用する必要があったのか！」

その答えはただ一つ……君の作ったISは、核兵器なんかより世界を滅ぼす力を大いに秘めている！究極の兵器だからさ！」

「ISが、兵器？嘘だ！デストロは嘘を言ってるんだ！そうだよね?」

……っ?!」

その時、束の脳裏にフラッシュバックの様に記憶の波が流れ込んで来た。

それはISの試験機を操縦し、その力の大きさに耐えられずに体を痛めた私の姿だった。その当時はただ出力の設定を間違えたただけだと束に言い聞かせていた。束もだったら負担を減らそう、そう言っただけで出力の調整に挑んでいた。

そう、私達は気付いていたんだ。ISの兵器としての側面に。だからこそ、それをただ純粹に宇宙を羽ばたく為の翼として見ている束に言えなかった。それを知った束が絶望するのが怖かったんだ。

それなのに、コイツは！

「束、君には感謝しているよ。君のおかげで『ベリアル』の力はより一層高まった」

そう言っただレストロは着ていた制服を脱ぎ捨てた。その下にはISスーツというISを動かす上でISへの脳の電気信号をダイレクトに伝えられる様にと束とレストロが開発した服を着込んでいた。そして奴はIS試験開発機2号のゼニスに乗り込んだ。ゼニスは、奴が物理研究部に入った時にどこからか持って来たボロボロのパワードスーツの様な物を改良した物だ。

「ベリアルって……ダメだよ！あれは危険だから解体しようって言っただじゃん！」

ベリアル、有名な神話に登場する悪魔と同じ名前を持つそれは、束とレストロが開発したエネルギー発生元型だと聞いていたが、何やら危険性があるらしい。

「何を言っているんだ？あれさえあれば世界のエネルギー支配等容易い！ベリアルの有効な活用法は世界の支配、そして……いや、これは君達に言っても仕方ないね。何故なら……」

……  
……  
……  
「今から君達には死んでもらうからね」

『そうですか、そんな事が………』

眼の前に膝を着いて座り込む私より一回りも二回りも大きい白銀のIS、ギンギラは私の話を聞いて何かを感じたのか、一言言おうと黙り込んでしまった。そして、それは束も同様だった。

「それから私達はデストロを追っている。そしてその過程で純と荘吉は……………」

純と荘吉の死は、二人を愛していた者の心に深い傷を負わせた。

1人は常に心に復讐の火を灯し、1人は心を病み愛した者の亡骸と共に失踪した」

私はギンギラに説明しながら胸を痛めていた。あの時私が奴を止めなければ、ISが兵器として見られる事は無かったかもしれない。

ギンギラと束、そして私は重苦しい空気のまま口を閉ざして会話はそこで止まり、数分後に解散しようと思案したギンギラの言葉で私達もその場から立ち去り、それぞれ束が用意した場所に向かった。

その時、私には全く予測すらしていなかった。

まさか一夏達がISを動かしてしまうだなんて。

始まりの始まり    F o u r t e e n t h    E p i s  
o d e

冬も終わり、春が芽吹き始めた3月。

この月に行われるのは、ステラや一夏達のいる中学校の卒業式。そして公立高校の入学試験である。

「一夏、準備出来た？」

「おう、出来てるぜ」

「頑張つて来てね！私応援してるよ！」

「そっか、ステラの入試つてもう終わってるんだっけ」

「うん」

本来IS学園の入試も、一夏の受験する藍越学園と同じ日に行われる。しかしステラは。

「ステラすげえよな。IS学園の推薦入試通るなんて」

「へへへっ」

そう、ステラはIS学園の推薦入試の枠を校内で勝ち取り、尚且つ合格したのだ。

IS学園は全世界から入学志願者が受験する為、普通入試でさえ倍率は10倍を超えている。故に推薦入試の枠は1校につき2枠しか無く、その中でも受かるのは僅かな学生だけだ。

「確か、今日荷物送るんだよな？」

「うん、それで明日専用機申請の為に1回IS学園に行つてから、なんか試験とは別に模擬戦するんだって。それで明後日にはここを出る……」

「不安なのか？」

「え？ううん！違うよ?!」

一夏の言葉にステラは酷く動揺しながら答えた。流石に一夏でもこれには気付いた様で、ため息を吐きながらステラに向き直った。

「ステラ、不安なら電話でもすればいいだろ？それでも不安なら1回

帰ってくればいい。いつでも帰って来いよ。お前が鈴に言ったんだろ？ここがホームだつて」

「一夏……」

『マスター、私もいます。ですから何かあれば溜め込まずに私や信頼出来る人に吐き出しても良いのですよ？』

「ギンギラ……」

一夏達の言葉にステラは1度俯き、そして満面の笑みを浮かべながら顔を上げた。

「うん、そうだね！ありがとう！」

「おう」

『はい』

「それじゃあ、行ってくる」

「うん、入試頑張つてね！」

「ああー！」

ガチャツ、ガタンツ

「よしっ！じゃあ始めようか！」

一夏が家を出た途端にステラは立ち上がり、荷造りを始めた。3年間で増えた荷物一つ一つに思いを馳せながら。

そして1時間経った頃ステラは自分の僅かな、しかし思い出が多く詰まった荷物を眺めていた。

「……………ここも、お別れだね」

『はい。ここには多くの思い出があります。楽しかった事も、辛かった事も』

「うん、そうだね。半年前は身体中撃たれてたなんて思い出す暇も無かったね」

『こう言っではなんですけど、EDN—3rdを離れてこの星に来て良かったと思います』

「流れ着いた星がここで良かった。2つ目の家族も出来たしね」

その時、机の上に置いてあったテレビのリモコンにステラの手が触れて、そのまま落ちてしまった。そしてその衝撃でスイッチが押されてテレビの電源がつき、そこにはニュース番組が流れていた。

「ああもう！なんか締めり悪いなあ…」

そう言いながらリモコンを拾おうとするステラの耳に、慌ただしいニュースキャスターの声が響いた。

そしてその一言は、世界を震撼させた。

『え?! た、たった今入った速報です！なんと世界で初めてISの男性適合者が現れました!』

そして次の一言が、その者の関係者を驚愕させた。

『名前は織斑一夏！第1回モンド・グロツソ優勝者織斑

千冬の弟の織斑 一夏君です!』

「は?」

「「「「「「はああ?!」」」」」」

そして、後に世界はもう一度揺れる事となる。

二人目と三人目、そして四人目の男性でありながらISに適合した人間。

五反田 弾、御手洗 数馬、津上 翔一  
の存在によって。



# 始まりの始まり Character introduction

ステラ・ターナー

本作の主人公。

EDN-3rdを救った英雄、ブレンとティキの間に生まれた女の子。アカデミーに新たに創設された小等部と中等部の内、小等部に所属していた。

組織内の内乱の際に戦闘センスを買われて戦闘要員として戦場に出た。そしてその際現れた未確認のVSとAエイクリッドKの内VSの討伐隊に選ばれ、その時にギンギラに新たに搭乗者登録して2代目の操縦者となった。

地球に来た際に束に拾われて、ギンギラの修理と自分の治療をして貰った事に恩義を感じてIS学園に入りたいと思う様になる。その後織斑家に預けられ、第2の家族として大切に思っている。

IS学園の推薦入試に合格する程の頭脳を持っているが、基本的に天然なため結構細々としたミスをする。

ギンギラ

ステラの専用機。

超高性能のAIによって自立思考を可能にした、NEVECの最先端技術の塊。

元々VSだったが、束によりISのコアを移植されてISとVSのハーフとなった。その為並の量産機なら圧倒出来る程のスペックがあるが、ステラの経験の少なさからその力をセーブしてステラの成長を促している。

織斑 一夏

原作の主人公。

恋愛に関しては超がつく程の鈍感。多数の女子から好意を寄せ

られているが、全く気付いていない。

藍越学園の試験会場の別の部屋に置いてあつた適性検査用のISを起動させてしまった為に半強制的にIS学園への入学が決定した。

織斑 千冬

一夏の実の姉。

第1回モンド・グロツソの全部門優勝者。全世界の女性からブリュンヒルデ世界最強と慕われているが、本人は嫌がつている。

ISの開発者の束とは親友で、学生時代に非常に高い身体能力を活かしてよくテストパイロットをしていた。そしてもう一人のIS開発者のデストロを行方を常に探している。

五反田 弾

一夏の中学校からの友人。

アニメや漫画、ゲーム等が好き。ステラもその影響を受けてアニメや特撮をよく見るようになった。

赤髪に黒いバンダナがトレードマーク。

一夏がISを動かした事で全世界で行われた適性検査で、同様に起動させてしまった。

五反田 蘭

弾の妹。

働き者でよく蘭の祖父の『五反田 蔵』の営む五反田食堂を手伝っている。

弾を通して知り合った一夏に惚れている。

五反田 蓮

弾の母親で、千冬と束の同級生。

明るい性格で、客からの人気も（蘭に次いで）高いが、束や千冬の前だと口調や性格がサバサバした物に変わる。

高校時代から付き合い、そして結婚した純をデストロに殺されてから復讐をその胸に誓っている。

五反田 巖

純の父親で、弾達の祖父。

五反田食堂を経営し、調理の際に見せる豪快さに惚れ込んだ料理人がたまに弟子入りを申し込みに来るが、それを殆ど断っている。

弾が『YD』という言葉を口に出す事を極端に嫌悪している。

御手洗 数馬

一夏の中学校からの友人。

常にハードボイルドを志していて、冷静さを欠く事は滅多にない。数馬をよく知る者からはハードボイルドだと認められているが、本人はそれを否定し「俺はまだただのハードボイルドだ」と評している。

弾とは幼い頃からの友人で、普段は言わないが互いを親友だと認めている。

一夏がI Sを動かした事で全世界で行われた適性検査で、同様に起動させてしまった。

凰 鈴音

一夏の小学五年生からの友人。

中国から引越してきた当初は虐められていて、それを一夏に助けられてそれから惚れている。ステラとは親友で、たまに一夏の事を相談していた。

両親の都合で帰国する際に一夏に「料理が上手くなったら毎日豚を食べさせてあげる」という告白をしたが、一夏はそれが告白だと気付いていない。

篠ノ之 束

千冬の幼少からの親友。

マルチパワードスーツ『インファイニット・ストラトス』通称『IS』の開発者で、千冬と蓮の為にトリガーを作った。

自他共に認める天才で、千冬と肩を並べる程の身体能力を持つ。ステラの事を娘の様に大切にしている。

クロエ・クロニクル

束の義理の娘。

幼少に束に拾われ、そこから常に行動を共にしている。自分の素性を束以外に教える事は無く、正体は不明。

料理は壊滅的に下手だったが、ステラの全力の指導のおかげで今では一流シェフにも引けを取らない程に成長したが、ステラはその成長っぷりに少し嫉妬している。

津上 翔一

一夏達のクラスの担任。

家庭科の教師で、料理の腕は一流。ダジャレをよく言うが、毎回スベる。

一夏がISを動かした事で全世界で行われた適性検査で、同様に起動させてしまった。

入学！ギンギラ一番星  
混乱と出会い First Episode

(これは、想像以上にキツイぞ…)

(あぁー、帰ってアニメ見てえ…)

(さて、どうしたものか)

一夏と弾、数馬は三人三様の思考で頭がいつぱいだった。なんか1人だけ違う気もするが。

3人が何故この様な事を考えているのか。それは今の彼らの状況を見れば分かるだろう。彼らは今。

(IS動かせるからって女子校に放り込むなよ…)

彼らは今IS学園に、つまり女子しかいない学校に放り込まれたのだ。そんな彼らの思考は知らずに、クラスの殆どの女子は3人に熱い視線を送っている。

そんな空気を打ち破る様に教室のドアが開き、緑色の髪の女性が入って来た。

(あ、突っ込んできた人だ)

一夏がそんな事を考えていると、女性は転けた。急にどうしたとか考えるなよ？ 転けたんだ。

「えっと、私はこのクラスの副担任を務める山田 真耶です。よろしくお願ひします」

「……………」

「ういーす、よろしくでーす…」

「よろしくお願ひします。ほら、一夏も」

「え？ ああ、よろしくお願ひします」

「よろしく頼む」

殆どの生徒にシカトされて涙目になっていた真耶だったが、ステラ達が反応してくれて嬉しそうにニコリと笑った。

「はい！ それでは自己紹介をお願いしますー！」

先程の事で自信がついたのか、ハキハキと喋り自己紹介の開始を促

した。

(それにしても、やっぱり視線が痛い……ん？あれ箒か？箒か！つて、目を逸らしやがった……)

「……くん？……おり……くん？織斑 一夏君！」

「は、はい！」

「あ、あの、その……自己紹介であ、から始まって次は織斑君の番なんだよね？だからその、してくれるといいなあって。ダメかな？」

「わ、分かりましたから！そんなに謝らないでください。えっと、うつ……」

一夏はオドオドしながら自分をお願いしてきた真耶を落ち着かせながら振り返った。すると全ての生徒から視線が注がれた。

(ふう……落ち着け。ステラと鈴もあの時はこんな感じだったんだな。よし、行くぞ！)

そして一夏は息を大きく吸い込み、口を開いた。

「織斑 一夏です！」

「……えっと、織斑君？他には？」

「以上です！」

「何が以上です、だ馬鹿者」

スパアンツ！

「げっ！関羽?！」

「誰が三国志の英雄か」

ゴツツ！

「いってえな。何すんだよ千冬ね」

ゴゴゴゴゴツ

「織斑先生だ」

「はい、織斑先生……」

「あの、もしかして織斑君って織斑先生の」

千冬と一夏の会話を聞いていた生徒の内1人が手を挙げて質問すると、千冬はため息を吐きながら質問に答えた。

「ああ、弟だ。だが弟だからと言って臍盾目で見たりはせず、公私は分別する。君達生徒にも甘くするつもりは毛頭ないから覚悟しておけ。

私の言うことをよく聞き理解しろ、理解出来なければ出来るまで教えてやる。私の言葉にははいとYesで答えろ。反抗するつもりなら覚えておけ。やった後に許しを乞うな、時間の無駄だ」

(流石は千冬／さん(姉)……)

「「「「き……」」」」

「きゅ」

((耳塞(う))

「「「「キャアアアアア!」」」」

「うわっ?!」

「千冬様!ずっとファンでした!」

「私千冬様に憧れてこの学校に来ました!九州から!」

(やっぱりこうなるよね……)

(もうマジで帰らせて……)

(面倒な事だ)

女子の歓声に反応出来ずに耳鳴りのする一夏と、女子達に呆れたりする3人。そして千冬もイラついたような表情にため息一つ零して、呆れたように口を開いた。

「良くもまあ毎度毎度こんな馬鹿共が集まるものだ。それとも何か?

わざと集中させてるのか?」

「あぁーん!もつと激しく罵って!♡」

「でも時には優しくしてえ!♡」

「はぁ………静まれ!」

シー……ン……

「すげえな」

「さて、織斑。もう一度やれ」

「はい………うあっ」

先程より熱い視線でたじろぎながら、一夏は先程の様に息を大きく吸い込んだ。しかし先程とは違い普通の声で言った。

「織斑 一夏です。試験会場で迷ってたまたま入ったISの適正検査の会場に入ってIS動かしてしまいここにいます。趣味は基本家ごとゲームです。よろしくお願いします!」

パチパチパチ

「まあいいだろう。時間も無い、男の自己紹介が終わったらLHRは終わりだ。他は各自でやれ。次は五反田だ」

「ういーす………五反田 弾。趣味はゲームとアニメと特撮の鑑賞で、今とりあえず早く帰りたいです………」

ザワザワザワ

「静まれ！五反田、もっとマシな事言え」

「ええ………ええと、あ、一夏とは中学からの仲でよくゲームとかやつてまーす。後嫌いな物は女尊男卑でーす」

ゴツツ

「いつてえ?!これ体罰じゃね?!」

「馬鹿か、お前は」

千冬は多少怒りのこもった顔で弾を出席簿で殴った。しかしそれは弾を心配しての事であると、弾も理解していた。しかし、それも譲れないということも千冬も理解している。

「まあいい、次は御手洗。まともなので頼むぞ」

「はい。御手洗 数馬。趣味は特に無いが、珈琲を煎れる事にこだわりのある。弾とは幼少から、一夏とは中学からの仲だ。三年間よろしく頼む」

パチパチパチ

「ようやくまともな自己紹介を聞いた。それと、もう一人紹介する『男』がいる。入れ」

「はい！」

千冬の呼び声に答えるように、教室の外から元気な声が聞こえた。そして教室の扉が開き、一人の男が入って来た。

「皆さん初めまして！俺は津上翔一って言います。担当は家庭科で、主にこのクラスの担任と副担任のサポートをします。ISの事はよく分からないけど、家庭科の事なら何でも聞いてね」

ザワザワザワ

「いいから静まれ！とりあえずこれで終わりだ。先程も言ったが、後は個人でやれ。これにてHRは終わりだ。1時間目の準備をしろ」



「「「はい！」「」」」

返事をすると共に千冬達教師陣は教室を出て、生徒達は色んな所に集まり話を始めた。

トタトタトタ

スパーンツ！

「いつてえ?!何だよステラまで!」

「何だよじゃない!弾はもうちよつと発言に気をつけて!」

「何でだよ!」

「あのね?女尊男卑はISを使う人の中で殆どの人が持つてる思想なんだよ?それに、世界的にもその思想は広がっているのに、あんな事……」

「何だ、心配してくれてたのか。別に問題ねえよ。ありがとな」

「もう……」

「一夏」

ステラ達が話していると、1人のポニーテールの凛とした少女が一夏に声をかけた。

「ん?箒だよな?久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだな。すまないが、少し一夏を借りていいか?」

「うん、いいよ」

「いいぜ」

「構わない、持ってけ」

「すまないな。一夏もいいか?」

「おう、いいぜ。じゃあまた後でな」

「あ、ちよつと待って?ねえ篠ノ之さん」

「箒でいいぞ」

「うん、分かったよ。箒はちよつとこつちに来て」

そう言うとステラは、箒の腕を掴んで少し離れた所でこつそりと箒に耳打ちをした。

「箒ってさ、一夏の事好き?」

「んなっ?!／／／」

「あー、箒もかー……」

「え、「も」ってどういう事だ？ま、まさかお前も?!」

「ん？あー、違う違う。でも気を付けてね？私は立场上応援できないけど、頑張ってるね？」

「フフツ、応援してるじゃないか」

「え？あはは、ホントだね。あ、引き止めてごめんね？はい！一夏と行ってらっしゃい」

「ああ、行ってくる」

（束さんの事はもう少し仲良くなってからがいいかな）

箒を見送りながらそんな事を考えて弾と数馬の元に戻って今後の事などを話していると、1人の少女が声をかけてきた。

「ちよつとよろしくつて？」

「よろしく無い。頼むから帰ってくれ」

「まあ！何なのですかその態度は？このセシリア・オルコットが話しかけて差し上げていると言うのに！」

「何者だ？」

セシリアの言葉に数馬は訝しそうに言った。

「オルコットさんはイギリスの国家代表候補生だよ。専用機も持っている」

「あら、そちらの方はご存知なのですわね」

「なあステラ、国家代表候補生って何だ？」

「まあ、そんな事も知りませんか？これだから男は（うわっ、俺コイツ嫌いだわ）」

「オルコットさん、男だからってどういう事？」

「決まってますわ。男なんて皆女にこうべを垂れるしか出来ない無能な生き物って事ですわ」

ステラの言葉にセシリアは当然の様に答えた。その答えに怒りを示したのは男である弾と数馬ではなく、ステラだった。

しかしその言葉に反論しようとした所に一夏と箒が帰って来て、その後ろから千冬達に戻って来た。

「全員席に付け。授業を始める」

「くっ！また来ますわ！」

「二度と来んなよ……………」

「同感だ」

そんなこんなで授業が始まった。授業が始まると先程騒いでいた女子達も静かに授業を受けていて、真耶はノートをとり、翔一は教材等の整理をしていた。そして授業時間が終わりに差し掛かった頃、千冬が思い出した様に振り返って口を開いた。

「そういえば、クラス代表を決めなければな」

「はい、織斑先生。クラス代表って何ですか？」

「月に一度行われる会議に参加したり、クラス会議等で司会をしたり学年別トーナメントに出場したり、まあ学級委員の様な物だ。自薦他薦構わん、誰かいないか？」

（（嫌な予感…………））

「はい！織斑君がいいと思います！」

「私は五反田君！」

「いやいや、ここはクールな御手洗君でしょ」

（当たった…………）

（やっぱりね）

「一周回って津上先生とかは？」

「あー、それもいいねえ」

「え？俺も？」

「他にいないか？いなければこれで決まりだが」

「いや、俺達やるなんて一言も「納得行きませんわ！」え？」

一夏が反論しようとする、セシリアが立ち上がって叫んだ。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか!?実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然！それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこの様な島国でISの技術を学ぶために来たのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「良いですか!?クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわ

たくしですわ!!大体!文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で「え?マジで?!変わってくれんの?!サンキュー!」あ、あなたは何を言ってますの?」「いやだって、やりたくねえし。俺YD病だから」

「YD?何ですのそれは」

「は?やりたい事しか出来ない病だよ。知らねえの?」

(いや、知らないだろ…)

一夏は心の中で呟いた。

「あ、あなたやる気はありますの?!」

「いや、だから無いって」

「な、ならば何故この学園に!」

「政府から強制的に」

「なっ?!ふ、ふんっ、所詮は島国の政府ですわね。やはりアニメや漫画『程度』の物しか取り柄のない国の考える事は低レベルですわね」

「お、お前いい加減に!」

いい加減頭に来た一夏が言葉を止めに入ろうとすると、弾がそれを制止した。そしてその顔は珍しく怒りに染まっていた。

「おいおい。今、アニメや漫画『程度』って聞こえたのは俺の幻聴か?」

「幻聴でも何でもありませんわ。そんな『程度の低い物』しか誇る物のない国など「いい加減にしとけよチョココロネ」チョコ、チョココロネですって?!」

「お前何も分かってねえな。アニメ作るのにどんだけの人材と時間が必要か分かってんのか?それに、アニメは漫画が原作ってパターンが多い。そしてその漫画でも人気を勝ち取る…いや、そもそも出版社に認められるのは極僅かなんだぞ?そして例え認められなくとも漫画を書き続け、それに魂すら捧げた漫画家の信念をお前はたった今馬鹿にしたんだぞ?その意味わかってんのか?テメエみてえな他人を蔑むしか出来ねえ様な奴が、漫画やアニメ語ってんじゃねえよ」

「何なんですの!・I・Sも使えない『男』の癖に生意気な!」

パターンツ

「残念ながらここではその言葉は通用しないぞ。セシリア・オルコツ

ト」

次に口を開いたのは、読んでいた小説を閉じて机に置きながら立ち上がった数馬だった。

「ど、どういう事ですの?」

「考えてみる、俺達がここに居る理由を」

「っ?!」

「俺達はISが使える。つまり、ここでは『男はISが使えない』という常識は当てはまらないんだよ」

「それにね?オルコットさん。あなたの発言は外交問題になり兼ねないんだよ?」

「え?」

多数の人間からそれぞれの指摘を受け混乱するセシリアにステラが優しい口調で、しかしどこか怒りを感じる声で告げた。

「あなたはさつきから何度日本を馬鹿にした?この事をイギリスの偉い人に伝わったら、どうなるかな?良くて代表候補生の権限を剥奪、そして専用機の強制返還。悪くてあなたの家の財産全没収だよ」

「わ、私はそんなつもりは!」

「それに、この学園の七割以上が日本人なんだよ?そんな発言して、大丈夫?」

「あ、ああ……」

それを見兼ねて一夏が立ち上がった。

「お、おい皆!その辺でいいだろう?確かに腹は立ったけど、流石に反省してんだろ?」

一夏の言葉を聞き振り返ると、そこには俯いて肩を震わせるセシリアの姿があった。

「……………ですわ…………」

「え?」

「決闘ですわ!ステラ・ターナー貴方もです!」

「え?!私も?!」

「いい加減静まれ!」

シュツッ!パァンツ!

強烈な音がして全員が教室の後ろの壁を見ると、白いチョークが突き刺さり一部砕けて白い粉が舞っていた。

「決闘は一週間後にアリーナで行う。いいな？」

「二二「分かりました！」」」

千冬の凄味の効いた声で、殆どの生徒は怯えて返事をした。

そして一週間後の決闘に向けて、それぞれの思惑が交差する。

「あの野郎、ぜってえ潰す」

「仕方がないか」

「何で私まで…」

「え？これって俺含まれてんの？」

「結局俺ってどうなの？」

会話に置いて行かれた二人を除けて。

## 混乱と出会い Second Episode

「やっと授業終わった………」

「疲れた、帰りたい………」

「すまないなステラ。入学の前にお前が俺達の所に戻って来て無かったらもつと苦勞していたかもしれない」

「いいよ全然。友達なんだから当然だよ」

一日目の授業が終わり、放課後の教室で一夏達四人がいた。

「まさか一日目にテストがあるなんて……本当にステラがいなかったら0点だったかも……」

「帰れる………」

「それは本当に驚いたよ。しかも最初のテストで応用問題ってこの学園怖い……」

「とか言いながらお前は100点だったな。篠ノ之 束に教わったというのもあるだろうが、やはりお前はこのクラスで頭一つ抜けているな」

「えへへっ、そんな事無いよオ……／／／」

否定しながら、ステラの顔はニヤけていた。

「あ、良かった。まだ居たんですね」

「ん？山田先生どうかしたんですか？」

ステラ達が談笑していると、教室の扉を開き真耶が入って来た。

「皆さんの部屋が決定したので、伝えに来ました」

「やっと帰れ………る？」

「え？俺達って一時は自宅からって」

「え？ちよつと、待って。要するに今日は家に帰れ……？」

「ないです」

「ウツダ嘘ダだドそコんドなコーン！」

「ちよ、今なんて言ったの？全然聞き取れなかった」

「これに関してはどうしようもないな」

ひたすら家に帰りたいと嘆いていた弾だった。

「今日は、今夜は……魔砲少女ぶら☆くらの放送日だというのに！」

「弾？それは録画でも」

「いい訳ねえだろ！ステラなら分かるだろ？サンダーズ軍曹の目が見えなくなつて、今日それがどうなるか気になるだろうが！」

「分かるよ！分かるけど！」

「そういうえば、俺達の荷物つて家に置いたまんまだ。取りに帰れないんですか？」

「まだ分からないのか？四人しかいないんだ。俺らの体を調べたい輩なんて馬鹿ほどいる。無闇矢鱈と出られんぞ？」

「御手洗の言う通りだ。お前達は世界に四人しかいない男性操縦者なんだぞ？」

「千冬さん、仕事おわつたんですか？」

「織斑先生と呼べと……いや、放課後だから関係無いな。しかし校内では気を付けろよ、ステラ」

「ちふy…織斑先生だつて私の事下の名前で呼んでますよ？」

「……………教師はいいんだ」

（（滅茶苦茶だ……））

「それと五反田。この学園の寮にはテレビがある」

「……………え？」

「毎年買い替えるから画質はいい。それに、録画機能もある」

「つ、つまり！」

「見たければ寮でも見れる」

「よっしやあああ！」

千冬 of 言葉に弾は歡喜のあまり叫んだ。

「いや、でも俺達荷物が」

「それなら問題ない。蓮に持ってきて貰った。入つていいぞ」

「久しぶり、でもないわね。元気にしてた？」

「なんで母さん？」

「蓮さんお久しぶりです！」

「ふふつ、ステラちゃんは元気みたいね」

「えへへ」

撫でられてニヤけているステラを見ていた蓮は思い出した様に自



分の持っていたキャリアバッグを開いた。

「そうだ。荷物は全員の数日間の着替えとパジャマ、歯磨き粉と歯ブラシ。それとスマホと充電器を持ってきたわ。足りないものがあったら連絡して。送るか持つてくるかするから。あ、それと数馬君には帽子とコーヒーマーカー持ってきたわよ」

「ありがとうございます」

「それじゃあ私は帰るわね。千冬、少し話があるわ。来て」

「分かった。山田先生、後は頼んだぞ」

「はい！」

千冬はその場を真耶に任せ、蓮と共に教室を出た。

「それじゃあ寮の鍵を渡しますね」

そう言つて真耶は番号の書かれた札の付いた鍵を3つ取り出して机に置いた。

「あれ？でも、寮つて二人部屋ですよね？」

「つて事は一人だけ一人部屋か？」

「そうなるな」

「へえ？なるほど」

その瞬間三人の目がギラリと光った。

(一人部屋なら、落ち着いて勉強とか出来るな)

(ゆつたりと休日を通すには丁度いい)

(ゲームしまくれるじゃねえか！)

「あ、いえその…一人は女子と同室なんです……………」

「……………え？…」

真耶の言葉に三人は先程の表情を崩し、間の抜けた声を出した。

「すみません！寮が一棟補強工事中で部屋が足りなくなつてしまつて……………」

「津上先生はどうするんですか？」

「津上先生は教師の寮の方になります。学生寮の方になるよう織斑先生も言っていたんですが、そこは決まりがありますので至りませんでした。本当にすみません……………」

「いいですよ山田先生！じゃあ、決めようぜ。弾、数馬」

「しゃあ！やるか！」

「そうだな」

そう言つて三人は拳を突き出した。

「あつあの、一体何を？」

「いや、こんな雰囲気ですけどただのジャンケンですよ」

「二じやーんけん……………」

(大概一人の敗北が条件の場合、弾と数馬は確実に合わせて出して俺の一人負けを狙つて来る。そしてその時にパーをよく出す。つまり俺はチョキを出せば勝てる！)

(と、一夏は考えるだろうな。つまりは)

(グーを出せば勝ち確だな)

(つて考えるだろうなアイツら。だから、パーを出して俺が勝つ！)

(よし、弾。行くぞ)

(オーケー)

(つて感じかな？どうせあっちが勝つんでしょ)

この間僅か一秒。謎の緊張感に包まれた教室の中で、三人は同時に腕を振り下ろした。

「『ぽんっ！』」

—————

「くっそー、負けたあ…………」

一夏は廊下を歩きながらボヤいた。

「一夏はわかりやすいからな」

「マジそれな」

「あ、着いた」

「今何時だ？」

「五時ちよつと前だな」

「数馬、テレビ使つていいよな？」

「別に構わないぞ」

そして並んだ部屋のドアノブにそれぞれ手をかけた四人は顔を合  
わせた。

「部屋が隣だし困った事があれば来ていいよ」

「ありがとな」

「サンキュ」

「それじゃあまた明日」

「うん」

ガチャツ、バタン

ーステラの部屋

「えっとー、誰かいますか？」

しーーん……

「まだ戻ってないのかな？」

ドアを閉めて、静かな部屋を見渡す。すると、そこに水色の髪の少  
女がテレビの前でリモコンを弄りながら画面を凝視していた。

「あの一？」

「え？あ、そのえっと……」

「あ、私はステラ・ターナー。この部屋をあなたと一緒に使わせてもら  
います。一年間くらいよろしくね」

「え、あのその。えっと……」

「あー……一応確認だけど、日本の代表候補生の『更識 簪』さんで合っ  
てるよね？」

「え？うん。でも何で？」

「IS学園に入学予定の代表候補生は全員覚えてるよ。それより、  
ちよつとテレビ借りてもいい？」

「いいけど……」

「あれ？もしかして見たいのあった？」

「録画したから大丈夫……」

(生で見たいけど、仕方ないよね)

「あ、その前に録画しなきゃ……あれ、もうしてる？」

簪からリモコンを受け取ったステラは、チャンネルを変える直前で

思い出して番組表を開いた。すると、ステラが録画しようとしていた『魔砲少女ぶら☆くら』が既に録画されていた。

「えっと、もしかして更識さんもぶら☆くら好き？」

『も』 って、あなたも？」

「うん！だから今日は絶対見逃したくない！」

「そうだよね！サンダース軍曹の目が見えなくなって、もう残りの体力も少ないのに敵はまだ大勢いる…気になりすぎ、て……あっ／＼

怒涛の勢いで語っていた簪だったが、無意識だったのか急に顔を赤らめて俯いた。

それに対してステラは目をキラキラさせて簪の手を取った。

「凄い！ここまで語れそうな人弾以外に初めてだよ！」

「え？引いたり、しないの？」

「する訳ないじゃん！私がアニメ好きじゃなくても、更識さんのこと見たら好きになってたかも。ってああああ！もう時間だ！急いでつけなきゃ！」

「え？ああ！ヤバい！今回は本当に見逃したくない！」

カチツ

『前回のぶら☆くら！』

『きやあ！』

『サンダース軍曹！』

『目が、見えない？』

「間に合ったアア！」

ドンッ！

「ウエ?!何?」

ドンドンドン！

「ステラ！助けてくれ！」

「え？一夏?」

「箒に殺される！」

「ごめんちよつと何言ってるか分からない」

どこかの芸人の様に言うステラと、本当に訳が分からず困惑する

簪。そして廊下から聞こえる一夏の声。

ガチャッ

「助かったー！」

とりあえず状況の確認の為にステラは、助けを求めた一夏と、廊下で修羅の様な雰囲気醸し出す簪も招き入れた。

「すまない、ステラ。今すぐそこの一夏を寄越してくれ」

「いいけど、その前に状況確認ね。更識さん、迷惑かけてごめんね。ぶら☆からは後で自分で見るからここで見てていいよ」

「う、うん」

「簪はこっち来て。一夏は弾と数馬呼んできて」

「お、おう」

「分かった」

冷静に対処するステラを見て一夏と簪は困惑し、簪は素直に受け入れた。

そして一夏と簪の部屋に、一夏、簪、ステラ、数馬が集まっていた。弾はどうしたか？部屋でぶら☆くら見てるよ。

「つまり？一夏が簪の風呂上がりを見てしまって、その後失礼な事言ったからその竹刀でぶった斬ろうと？」

「ああ」

「俺が何言ったよー！」

「何言ったの？」

「いや、それはその……」

「はい、簪」

顔を赤らめて俯く簪に、ステラは耳を向けた。

「ブラジャー付けるようになったんだなって」ヒソヒソ

「なるほど、一夏？」

「なんだ？」

「セクハラ」

「んなっ?!そんな言い方無くねえか?!」

「いや、これはセクハラだね」

「なんと言ったんだ？」

「いや、これは女子の問題だから」

「なるほど、それは竹刀でぶった斬られても文句は言えんな」

「そもそも竹刀はぶった斬る物じゃねえけどな?!」

「え?だって箒ベツド真つ二つにしたんでしょ?」

「鍛えているからな」エヘン

「そんなどつかの猛士みたいな…」

「それで、ステラがわざわざ俺と弾を呼んだ理由はなんだ?やはりセシリア・オルコットとの決闘か」

「うん、そうだよ」

ステラは頷きながら、ポケットからメモリーカードを取り出した。

「ちよつとパソコン借りていい?」

「おう」

ステラは部屋に備え付けてあるパソコンを起動させると、メモリーカードを挿してデータを表示した。

「これは、ISのデータか?」

「うん、代表候補生の戦闘訓練とかは基本的には公開されてるんだ。そして、希にISの適正度も開示されてる。だからそのデータを引張ってきて、私なりの対策を考えて来た」

「流石ステラ。仕事が早い」

「数馬には負けるよ。数馬も調べてるんでしょ?」

「まあな」

そうやって数馬は手書きの書類をテーブルに置いた。

「一応俺の調査結果を伝えよう。奴の機体の名は『ブルー・ティアーズ』。イギリスで開発中の第3世代型ISだ。射撃を主体とした機体で、第3世代兵器「BT兵器」のデータをサンプリングするために開発された実験・試作機という意味合いが濃い。『スターライトMark-III』は主力武装である巨大な特殊レーザーライフルで、実弾装備がない。『インターセプター』という近接武器もあるが、使用されたデータは少ないな。俺の調べられる範囲はここまでだった。後は頼む」

「うん、でも数馬が殆ど言っちゃったし私は補足説明と用語の説明く

らいかな。まずBT兵器って言うのはブルー・ティアーズの略称で、機体の名前の由来にもなってるよ。

遠隔無線誘導型の武器で、相手の死角からの全方位オールレンジ攻撃が可能。装備によっては機体に接続することでスラスターとしても機能したりするよ。装備数は6基で、4基はレーザー、2基はミサイルを撃つことができるの。最大稼働時にはビームの軌道も操ることがができる。私からはこの位かな」

「要するにそのブルー・ティアーズってのはビツトみてえなもんか？」

「あれ、弾来てたんだ」

「さつきからな」

ステラ達が見た方向に、腕を組んで開いたドアに寄りかかる弾がいた。そしてゆっくりドアを閉めてこちらに歩いてきて、一夏達と同じ様に適当な所に腰掛けた。

「まあ、簡単に言うとうそだよ」

「しかし、作戦を練ると言っても専用機が届いていないのではやりようが無いのでは無いか？」

箒の言葉にステラは首を横に振った。

「多分、一夏の機体には確実に1つだけ確定している武装がある」

「え？」

「一夏、覚えてる？第2回モンド・グロツソの時の事」

「……」

「ああ、一夏そっちじゃなくて試合の方ね？」

「え？ああ！そういう事ね」

「ステラ。恐らくとは思いますが、以前千冬さんの使っていた『雪片』か？」

「うん、多分その後継だと思う」

その場にいる全員が考える中、ステラは既に何かを思い付いているようだった。

「実は一夏の訓練は決めてるの」

「本当か?!」

「箒とひたすら剣道して。以上」

「……」

「え？」

「確かに武装が1つ確定しているなら丁度いいな」

「じゃあ俺らどうする？」

「一応、私が付くよ。射撃と近接武器の間合いの把握とか、少し武術を織り交ぜての近接格闘訓練しか出来ないけど」

「それで十分だ」

「あ、俺も剣道やりてえんだけど？」

「じゃあ、箒。一日教えて貰える？」

「え？あ、ああいいぞ」

よく分からないまま返事をした箒だったが、次の瞬間に気付いたのか少し焦り出した。

「ま、待て！私に誰かを教えるなんて」

「いやいや、大丈夫だよ。箒強いもん」

「ど、どういう事だ？」

「だって、そんなに引き締まって綺麗な腕してる人、私千冬さんしか知らないもん」

「千冬さんと、同じ？」

「うん。だから箒は強い。もし今力が無くてもきつと強くなれる」

そう言うステラの目は、本気だった。それに後押しされた様に箒はキリッとした表情になった。

「ああ、任された！」

「よーしっ！来週はオルコットさんに勝つぞおー！」

「」「」「おー！」「」「」

その頃隣の部屋では

「ターナーさん、遅いなあ……」

簪が待ちくたびれていた。



## 混乱と出会い Third Episode

「すまないな御手洗。本来全員の機体が届いてから試合を始める予定だったが、少し遅れていてな。対戦相手を繰り上げて始める事になった」

「大丈夫です。俺も代表候補生の実力を体感してみたかった」

そう言って数馬は黒に所々銀色の装甲やラインの入った装甲の付いた機体に体を預けた。

「御手洗 数馬、フライリップ。出る」

数馬が乗ったカタパルトはレールの上を滑り、数馬をピットの外に運んだ。そこには既にセシリアが宙に浮いていて、アリーナの観客席には多くの生徒が集まっていた。

「あら、逃げずに参られたのですね。その度胸だけは褒めて差し上げますわ」

「ああ。お前相手に逃げるなんてそもそも選択肢にすらない」

「その減らず口を閉じさせてあげますわ！」

その時、アナウンスの音が響いた。

〈試合、開始！〉

「踊りなさい！私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

ギョーンッ！

そう言って、数馬目掛けてスターライトMk-IIIを向けてビームを撃った。しかし数馬は冷静に避けて拡張領域から青いハンドガン型のビームライフルを取り出して構え言った。

「お前に一つ教えてやろう。撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだぜ？レディー」

「ふん！キザつたらしい！ティアーズ！」

セシリアが手を横に振ると、そこから四機のビットが飛び出した。

「やはりか、ならば来い。追いつけるものならばな」

そう言って数馬は地面に向かって急降下した。

「逃げてばかりなのですか？やはり男は」

ガキンッ！

「なんですの?!」

突如響いた金属音に、アリーナに集まった観客とセシリアはその方向を向いた。

「一機撃破。この程度か? イギリスの代表候補生」

「まさか、ISの初心者がブルー・ティアーズを一機落とした? ま、まぐれですわ!」

「まぐれかどうか、試してみるか?」

数馬はそう挑発しながらハンドガンと新たに取り出した銀色の鉄パイプの様な形状をしたロッドを構えた。

「くっ! 男が、一機落とした程度で!」

ギョんツ! ギョんツ!

バンツ! バンツ!

ガキンツ! ガゴツ!

バコツ! ドガアーン!

「早速二機目だぜ。」

「どうなっていますの?! ブルー・ティアーズは整備したばかり、初心者に落とされる筈が!」

「つまり、それがお前の実力だ」

「なんですって?!」

「それと、お前の弱点を一つ教えてやろう」

「弱点? そんな物私には!」

「お前、ビットとそのビームライフルの併用が出来ないだろ」

「なっ?!」

核心を突かれ動揺するセシリアをよそに数馬は尚も続けた。

「そして、お前は近接格闘を苦手としている。つまり」

数馬の声とともにスラスターが起動し、次の瞬間数馬はセシリアの目の前にいた。

「ライフルを撃てない間合いまで近付けば、お前の体はガラ空きだ」

そう言いながら手に持ったロッドをセシリアに突きつけた。すると、先端から一回り細いロッドが射出された。

「イグニッション・ブースト瞬時加速に、武器の変形機構。あなた、本当に初心者なんですの

?!」

「ああ、初心者さ。少しステラに戦い方を教わっただけだ」

（私が、男に負ける?………いえ、この驕りこそが私の弱さ………?でも、それでも………つ）

「私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコット!絶対に、負ける訳にはいきませんわ!」

「いい眼だ。やっと楽しめそうだ」

数馬とセシリアは向き直り、互いの武器を構えた。

「行きますわ!」

「はあっ!」

そこから、二人の戦いは激しさを増した。そして数分が経ち、二人の機体はもう限界に達しつつあった。

「セシリア・オルコット、一つ提案がある」

「はあ、はあ……なんですか?」

「次の一撃を最後にしよう」

「……分かりましたわ」

そう言つて二人は浮上してある程度まで行くと、互いの最後の武器を構えた。

「良いのですか?互いに残っているのは射撃系の武器。そしてそちらはハンドガン型で私はスターライトMk—III。威力では明らかにこちらが勝っていますわ」

「構わないさ。弾からの受け売りだが、こういうのを必殺技と言うんだろ?」

そう言つて数馬はハンドガンを投げ捨てて右足を前に腰を低く構えると、フィリップから紫色のオーラと緑色の粒子が溢れ出した。そしてオーラはフィリップの足を包み込み、粒子は風の様になり足元から包み込んだ。

「さあ、行くぜ?」

「面白いですわ!ならばそれを正面から打ち砕き、あなたに勝ちますわ!スターライトMk—III、最大出力!」

セシリアも、残っていた二機のビットをスカート状にしてモードを

スラストアーに切り替えた。そしてスターライトMk—IIIとスラストアーモードのビットにエネルギーを充填し始めた。

「はあああ！」

セシリアは強力なエネルギーを打ち出し、数馬はそれを蹴りで受け止めていた。

「くっ！うおおお！」

「ううっ、はあああ！」

二つのエネルギーは拮抗していたが、じわじわとブルー・テイアーズの放つ青いレーザーが裂けていった。

「これで、終わりだ！」

「え？きやあああ！」

ドガーンッ！

〈試合終了！シールドエネルギーが両者ともにゼロの為、試合結果は引き分け！〉

ワアアアアアアアア！

アリーナを歓声が包んだ。そして、その歓声の中にはピットの中にいるステラ達も含まれていた。

「凄い！凄いよ数馬！」

「まさか、イグニッション・ブースト瞬間加速をぶっつけ本番で物にするとはな

「さすがカズくんだね！」

「そうだ、な……？？」

ん？

「あれ？東さん？」

「ん？あ、はい！皆のアイドル東さんだよお！」

そして、束も含まれていた様だ。

ゴツッ！

「いったあ?!ちーちゃんそれは酷くない?!」

「あのなあ、いい加減自分の立場をわきまえろ！」

「仕方ないじゃん！ダンクんのISのチューニングが最終部分終わってないんだもん！」

「何？」

東の発言に、千冬は怪訝そうな表情をした。

「五反田の…いや、コイツらの機体はお前が作ったのか？」

「うん、そうだよ？」

さも当然のように言う東に、千冬は呆れた様な顔をした。

「あのオーバースペックはやはりお前の仕業か」

「うん♪でもブルー・ティアーズに引き分けたのはカズくんの実力だよ」

「はあ……まあいい。さつきと五反田の機体のチューニングを済ませろ」

「はいはい！この東さんに任せたらチューニングなんてちやっちやと終わっちゃうから！」

カタカタカタカタ、カチツ

「はい、おーわり！これがダンくんの機体だよ！」

東の声とともに置いてあったISのコアが光りだし、光が収まるとそこには青と白の機体が立っていた。

「こ、これは！」

「ま、まさか！」

「そのまさか！この機体の名前はエクシア！ダンくん好きでしょ？」

「最っ高だぜ！」

そう言つて弾はエクシアに飛び乗った。

「五反田 弾！エクシア！行くぜオラア！」

弾がピットを飛び出すと、ステラがギンギラを展開してカタパルトに乗った。

「行くよギンギラ！」

『はい、マスター』

「ステラ・ターナー！」

『ギンギラ！』

『『出ます！』』

そしてステラもアリーナに飛び立った。

「弾、よろしくね」

「おう」

『マスター、今回はサポートはしません。そうなつては初心者の弾さんにハンデを背負わせる事になります』

「分かってるよ」

「心遣いありがとよ。それじゃあ…」

〈試合、開始!〉

「行くぜ(よ)！」

ギンツ!

「うおっ?!早っ!」

「悪いけど、手加減は無しだよ!」

「なら!」

そう言つて弾は拡張領域から実体剣を取り出して刀身を折り畳んだ。だ。

「喰らえっ!」

弾は折り畳んだ刀身の内側にあつたビームライフルでステラを狙い撃つた。

「うわあ?!あつぶない……やっぱりエクシアつて事は『GNソード』は必須だよね」

「当たり前だろ!」

GNソード。それはエクシアの右前腕に装備される斬撃兵装。ビームライフルとしての機能があり、刀身を折り畳むことで銃身を展開するライフルモードになる。

「ねえ弾。攻撃しないからちよつと機体のデータ見てみて?」

「は?なんで……ああそういう」

ステラに言われて弾はエクシアの機体データを閲覧しだした。

「ステラ。やつぱり『GNドライブ』載つてたぞ」

「だよねえ………後で束さんに事情聴取しなくちやね☆」

「うおお?!なんか背筋に寒気が?」

「さてと、それじゃあそろそろ再開しようか」

「おう。やるか」

「はあっ!」

「よつと!ウラァ!」

ステラと弾は空中で縦横無尽に飛び回りながら互いに遠距離武器を撃ち合っていたが、弾がしびれを切らした様にGNソードをソードモードに戻して斬りかかってきた。

「しやらあー！」

「うっ！」

近接武器を持たないステラにとってはこの状況はキツイのか、明らかに防戦一方となってしまうた。

「仕方ない………シフト！スピード！」

ギンツ！

「なっ?!」

弾が驚愕の声をあげた。理由は、突然ステラが姿を消したからだ。

「消えた？いや、上か！」

ガキンツ！

「グツ！重い！」

アリーナで白熱した試合をしている時、千冬達は二人の映像を見ていた。

「束、今のは何だ？」

「今のは『シフト』だよ。私がギンギラちゃんに搭載した3つのシステムの内の1つで、パワーとスピードとディフェンスの3つの内1つか2つを選ぶことでギンギラちゃんの性能のバランスを変える能力だよ」

「その3つというのは単一使用能力ワンオフ・アビリティか？」

「違うよ。ギンギラちゃんの単一使用能力はまだ発現してない。だから外付けで能力を付けたんだよ」

「その場合拡張領域をそこそこ使わないか？」

「確かに使うよ。でもギンギラちゃんには武器が無いからね」

「え？」

その発言にその場にいた殆どの人間が驚いた。

「束。つまり、ギンギラの武装は」

「腕部のビーム砲とカスタム・ウイングで投擲武器にもなる肩の上のリング。それと拳だけだよ」

「お前、ステラの負担を考えろ」

「仕方ないじゃん。スーちゃん自身もその方が慣れてるし」

「しかし、今度何かギンギラ専用の武器を作れ」

「りよーかい！すっごいの作っちゃお」

そしてその頃アリーナでは。

「ステラ、そろそろ決着付けようぜ」

「いいよ。それじゃあ本気で行くよ？」

〈TORANZ—AM SYSTEM LADY?〉

弾の視界に映る機体情報の中に、赤い文字でそう映し出された。そして弾は迷わずそれを認証した。

「しゃあ！行くぜ！トランザム！」

「シフト！パワー！スピード！」

ギンツ！

風を切り裂く音と共に赤い光と青い光の線が生まれ、アリーナの中でぶつかった。

弾はGNソードを高速で振り、ステラは強化されたスピードとパワーでリングを巧みに使い攻撃をいなしていた。

「弾、やるね！」

「さんざん箒とお前に習ったから、な！」

ガキンツ！ブンツ！ギンツ！ドガンツ！

「くっ！トランザムの方が速いか……なら！シフトリセット。シフト、スピード！」

「ぐああ?!」

ドガンツ！

ステラはスピードに全ての性能を振ると、弾に抱き着いてそのままスピードに任せて弾を壁に叩きつけた。

「決める！サーマルキャノン！」

「喰らうかよ！」

弾はそう言っ左腕に付いていたGNシールドを前に突き出した。サーマルキャノンはそこから裂けたが、弾は壁に叩きつけられている事もあり壁とサーマルキャノンに挟まれ機体がギンギシと悲鳴をあ



げていた。

「くっ！うおおお！」

弾は叫びながら壁に沿って飛び出した。

「逃がさない！」

そう言つてステラはサーマルキャノンを撃つたまま横へずらして弾を追った。

ガゴーンッ！

その時、先程の戦いと今の戦いで蓄積されたダメージでアリーナの支柱が一本折れた。それは不運にも観客席の方に倒れた。

「マズイ！」

「くっ！間に合え！」

ステラは発射していたサーマルキャノンで支柱を撃ち抜いた。だがその破片が観客席に降り注いだ。観客全員が観客席のガラスのシールドの強度を信用している様で、逃げる者は少なかった。だが突然シールドにヒビが入り、そこにいた黄色いカチューシャを付けて眼鏡をかけた生徒がその事を大声で全員に伝えると、蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「逃げて下さい！ここは危険です！」

「きゃあ！」

「っ?!本音！」

先程の生徒が避難誘導をしていると、一組の布仏 本音がその場で転びそれを助けに行った。

バリーンッ！

その時、アリーナのシールドを1つの破片が貫いた。

「うおおお！」

その時、その間に赤い光が割り込んだ。

「グッ！うああ！」

それはトランザムを発動したままの弾だった。弾は背を天に向けて二人に覆い被さるよう守った。

「ダンダン！」

「本、音！逃げろ！その奴も！」

「すみません！ありがとうございます！」

二人が離れたのを確認すると弾はその場に膝をついた。

「弾！危ない！」

その時、弾の頭上に最後に残っていた瓦礫が降ってきた。

「あ、終わった」

「何が終わっただ」

弾が終わりだと感じて呆然とする中、黄色い光弾が不規則な軌道を描いて瓦礫を粉々に吹き飛ばした。

「おお、数馬」

「おお、じゃない。全く……とりあえず試合は中止だよ」

「だろうな」

数馬は黙って弾に手を差し出して、弾も笑いながら何も言わずに手を取った。

その後、残っていたシールドエネルギーの量から勝者はステラに決定した。

## 混乱と出会い Fourth Episode

「さてと、東さん？」

ステラと弾の試合が終わって残す所後一戦となり、ステラ達はピットで束による整備を受けていた。その最中にステラが束にニコニコしながら近寄り話しかけた。

「ん？何かな？」

「GNドライブの事なんだけどさ。作った？」

「うん！作ったよ！」

ゴツツ！

「いったあ?!ええ?!どうしたのスイちゃん！」

「どうしたのじゃ無いですよ！」

どうやらステラは弾の機体に積んであったGNドライブの事で束を問い詰めている様だ。

GNドライブとは通称「太陽炉」と呼ばれる半永久機関である。

太陽炉は起動開始から常に「GN粒子」と呼ばれる特殊粒子を生成し、機体の稼働エネルギーのほかに、高濃度圧縮した粒子による強力なビーム兵器、飛行用の推進剤（GNバーニア）などさまざまな用途に利用される。搭載機の掌にはプラグが存在し、ビーム兵器の使用の際はここからエネルギーを供給する。また、装甲表面にGN粒子の防護膜を形成したり、高圧縮してバリアのように固定する「GNフィールド」を展開することで高い防御力を得ることができる。

という本来ならば存在すらない粒子を生成してしまう、束の作ったISのコアと同等の力を秘めている物だ。

「男性操縦者つてだけでも狙われる危険性があるのに、GNドライブみたいな物を付けたら狙われる危険性増してるよ！数馬のだって！」

「そこら辺にしろ、ステラ」

「数馬？でも」

「あれは俺が頼んだんだ」

「どうして？色々な国から狙われる事になるかもしれないんだよ?!」

「それでいい。それで俺達男でもISを扱って尚且つ強さを示せば女

尊男卑を打ち砕ける。それで受けるリスクが狙われるだけなら安いもんだ」

「そうかも、しれないけど……」

数馬の言葉の意味を理解しつつ納得が出来ないステラは、二つの感情がぶつかり合い口籠ってしまった。

「そういうえば弾は？」

「あいつは試合の疲労と瓦礫から生徒を守った時のダメージが大きかったらしく、医務室に運ばれた」

「じゃあお見舞い行かないと」

「今は止めとけ」

「え？なんで？」

「あいつが助けた女子生徒が礼を言いに行っているからだ」

「ああ、そういう」

そしてその頃の医務室。

「あの、先程は妹共々助けて頂きありがとうございました。私は三年生の生徒会会計を任されている『布仏 虚』です」

「え？ああ、別にいいですよ。俺がやりたくてやったんだし」

「しかし、何かお礼をしないと」

「なら敬語無しでお願いします」

「え？」

虚は何を言われるか一瞬身構えたが、弾の言葉に力が抜けた。

「だって先輩でしょ？」

「それだけでいいなら、敬語は直しますが……」

「はい、アウト。今敬語だった」

「あ、ごめんなさい。えっと、五反田君」

「弾でいいすつよ」

「えっ？え、でも……」

（男の人を下の名前で呼んだことなんて1回も無いっ！でもどうしよう。五反田君にお礼はこれだけでいいと言われたのに無下にする訳には……）

「あの、どうしました？」

「ひゃいっ?!」

心の中で悩む虚に突然弾が声をかけた事で変な返事をしてしまった。

「ハハッ、なんすかその声」

「うう…」

「でもそういう風に緩くていいですよ。その方が接しやすいですし」

「そ、それなら弾君も敬語やめて下さい!」

「え?別にいいですよ?それと今は敬語ですよ」

「私はこの喋り方に慣れてしまってます!だから弾君も私を下の名前で呼んで敬語無しです!」

「あれ?私何言ってるの?!」

「わかったよ虚」

(しかも弾君全く動じてない?!)

バシユウツ…

「五反田、先程の試合の事だが………すまん邪魔したな」

独特の空気を圧縮した様な音が鳴りドアが開いて千冬が医務室に入ってきたが、顔を赤らめる虚を見て少しニヤツとして踵を返した。

「お、織斑先生、誤解です!」

「え?ちよつと待ってなんで帰るんすか千冬さん?」

「冗談だ。先程の試合についての連絡だが、事故が起きる直前のシールドエネルギーの残量を鑑みてステラが勝者となった。お前は疲労も怪我もあるし丁度良かったかもな」

「了解つす」

「そうだ布仏姉」

「は、はい。なんですか?」

「頑張れよ」ニヤツ

「なっ?!」

再びいたずらっ子の様な笑顔を浮かべて一言言葉を残して医務室を出た。

「えつと、虚?」

「わ、私もう帰りますから!」

「え？お、おう？」

虚は顔を真っ赤にしてそう言い医務室を飛び出した。

そして場面はピットに戻る。

「それにしても、フィリップの構造複雑だね」

「うん、色々と無理したからね。それと、今度の休日家に来なよ」

「え？」

「いやあ、クーちゃんが会いたい会いたいってうるさくてさあ。私が今日来るのにも着いてこようとしてたし」

「そうなんですか？なら今度帰ろうかな」

二人はそんな日常会話をしながらも、テキパキと作業をこなしていた。

『マスター、出力設定安定しました』

「了解。それじゃあ次はこれを拡張領域に入れて」

『はい』

バシユウツ…

「束、終わったか？」

「後少しだよ」

「俺の専用機まだ来ねえのか？」

「先程あと少しだと山田先生から電話があつた」

ピットに入ってきたのは千冬と一夏だった。

「皆さーん！届きましたよ！織斑君の専用機！」

ピットの搬入口の様な所から大きな箱が搬入されて来た。そしてその影から真耶が出てきた。

「これが織斑君の専用機『白式』です！」

真耶の声と共に箱が音を立てながら開いた。そして、そこには『白』がいた。紛うことなき『白』が。まるで汚れを知らぬかのような佇まいに、その場にいる殆どが言葉を失った。

「これが、俺の…」

そう言いながら一夏はそのISに触れた。すると一夏と白式は光に包まれて次の瞬間、そこには白式を纏った一夏が立っていた。

「よしっ！それじゃあサクツとファーストシフト一次移行まで済ませちゃおうか」

「いや、戦え」

東の言葉を一言で切り裂いたのは人類最強の女、千冬だった。

「お前の機体のスペックを考えればこの中でステラと一二を争う。そして、その機体は……いや、この先は自分で感じろ」

「無茶言うなよ千冬姉！」

「無茶では無い。どうせこのISの開発には東、お前が関わっているのだろう？」

「うん、倉持技研が制作放棄した新しいコンセプトの機体を私が組み上げて作っただよ。それに開発段階のギンギラちゃんのデータも組み込んだから、出力やスピードは凄いいよ」

「つまりはそういう事だ。それにアーリーナの使用時間は無限では無い」

「一夏、こうなったらやるしかないだろ」

「どうする？」

「……………こうなりややるつきやない！」

「それでは準備をしろ」

千冬に言われ、まずはギンギラに飛び乗ったステラがカタパルトに乗った。

『千冬さん、オルコットさんはどうしたのですか？』

「オルコットは機体の破損が予備のパーツで補える物では無かったので棄権だ」

「了解です。ステラ・ターナー！」

『ギンギラ！』

『出ます！』

そして次はフィリップを纏った数馬。

「御手洗 数馬、フィリップ。出る！」

そして最後は、白式を纏った一夏だ。

「千冬姉、東さん」

「ん？」

「何かな？」

「勝ってくる！」

「フツ、まあ精々頑張れ」

「頑張つてねいっくん！」

そして一夏の表情は引き締まり、カタパルトに乗った。

「織斑 一夏！白式！行きますー！」

その声と共にカタパルトはレールの上を滑り、一夏はアリーナへと飛び出した。

「さてと、それじゃあ」

「始めるか」

「ああ！」

〈試合、開始！〉

ギンツ！

ブウーーンツ！

バンバンバンツ！

ステラは先程とは違い、アリーナの地面に向かって加速し、そのまま地面のスレスレを飛び始めた。そしてこの操縦テクニクに観客達も魅入っていた。

「逃がさん！」

数馬の放った青い光弾は、途中から黄色くなり不規則に動きステラの後を追った。

「くっ」

（やっぱりこの能力が厄介だ！）

「はあっ！」

ステラは後ろを振り向き、レーザーで光弾を爆発させた。

「ウオオオ！」

ブウンツ！

「っ?!一夏か！」

ステラをひたすら狙う数馬に、横から縦一戦にブレードが振るわれた。

「くそっ！」

その後数馬はロッドを取り出して一夏とつば競り合いを始めた。  
ガキンツ！



「流石に剣の腕はいいな、はあっ！」  
ガンッ！

「そつちもそんな武器よく扱える、なっ！」  
ブンッ！

「サーマルキャノン！」  
「っ?!」

二人のぶつかり合いに、突然横からステラがサーマルキャノンを撃ち込んできた。

「私も居るって、忘れてない?」

「ああ、忘れてないさ」

「忘れてる余裕はねえしな…」

三人は言葉を交わしながら宙を漂い、互いに間合いを計っていた。

「っ！そこっ！」

ギユンッ！

「はあっ！」

バンバンバンッ！

「おおっらあ！」

ブウン！

ステラはレーザーを撃ち、数馬はそれを撃ち落とそうと光弾を放ち、一夏はその流れ弾を切り裂いた。

「ちっ！先に一夏を落とす！」

数馬はそう言うと、ビームライフルにエネルギーを蓄積し始めた。

「これでも喰らえ！」

そして撃ち出された青い光弾は風のような緑の粒子に包まれてその速度を上げた。

「くっそー！」

一夏は負けを覚悟して防御の体制に入った。だが――

「ちーちゃん！始まったよ！」

「ああ」

突然白式は光に包まれ、光が弾け飛ぶとそこには先程とは姿の違う白式がそこに居た。

「ステラ、数馬。俺は最高の姉を持ったよ」

「まさかっ」

「このタイミングでファーストシフト一次移行?!」

そして一夏は一次移行によって現れた『雪片式型』を横に振って自分の周りに漂う砂埃を切り裂いた。

俺はこの力で、あの日守れなかった物を、仲間を守る!」

そして一夏はその場から一瞬で数馬の目の前に移動した。

「なっ?!」

イグニッション・ブースト（瞬時加速を、今の一瞬で?!ていうか零落白夜最大出力じゃん!）

「数馬!」

ギンツ!

「はあああ!」

雪片式型を振り下ろす一夏と突然の事に驚く数馬の間に、シフトでスピードを極限まで高めたステラが割り込んだ。

「があ?!」

「なっ?!」

「っ?!ステラ!」

ステラの背中に斜めに傷が入り、そこから血が飛び出す。一夏と数馬は突然の事に驚き、会場全体も騒然とした。

〈試合中止!一夏、数馬!今すぐステラを連れてピットに戻れ!〉

千冬の声は焦りに染まり、完全に教師としての態度を忘れている。

「一夏!とりあえずステラを!」

「わ、わかってるよ!」

そして二人はピットへ戻ると、すぐにギンギラを整備台の上に乗せてステラを運び出してISを解除した。

「おい!大丈夫かステラ!」

そこに千冬が駆け寄り、抱き着いた。

「ちーちゃん離れて、応急処置だけでもしとかなないと」

「ああ、わかった………一夏、来い」

「おう……」

ドゴッ!

「ごあつ?!」

ピットの中に、重い音が鳴り響いた。その瞬間、時が止まったようだった。

「一夏、何故殴られたか分かるか」

「俺が、ステラを傷付けたから…」

「違うな。お前、あの時なんと言った?」

「え?」

千冬の言葉の意味が分からずに動揺する一夏に千冬は苛立ったように胸ぐらを掴んだ。

「お前はあの時『あの日守れなかった物を守る』と言ったな。結果はどうだ? お前はまた守られただけだろう! もう少してお前は数馬を斬り殺す所だったんだぞ! もしコイツが死ねば、荘吉達に合わせてる顔が…」

「千冬姉はいつもそうだ…」

「なに?」

「千冬姉はいつも合わせる顔が合わせて、そんな事ばかりじゃないか!」

一夏は千冬の手を弾いて、今度は一夏が千冬に詰め寄った。

「それを言うなら千冬姉だって、あの日千冬姉がもう少し早ければステラの怪我も少なく済んだんだ!」

「なんだと! ならあと時あの場に居ながら女に闘わせてただ怯えていたのは何処の誰だ? お前だろ!」

「うっ! それは…」

「それにお前は「やめてよ二人とも!」っ?! 束?」

「何してるの? スーちゃんがこんなになってるのに、口喧嘩してる場合なの?! それに、二人はただ言い争ってるだけだと思ってるだろうけどさ、その根本的な原因って、私だね」

「なっ?! 違う! お前を責めたい訳では!」

「そうですよ束さん!」

「だって、そもそも私がスーちゃん達を私達の戦いに巻き込んだのが間違いだっただ! そのせいでまだ子供のスーちゃんを何度も傷付

けた！スーちゃんはまだ夢を見れたのに！スーちゃんはまだ自由にいられたのに！私がそれを壊した！」

束は涙を流しながら、自分の事を責め始めた。その姿は世界最高峰の天才では無く、過去を悔いるただの一人の人間だった。

「ねえ、このパターン何回目だっけ？」

その声に、全員の視線は簡易ベッドに注がれた。

「皆自分の事を責め過ぎだよ」

「ステラ、大丈夫だったのか？」

「平気だよ！一夏の攻撃なんて全然効かないもんね」

ステラはニコツと笑い、そう言った。

しかし場は和まず、尚更に重くなった。

「スーちゃん、無理しないでよ！まだ起きれる程は」

「心配し過ぎですよ束さん！私そんなに弱くないですよ！」

「でも、俺があの時武器の特性をしっかりと把握しておけば！」

「初めて使うんだから仕方ないでしょ？それに、あの時は夢中だったもんね」

「俺が反応できていれば、お前は俺を庇わずに済んだ」

「数馬だつてまだ初心者なんだから仕方ないよ。これから経験を詰めば良いって」

「私がファーストシフト一次移行を優先させなければ、一夏に特性を教えられた！」

「時間無かつたんですから仕方ないですよ」

「でも……」

「だーかーらー！皆自分を攻め過ぎなの！今回は誰も悪くないの！いい?！」

ステラの言葉に、その場にいた全員が押し黙った。

「で、この場合クラス代表ってどうなるんですか？」

「本来勝者がクラス代表という話だったが、流石にもう試合は出来ない」

「じゃあ私が決めていいですか？」

「まあ、あのまま行けばお前が勝っていた可能性が一番高いからな」  
「やった！ありがとうございます！」

ステラの笑顔に、四人は釣られて笑顔になった。  
そして、この波乱続きのクラス代表決定戦は終わった。

## 混乱と出会い Fifth Episode

「という訳で、クラス代表は織斑 一夏君に決定しました！」

「異議あり！」

「もう、せっかくだいい感じなのにどうしたの？一夏」

「え？いや、ステラがやるんじゃ無かったっけ？」

「え？私そんな事一言も言っていないよ？」

「え？」

「ここは一年一組の教室。先日のクラス代表決定戦の結果を朝のHRで伝える為に、連絡を早めに済ませ今に至る。」

「だって私『決めていいですか？』って聞いたただけだもん」

「うっ、それは…」

「諦めろ、織斑。それと時間も無いんでな」

その言葉に全員が時計を見た。

「後五分だ。早く授業の準備をしろ」

そして全員が急いで準備を始めた。

「それとステ…：ターナー。整備科の生徒が男子を連れて明日来て欲しいと言っていたから、明日行ってやれ」

「はい、織斑先生♪」

ステラはちよつとニヤツと笑って返事をした。

「ねえ一番星ちゃん」

まったりとした声をかけてきたのはこのクラスのマスコットの存在の『布仏 本音』。先日弾に助けられた二人の内の一人で虚の妹である。

「どうしたの？のほほんさん」

「今日の放課後におりむーのクラス代表のお祝いしようと思ってるんだけど、一番星ちゃんも来る？」

ちなみに一番星ちゃんというのは本音がステラと話したときの印象で付けたあだ名だ。

「あ、うん！行く行く！」

「それじゃあ決まり〜！」

にんまりと笑う本音に癒されながら、ステラは授業の準備を始めた。そして準備が終わると、思い出した様に数馬の元に向かった。

「ねえ数馬」

「どうした？」

「これ束さんからのプレゼント」

「プレゼント？」

ステラから手渡された箱を開けると、そこから赤いクワガタの様な機械と黄色い蜘蛛の様な機械、そして青いコウモリの様な機械が飛び出した。

「うわあ?!」

「……………なんだこれ？」

「束さんが作った自立稼働出来る小型のメカで、メモリガジェットつて言うの。こうやって後ろのメモリを抜くと携帯とか腕時計とかカメラになるよ」

「どっかで見た事あるぞこれ」

「気にしない気にしない」

「まあありがたく貰つとく」

「あ、それとフィリップにも追加武装として使えるつて」

「了解」

キーンコーンカーンコーン

「それじゃあまた後でね」

「おう」

そして一日の授業が終わわり、本音の言っていたパーティーが始まった。

「」「織斑君、クラス代表就任おめでとう!」「」

「なんだろう。お祝いの筈なのにそんなに嬉しくねえ」

「まあまあ、いいじゃない。料理も美味しそうだし」

「元凶が何言つてんだよ」

「えへへ／＼／＼」

「いや、褒めてねえよ」

「そんな事より、オルコット。お前は全員に話す事があるんだろ？」

「はい」

数馬に言われ、セシリアは席を立ち全員から見える場所に立った。

「皆さん。先日の非礼、申し訳ございませんでした！」

「二」「ええく……」

「今更過ぎるよオルコットさん」

「あんな試合見せられて、それにもう御手洗君達と和解してるんでしょ？なら私達が口出ししたりする事じゃないよ」

「そうだよお、セツシー。あの戦い凄かったよ」

「皆さん……ありがとうございます！」

セシリアはクラスメイトの言葉に少し涙ぐみながら顔を上げ、満面の笑みを見せた。

「良かったな」

「はい！ありがとうございます！数馬さん！」

「もうそんな事より早く食べようよ」

「そうだな。今から珈琲を淹れるが、誰か飲むか？」

「二」「はい！飲みます！」

「ハハハッ、数馬人気だな。俺も頼む」

「んじやあ俺も淹れるか」

「はーい！私も飲む！」

「でしたら私も頂きますわ」

「全員か。好みによって俺か弾に分けるぞ」

「ういーす」

それぞれ珈琲を受け取り、一斉に飲み始めた。

「美味しい！」

「何これ！もう缶珈琲飲めないよ！」

「ちよつとそつちのも飲ませてよ………あまーい！」

「おい、今どつかにハンバーグいたぞ」

「うわっ！渋っ！」

「馬鹿ね。それがいいんじゃない！」

その後、たまに食堂で二人の珈琲を飲みによくの生徒が集まったりしたとかしないとか。



「はいはい！新聞部です！話題の男性操縦者をインタビューしに来ましたー！」

そう言いながら食堂に入ってきたのは、二年生の新聞部副部長のまゆずみ薫子。かおるこ

「さてと、それじゃあ織斑君から！クラス代表としての意気込みは？」

「え!?えくと、その、頑張ります！」

「えく、もつと何かないの？」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「じゃあ適当に捏造するとして、質問です！君達三人は結構仲が良いみたいだけど、同じ中学校なの？」

「はい、そうですよ」

「なるほどなるほど。それじゃあ次は五反田君行ってみよう！」

「ういーす…」

薫子に声をかけられた弾は面倒くさそうに机から起き上がった。

「それじゃあ質問！君の今後の意気込みなんか聞かせて貰おうかな」

「やりたいことだけやる。以上」

「おお！どストレートに来たね！それじゃあ次は御手洗君！」

「まずはこの学校の意識改変だな。実力至上主義もいいが、もつと大切なものもある」

「おお！今のフレーズいいね！使わせてもらおうよ。それじゃあ次は、セシリアちゃんっている？」

「こちらに居ますわ」

薫子の呼び声に答え、少し離れた席に座っていたセシリアが立ち上がった。

「それじゃあセシリアちゃんには、御手洗君と戦った時の感想も聞こうかな」

「はい。数馬さんの動きは初心者とは思えない程の物でした。ISのシミュレーターと生身の訓練しかしていないと聞いた時にはとても驚きました」

「なるほど、あの動きをたったそれだけの訓練で。そういえばその訓

「練付けたのって、あの時のアリーナ破壊した子？」

「そうですね。お呼びしましょうか？」

「うん、よろしく」

「ステラさん。少しよろしいですか？」

「ん？いいよ。ちよつと行ってくるね、本音」

「いつてらっしゃる？」

本音とじゃれあっていたステラは、セシリアの呼び声に答えるとテコテコと歩いて来た。

「なにになに？」

「新聞部の方がステラさんのお話をお聞きしたいと」

「うんうん、少し興味があつてさ。一体どんな訓練をしたの？」

「基本的には色々な武器の扱いとか、銃火器の扱い方等です。それと対人格闘術や剣道等の武術。まあ剣道は他の人の力が大いに役立ちました。その技術は弾のエクシアのブレードでの戦いにも反映されています」

「ふむふむなるほど。そういえば君の専用機ってどこ製？君は国家代表候補生でも企業代表でもないでしょ？」

「え？あ、えつと……………」

（篠ノ之 束製です。なんて、言える訳ないじゃん！どうしよう！マジでどうしよう！）

「黛、ターナーの機体に関してはあまり掘り下げるな」

「あ、織斑先生」

戸惑うステラに助け船を出したのは、スーツを着込んだ完全に教師モードの千冬だった。

「ターナーの機体は特殊だな。実験機として運用されている。篠ノ之束が信頼した者にコアを一つ託したらしい。つまり、わかるな？」

「触らぬ神に祟りなし、ですね」

「物分りが良くて助かる」

「ごめんねステラちゃん。それじゃあセシリアちゃんから順に意気込みお願いね」

「はい。私は今の自分を見直し、更に邁進して行きたいと思っております」

ます」

「次はステラちゃんね」

「えっと……………あ、そうだ」

「ん？」

「まさか」

「あー、多分そのまさかだな」

「あれか」

「あれですわね」

ステラは言いながらニヤツと笑い、その他の薫子以外のメンバーは理解したように笑顔や苦笑いを浮かべた。

「この学園で、ステラ・ターナーここにあり！と、言われるような……………ギンギラ一番星を私は目指す！」

## 混乱と出会い Sixth Episode

「ねえ、織斑君達知ってる？今日中国から転校生が来るんだって」

「しかも代表候補生！」

『マスター、これは』

「うん、分かっている」

「中国の………てことはあいつか？」

「まああいつだろうな」

「あいつ以外にいないだろ」

クラスの女子のもたらした噂を聞き、ステラは少し震えだし、一夏は自分の考えを確認しようと弾と数馬に問い、問われた二人はそれぞれ味の異なる珈琲を飲んでいた。

「そういえば、今後のトレーニングのことなんだけどき」

「えっ！ステラ手伝ってくれるのか!？」

「そりやそうだよ。この前の試合はお互い敵同士だったけど、一夏はクラス代表で私達はクラスメイト、協力しない理由ないからね。それに、セシリアも協力してくれるよ」

「おりむーが勝つとみんなが幸せだからね〜！」

話をしていると本音や数人の女子が割って入ってきた。

「みんなが幸せ？」

「クラス対抗戦の優勝クラスには、食堂のデザートのフリーパスが贈呈されるんだよ！」

「そうだよ一夏！デザートフリーパスだよ?!絶対勝ってもらわなきゃ！」

「ステラは前からスイーツ好きだよな。けど、そう簡単に勝てるかどうか」

「大丈夫！織斑君なら勝てるよ！専用機持ちのクラスはウチだけなんだから！」

一組の生徒が声援を送っていると、教室の扉が開いた。

「その情報、古いよ！」

ドアの方から声が聞え、その方向を見るとそこには見覚えのある小柄な少女がいた。

「二組も専用機持ちの私がクラス代表になったわ！そう簡単には勝てな「りーろーんろーん！」どわっ?!」

ドアの所に立っていたのは、二年前に中国に帰った鈴だった。そして、ステラは東直伝のジャンピングハグで鈴に飛び付いて押し倒した。

「鈴！久しぶり！本当に代表候補生になったんだね！」

「そうよ！なったわよ！そんな事より、とりあえず降りなさいよ！」

「え？あ、ごめん」

嬉しさのあまり我を忘れていたステラは、鈴の言葉で正気に戻り、静かに立ち上がった。しかし状況が飲み込めない生徒達はただただ困惑していた。

「全く、再会をサプライズでドーンと飾りたかったのに、ステラのせいで台無しじゃない！まあ、いいけどさ？でもいきなりあれは無くない？」

「うう…だからごめんってば。久しぶりに会えて嬉しかったんだもん…」

少し拗ねたステラの頭を鈴は軽く叩き、抱き着いた。

「あのさ？私だって嬉しいに決まってんでしょ？まあ、一夏達と再会するのは計算外だったけど」

「うううう…鈴…」

「はあ、あんたは変わんないわね」

「鈴も変わってないよ」

「そうねえ、変わってないわよねえ。あんたはそんなに大きくなってんのになえ！」

「うにゃ?!」

突然鈴がステラの胸を掴んだ。

「何であんたはまだ成長してんのよ！」

「わ、私に聞かれてもお！」

「あーもう！イライラするう！」

「も、もう離してよお……んんっ！」

ガッツ!

突然の展開に一夏達すら困惑し始めた頃、鈴の頭に出席簿がクリンヒットした。

「いとおあ?!何よ!今私はステラ、の……」

「もうホームルームの時間だ」

「ち、千冬さん……」

出席簿で鈴を殴ったのは毎度の如く千冬だった。

「織斑先生だ。早く自分の教室に戻れ」

「くっ!覚えてなさいよアンタ達!」

「さっさと戻れ!」

「かしこまりましたあああ!」

「廊下を走るな!」

「ぐええ!」

千冬が手に持っていたチョコレートを投げナイフの様に投げると、鈴の頭に命中した。

「あの人もうどうなってるんだよ……」

「気にするだけ無駄だ」

「まあ、もう人間辞めてるしな」

「おい、その男子三人組。何か言ったか」

「「イエ、ナニモ」」

「はあ……まあいい。HRを始める」

……………

午前中の授業を終え、ステラ達は食堂へと向かっていた。

「フン!逃げずに来たようね!」

「逃げずにつて……、そりや食堂には来るだろ。休み時間なんだし」

授業が終わり昼食をとり、食堂に行くと、入り口で鈴が待ち伏せていた。

「鈴、取り敢えず中に入る?邪魔になってるし」

「わかったわ」

そしてステラ達は、空いている食堂の席に座った。

「久しぶりねアンタ達！」

「鈴こそな。元気だったか？」

「オホン！私を忘れてもらっては困りますわ！凰鈴音さん！」  
「えっと、誰？」

「セシリアはイギリスの代表候補生で私達のクラスメイトだよ」

「ふうん、他の代表候補生に興味ないから知らなかった」

「きよ、興味ないですって!？」

「それはそうと、一夏！約束、忘れてないでしょうね！」

「約束…、いや、俺は覚えてるはずなんだけどさ…」

「？まあいいわ。放課後に聞きに行くからね」

「あ、ああ…わ、わかった。」

「数馬さん。約束とは何のことですか？」

「プロポーズだ」

「プロポーズ!？」

「馬鹿！声が大きい！」

「も、申し訳ございませんわ」

「なあ弾、なんで数馬はプロポーズの話なんかしてたんだ？」

「さあ。自分で考えろクソリア充」

「え？」

-----

## 放課後

「一夏のバカー！覚えてなんかないじゃない！」

「だから言ったのに。ほら、お茶だよ」

「グスツ、ありがとう…」

「で、鈴、これからどうすんだ？」

「一夏がちゃんとわかってくれるまで……!！」

「あー鈴、多分それは無理だと思っぞ？付き合ってくれって言われて  
買い物に行くと思う様な奴だし」

「……………」

弾の言葉に、鈴は何かを思い出した様な表情になった。

「取り敢えず、一夏と会って来た方がいいんじゃない？」

「……わかった」

そう言っ鈴は部屋から出て行った。

そして—————

「バカ一夏！ぜつつたいに許さないわ！」

体中に怒りと闘志をみなぎらせ帰って来た。

—————

日は流れ、クラス対抗戦。

初戦のカードは一組対二組。そしてその二つのクラスの代表は。

「覚悟しなさいよ一夏！」

「ああもう！鈴！俺が勝ったら約束の意味、教えてもらうからな！」

現在進行形で喧嘩中の一夏と鈴だった。

〈試合、開始！〉

「うおおおおお！」

試合開始のコールと共に一夏は雪片式型を構えて突っ込んだ。

「甘いわよー！」

「ぐあっ?!」

その時、一夏は突然何かにぶつかつた様に飛ばされた。

「いってえ……それが龍咆って奴か」

「あら、良く知ってるわね。でも、知識だけでどうこうなる程私の

シエンロン

甲龍は甘く無いわよー！」

「ぐっ！があ?!」



そして、その戦いを観戦しているステラ達は鈴の強さに舌を巻いていた。

「防戦……いや、ただの一方的な攻撃だな」

「幾ら鈴さんが代表候補生と言えど、この強さは異常ですわ」

「そりゃそうだよ。鈴はたったの一年で代表候補生になったんだもん」

「二年?!」

ステラの言葉にセシリアは驚き、弾と数馬は戦いを見ながら苦い表情を浮かべた。

「二応甲龍の装備は見たが、双天牙月という青龍刀が一本に、肩部と腕部の衝撃砲の龍咆。装備は少ないが、逆にこの二つだけだからこそ戦略を組みやすい」

「さらに言えば鈴は格闘とか反射神経はえげつねえからな。一夏がそれに対応出来るかどうか」

「いや、出来るさ」

「え?」

数馬達が意見を出し合っていると、今まで黙っていた箒が口を開いた。

「一夏はまだ小さい時だったが、千冬さんの動きを見切った時がある」  
「なっ?!」

「千冬さんの攻撃を見切った?」

「あのブリュンヒルデの織斑先生の攻撃をですか?!」

「……そうか、だからあの時も」

「ステラさん?どうかしましたか?」

「一夏がこの前の戦いでイケニツジョン・ブースト瞬間加速を訓練もして無いのに扱えたのは、多分そういう事なんだよ」

「どういう事だ?」

「多分、一夏は瞬時加速の使い方を直感で理解して実行した。それは多分私達の高速化を見たからだと思う。そして、千冬さんの攻撃を見切ったのは千冬さんの動きを毎日見ていたから。つまり一夏は実感無いかもだけど、見たものをすぐに学習して使える」

「なる程、だからあのタイミン<sup>ファーストシフト</sup>グの一次以降か。一夏の能力を引き出す為に白式が一夏に合わせたんだ」

「そういう事だと思う。だから、時間があれば一夏も勝てる」

そんな事を言われているとはつゆ知らず、一夏達の戦いは激しさを増した。

「はああ！」

「おおらあ！」

ガキンツッ！

鈴の全力で振られた双天牙月を、一夏は全力でスラスターを噴かせ、そのスピードを利用して何とか拮抗している。

「甘いつて言ってるの！」

「そうそう何度も食らうかよ！」

一夏はそう言いながら海老反りの様に体を逸らした。すると、後方の壁に何がぶつかった様な跡が付いた。

「どうして?!」

「なんでだろう、な！」

ブンツッ！

「あぶな！」

鈴はギリギリの所で躲し、そのまま距離をとった。

「鈴、そろそろ終わりにしようぜ！」

ドンツッ！

白式のスラスターが全開し、そこから押し出されるエネルギーが空気にぶつかった音がアリーナに響いた。そして一夏は一直線に鈴に向かっていった。

「芸がないわね！沈みなさい！」

一夏に向けて龍砲が放たれる。

「今だ！」

その瞬間、一夏の動きが変わり、瞬時加速した一夏が鈴へ向かう。

「な、速っ！」

「もらった！これで……！」

ドゴオオオオン！

一夏が鈴の懐に入り、決めようとした瞬間。アリーナのシールドを破り、黒い影が現れた。

「何？あれ…」

「フルスキン全身装甲の、IS？」

「ていうか今、アリーナのシールドを？」

キヤアアアア！

次にアリーナに響いたのは、IS学園の生徒達の悲鳴だった。

『マスター！皆さんの避難を！』

「分かってる！セシリア以外は他の生徒の避難誘導を！」

「私は何を！」

「あそこに一つだけ開いているピットがある。あそこから入って一夏のサポートお願い！それじゃあ皆持ち場に！」

「「了解！」」

「あ、箒！」

「なんだ？」

「これ使って」

ステラはそう言って拡張領域から武器を取り出した。

「これはロケットランチャー。多分扉にロックがかかってるからそれで破壊して」

「破壊していいのか？」

「いいよ。緊急事態だから」

「わかった、使わせてもらう」

箒は受け取ったロケットランチャーを持って避難誘導を始めた。

「よし、私も！」

そして、一夏達は突然現れたISとの戦い。ステラ達は避難誘導を。

それぞれに出来る事を始めた。

## 混乱と出会い Seventh Episode

「皆さん！ここから避難して下さい！」

混乱の中、教師達も自分に来れることをしていた。

「山田先生！」

「ターナーさん！大丈夫でしたか？」

「はい。それと、ここから先には行けません」

「え？どうしてですか？」

「さつき確認しましたが、アリーナのセキュリティシステムが作動しています」

「そんな！それじゃあ出口が！」

「落ち着いてください！扉は私達が破壊します。一応先生に確認を取りたくて」

「こういう場合は生徒の命が最優先です。お願いします」

「はい！皆さん、扉から離れて下さい！」

ステラはギンギラの右腕を部分展開して、サーマルキャノンを放ち扉を破壊した。

「後は避難誘導を」「一番星ちゃん」え、本音？」

「避難誘導は私がするから、一番星ちゃんはおりむー達を助けてあげて」

「……………ありがとう本音！今度スイーツ奢るから！」

「特盛パフエね〜」

「ええ?! ああ、もういいよ！特盛パフエ一緒に食べよ！」

「わ〜い！やった〜！」

ステラは走りながら、本音はそれを見送りながら笑顔で別れた。

……………

「そこを退いて下さい！……………ダメだ。セキュリティが頑丈過ぎる……」

「虚！」

「弾君？どうしてここに！」

「開かねえんだろ？だったら壊す！エクシア！」

弾はエクシアの両腕を部分展開させて、GNソードをガンモードにしてエネルギーをチャージし始めた。

「バンツ！ガゴツ！」

「開いたわー！」

「皆さん！早く、そして落ち着いて逃げて下さいー！」

虚の言葉に、その場にいた生徒達は落ち着いて避難を始めた。

「弾君、ありがとうございます」

「おう?!」

虚は嬉しさのあまり弾に抱き着いた。そして虚はゆつくりと離れて弾に言った。

「アリーナに行って下さい、あの二人だけでは心配です」

「分かってる」

弾は虚に背を向けて走り出した。そして虚はその背中を見ながらふと思った。

（あれ？私、何してるの?!）

そして顔を赤らめた。

.....

その頃、数馬が行った方では。

「扉が開かない！どうして?!」

「アリーナのセキュリティが作動してるんだよ！早く解除しなきゃ！」

「そこを退け」

その声を聞き、生徒達はまるでモーゼの海割りの様に道を開けた。「フィリップ」

数馬はフィリップの右腕を部分展開してビームライフルを構えた。そしてそれを撃つと、今までとは違い赤い炎の様な粒子が光弾を包んだ。

そして火球となった光弾は扉を破壊した。

「後は避難誘導か」

「その必要は無いわ。貴方はアリーナに向かいなさい」  
「なに？」

「ここは私がやるわ。貴方は貴方の成すべき事をしなさい」

数馬に声をかけたのは、水色の髪の少女だった。

「そのリボンの色、二年か。だが」

「いいから行きなさい。私を、信じて」

「……わかった」

数馬は彼女の事を疑問に思いながらも、走り出した。その後ろ姿を見ながら、少女は呟いた。

「貴方との約束があるから、私は死なない」

その目は、希望を見る様な目だった。

.....

「あ、篠ノ之さん！」

「どうしよう、扉が開かないの！」

箒が行った場所は、たまたま一組の生徒が多くいた。

「分かった。セキュリティを解除している時間は無いから、破壊する」

「でもどうやって？」

「こうするのさ」

ガチャッ

「え?!ちよい待ち!何それ!」

「ロケットランチャーだが？」

「いやいやいや!何で持ってたんの!」

「借りたんだ。こういう時の為にな」

そして箒はロケットランチャーを構えた。それを見て生徒達は扉と箒から離れた。

「はあ！」

ドンッ!ドガアアッ!

「早く逃げろー!」

「ありがとう篠ノ之さん!」

箒は避難誘導をしながらアリーナの方を向いた。

「後は頼んだぞ」

.....

その頃。

「クソっ！こんな『奴ら』何処から来たんだよ！」

一夏達は突如襲っていたISが無人機だと気づき、そのISを合流したセシリアと共に倒した。そんな時、更に三体の無人機が先程空いたアリーナの穴から進入して来た。

「くっ！ぐあっ?!」

「うっ！きゃあ?!」

先程の無人機の観察する様な動きとは違い、今回のISは容赦なく一夏達の命を狙っていた。

ギョーンッ！

「きゃああ！」

「鈴さん！」

「鈴！よくも鈴を！許さねえ！」

「一夏さん！一人では無理です！」

「うおおおお！」

「戻れアホ」

〈Spider〉

「うわっ?!」

一夏は突然鉄製のワイヤーに捕まり、ピットに引っ張られた。そして、セシリアも瓦礫に隠れた。

「冷静さを欠いて勝てる相手じゃない。まず落ち着け」

「数馬？でも鈴が！」

「鈴ならさつきステラが助けた。俺達はアイツを倒す。人数だけでも揃えたいのが現実だ。お前も来い」

「そんなの当たり前だろう！でも、もうエネルギーが」

「それならそこで補給しろ。今回の作戦にはお前が、お前の零落白夜が必要不可欠だ」

「じゃあ、それまで奴らはどうするんだよ」

「俺達が時間を稼ぐ。弾とステラが反対側のピットで待機しているから、セシリアと合流して奴らを叩く。それでも恐らく俺達だけでは倒せないし、教師のIS部隊を待っていれば奴らはここを飛び出して学園にダメージを与えかねない。お前がこの戦いの鍵だ。頼んだぞ」

数馬はそう言うと、フィリップを完全に展開させてピットを飛び出した。

「俺が、戦いの鍵……」

……

そして、アリーナに飛び出した数馬はロッドを展開して敵機の内一体を地面に叩きつけた。

「ゴイツらに識別番号を付ける。俺が落としたのは一号、ステラの側にいるのが二号、弾の側が三号だ。セシリアは援護を頼む！」

「了解！」

そして数馬は、地面のクレーターに佇むIS、一号を見て呟いた。

「やはりこの程度では倒れないか。なら！」

そういうと次はビームライフルを展開して光弾を撃った。そして光弾は黄色い光を纏い、逃げ出した無人機を追尾した。

「やはりこの能力がビームライフルに相性がいいな」

数馬はそう言いながらも攻撃の手を緩めない。そして全速力で向かって来る一号を勢いを殺さずに受け流して、その背後に光弾を撃ち込んだ。

……

「でりやあー！」

ブンッ！

ステラはを拳を振るう。だが二号は身を翻してそれを躲すと、自身の腕部から射出されるビームソードでステラを切り裂こうとする。

「よつとーはあー！」

ギユンッ！

ギユンッ！

ドオーンッ！

ステラの撃ったレーザーと二号の撃つレーザーがぶつかり合い、爆



発が起きた。

『マスター、今です！』

「はあ！」

ガンツ！

爆発を突き抜け、ステラは二号を殴り飛ばした。

「かったい！全然ダメージ入って無いじゃん！」

『いえ、シールドエネルギーは着実に削っている筈です』

「それならいいんだけど、ね！」

ステラはギンギラの言葉を聞きながら追撃を仕掛けた。

.....

「おうらあ！」

ブンツ！

「ちっ！無駄に速いな」

ギウンツ！ギウンツ！

弾は三号にGNソードで斬りかかり、それを躲して離れる三号に対して刀身を畳みレーザーで狙う。

ギウンツ！ギウンツ！ギウンツ！

グウーンツ、ドンツ！

「おわつと?!速すぎんだろ！しゃーねー、トランザム！」

弾はトランザムを発動させると、超高速で動き回る三号の背後についてビームを撃つ。

.....

「これをどうサポートすれば……」

三人の戦いを見ていたセシリアはただただ困惑していた。

(未だビットの操作と射撃は両立出来ませんし、出来たとしてもこの状況では！……私に、出来ること……)

「きゃあ！」

「っ?!ステラさん!」

セシリアが悩んでいると、二号の攻撃を食らったステラの悲鳴が聞こえた。慌てて辺りを見ると、そこにはまだ稼働は出来るものの、ダメージを多く負っている数馬達がいた。

(私に出来ること……………いえ、違いますわ!)

セシリアは一度俯き顔を勢い良く上げると、心を解き放ち叫んだ。

「私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコット! 友達を助ける為に戦えない様な人間には代表候補生は務まりませんわ! 出来るかでは無く、やるのですわ!」

セシリアはそう言いながらスターライトMk—IIIを構えた。

「私の思いに答えよ! ブルー・テイアーズ!」

セシリアの叫びと共に一瞬髪が銀色に光り、すぐに元に戻った。そしてスターライトMk—IIIから大出力のビームが放出され、そして動かせない筈のビット達が敵を狙い撃つ。無人機達はそれを躲したが、気付かぬ内に一箇所に集められていた。

「今ですわ、一夏さん!」

「うおおおお!」

青く輝く光の剣が、無人機達を纏めて切り倒した。

……………

「無人機、か」

薄暗い部屋。その中心には四つの発光する球体が置かれていた。

「はい。解体の結果中に人は居ませんでした。しかし…………」

「どうした?」

「その…人の、脳が…………」

「……………そうか」

「そうかって…………織斑先生は何とも思わないんですか?!」

「思うさ。ただ、こんな事を平気で行える奴は、一体何を考えているのだらうなと思ってな」

「織斑、先生?」

（お前は何を思い、これを作った？お前は何がしたい？何故ステラ達を巻き込む？）

「答えろ、デストロ」

千冬の怒気の籠った弦きは、機械音しか聞こえない部屋の中で、僅かに木霊した。

## 混乱と出会い Ninth Episode

「昨日は凄かったよセシリア!とうとうビットとの併用が出来る様になったんだね!」

「わっ?!ステラさん?!」

戦いの翌日。昨日は取り調べ等があつて話せなかったからか、ステラはセシリアに飛びつき気味に抱き着いた。

「あの時は必死でしたので。しかし、あの後幾らやっても出来ませんでした」

「え?そうなの?」

『マスター、少しよろしいですか?』

「ん?いいよ。あ、少しごめんねセシリア」

「構いませんわ」

ギンギラに言われ、セシリアと話していた場所を離れて物陰に入つた。

「どうしたの?」

『先日の戦闘のデータを確認していたのですが……』

「……………え?」

ステラは、ギンギラ言葉に驚きを隠せなかった。そして二人は尚も話し続け、数分後。

「そんな……………」

『マスター、お気持ちは分かります。ですが現にセシリアさんにはその兆しがあります』

「……………兆し、か」

ステラは少し考えた後、物陰から出ていつもどおりの表情で教室に戻つた。

そして数分後。今日の一時間目。

「はいはい、皆席に座ってー」

教壇に立つ翔一は、いつにもましてやる気に溢れていた。

「皆は今まで基本の五教科を勉強して来たと思うけど、今日から他の四教科も追加されます。家庭科、体育、保健、書道の四教科です。と、

いう事で！今日のこの時間は家庭科をします！」

「「「イエエーイ！」」」

「それじゃあ、好きな人同士で班を作って貰おうかな。次の授業で調理実習するから」

「先生、どんな料理なんですか？」

「何でもいいよ」

翔一の言葉に、教室が少しざわついた。

「先生、それじゃあ説明足らないと思いますよ？」

困惑する生徒達を見かねてステラが苦笑混じりにそう言うと、翔一は笑いながら頭をかいた。

「あ、ごめんね？何でもいって言うのは、どんな料理でもいいよって事。今日までに班と料理を決めて、俺から班長がプリントを貰って班員と必要な材料を書いて提出して下さい」

「「「織斑君／五反田君／御手洗君！私と班組んで！」」」

「一夏、弾、ステラ、セシリア、箒、組むぞ」

「おう。ゴメンな皆」

「フライドポテト作ろうぜ」

「弾、調理実習でジャンクフードは無し」

「フツ、弾さんは相変わらずですわね」

「栄養も偏るだろ」

「「「振られた……」」」

落ち込んだような素振りを見せた生徒達だったが、いつもの事だと割り切りそれぞれ班を組んでいった。

「さてと、何作る？」

「フライドポテト」

「以外で」

「無難に朝の定食でいいんじゃないか？」

一夏と弾の漫才を他所に、箒はそう提案した。

「だな。皆はそれでいいか？」

「何でもいい」

「いいよ」

「構いませんわ」

「よしっ、じゃあ班長決めようぜ」

「え？一夏じゃねえの？」

「そうだよ。一夏だと思って聞いてなかったのに」

「待て待て！何で俺が班長なんだよ！」

「クラス代表だから」

「ぐうっ…」

ステラと弾が当たり前の様にいうと、一夏はぐうの音も……………いや、ぐうの音は出た。

「じゃあ提出してくるが、いいか？」

「え？材料書いてなくね？」

「お前らが話している間に書いた。鮭と味噌汁の具材と米だが、問題あるか？」

「あ、セシリアってお箸大丈夫？」

「ええ、祖国で練習しましたわ。日本に行くということは箸を使う機会が少なからずあると思いましたが」

「さっすがセシリア！真面目！」

「しかし、箸は扱いが難しいからな。結構練習を積まなければまともには扱えない。セシリアは努力家だな」

「フフツ、褒めても何も出ませんわよ」

先日的一件から友としての親睦を深め合い、当初とはまるで違う雰囲気です話す三人を、一夏達は眺めていた。

「あの三人が話していると絵になるよな」

「まあ三人とも美人だしな」

「そうだな。それじゃあそろそろ決めるぞ。班長は一夏。作る料理は白飯、焼き鮭、味噌汁でいいな。材料は米、鮭、味噌、豆腐、ワカメ、葱。これで提出するが、いいか？」

書類を纏める数馬がそういうと全員が了解し、そのままその案で通った。

そして三日後。

「それじゃあ班の人は番号の所に行つてね。そこに材料と調理器具一

式あるから」

「よしっ！すっごいの作っちゃうぞ！」

「まずは米を洗うか。セシリア、頼めるか？」

「はい、お任せ下さい」

箒に聞かれたセシリアは、何故か洗剤を取り出した。

「おい、セシリア。何故洗剤を取り出した」

「え？お米を洗うのですよね？」

「ああ、そうだ」

「違いますの？」

「ああ、大いに違う」

「ええ?!」

「ええ?!待ってセシリア、今までどうやって料理作ってきたの?!ていうか自分で食べた事ある?!」

「いえ、私の使用人達に振る舞う時に作りましたので、自分で食べたりはありませんわ」

「あちやあ〜……………」

ステラはあからさまに頭を抱えた。

「ある意味でクロエさんより重症だ…」

「ど、どうするんだ？」

「ここは私が何とかする。そっちは箒達でお願い」

「ああ、任された」

「なんだよこのロボットアニメっぽいシーン」

かくして、ステラ達の班は（色んな意味で）ロケットスタートで調理を始めた。

「まずは味噌汁だな」

「わあ！セシリア何いれんの！」

「何って絵の具ですわよ？」

「いや、ちょ、何考えてんの?!食べられなくなっちゃうじゃん！」

「いえ、色味が足りないと思ったので…」

「そこは作りながら味と一緒に調整するの！とりあえず絵の具しまつて！」

「は、はいな……」

「……………味噌汁作るか」

「おう」

「ああ」

「そうだな」

尚、ロケットは二人乗りでした。

「だーかーらー！香りが足りないからって香水入れちやダメだつて！」

……………

40分後。

「何とか形にはなったね……………」

「ああ、なかなかの出来だろ」

「さて、そろそろ飯も炊けただろう」

「腹減ったあ……」

「同感……」

「すみません、私のせいで……………」

「え？あー、気にしないでいいよ。慣れてるし」

何とか見た目も味も最高の出来になった所で、ステラ達は椅子に座り込んだ。

「おっ！結構よく出来てるじゃん」

疲れ果てたステラ達の元に翔一が声をかけた。

「あ、津上先生」

「うん、香りもいい。でも……………テーブル片付けよつか？ていうか何で絵の具?!」

「あ、それは……………」

「私ですわ。私が料理の際に使おうと持ち込みました。ですが、先程ステラさんに教わりました。料理が何たるかを」

「そっか……………なら、俺が言うことは無いよ」

「まあ、とりあえず食べようぜ」



「おう」

「ああ」

「うん」

「そうだな」

「ですわね」

料理を食べる六人の顔は疲れ果て、そして楽しそうだった。

.....

一日の授業が終わり、部屋に戻ったステラを待っていたのは、机に大きな紙を広げていた簪だった。

「おかえり、ステラ」

「うん、ただいま。それじゃあ始めよつか」

「うん」

ステラ達は机に座り、大きな紙に何かを書いていた。そこにはこう書かれていた。

—打鉄式 改修プラン—

## 混乱と出会い Tenth Episode

「それじゃあ始めよっか」

「うん」

机の上に広げられた設計図。それには至る所に赤いペンで修正や追記がされていて、どれもがISの専門用語ばかりだ。

「昨日どこまでやったっけ？」

「慣性制御のシステムの見直し」

「あー、あそこね」

二人のこの作業は、クラス代表決定戦の日から行われていた。

.....

ガチャツ

「うう、まだ背中がヒリヒリする……」

寮の扉を開きながら、ステラは呟いた。一夏の全力の零落白夜によって受けた傷は、束の作った医療用ナノマシンが塞いだ。しかし、まだ体が順応していないのか、ステラは背中に変な感覚が残っていた。

「ここは、こう。出力はもう少し上げて。でもそれだと重量が増すから……」

「ん？更識さん何やってんの？」

「ひやつ?!ターナーさん？」

「あ、ステラでいいよ？その方がじっくりくるし」

「なら、私も簪でいい」

「オツケー、簪。それで、それって何の設計図？」

「あ、えつと……」

未だ動揺する簪を他所に、ステラは机に広げられている設計図を見た。

『『打鉄式式』？打鉄の次世代、でも無さそうだけど』

「それ、私の専用機なの……」

「そうなの?.....えっ、だったら何で簪が設計図なんて」

「私の専用機の開発が中断されちゃったから」

「中断?・ISは国にとって最重要の筈なのに.....ねえ、簪。も  
しかして簪の専用機を開発しているのって倉持技研?」

「そうだけど、どうしたの?」

ステラは簪の返答に、少し呆れた様な表情になった。

「幾ら初の男性操縦者だからって、元からある契約をほっぽり出すな  
んて」

「あ、違うの。打鉄式を担当してくれてた技術者さんは最後まで  
粘ってくれたの。でも上の人からの命令だからごめんなさいって。  
だから私は大丈夫」

「それでも、これは酷いね。半分くらいしか出来てないじゃん」

「やっぱり、私一人じゃダメなのかな?」

「え?」

「え?」

簪の言葉に呆気にとられ、間の抜けた声を出すステラ。そしてその  
声を聞いて同じ様な声を出す簪。

「一人って、ええ?!これ簪一人で作ってるの?!」

「うん」

「どこから?!」

「フレームの設計の見直しから、だけど.....?」

「凄い。簪ってそんな事も出来るんだ.....」

「ステラも、出来るでしょ?」

「ううん、私はフレームの設計なんて出来ないよ。プログラムや整備  
くらい」

「私は、そっちの方が少し苦手」

「.....あっ」

二人は何かを思いついた様に声を出した。

「あの、簪。よければその、手伝っても、いい?」

「いや、その、私も手伝って欲しいなって...」

そして二人はペアッと表情を明るくして顔を上げた。

「一緒に作ろう！」

.....

そして、時間は現在に戻る。

「えっ?! ステラってあの篠ノ之博士の弟子なの?!」

「んー、ちよつと違う。私と東さんは第二の家族みたいな物かな」

「第二の? そういえばステラの両親って」

「結構離れた所に居るから、今は会えない」

「あ、ごめん…」

「いいよいいよ! それよりほら、続き続き!」

申し訳なさそうに俯く簪に、ステラはとびきりの笑顔で笑いかけた。

「……………うん!」

そして二人の作業は夜遅くまで続き、ある時ステラがある事に気付いた。

「東さんに手伝って貰うっていうのもありじゃん」

「え?」

「いや、東さんに少し武装や慣性制御プログラムを手伝って貰おうかなって」

「出来るの?」

「多分ね。忙しく無かったら大丈夫だろうけど……」

『マスター、東さんからビデオ通話です』

東の事を話していると、丁度東からの連絡が入った。

「おお! タイムリー! 何何?」

「へやっほー! スーちゃん! 実はクーちゃんが会えないからってごねだしちゃって、ご飯作ってくれないの! 明日土曜日でしょ? 出来れば来て! 座標送るから!」

「いや、別にいいですけど。あ、一つお願いいいですか?」

「スーちゃんの頼みなら全然いいよ! 何?」

「実は、倉持技研が開発中だったISが一夏達の存在で開発が中止さ

れちゃって。それで私とそのISの所持者の子で制作しているんですけど、資料や資材が足りなくて……だから」

「うん、全然いいよ」

「本当ですか?!ありがとうございます!」

「それじゃあまた明日ね。そっちに迎えのロケット飛ばすから、数人乗れるスペースあるし誰か誘っていいよ」

「はい!ありがとうございます!」

「それじゃあバイバーイ!」

「はい!さようなら!」

プツツ

電話が切れると、ステラは速攻でダンスを開き中から色々な物を取り出した。

「簪も準備しなよ」

「え?私も行つていいの?」

「え?行かないの?」

「いや、行きたいけど。邪魔にならないかな……」

「まさか!そんな訳ないじゃん!束さんだつてあんな風にしてたけど、少しは罪悪感感じてるよ」

「罪悪感?」

『一夏さん達の専用機の開発には束さんも参加しています。それ故に、話している時に僅かに声の振動パターンが変わりました。恐らく少し動揺したのでしょうか』

「そう、なんだ……」

ギンギラの言葉を少し信じられない簪だったが、ふと一つの事を思い出した。

「そういえば、さつき誰か呼ぶって言ってたけど誰呼ぶの?」

「え?あー、まあまずは千冬さんかな。それと箒も呼ぼうかな」

「箒?」

「うん。一組の生徒で、束さんの妹なんだよ」

「そうなんだ」

.....

「それで、ステラ。だいたい誰に会いに行くのかは予測済みだが、なんだこの大所帯は」

学校の門の付近に、数人の人影があった。そしてそこに立つ千冬がステラに問いかけた。

「いやあ、めぼしい人呼んでたらいつの間にか増えてて……でもほら、多い方が楽しいし！」

「はあ……まあいい。それで、このロケットに乗るのか？」

「はい」

「そうか、わかった」

千冬はそう言うのと、一人で乗り込んだ。

「ほら、一夏達も乗って」

「おう」

「ステラ、これからどこに行くんだ？」

「まあまあ、それは着いてからのお楽しみだよ」

ステラにそう問いかける筈に、悪戯を仕掛けた子供の様な笑顔で答えた。そして一夏達男子メンバー三人と翔一、箒、鈴、そしてセシリアが乗り込んだ。

「ステラ、今日はありがとう」

「いやいや、元々はこの為だし」

「それでもだよ。それじゃあ、先に乗ってるね」

「うん」

「貴方がステラ・ターナーさん？」

箒が乗り込むのを見届け、自分も乗り込もうとしたステラに、一人の女子生徒が声をかけた。

「はい、そうですけど。えっと、あれ？もしかして」

「ええ、私は更識 楯無。箒ちゃんの姉よ」

「そうですよね！やっぱりそっくり！」

「ステラさん。こんにちは」

「虚さんも来るんですか？本音誘えばよかったなあ」

「ああ、それなら」

「もう、一番星ちゃん酷いよ。こんな楽しそうな事があるのに声掛けないなんて」

「え?!なんで本音いるの?!」

「お姉ちゃん達が話してるのを聞いて付いて来たのだ」

本音の言葉に驚いているステラに、虚が申し訳なさそうに声をかけた。

「この事は簪お嬢様には内密にして頂けますか？」

「いや、いいですけど。ていうかお嬢様？」

「私の一家は、代々更識家に使える従者の家系なんです」

「そういえば更識ってどこかで……………ああ!あの対暗部むぐうつ?!」

思い出した様に声を上げるステラの口を、先程とは打って変わって人さえ殺しそうな顔になった楯無が塞いだ。

「貴方、どうしてそれを知っているの?場合によってはこのまま首を切るわ」

いつの間にかステラの首元には、鋭い木の枝が当てられていた。

「楯無お嬢様!お止め下さい!」

「そうだよ!そんな事したら、かんちゃんが悲しむよ!」

「……………事情は後で聞いわ」

「あ、ありがとうございます……………後でこの事を教えてくれた人と事情説明します……………」

「お嬢様、あまり脅さないで下さい。ステラさんが怯えています」

「え?ああ、ごめんなさい!癖でつい……………ごめんね?ステラちゃん」

「え?あ、ええと、はい」

殺気に満ちていた表情と雰囲気は何処に行ったのか、その表情は本気で申し訳なさそうだった。それに戸惑ったのか、ステラは少し困惑した様な声を出した。

「おーい!ステラ!早く行こうぜ!」

「え?あー、ごめんごめん!今行く!楯無さん達も行きましよう?」

「そうね」

「ええ、待たせてしまっていますしね」

「わーい、一番星ちゃんの手作り料理」

そして四人もロケットに乗り込んだ。するとロケットの扉が自動で閉まり、エンジンが駆動し始めた。

そして十二人を乗せたロケットは空へ飛び出した。



## 混乱と出会い    Eleventh    Episode

「だーかーらー！トランザムはダン君への負担が大きいの！時間伸ばすとか無理だから！」

「だから！あれじゃあ時間も出力も足りねえの！アリーナ壊れた時だってギリギリで、下手すりゃ死人出てたんだぞ！どうせリミッター掛けてんだろ？さっさと外せよ！」

「あー！もう！弾も我儘言わない！ただでさえピーキーな機体なんだから、そうそうリミッター外せないよ！」

ここは束のラボの整備室。そこにはそれぞれの専用機、そして見たことのない機体が一機鎮座していた。

「ちよつと三人とも落ち着いて！」

言い争う束と弾とステラ。そしてそれを止めようとする翔一。何故この様な状況にあるか。それは今から約二時間程前。

.....

「やーやー！久しぶりの子は久しぶり！初めましての子は初めまして！皆のアイドル、みーたn……束さんだよお！」

一瞬どつかのネットアイドルの名前を口走りそうになった束だったがすぐに言い換えた。

「皆さんお待ちしておりました。束様のメイドを務めさせていただきます、クロエです。以後お見知りおきを」

何故か歩きながら言うクロエに全員が疑問を抱いていたが、次の瞬間更なる疑問に襲われる。

ギユウツ

「はあー♡ステラ様の匂い、落ち着く♡」

「おわっ?!ええ?!どうしたのクロエさん!ていうか何があったの束さん!」

「いやあ、私ばかりスーちゃんに会ってたらいつの間にか禁断症状起こしちゃって。ははっ」

「いやいや笑ってる場合じゃないでしょ！クロエさんこんなキャラでしたっけ?!」

「まあまあ、対処法ならもう考えてるから」

「何ですか?!言ってください!」

焦るステラに落ち着いたまま語りかける束。しかし、周りはまだほかんとしていた。

「ちよつと耳元で『ただいま、クロエ』って囁いてみて。出来るだけ暖かい息漏らしながら」

「いいですけど、何ですか?」

「え?あー、それはまあ。何となく」

(あつぶなー、スーちゃんこういうの知らないの忘れてた)

「えつとー、ふう……」

「ただいま、クロエ」ボソツ

「んんっ♡おかえりなさい………あれ?私何を?!」

「あ、戻ってきた」

「ここまで約二分。未だにぼかんとしているその他大勢だった。

……………

「という事で!束さんの束さんによる束さんの為の島。略して束さんの島へようこそ!」

「あれ?でも束さんって移動型ラボで世界を放浪するんじゃない?」

「まあまあ、細かい事は気にしない!」

実際に、束は移動型ラボで世界中を放浪していた。しかし、そのせいでステラに会いづらいとクロエが駄々をこね始めてしまったので、急遽人工島を建設した。無論ステルスも完備している。

「さてと、それじゃあ早速料理を出すね。クーちゃん手伝って」

「はい。かしこまりました」

すっかりいつもの調子に戻ったクロエと共に束は厨房へと消えた。

「一番星ちゃんは作らないの?」

「いや、そのつもりだったんだけどさ。『成長した私達を見せてあげる

！』って言われてさ。断りづらくて」

「なーんだ、残念」

残念がる本音。何気に適応力が高い。

「ここが、篠ノ之 束のラボ……………」

楯無は少し警戒した様な目で部屋を見渡す。

「お嬢様、一応人様の家です。あまり見渡すのは良くありませんよ」

「それもそうね。それと、お嬢様って止めてくれる？学園では会長って呼べと」

「ここは学園ではありませんよ」

「ううっ、的確に痛い所を…………それなら昔みたいなたっちゃんで」

「それでは立場が」

「同じ年なんだから立場も何も無いでしょ？それに、そういうのをとっぱらってこそ食事を楽しめるのよ？」

「…………そうですね。たっちゃん」

「ふふっ、それでいいのよ」

微笑ましく話す二人を少し離れたステラの隣の席から見る視線が一つ。

「何でお姉ちゃんが？どうして？」

酷く困惑した簪だった。

「簪、ごめんね？」

「直前で行かせてって言われたものだから、つい」

「それにね、一番星ちゃんは二人の関係の修復の為に、お嬢様を呼んだんだよ」

「あ、ちよい本音！何でそれ言っちゃうの！」

「そうなの？ステラ」

「あの、ごめんね？勝手にこんな事しちゃって…………」

「ううん。ステラが私の為にしてくれたんだから、嬉しいよ。でも、次からは事前に言っただけ？」

「うんー！」

簪に撫でられながらそう言われ、ステラはニコツとしながら答えた。そして簪は席を立ち、虚の席と交代した。

「皆お待ちませー！東さんとクーちゃん特製メニューごつちや混ぜフルコースだよー！」

東はそう言うのとテーブルに敷いてあるテーブル掛けを叩いた。すると、テーブル掛けから和、洋、中華と様々な料理が現れた。

「どうよ！この為だけに作ったグルメテーブル掛け！某ネコ型ロボットの秘密道具を完全に再現したよ！まあ、拡張領域の技術を応用してテーブル掛けの中から取り出してるだけなんだけどね」

「うおおおお！グルメテーブル掛け！最高かよ！」

「何だろう。技術の無駄遣いな気が」

「はあ?!使える技術は使い潰すのが基本だろうが！」

「落ち着け弾。まあ、自分で作った技術をどう使おうが東さんの勝手だろ」

「まあいいんじゃない？美味しそうだし」

「それじゃあ！皆食べていいよ！」

東の言葉に全員が一斉に食事を始めた。

「うん！美味しい！店出せるレベルだよ！」

「ふふん、創作料理の神と噂の津上 翔一に褒められるとこちらも鼻が高いよ」

褒める翔一に、東は少しドヤ顔まじりにそう答えた。

「うん、確かに美味しいわね！それにこの酢豚も！」

「さっすがクロエさんに東さん！料理の飲み込み早いねえ。私も流石にここまで上達してるとは思ってたよ！これはもう私追い抜かれちゃったなあ」

「そんな事ありませんよ。ステラ様の料理にはまだ敵いませんよ。何せステラ様の料理は愛情がたっぷりで尚且つ美味しいですから、まだ私は追い付きません」

にこやかに話す鈴とステラとクロエ。

「下手なファミレスより美味しいな」

「ああ、特にこのステーキの焼き加減が絶妙だ」

「ポテトうめえー！」

それぞれの感想を述べる一夏、数馬、弾。

「あの姉さんが料理……?」

「束は既に家事が出来ると言うのか?ま、まずい。相当出遅れている。それに、何故束と津上先生が話しているのを見てイライラしているんだ私は!」

小声で呟く筈と千冬。

「えつと、その……元気だった?簪ちゃん」

「う、うん。それなりに……」

「お嬢様……」

「これは気まずいね」

気まずい主人姉妹を見守る従者姉妹。

全員感想はそれぞれだが、その表情は楽しそうだった。

……

「さてと! 食事も終わったし、皆の機体のチェックでもしようか」

「束様、整備室のメインコンピュータを起動させてきます」

「うん、よろしく」

クロエはそう言い、部屋を出た。

「それじゃあ皆ISを出して」

「私達も、ですか?」

「うん、お願い。この前の無人機のデータ取りたいから」

「そうだ、束。あの無人機について分かった事はあるか?」

「え?あー、うん。でもその話はここじゃ」

「出来ない様な内容なんですか?」

「いや、こういうのはあまり多くの人に知れちゃ行けないから」

ステラの質問に、束はそれとなく返した。

「私達当事者なんだけどね」

「うっ……」

「私達も学園の生徒会として知る義務があります」

「ううっ……分かったよ。言うよ」

ステラと楯無の鋭いツツコミに折れ、束は大きなディスプレイに映

像を映し出した。

「これがあの無人機『ゴーレム』の資料だよ。元々は私のラボで研究していた無人探査用のISだったんだけど、その資料の内の五割程が何故かコピーされちゃってたんだよね。そして、その直後にIS学園の襲撃。更に、あのISの最大の特徴は「東、それ以上は言うな」……：……：……」

「どうしてですか？ どうして何も教えてくれないんですか?!」

「ここからは、最重要機密だ。例え当事者であろうと生徒会であろうと、教えられない」

「しかし!」

「これは教員として命令する。これ以上聞くな。いいな?」

「……………はい!」

「皆さん、整備室の準備が整いました」

会話に区切りが付いた所で、整備室からクロエが戻って来た。それに反応する様に、部屋に張り詰めていた重い空気は消えた。

「うん、分かった。皆、行こ?」

東の言葉に全員が従った。

……………

「だーかーらー! トランザムはダン君への負担が大きい! 時間伸ばすとか無理だから!」

そして場面は冒頭に戻る。

「だから! あれじゃあ時間も出力も足りねえの! アリーナ壊れた時だってギリギリで、下手すりゃ死人出てたんだぞ! どうせリミッター掛けてんだろ? さっさと外せよ!」

「あー! もう! 弾も我儘言わない! ただでさえピーキーな機体なんだから、そうそうリミッター外せないよ!」

「ちよつと三人とも落ち着いて!」

「そうだ五反田。お前はいいかも知れんが、守られる側は納得してないようだぞ?」

「え？」

「弾君！貴方はもう少し自分の体を気遣って下さい！」

「だから、それを言ってもらえる程「少し黙って下さい！」は、はい！」  
間髪をいれずに話す虚に、弾は流される様に聞く側になった。

「貴方はすぐ突っ走りますけど、こちらからすればただいつもヒヤヒヤしてるんですよ！心配で心配で、だから」

「あーもう分かったって！」

「何？あの二人できてるの？」

「いや、まだだよ」

「へえー。まだ、ね」

夫を心配する妻の様な虚の言葉に、楯無は二人の関係を怪しんだが、本音の「まだ」という言葉に少しニヤリとした。

「それより、気になってる事あるんですけどいいですか？」

「ん？何かな？」

「あの機体、誰の？」

「あー、あの機体ね。あれは翔一君のだよ」

「え？俺の？」

自分にはあまり関係の無いことだと思い、近くのベンチに座って本を読んでいた翔一は、突然自分の名前が呼ばれた事に驚いた。

「うん。世界に四人だけの男性操縦者なんだから、護身用に持った方がいいよ」

「いや、でも俺ISなんて一回しか触った事無いしな……」

「どんな機体なんですか？」

「うん、これはモードセレクトで武装が変わる機体だよ。まあ遠距離系は無いんだけどね」

「津上先生、あなたもIS学園の教員。持っておいて損は無いと思います」

「織斑先生……はい、分かりました！それじゃあ東さん、お願いします」

「うん！それじゃあ初期化フィッティングを始めようか。つと、その前にISスーツだね。あっちの部屋のロッカーに入ってるから着替えてきて」

「はい」

東に言われ、翔一は扉から隣の部屋に向かった。

「それじゃあ他の皆もそこら辺のハンガーにISを掛けててね。スーちゃんはギンギラちゃんを置いたら簪ちゃん連れてきて」

「はい」

それぞれ指示に従って作業を始めた。しかし、ここで三人程困っていた。

「私は何をすれば……」

専用機を持たない箒と本音、虚だった。

「虚ちゃんちよつと来て」

「どうしたんですか、たっちゃん」

「ごめん、手伝って本音」

「はいはい」

「……さて、何をするか」

「箒ー！ごめん手伝って！この荷物私一人じゃ無理っぽい！」

「っ！ああ！今行く！」

頼られた事が少しでも嬉しかったのか、箒の顔は嬉しそうだった。

「束さん、着替え終わりましたよ」

「うん、分かった。それじゃあこの子に触れて」

「……………」

トンツ

翔一は静かにISに触れると、ISと翔一は光に包まれた。光が止むと、そこには黄金の装甲を纏った翔一が立っていた。

「何だろう。初めてな気がしない」

翔一は手を閉じたり開いたりしながらそう呟いた。

「それじゃあ、名前を決めようか。何がいい？」

「……………アギト」

「どうして？」

「何でか分かんないけど、頭に浮かんだんです」

「そっか。なら初期化と最適化と一次移行を済ませようか」



.....

「ふむふむ、これは確かに学生レベルじゃ難しいね。よくここまで頑張ったね。流石スーちゃん」

「でも、やったのは殆ど簪だよ。私は簪の苦手な部分を補っただけだし」

「ほえー。今の代表候補性はレベルが高いね」

東が簪に关心する束に、ステラはデータを開きながら問いかけた。

「それでさ、この前の事なんだけど」

「うん、全然いいよ。でも武装の実践データは私じゃ無理だから、スーちゃんよろしくね」

「うん、その程度なら幾らでもいいよ」

「あの、ありがとうございます。私なんかの為に……」

「え？お礼なんていいよ。そもそも私のせいなんだし」

「でも、これだけは言いたくて……」

「……………そうだ！ねえ、かんちゃんって呼んでいい？」

「え？いいですけど」

「ありがとね。それじゃあかんちゃん。君にやって貰いたいことがあつてね」

「束さん？」

「実はこれはそこそ難易度高いんだけど、頼めるかな？」

「はい！私に出来ることならなんでも！」

「そっか、ならお願い」

「何するんですか？」

「それはねえ」

ガシャーーンッ！

「おわっ?!なにになに?!」

「うらあー！」

「たあー！」

何かが壊れる様な音が整備室に響き、その方を全員が向くと、そこには紅蓮と黄金の光が幾つもの線を描いていた。

## 混乱と出会い    T w e l f t h    E p i s o d e

「うらあー！」

「たあー！」

ステラ達が作業をしている整備室に、紅蓮と黄金の光がぶつかり合いながら壁を突き破り侵入してきた。そして二つの光が弾けると、エクスシアを纏った弾と、アギトを纏った翔一が纏れあっていた。

「え?!ちよつと何やってんの!弾!」

「津上先生!止まって下さい!」

ステラと千冬が必死で止めようと声を掛けたが、二人はもう一度能力を全開にし光になった。二つの光は纏れ合いながら開けた穴から出ていった。

「私が行きます!」

ステラはそう言って整備台に鎮座していたギンギラに飛び乗り、そのまま二人を追った。

「私も行く!」

千冬もトリガーを展開しながら走り出した。

ドゴーンツ!ギユンツ!ザシユツ!

ガキンツ!

「弾!何やってんの!」

「津上先生!止まってください!」

お互いの剣でつば競り合いをする翔一と弾の間に割って入ったステラと千冬は、それぞれの武器を展開して攻撃を受け止めた。

「何って、模擬戦だけど?どつたの?」

「どうかしたんですか?織斑先生」

「え?」

「え?」

「もー、喧嘩でもしてるのかと心配したよ〜……」

「あ、悪い」

「津上先生、教員の生徒との私闘はなるべく控えて下さい」

「すみません、はははっ……」

その後四人は整備室に戻り、弾と翔一は東に怒られていた。

「二人とも無茶し過ぎ！幾らファーストシフト二次移行の為でもやりすぎだから！」

「すみません……………」

「今回は許すけど、模擬戦は次からちゃんと私に言ってからやるように！いい?！」

「はい……………」

「ちよつとダン君聞いてる?！」

翔一は東に注意され反省する様な雰囲気になっているが、弾は先程からずつとそわそわしている様だった。

「こんなことしてる場合じゃねえ！早く、誰か俺と試合してくれ！」

「何言ってるの！弾は東さんの話聞いてたの?！」

「ふざけんなよ！聞いているわけねえだろ！」

「なに逆ギレしてるの！」

「今のままじゃダメなんだよ！もつと、もつと強くならねえと！」

「そんなの「俺がやる」え？数馬?！」

叫ぶ弾に、ステラは止めようとするが、数馬がそれを止めた。

「この際だ。専用機持ちの実力の把握の為にも、全員で模擬戦をしよう。しかし、機体の整備の為にも模擬戦は二時間後だ」

千冬も数馬の提案に乗り、模擬戦を提案した。反論しようとする者はいたが、千冬のごり押しで決定した。

……………

「さてと、初乗りの感覚はどう?！」

ギンギラを纏い、IS学園のアーリーナの様な場所に浮くステラがそう言うと、正面には新たなISがそこにはいた。

「うん、まるで今までの失敗が嘘みたい体に馴染むよ。今なら、誰にも負けないとさえ思えるよ」

「そっか」

そう答えた簪を、ステラは嬉しそうに見つめた。

「手加減はしないよ?！」

「うん。寧ろされたら困る」

「なんで?！」

「私がすぐに勝っちゃうから」

「言ってくれるじゃん」

互いに挑発しあうステラと簪だが、その顔は心の底から楽しそうだった。

「さあ、始めよう」

〈試合、開始!〉

「行くよ!」

『了解!』

「はあ!」

試合開始の合図と共に、ステラと簪は互いの武装を展開してつば競り合いを始めた。

「くっ!」

「ううっ!」

ステラの使う武器は、本来ビームを撃ち出す為の射出口からエネルギーを維持させて作る即席のビームサーベルだ。対する簪の武器は近接武器である対複合装甲用の超振動薙刀の夢現。

バチバチバチッ!

二人の剣戟を物語るように、火花が散る。そして、数分間斬り合いが続いた頃に戦いは動いた。

「うらあ!」

「くっ!はあ!」

二人は互いを弾き飛ばして、そのまま遠距離武器を展開した。ステラはそのままビームガン。そして簪は背中に搭載された2門の連射型荷電粒子砲、春雷。

「はああ!」

「いけえ!」

ドンッ!

二人の撃ち出したエネルギーが衝突し、爆発が起こった。

『マスター、来ます!』

「っ?!」

ドーーーーンッ!

爆発で生じた煙を、数発のそれぞれ別に稼動するミサイルが突っ切ってステラを襲った。

「あつぶなく。もう少し遅れてたら直撃だったよ」

ステラはギリギリのタイミングでバリアを張っていた。

「それが、山嵐なんだね」

山嵐。それは打鉄式式の最大武装。第3世代技術のマルチロツクオン・システムによって6機×8門のミサイルポッドから最大48発の独立稼動型誘導ミサイルを発射する。そして束の手によりリロード機能が大幅に強化され、拡張領域を大量に消費する代わりに10回分のミサイルを乗せた事により山嵐は本来より格段に進化している。「いくらステラでも、これは避けられないでしょ?」

そう言つて簪はすべてのミサイルポッドを開いた。

「こ、これは流石に拙い…」

『……マスターはエクササーマルを高める事に集中して下さい。回避と防御は私がやります』

「わかった。お願い!」

『はい!』

ステラは狙われる方向を減らすために、地面スレスレに降りてそこから機体コントロールをギンギラに委ね、目を閉じた。

「いつけええ!」

簪の叫びと共に、ミサイルポッドからミサイルが連続で発射された。その数は144発。

『くっ!はっ!』

ギンギラは掠りながらも全てのミサイルを避けていた。

「まだ、もう少し…」

ドーンッ!ドーンッ!

「まだ、足りないっ!」

ドーンッ!ドカーンッ!

『マスター!』

「っ!行ける!」

その声を聞いて、ギンギラは立ち止まってリングを前に突き出し

た。

『サーマル、キャノン！』

ステラ達の放ったサーマルキャノンは迫り来るミサイルを破壊しながら進み、簀に直撃した。

「きやああああああ！」

シールドエネルギーが尽きてISが解除された。

「つとー大丈夫？簀」

空中に投げ出された簀をお姫様抱っこの様な形で受け止めると、簀は笑いながら答えた。

「うん、大丈夫。ステラは強いね」

「えへへ／＼／＼ありがとう」

そしてステラと簀は楽しそうに話しながらピットに戻った。

混乱と出会い    T h i r t e e n    E p i s o d e

「次は私達ね」

「その様ですわね」

ステラ達の戦いを見ていた鈴とセシリアはそう言いながらカタパルトに立った。

「凰 鈴音、甲龍！行くわよ！」

「セシリア・オルコット、ブルーティアーズ！行きますわ！」

二人の声と共にカタパルトはレールの上を滑り、二人をアリーナへと解き放った。

「手加減しないから」

「無論ですわ」

〈試合、開始！〉

「はあ！」

「やはりそう来ますか！」

試合開始の合図が聞こえると、鈴は双天牙月を展開して真っ先にセシリアに突っ込んだ。それを予測していたセシリアはスターライト Mk-IIIを展開しながら距離をとった。

「遅い遅い！」

鈴は龍砲でセシリアを狙い撃つが、セシリアはそれを縦横無尽に機動することで当たる回数を最低限に収めていた。

「今ですわ！」

セシリアはいつの間にか飛ばしていたビットを甲龍に向けた。

「チッ！危ないわね」

鈴はそれをギリギリで回避して上に飛び上がったが、セシリアは既にその位置に銃口を向けていた。

「終わりですわ！」

「っ?!」

鈴が気付いた時には既にビームがそこまで迫っていた。

「くっ！仕方ない！」

鈴はそう言うのとビームに向かって龍砲を最大出力で放った。二つのエネルギーはぶつかり合って相殺されたが、エネルギーの衝突地点が近すぎた為にダメージを負った。

「もう少しで、やられる所だった…やるわね」

「まさかエネルギーを衝突させて相殺するなんて。流石ですわ、鈴さん」

「はっ、澄ました顔で、言っつて、くれんじやない」

息切れを起こす鈴をセシリアは余裕の表情で見ていたが、内心は驚いていた。

（あの一瞬であの判断を下すのは非常に困難ですわ。しかし、鈴さんは特に誇る様子もありませんし。あれが野生の勘というものです？）

「なにボーっとしてんのよ！」

「っ！」

鈴は考えに浸るセシリアに二つを連結させた双天牙月を投げた。

「しかし、その程度なら！」

セシリアがそれを避けると、機体からロックオンされている事を警告するアラームが響いた。

「さっきの、お返しよ！」

「くっ！ティアーズ！」

先程とは逆の立場になり、セシリアは苦い顔をしながらビットを四つ前に出して盾にした。

「これであんたの戦力は大幅に落ちたわね」

鈴の言葉に、セシリアは下唇を噛んだ。

（確かにそうですわ。鈴さんは装甲へのダメージはあるものの、武装は全て使える状態。私はビットを四つ失い、インターセプターは使えますが近接格闘では鈴さんには敵いませんわ。つまり…）

「絶体絶命ですわ…」

「これで終わりよ！」

鈴はそう言うのと双天牙月を二本に分けて投げた。



「その手ならもう食らいませんわ!」

セシリアは飛んできた一本目の双天牙月をスターライトMkⅢの側面ですべらせる様にして受け流し、次に飛んできた方はビームを撃ち弾いた。

「まだまだ!」

鈴は弾かれた双天牙月を掴み龍砲を撃ちながら全速力でセシリアに迫った。

「どこを狙っていますの?」

しかし鈴の撃った龍砲は明後日の方向に向き、セシリアの後方で衝突音が響く。

ガキンツ!

「?」

突然響いた金属音を聞き、後ろを振り向くと。

「なっ?!」

そこには、急速で回転しながら迫る弾いたはずの双天牙月があった。

「くっ!」

セシリアはそれを受け流す事で回避した。そして、次にセシリアの目に映ったのは。

「うらあー!」

二本の双天牙月を振り下ろす鈴の姿だった。

.....

「中々いい動きだったぞ。特に最後の決め手は見事だった」

「あ、ありがとうございます!」

ピットに戻った鈴を待っていたのは世界最強からの賛美の言葉だった。

「本当にお見事でしたわ。最後のはどうやってやったのか、今でも分かりませんわ」

「ああ、ええとあれは...」

「まずは壁を龍砲で深く凹ませる。そしてそこに向かって双天牙月を投げつけて、出力を抑えた龍砲をそこに撃ち続ける事で生まれる空気の流れを使うんだよ。その空気に乗って双天牙月が動いて、そっちに気をとられた相手に攻撃するっていうのがさっきの戦いで使った戦法、だよな?」

「え?あ、ああうんうんそうそう!」

「なるほど。そういう使い方もあるのか」

鈴が説明に戸惑っている所に、いつの間にかピットに入っていたステラが補足し、束が納得したように頷きながら歩いてきた。

「どうだ束。私の生徒は」

「うん。状況判断能力も高いし、それを活かすための反射神経とかもすっかり付いてる。そしてなにより、ISとの適合率が高い」

束の言葉に、セシリアと鈴は首を傾げた。

「私のISの適正はAですので、普通の代表候補生でもこのくらいは多くいますわよ?」

「私もAです」

「ああ、そうじゃなくて。コア自体との適合ね」

「コア自体との適合?」

聞きなれない言葉に、セシリアと鈴は再び首を傾げた。

「うん。コアには自我にも似たものがあるのは知ってるよね?」

「はい」

「勿論ですわ」

「つまりは、コアとどれだけ仲が良いかって事なんだよ。ISが気に入らなければ本来の力は発揮されないし、ISが認めれば必然的に力は通常を遥かに凌ぐ物となるんだよ」

「そんなシステムが」

「全く知りませんでした」

「そりやそうだよ。ここでしか言っていないもん」

「おーい。準備出来たぞー!」

「あー、はいはい。ちよっと待ってね」

カタパルトに乗った弾に言われ、束は端末を操作して弾をアリーナ

へと運び出した。

「出たか」

「あれ、数馬？弾と戦うんじゃないの？」

「そのつもりだったんだがな」

「おい、束。お前が呼んだのか？」

「うん」

「そうか」

「え？なんでここに?！」

全員が見つめるモニターに映る弾の正面に立つ人物。それはその場の殆どが見知った人物だった。

「……………母さん」

「少し久しぶりね。弾」

弾の母親、蓮だった。

「なんで母さんがここに？」

「分かってるでしょ？それでも聞くあたり、純に似てきたわね」

「さあな。皆目検討もつかねえよ」

「まあいいわ。私が勝手に理解しておくから」

蓮はそう言いながら、ポケットからトリガーを取り出した。

「ええ?!なんで蓮さんがトリガーを?!」

「トリガー、オン」

スピーカーから響くステラの声を他所に、蓮はトリガーを起動させた。

「いくら母さんでも手加減しねえからな。俺にも譲れねえ物がある」

「ふふっ、そもそも勝てると思ってるの？」

「速攻で終わらせてやるよ!」

弾は瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速で蓮に近付き、そのままの勢いでGNソードを振り下ろした。

「甘いわね」

蓮は余裕でその攻撃を手に持ったスコーピオンで受け止めた。

「チッ!」

弾は舌打ちをしながらなぎ払うようにGNブレードを振るった。

「感情的になって勝てるほど、私もアイツも甘くないわよ?」

「そんな事、分かってんだよ!」

「いえ、分かってないわ」

「っ?!」

先程まで地面にいた筈の蓮が目の前に現れた事に、弾は驚愕した。

.....

その頃、ピットでは。

「流石れーちゃん。もう完全にトリガーを使いこなしてるよ」

「ああ」

「そんなことより東さん! いい加減に教えて下さい! なんで蓮さんがトリガーを持つてるんですか?!」

「篠ノ之博士。そもそもトリガーとはなんですか?」

「ていうか何で蓮さんがいる」

「ああもう! 私聖徳太子じゃないんだから一斉に聞かないで!」

三人の質問攻めに、東は後ずさりした。

「とりあえずトリガーについて説明するね。トリガーは私の作った擬似ISコアを埋め込んだシステムの総称だよ。今は研究用の三本と実戦用の二本の五本しかないけど、使い手によつてはISをも上回るよ」

「使い手によつては?」

「本来のスペックはISには劣るんだよ。所詮擬似的な物だからね」

東の言葉に、楯無は疑問を抱いた。

「何故擬似的なのですか? ISのコアは篠ノ之博士が作ったのですから、完璧な物を作ればいいじゃないですか」

「そ、それは...」

東は楯無の言葉に口籠った。

「更識姉。その事は後でだ。ここでは耳が多すぎる」

「そうですね」

「さて、次はスーちゃんだね。れーちゃんのトリガーは私が渡したん

だよ。理由は言えない」

「どうして!」

「それが約束だから。いくらスーちゃんでも、教えられない」

「…分かりました」

ステラは無理矢理に自分を納得させた。それを見ると、東は数馬の方を向いた。

「さて、次はカズ君だね」

「いや、俺はいい。あの戦いを見たらなんとなく分かってきた」

「そっか」

数馬の言葉に全員がモニターを見ると、既に決着がついていた。

.....

「はあ…」

東島の西側。夜の草原に、弾は寝転び星空を睨んでいた。

「勝てなかった」

「なに黄昏てんだよ」

「数馬?」

寝転ぶ弾に声をかけたのは、湯気の立つコーヒーを持った数馬だった。

「なに焦ってんだよ」

そう言いながら数馬は弾の隣に腰を下ろした。

「……やっぱ数馬には隠せねえか」

「当たり前だろ。何年親友してると思ってる」

「そりゃそうか」

弾は笑いながら答えたが、すぐにまた先程の表情に戻った。

「ステラが始めて俺の家に来た日覚えてるか?」

「ああ。それがどうした?」

「あの日、母さんが束さんに電話してるの聞いたんだよ。その時、母さんは殺すって言った。そして、電話が終わった後に父さんの名前を呟いたんだよ。それに毎年父さんの命日になると必ず何かを恨む様

な顔をするんだよ。これってつまり」

「殺されたって言いたいのか？」

「……ああ」

数馬の言葉に、弾は悲しそうに答えた。

「だから、母さんはソイツに復讐しようとしてるんだと思うと、止めたくて……でも、母さんの復讐心はもう止められないって分かった。だから、母さんがソイツを殺す前に俺が殺す」

「やめとけ。お前には無理だ」

「かもな」

「だが、お前が決めたんだろ？なら好きにしろ」

「いいのかよ」

「その時の気分次第だ……お前は俺が死なせない」

「ははっ、心強いこった」

弾はそう言い、拳を突き出した。数馬も無言で突き出し、互いの拳をぶつけた。

そして、夜空に不自然に赤黒い星が煌いているのに、二人はまだ気付いていなかった。

混乱と出会い    F o u r t e e n t h    E p i s o  
d e

「一夏、こんな物か？」

「まだまだ！」

「攻撃が甘い！突っ込むだけなら猪でもできるぞ！箒は前に出過ぎだ！もっと二人の呼吸を合わせる様にしろ！」

「はい！」

日曜日。ステラ達が東島に来て二日目。アリーナには白式を纏った一夏と打鉄を纏った箒が千冬と模擬戦をしていた。

「旋空弧月！」

「ぐあ?!」

「一夏?!くっ！」

「はあ！」

「がっ?!」

ビーーーーッ！

〈試合終了！勝者、ちーちゃん！皆お疲れ。そろそろ休憩にしようか。丁度スーちゃんのご飯が出来たみたいだし〉

「ああ、そうだな」

東のアナウンスを聞いた千冬はトリガーを、解除してアリーナを後にした。

「強すぎるだろ……」

「勝てる気が全くしない……だが千冬さんにもなにか隙がある筈だ。次こそはそれを見つけて私達が勝つぞ」

「おう。そうだな」

二人はその後も談笑しながらダイニングへと向かった。

.....

「」「いただきます（！）」「」

東島にいる全員が揃った食卓はとても賑わっていた。しかし、その場に蓮は居なかった。

「簪ちゃん、後で模擬戦しない?」

「いいよ。私もお姉ちゃんと戦ってみたかったし」

簪と楯無は、食事をしながら仲睦まじそうに会話をしていた。

「あの二人いい雰囲気だね」

「ええ、そうね」

そんなふたりを見つめるのは、二人の従者である虚と本音だった。

「なあステラ。俺らの動きってどこら辺が悪かったんだ?」

「千冬さんに勝つ為にも、教えてくれないか?」

「うーん、悪いところか。一夏は動きが単調過ぎる事かな。攻撃と攻撃の間のリズムもバラバラで、あれじゃあ技が繋がらないのも仕方ないよね」

「うっ……………」

「箒は近接武器にこだわり過ぎ。もっと柔軟な戦い方しないと、千冬さんには勝てないよ」

「そ、それは……………」

ステラの遠慮の無い言葉に、一夏と箒は怯んだ。

「千冬さんにはグラスホッパー以外に空中戦闘の手段がないっていうアドバンテージもあるけど、旋空弧月があるから千冬さんには殆ど関係ないし」

「どうすりゃいいんだ?」

「んー、一夏はもう少し相手との間合いの把握と攻撃のリズムを整える事かな。箒は射撃武器も扱える様にしようか。剣の道にこだわってるのもありだけど、それじゃあいざって時に困るよ?」

「分かった。しかし、射撃武器となると誰に教わればいいんだ?」

「それなら私が致しますわ」

向かいの席からの声に三人はそちらを向いた。

「セシリアか。ありがとう、昼一番でもいいか?」

「ええ、構いませんよ」

「そうになると、俺って誰に教わればいいんだ?」



「鈴なんてどう？」

「鈴か？でもアイツ完全な感覚派じゃん」

「そうだけど、模擬戦繰り返し返してれば何か見えてくるかもよ？鈴は戦いのリズムはいいし」

「呼んだ？」

二人の会話に反応したのか、鈴がこちらを向いた。

「あのさ、一夏と模擬戦してくれない？」

「え？」

（こ、これはまさかステラが私の為に、ステラが用意してくれたイベント？なら！）

「やってやるじゃないの！私が徹底的に鍛えてやるわよ！」

「お、おう！」

やる気満々になった鈴に釣られて、一夏も勢い良く返事をした。鈴はステラに感謝しつつ午後の事に思いを馳せた。そしてステラは、（なんか鈴いつにも増してやる気だなあ。何か良い事あったのかな？）

無自覚だった。

「なら、ステラは私とやろう」

「いいんですか?!やった！今度こそ勝ちますよ！」

「ふふつ、そう簡単にはいかないぞ」

笑顔で話す各々を見て弾は数馬と翔一を見た。

「俺らでやるか」

「だな」

「それしかないね」

それから十数分。食事は終わり、それぞれの準備に入った。

.....

S a i d 一夏&鈴

「うらああああ！」

「だあああああ！」

ガキンツ!

「だんだんと、掴んできたじゃない!」

「そりやどうも!」

それぞれの武器を構えて戦う一夏と鈴。ただぶつかり合うだけに見えるが、アリーナに出来たクレーターや傷がその戦いの激しさを物語っていた。

「そろそろ次のステップ行こうか!」

「くっ!らああっ!ぐあ?!」

(あの技の感覚なら残ってる。あれが決まれば!)

「はあ!」

鈴は双天牙月を投げて、龍咆の照準を合わせた。

「ちいつ!」

(掛かった!)

一夏の動いた方向に龍咆を撃った。

「っ!それなら、さつき見たんだよ!」

「なっ?!」

一夏は見えないはずの龍咆を避けると、イグニッションブースト瞬時加速で急接近すると、雪片式型を振り下ろした。

「それはもつと見たわよ!」

鈴は分かっていたかのように、いや、分かっていたのだ。なんと一夏の突進を見たことか。鈴はギリギリでそれを避けると、双天牙月を回収しながら龍咆を撃った。

「くそっ!」

一夏はもう一度イグニッションブースト瞬時加速を使おうとした。だが、何か妙な感覚を覚えそれを止めた。

「なあ、鈴。何か感じないか?」

「何よ、時間稼ぎのつもり?」

「違うって!なんていうか、こう、肌がピリピリするみたいな」

「知らないわよ!とにかく今は」

ドカアーーーーーン!!

鈴の言葉を遮る様に、それは降って来た。

「な、なんだ?!」

そこには、黒い体に赤いラインの入った機体がいた。

「ギンギラ? いや、違う! お前誰だよ!」

「やあ、織斑一夏。一応は初めましてだね」

「一夏逃げて!」

「っ?!」

鈴の叫びと、ロックオンの警告は同時に一夏の耳に響いた。

S a i d   E n d

.....

S a i d   箒&セシリア

「箒さん、もう少し脇を締めて」

「こうか?」

「そう、その構えですわ。その銃『焰備』はアサルトライフルタイプの中でも命中精度等が高く人気の武装ですが、持ち方等がしつかりしていないと反動に負けて命中精度が格段に落ちてしまいますわ」

「そうなのか? なら気を付けないとな」

セシリアの指導の下で重火器の基本を教わる箒。その表情は真剣その物だった。

「一旦休憩にしましょうか」

「ん? ああ、分かった」

二人はISを解除してベンチに腰掛けた。

「そういえば、箒さんの剣の腕はどこで磨かれたのですか?」

「え?」

セシリアの急な問いに少し戸惑った箒だったが、すぐに落ち着いて話し出した。

「祖父が道場を開いていてな。そこで鍛えたんだ。まあ、今は要人保護プログラムによって道場はやっていないし、祖父とも離れ離れなのだがな」

「そ、それは……すみません。そこまで気が回らずに」

「いいんだ。まあ、そのことで姉さんの事を一方的に嫌い、避けるようになったのは事実だ。あんなに思っていてくれたというのにな」

「箒さん……………」

「さあ、こんな暗い話はお終いだ。訓練を再開しないか？」

「ええ、分かりましたわ」

二人は立ち上がると、ISを展開した。

ビービービー！

「っ?!なんだ!」

「箒さん、緊急事態ですわ。一夏さん達のアリーナに謎のISが現れましたわ」

「ならば私も!」

「いえ、箒さんは連れて行けません」

「何故だ!」

セシリアの言葉に、箒は苛立った様な声を上げた。

「箒さんはあくまでも一般人ですわ。貴方は来てはいけませんわ」

「しかし!」

「足手まといになるつもりですの?!」

「でも!……………分かった」

「それで良いですわ。とにかく避難して下さい」

セシリアは箒にそう告げるとアリーナを飛び出した。

「くっ……………!」

誰も居なくなったアリーナで、箒は静かに唇を噛んだ。

S a i d   E n d

……………

S a i d   ステラ&千冬

「また負けたく……………」

「だが、一戦ごとに確実に腕は上がっているぞ」

「そうかな」

「私が言うんだ。自信を持って」

「それを勝った人に言われても…」

ステラは愚痴の様に言いながらも、戦った時に感じた高揚感に疑問を抱いていた。

(私、そんなに戦いが好きって訳でも無いんだけどな。なんであんなに興奮してたんだろう?)

「どうした?」

「え? ああ、いやなんでも無いです」

ステラの変な返しに首を傾げる千冬だったが、束から入った連絡に表情を変えた。

「ステラ、緊急事態だ。一夏達のアリーナに行くぞ」

「っ?! 襲撃ですか?」

「ああ。敵は正体不明だ。アンソウン 気を引き締めて行くぞ」

「はい!」

ステラと千冬は全速力で一夏達のいるアリーナに急行した。

S a i d   E n d

.....

S a i d   弾&数馬&翔一

「まあ、とは言ったものの」

「する事なんて」

「無いよね」

三人はアリーナのピットでくつろいでいた。

「模擬戦は何度もしたしな。さてと、どうするか」

「ゲームでもしね?」

「えー? 俺苦手だよ?」

ドカアーーーーー!!

「おわ?!」

不意に起こった爆発に、弾は椅子から転げた。

「なんだ!」

「っ?! 不味いぞ! 隣のアリーナで襲撃が起こった!」

「弾！お前のトランザムならすぐだろ！先に行け！」

「了解！」

ギョーンッ！

弾は瞬時にエクシアを展開して赤い光を纏い、空気を切り裂きながら飛んだ。

「さあ、俺達も行こうか！」

「ああー！」

残った二人もISを展開してピットを飛び出した。

.....

s a i d V S ???

「ぐあ?!」

「ぎゃあ?!」

赤い光に弾き飛ばされた一夏と鈴はアリーナに更なるクレーターを作っていた。

「はははっ！その程度かい？」

「くっそ！このお！」

「その勢い、あの時の千冬にソックリだよ！」

「うおおー！」

勢いに任せて雪片式型を振る一夏。だが謎の『男』はその攻撃を普通に片手で受け止めた。

「それでも君は彼女程の力は無い。やはり失敗作か」

ギョーンッ……ドンッ！

「があ?!」

ゼロ距離で放たれたエネルギーに、一夏は吹き飛んだ。

「そこまでだ！その場で止まれ！」

「ん?」

男が振り返ると、そこには専用機持ち全員が集まっていた。

「なんのつもりかは知らんが、今すぐ武装を「やあ、千冬じゃないか！」

……………何?き、貴様は！」

「久しぶりだねえ。お？そこに居るのは彼らの？大きくなったねえ！」

「黙れ！何故だ。何故貴様がここに！」

千冬の鬼の様な形相に専用機持ち達は驚愕した。しかし千冬は男を睨む事を止めずに、そのまま男の名を叫んだ。

「デストロ・デマイド！」

混乱と出会い      F i f t e e n t h      E p i s o d

e

「何故貴様がここにいる！デストロ・デマイド！」

千冬の怒鳴り声アリーナに響く。

「なに、少し昔の友に会いに来ただけさ」

「誰が貴様など！」

千冬はデストロを睨みながら叫んだ。

「酷いなあ。僕が君に何をしようんだい？」

「確かに、私には何も大したことはしていない。だがお前は！束の夢を汚し！多くの儂い命を奪い！壮吉と純を殺した！」

「え？」

「そいつが、親父を？」

「はっ?!」

千冬は我に返り後ろを振り向いた。

「そいつが父さんを殺したのか？」

「ち、ちが「そうだよ」っ！デストロ貴様！」

「僕が君達の父親を殺した」

「そうか」

「教えてくれてありがとよ」

数馬と弾はデストロを睨みながら言うと、一歩前に出た。

「待て！そいつは私が倒す！」

「何言ってるんですか？」

「コイツは俺達が殺る」

「かかってきなよ。まあ、勝敗は目に見えてるけどね」

「行くぞ弾！」

「おう！」

デストロの言葉を区切りに、二人は突っ込んだ。

「トランザム！」

「サイクロン！ジョーカー！」



二人は機体の能力を発動させながらデストロ目掛けて襲い掛かった。その様子を見てギンギラとステラは驚愕していた。

「ねえ、ギンギラ。あれって…」

『ええ。少し形状等は変わっていますが、あれは紛れも無くブレンと私が戦ったゼニスです』

「そう、だよな？ならなんでこんな所に？あれはあの戦いで破壊された筈じゃ？」

『あの威力ならばほぼ確実に破壊している筈です。しかし、ゼニスの残骸は発見されても、本体はどこにも見当たりませんでした。つまり』

「私達と、同じ？」

ギンギラの言葉に、ステラは信じられないように聞いた。

『可能性は大いにあります。しかし、彼は見覚えがありません』

「そうだね。EDN-3rdの人でもなさそうだけど」

『今は戦闘に集中しましょう』

「うん」

ギンギラはそこでステラとの会話を終えたが、思考の中では未だに先程の事を考えていた。

『(マスターにはこう言いましたが、デストロ・デマイドという名前は以前千冬さんの話の中に出てきた人物と同じ。同姓同名とは考えづらい。つまりは彼が束さん達を騙し、ISの技術を盗んだ犯人……)』

「何してるのギンギラ！反応遅れてるよ！」

『っ！すみません』

ステラの言葉にはっとしたギンギラは、急ぎ戦闘に集中した。

ガキンッ！

「ぐあっ！」

ガコンッ！

「がはっ！」

ギンギラが戦闘に意識を戻したのと数馬達が吹き飛ばされたのは同時だった。

「全員下がれ。コイツは私が倒す」

「でも！」

『でも』ではない！足手まといだと言っているんだ！」

千冬の今まで見たことの無い様な剣幕に、全員がたじろいだ。

「さあ、勝負だデストロ」

「ふっ、そんな未完成な物で僕に勝てるとても？」

「勝つき。完全に、真正面から！」

そう言うのと千冬は弧月を二本とも抜刀して斬りかかる。

「はあ！」

「はははっ！相変わらずのスピードだね！でもそれじゃあゼニスに勝てない事は君が一番分かっているだろう？」

「旋空弧月！」

ブンッ！

「うおっと！危ない危ない。こんな隠し玉があるなんてね」

「ちっ！」

わざとらしく大げさに振る舞うデストロに腹が立ち、千冬の剣戟は更に加速し鋭くなっていく。

「くっそ！」

しかし、デストロには一撃も当たらずに弧月の刃は常に空を斬っていた。

「トリガー、オン！」

突如響いた声に、デストロを含めた全員が上を見上げた。

「見つけた。デストロオオオー！！」

上空から急降下して来るのは、トリガーを起動させてスコープオンを二本構えた蓮だった。

「くっ！」

今まで余裕だったデストロの表情が、蓮の一撃で崩れた。

「まさか、君も居るとはね。ある意味で千冬より厄介だ」

「純の仇よ。今ここで殺す」

「無理だね。そもそも君はそんなに力は」

バンバンバンッ！

「ぐっ?!」

デストロは突如腕に重量感を感じた。デストロは腕を見るとそこには鉛色の重石が機体から生える様な形でくっついていた。

「こ、これは？」

「これで終わり！」

蓮はその言葉と共に一瞬で加速した。しかし、デストロは表情を一変させて邪悪ににやけた。

「蓮やめろ！毘だ！」

「っ?!」

千冬の声でその事に気付いた蓮だったが、既にデストロの間合いに入っていた。

「残念。ゲームオーバーだ」

デストロは重石が付いていない方の手を蓮に向けて赤黒い光弾を放った。

「蓮さん！」

その事にいち早く気が付いたのはステラだった。トリガーが解除された蓮が爆煙の中から弾かれた様に飛んできたのを受け止めて千冬に引き渡すと、ステラはデストロを睨んだ。

「正直、貴方が何者かだなんてこの際どうでもいい。貴方には聞かなければならない事があるけど、それもどうでも良くなった。でも、一つだけどうでもいいで済ませれない事がある」

そう言つてステラは目を閉じて、ゆっくりと開いた。するとステラの瞳の青かった部分が真っ赤に染まっていた。

「お前が、私の大切な人を傷付けた事だ！」

ステラの豹変ぶりに多くの者は驚いたが、中学の頃からステラを知る者達は焦り、動揺した。

『マスター！いけません！』

「ステラ！ダメ！」

「はあああああ！」

「リミットブレイク！」

ズドンッ！

ステラの叫びと共に、ギンギラから放出されていた光が強くなっ

た。

「うらあ！」

「くっ、はあ！」

ガキンツ！

アリーナの中心で、ギンギラとゼニスの拳がぶつかり合う。

「オラツ！ダラア！」

「グツ！なんだこのスピードとパワーは！」

「喰らえ！」

「ちっ！はああ！」

ギユンツ！

「ラア！」

デストロの放った光弾をステラは殴り打ち消した。

「計算外だ！こんなの！………仕方がない」

「ブースト！」

デストロの叫びと共に、ゼニスから放出されていた光が強くなった。先程のギンギラと同じ様に。

「サーマル！」

ステラはリングを前へと配置し、拳を腰の辺りに構えた。

「オメガ！」

対するデストロは両手を肩の高さまで上げた。

「キャノーーンツ！」

ステラは拳を突き出して最大の技、サーマルキャノン放った。その威力はいつもの倍以上だった。

「シューーンツ！」

デストロは両手を突き出し、赤黒いエネルギーを撃ち出した。

ぶつかり合う黄と赤の光。その威力は互角で、拮抗したまま動かなかった。

「ここは引くのが身の為か」

デストロはそう言うと、全速力で戦闘中域から離脱した。

それを確認したステラは、サーマルキャノンを撃つのを止めた。

「待て！逃げんのか！私と戦えー！」

ステラの叫びはアリーナに木霊した。

「うっ！」

ステラは急に苦しみだし、倒れた。状況に取り残されていた者達は辺りを見回した。

サーマルキャノンの熱量により溶けて穴の開いた壁。所々に出来たクレーター。まだ十五歳の少年少女達にはその光景があまりにもショッキング過ぎた。

その後、東の指示で一同はステラを運んだ後にリビングに集まった。

混乱と出会い    Sixteenth Episode

「東、ステラの容体はどうだ？」

「まだ目が覚めないよ」

「そうか」

リビングの隣の簡易医務室で、数馬、弾、蓮、ステラがベットに横たわっていた。しかし、ステラだけが依然として目を覚まさず、数馬と弾も一度起きたらすぐに模擬戦をしに行ってしまった。

「これで二度目だな」

「うん。一度目も二度目も大切な人が傷付けられた事によりスーちゃんが怒りを見せた時に発動している」

「ステラにとっては、自分より他人の方が大切なんだな」

「そうだね。私には真似出来ないよ」

ステラの頬を撫でながら言う千冬に、東は苦笑混じりに答えた。

「ねえ、千冬。貴方達は知っているんでしょう？ステラちゃんのさつきの状態の事を」

「ああ、知っている。お前にトリガーを渡した日が、私たちの中では最初だ」

「そう。あの日なのね」

蓮は少し考えた後に、再度千冬を見た。

「私にも教えて。ステラちゃんのあれがなんなのか」

「……………良いだろう」

『ならば私から話します』

「ああ、頼む」

ギンギラの声を聞いた千冬は、ディスプレイを付けて蓮の隣に立った。

『ありがとうございます。それでは話す前に蓮さんをお願いします。この話を聞いても、決してマスターの事を特別視や、軽蔑をしないで下さい』

「当たり前でしょ？する訳無いじゃない」  
『わかりました。それでは話しましょう。私の前マスターとマスター  
のここではない星の出会いの話を』

.....

「お父さーん！」

開いた扉から一人の少女が飛び出してきた。

「おお、ステラ！いい子にしてたか？」

ステラと呼ばれた白髪の少女は、抱きつきながら男の顔を見上げた。  
た。

「うん！あのね、私今日いっぱいお花摘んできたの！あとでお父さん  
にも見せてあげるね」

「おう！」

「おかえり、ブレン」

「ただいま、ティキ」

ブレンと呼ばれた男とティキと呼ばれた女は、互いに微笑みながら  
挨拶を交わした。

「ねえねえお母さん！今日のご飯何？」

「ハンバーグよ」

「わーい！私ハンバーグ大好き！早く食べよ！」

ステラはそう言いながら食卓に走っていった。

「あーもう、ステラ！廊下は走っちゃダメよ！」

「だっってお母さんの料理早く食べたいもん！」

「それは嬉しいけど、廊下は走っちゃダメ」

「もー！お母さんのケチ！」

なんだかんだあつて、三人は食事を済ませた。そしてステラは少し  
遊んだ後に、疲れて眠りについた。

「ステラ、寝たか？」

「ええ、ぐっすりと」

「そっか.....そういえばウォルター教官が、ステラは俺達に任せ

るってさ」

「そうなの？なら安心ね」

二人はいつしか暗い顔になっていた。

「あれから三年か……」

「そうね。あの事件から、三年」

.....

「おい！待て！」

警報音の鳴り響く研究施設で、ブレンは白衣の男を追いかけた。

「くそ！何故この場所が分かった！NEVECC！」

「教えねえ、よ！」

ブレンは男を蹴り上げて気絶させ拘束し、次に研究の資料を拾い始めた。

「うつわ、まさに外道だな………ん？」

ブレンがふと横を見ると、そこには一つの大きな水槽の様な物があった。そしてその水槽は黄緑色の液体に満たされていた。

「なんだ？また人口のエイクリッドか？………っ?!」

その水槽には、一人の小さい赤子が入っていた。

「くくくつ、驚いたかい？それは私が作った人型人工生命体『エクストイド』さ。人工的にエクストルーパーを作る研究の一環でね」

「ふざけんな！人の命をなんだと思っやがる！」

ブレンは男を睨みながら胸倉を掴んだ。

「ただの研究材料さ。どれだけ手っ取り早く『奴』に近づく為のね」  
「奴？」

「君は疑問に思った事は無いかい？そもそもサーマルエナジーTINGはどこから来たのか。その答えがその画面に映っているよ」

「あ？………嘘だろ？」

ブレンは男の言葉を聞いて画面を見ると、そこにはとあるデータが記されていた。



「嘘じゃないさ。そこに書かれているのは紛れも無い事実さ」

ガタンツッ！ドカアーンツッ！

「なんだ！」

「自爆プログラムさ。そしてこれが起動したと言う事は、アイツはもう脱出したようだな」

「アイツって誰だ！」

男の先程からの濁す様な言い方に、ブレンは苛立ちを隠せなかった。

「なに、私の後継者さ。それよりいいのかい？このままここにいても、君は死ぬぞ？」

「くっ！………なあ、あの子は本当になんなんだ？」

「体の構造は限りなく人間に近い。アレは君と雪賊の大女神の細胞から作った、ある意味君達の子供さ」

「そうか。なら、連れて帰らせてもらおう」

「いいのか？確かに人として育てる事は可能だ。アレには何の知識も記憶も無いからな。だが、いつかアレが成長すれば自ら気付くだろう。そして感情の爆発でアレは覚醒する。それが君に止められるのか？」

男の言葉に、ブレンは静かに男を見下ろした。

「分からねえよ。でも、俺が近くにいる限り止める。もし俺らが居なかったら、その時はあの子に友達が出来てる時だろうな。そして、友達がいればその友達が止めてくれる筈だ」

「確率は100%では無いのだろう？ならばやめておいた方が「うるせえよ」ん？」

「それを決めるのはお前じゃねえよ。『この子』だ」

ブレンはそう言って水槽を持ち上げた。

「ならば黄泉の国で見ていよう。ソレの決断とやらをね」

そしてブレンは水槽を抱えて、爆煙が充満した研究施設を脱出した。

……………

「あれから三年。あの子は三歳になって、人として生きている」  
「何も知らずに、ね」

ブレンの表情は、どこか罪悪感の様なものを感じている様な表情だった。

「本当に良かったのか？あの子がもし真実を知って傷付いた時、『父親』として何を言えればいい？」

「ブレン……」

「まだ頭に残ってたんだ。あの日のあの男の言葉が」

次にブレンが見せた表情は、悲しそうな表情だった。

「……………確かにこの子は兵器として生まれたかもしれない。けど、生まれと育ちは関係無いでしょ？大事なものは、この子がどう生きるか、でしょ？」

「そう、だな」

「きつとこの子は今後色々な困難に襲われるかもしれない。けど、その時はきつとこの子の周りには『皆』みたいな友達で溢れてる筈。だから、信じよう？」

「皆？あー、センパイ君とかクーリスとかか。なら安心だな！」

「ふふっ、そうね」

「さてと、それじゃあ寝るか！」

「うん、そうしましょう」

……………

『以上が、マスターの真実です』

「そう。つまりステラちゃんは、あの子達と同じなのね」

「ああ。だから私達には守る義務がある」

「デストロが作ったあの子達と、EDN—3rdで作られたスーちゃん。二つの存在を」

会話が途切れ、医務室には重苦しい空気が流れた。

「私、少し焦りすぎてたかも」

「蓮？」

「私の力はまだ千冬にも遠く及ばない。なのにデストロに勝てる訳もないわね」

「確かに、れーちゃんは焦ってるかもしれない。けど、強くはなってると思うよ。だって、あんなに攻撃を正確に当ててたじゃん」

『ただ、まだ実戦経験が少なかつただけです。まだ強くなれます』

「三人とも、ありがとう。ゆっくりとまた始めるわ」

今まで復讐に燃えていた蓮の言葉に、三人は安堵した。

.....

「弾君はトランザム状態になると動きが直線的になるのよ。それは一夏君の瞬時加速イグニッションブースト中にも言える事よ」

「なる程、直線的……」

「さっすがロシア代表兼生徒会長。説明がわかりやすい」

リビングで、一夏達専用機組は楯無によるISの操縦技術の指導をされていた。

「それと数馬君はファイトスタイルが機体の能力に依存しがちな所があるから、素の状態でも戦える程の力を身に付けなければいけないわ」

「確かに一理あるな。能力を使用した戦いは避けるべきか？」

「いえ、能力は全然使っていいわ。けど、能力だけでは無くてもっと色々な戦い方を見につければ、能力と組み合わせる戦うことが出来る」

「そういう事か。助かる」

「いえいえ。それじゃあ今回はこのくらいにしておきましょうか」

数馬の返事に満足した様に楯無は手を叩いて終了を提案した。

「はい、ありがとうございます」

「そんじやあ帰る準備すつか」

「ああ、そうだな」

「私は皆に声をかけてくるわ」

そう言って楯無は、廊下へと消えた。

混乱と出会い    S e v e n t e e n t h    E p i s  
o d e

「え？また転校生？」

一組の教室で、ステラは間抜けな声を出した。

あれから二日。ステラは前回と同じく赤い目の状態の記憶は一切無く、誰もステラにその事を聞こうとはしなかった。

「そう！今日うちに転校生が来るんだって！しかも二人！」

「二人も？しかもうちのクラスに？」

「うん！」

（まあ理由は大方想像出来るけどね）

ステラはそう思いながら一夏達を見た。彼らは世界で四人……いや、二日前に現れたデストロ・デマイドを含めて世界に五人しかない男性操縦者の内の三人なのだから。

（なんなら津上先生もこのクラスの所属だし、デストロ・デマイドは公表されていないから実質全ての男性操縦者はこのクラスにいるんだよね）

「えっと、ステラさん大丈夫？」

デストロ・デマイドの事を考え、険しい顔になるステラに、クラスメイトの相川が心配そうに顔を覗き込んだ。

「ん？ああ、ごめん。何でもないよ」

ニコリと笑ってステラはそう答えた。

「諸君、おはよう。まずは席に着け」

教室へと入って来た千冬は壁に寄りかかり、真耶は教壇についた。「だいぶ噂になっていますが、今日はこのクラスに転校生がいます！入ってきて下さい！」

真耶に呼ばれて入ってきたのは、小柄な銀髪の少女と、

「……………えっ？」

「ちよっと、あれって」

「嘘でしょっ？」

「フランスから来ました。シャルル・デュノアです」

金髪の男子だった。

「男……!!?」

「はい。僕と同じ境遇の子がいますと聞いたので、急遽転入することになりました」

「……………キ、」

（（（（あー、これは（（（（（（（（

男子三人とステラ、箒、セシリアは、以前のパターンを思い出して耳を塞いだ。

「?」

「「「「キヤアアアアアア!!」」」」

「うわあ!」

何も知らないシャルルと名乗った男子は、女子達の歓声をモロにくらい、その場にたじろいだ。

「男子よ男子! 四人目!」

「守ってあげたくなる系の!」

「何言ってるの! 津上先生入れて五人目よ!」

「お姉ちゃんって呼んで!」

「好きです! 付き合ってください!」

（いや、それは気が早いんじゃないかな?）

ステラは内心で苦笑いしながらクラスメイトの言葉を聞いていた。

「静かにせんか。まだ自己紹介が残っている。山田先生、どうぞ」

「わかりました。ラウラさん、自己紹介してくれるかな?」

「はい。私はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツから来た代表候補生だ。よろしく」

パチパチパチツ

普通に挨拶をするラウラを見て、千冬は内心驚いていた。

（あいつが普通に挨拶を? 変わったな）

ラウラは拍手を受けながら、一夏の前に立った。

「お前が織斑 一夏か?」

「そうだけど、何?」

「なに、お前がクラス代表と聞いたのでな。確認したまでさ」  
「?そうか」

ラウラは一夏の返事を聞くと、自分の席へと歩いて行った。  
「ふっ」

しかし、ステラはそれを見るクラスメイトのどの表情とも当てはまらなかった。

(今の、殺気?一瞬だけだったから分からなかったけど、今のボーデヴィツヒさんから出てたのは多分憎悪と殺気……………つまり)

「それではHRを終わる。各自授業を開始してくれ」

「あ、もうそんな時間か」

ステラは一旦考える事をやめ、一時間目の準備に取り掛かった。

……………

「あ、さっきも言ったけど僕はシャルル・デュノア。よろしく」

「よろしくな。けど今はゆっくりしてられないから、行こうぜ」

「え?なんで?」

きよとんとするシャルルに一夏は少し驚きながら答えた。

「なんでって、一時間目はISの実習だぞ?」

「うん。でもそれでなんで急ぐの?」

「男子は更衣室で着替えるんだよ。もしかしてお前女子の裸見たいのか?」

「え?あ、ああ!そうだね!急がなきゃ!」

「?」

「おい、そこの変態予備軍。さっさと行くぞ」

「え?ああ!忘れてた!」

一夏はシャルルの不自然な態度に疑問を抱いたが、数馬の言葉で準備を急いだ。そして、シャルルも教室を出た所で数馬に腕を掴まれて、半ば強引に走らされていた。

「ねえ、三人とも何でそんなに走ってるの?授業までまだ時間あるでしょ?」

「いや、残念ながら無いぞ」

そうして更衣室まで歩いて行くと、(興奮した)女子の大群に遭遇した。

「見つけた！転校生よ！三人も一緒だわ！」

「これに捕まったらな」

「ど、どうしてこんなに人が!？」

「そりや俺達が男子だからだが」

「！そ、そうだよね！男子だもんね！」

三人は走って逃げていたが、とうとう壁際に追い詰められた。

「大丈夫よ三人共。ちよつと体のあんな所やそんな所を触りたいだけだから！」

「いや、十分アウトだろ！」

弾は女子達の言葉に、渾身のツツコミを入れた。

ガラガラッ

「行くぞ」

後ろから聞こえた言葉に振り返ると、数馬が開いた窓に手を掛けていた。

「行くって?」

「飛び降りるんだよ！」

「「うわあ?!」」

一夏とシャルルを引っ張った数馬は、窓から飛び降りた。ちなみに弾は一夏に引っ張られた。

「サイクロン」

数馬はフィリップを部分展開してサイクロンの能力で風を操り、無事に着陸した。

「ふ、不思議な能力だね……」

「まあ、束さんが作ったからな」

「束って、あの篠ノ之 束?!」

「ああ。まあ、一応束さんは協力者として技術提供しただけだと言っているがな」

「そ、そうなんだ……」



埃を払う数馬にシャルルは問いかけたが、更なる疑問が生まれただけだった。

「おい、起きろ」

そんなシャルルを気にせず数馬は目を回す一夏と弾を起こした。「……………」

それを見つめるシャルルの目には、先程の様な暖かさは無く、ただひたすらに冷たかった。

……………

「では、授業を始める。まずは、そうだな……………オルコットと嵐は前へ出る。模擬戦をしてもらう。戦闘の実演だ」

千冬に呼ばれてセシリアと鈴は前へ出る。

「ハア……………まるで見世物ですわね」

「気は乗らないけど、やるしかないわね」

二人は嫌そうに前に出た。すると、千冬は二人に耳打ちした。

「いい所を見せなくていいのか？」

千冬は誰とは言わない。それは二人にとって勇姿を見せたい相手が違うという事を理解しているからだ。

（一夏に、いい所を……………）

（ステラさんに、私の勇姿を……………）

「やってやろうじゃない！」

「ええ、イギリスの代表候補生の力をご覧にいただけますわ」

ちなみに何故セシリアがステラを意識するのかと言うと、ステラと関わる内にその妹の様な雰囲気に着が湧いたからだ。今のお気に入り嬉しそうに「もく、やめてよく／＼／＼」というステラを撫でる事。

「そう焦るな。お前達の相手はあっちだ」

千冬の指差した方には、ラファール・リヴァイヴを纏った真耶が浮遊していた。

「お前達には山田先生と二対一で戦って貰う」

「二対一ですか？いくら何でもそれは」

「私達を馬鹿にしていますの？」

「安心しろ。山田先生はお前達が組んでも引けを取らん」

「へえ〜……………」

「そうですの」

鈴とセシリアはISを展開してゆつくりと浮上していった。

「二人とも……！頑張ってね……！」

その声に二人が下を見ると、笑顔で手を振るステラが居た。

「つたく、相変わらずね」

「ふふつ、でもあんな笑顔で応援されると」

「そうね。尚更に負ける訳には行かないわね」

先程のどこか苛立ちを含んだ表情だった二人は、いつの間にか僅かに笑っていた。

「二人とも、よろしくお願いしますね」

「よろしく〜」

「よろしくお願いしますわ」

「試合、開始！」

地上から響く千冬の声を皮切りに、戦いは始まった。

「らあ！」

「はあ！」

ギョーンツ！

「はっ！たあ！」

ガガガガガガツ！

鈴の突撃とセシリアの狙撃を軽やかな動きで避けた真耶はマシンガンを二丁呼び出し、正確に狙い撃った。

「くっ！きやあっ?!」

「鈴さん！」

近くに居た鈴はそれをまともくらい、セシリアがそれを受け止めた。しかしその間も真耶の攻撃は止む事は無く、二人は二手に分かれて回避を余儀なくさせられた。

「やっぱり、教師なだけあってやるわね！」

「鈴さん、一つ考えがありますわ」

「え？」

鈴とセシリアはプライベートチャンネルで会話しながらも回避を続けた。

「ティアーズ！」

セシリアが急に回避を止め、ビットを放った。

「それではただの的ですよ！」

ガガガガガガがガツ！

真耶は立ち止まったセシリアにマシンガンを二丁とも向けて撃つた。

「分かっていますわ！」

セシリアは弾丸を全て落とす様にスターライトMkⅢを撃った。

「ウラアアア！」

「っ?!」

真耶はそれを避けたが、避けた先には鈴が双天牙月を構えて突っ込んできた。

（ほう、あの時の戦闘で使った戦法の応用か。なるほどな。しかし今の一瞬の会話でここまでの完成度か。中々やるな）

「くっ！はあ！」

真耶は急いで体制を立て直したが、鈴の攻撃は避けきれないと悟り近接武器を展開して受け流した。

「これで！」

「決まりですわ！」

いつの間にか挟み込む様な陣形になっていた二人は、互いの近接武器を投げた。

「その程度なら！」

二人の投げた武器を余裕を持って避けた真耶だったが、二人にもそれは予測済みだった。

「はあ！」

ギユンツ！

セシリアはビットを巧みに操り、放ったビームで鈴の双天牙月を打

ち返した。しかし

「甘いですー!」

真耶はそれを弾き、セシリアに向かってロケットランチャーを撃つた。

ドカアーンンッ!

「きゃあー!」

その攻撃が致命打となり、セシリアは落ちた。

「まだ、私がいんのよー!」

後ろを振り返ると、セシリアのインターセプターを振り下ろす鈴の姿があった。

「分かっています」

「なっ?!」

インターセプターを振り切った鈴だったが、そこに真耶の姿は無く、あるのは栓の抜かれた手榴弾だけだった。

「まっずっ」

ドカアーンンッ!

手榴弾の爆発を避け切れなかった鈴は、その威力をもろにくらい甲龍のシールドエネルギーが底を突いた。

.....

「負けましたわ。完膚なきまでに.....」

「あと少しだったのに.....」

落ち込む二人の元に汗を拭きながら真耶が近寄った。

「二人とも、凄かったですよ。あと少し反応が遅れていれば負けていました」

「そうだよ!二人ともかつこよかったよ!」

「ステラ(さん).....」

「まあ、確かに想像以上の実力だったぞ。まさかあのような戦い方をすると、やるな」

千冬の厳格のあるイメージの抜けない二人は、千冬の微笑む様な笑

顔に一瞬困惑した。

「これがIS学園の教員だ。以降は敬意を持って接するように」

「一二はーい!」

「うむ。それではこれより、ISの歩行訓練を始める。専用機持ちは指導に回れ。ISは全部で六機。『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』、好きな方を選べ」

一組と二組のピツタリと揃った返事に千冬は頷くと、今後の指示を始めた。

「織斑君!私に教えて!」

「デュノア君!」

「五反田君!」

「御手洗君。私に教えて?」

「どこ?!津上先生はどこ?!」

「何をしている!出席番号順に整列しろ!」

「一二すみませんでしたー!」

千冬の怒鳴り声に、生徒達は即座に並び始めた。

(何故だ。何故小娘一人の発した名前にここまで反応するんだ?!私は何故津上先生を意識しているんだ!)

怒鳴り声には多少の私情が挟まっていた千冬だった。

尚、訓練は怖いくらいに順調に進んだ。

混乱と出会い      E i g h t e e n t h      E p i s  
o d e

「いっただつきまーす！」

「はい。いくらでもお召し上がりください」

現在は昼過ぎ。IS学園の屋上の庭園には少年少女達の姿があった。

「美味しい！凄いいよ！いつの間にこんなにレベルアップしたの？」

「ふふっ、津上先生に特訓して貰ったのですわ。皆さんを驚かせようと思ひまして」

微笑みながら会話に花を咲かせるステラとセシリア。それを見ながらも箸を進めるいつものメンバー＋シャルル。

「そういえばターナーさん」

「ステラでいいよ。えっと」

「シャルルでいいよ」

「ありがとうシャルル。それで、何？」

手に持った料理を食べるのを我慢しながら、シャルルの質問を聞くステラ。

「ステラは代表候補生じゃないよね？なのにISを持っているのはどうして？」

「え？それは……………誰にも言わない？」

「うん」

「ここに居る皆とちふ…織斑先生だけしか知らないんだけどね。私のISは一夏達と同じで東さんが作ったの。半分だけね」

「そ、そうなんだ……………ん？半分って？」

ステラの言葉に驚きながらも、最後の言葉に抱いた疑問を素直に口にした。

「もともとあった物を東さんが改造したんだよ。ね？ギンギラ」

『はい。そうです』

「え？今どこから声が」

ギンギラの声に驚くシャルルに、ステラは苦笑しながら答えた。

「これこれ。このゴーグルが私のISの待機状態なの」

「あー、ISの……ええ？ISが喋るの?!」

「なんとなく束さんの気持ち分かる」

「ステラさん。あまり人をからかつてはいけませんわ」

「ごめんなさい……」

意地悪そうな顔をするステラにセシリアが子供を躡ける様に言うと、ステラはしよぼんとした。

「ごめんね？シャルル。私のISのギンギラにはAIが搭載されて、自立して思考が出来るんだよ。私戦闘のセンスあまり無いから、ギンギラのサポート無かったらそこそこ弱くなるんだよね」

「まあ、初乗りの俺と互角だったもんな」

「むう、違うもん！あれはエクシアが強かったんだもん！」

にやりと笑いながら言う弾にステラはいじけたように返した。

「そういえばステラ。ボーデヴィツヒは誘わなかったのか？」

箒はステラのいじけ様に苦笑しながらそう聞いた。

「え？ああ、なんか用事があるって言ってたよ？」

「そうか。やはり代表候補生は忙しいんだな」

「それでもないわよ？極端な話、データ取り以外に大した仕事無いし」

「え？そうなの？」

「大した仕事が無いだけで、細々とした物が沢山ある。例えば写真撮影とか」

「写真撮影？」

鈴の言葉にステラは驚き、それを補足するように簪は言ったが、その言葉は更にステラを困惑させた。

「モデルの様な物ですわ。鈴さんは無いのですか？」

「あるけど、そんなに大きい物とは感じてないしね。ただ水着とか服着て写真撮るだけじゃん」

「ええ?!なにそれ！見たい見たい！」

「いいわよ。明日見せる」

「今日じゃダメなの？」

鈴の言葉に、ステラはキョトンとした。

「まあ、今日はね……」

（あつぶなー。ステラが見るってことは一夏見るわよね……。ならばとびつきり良い奴を用意しなきゃ！）

（とか鈴は考えてるんだらうなあ……）

一夏を落とそうと企てる鈴と、だいたい察しの付いてるステラだった。

キーンコーンカーンコーン

「あ、予鈴だ」

「それじゃあ、解散しようか」

「それじゃあ鈴と簪はまた後でね」

「うん」

「それじゃね〜」

ステラの言葉に鈴と簪が答えると、全員はそれぞれの教室に向かった。

……………

「え？放課後にアリーナ？」

「うん。打鉄式式のデータを取りたいから」

ステラの机の前に立つ簪はデータを空中に投影しながら言った。

「うん、分かった」

「それじゃあまた後でね。けど何かあったら言ってね。予定ずらすから」

「うん、また後で」

そしてステラの言葉を聞いた簪は、笑いながら教室を出て行った。

「ターナー。放課後空いているか？」

「うえ？」

簪との会話が終わり、ポケっとしだしていたステラに千冬が声をかけた。しかしポケっとしていたステラは返事をしようとして変な声が出た。



「整備課がまた武器のデータが見たいと言っていたぞ」

「マジですか」

「む、何か予定があったか？」

「あ、でもそっちは遅れていいって言ってたんで、行きます」

「そうか。なら頼んだぞ」

ステラは後にこの選択を後悔するが、その事はまだ誰も知らなかった。

.....

「ありがとうねステラちゃん」

「いえいえ。私のデータが役立つなら全然使って下さい」

IS 学園の整備室。技術だけで見れば世界でも有数の物が揃ったその部屋には、不思議なデザインの武器が並んでいた。

「いやあ、相変わらず面白いね。武器の弾丸等に属性を持たせるなんて。今度お礼に学食でプレートパフェ奢ってあげる」

「本当ですか?! やったー!」

(( (癒されるわ) ))

整備課にいるステラ以外の生徒と教員全員の思考がベストマッチしたその頃、ステラは時計を見て焦りだした。

「あー! やばい! 結構時間経ってる!」

「どうかしたの?」

「友達とアリーナで約束があるんです! 遅れるとは言ったけどこんなに遅れたら流石に怒るよ.....」

「そんなステラちゃんに良いこと教えようか?」

「何ですか?」

「この整備室を出て廊下を通るより、窓に付けてあるスロープを使った方が早いよ」

「スロープ?」

その言葉に振り返ると、そこには確かに鉄のワイヤーがアリーナ付近の廊下へと繋がっていた。

「凄い！先輩ありがとうございます！」

「おお?!／／／」

ステラそう言いながら抱き着き、次に身を翻してスロープにかけてあるフックを掴んだ。

「それじゃあ、グレートパフェ楽しみにしてますね！」

ステラは笑顔でそう言いながらスロープを下って行った。

それを見送る女生徒は、頬を赤らめてボーっとしていた。

「ねえギンギラ！間に合うかな？」

『アリーナに打鉄式式の反応があります。連絡しますか?』

「うん、お願い！」

スロープを下り終わり窓から飛び込んで、ステラは廊下を駆け出した。

『マスター、通信繋がりました』

「了解。開いて」

〈ステラ！来ちゃダメ！〉

「え？何で？」

〈良いから！絶対に来ちゃ、キヤア！〉

「え？どうしたの?!ねえ！簪！」

ステラは叫ぶが、既に通信は途切れていた。

「いったい何が……。ギンギラ！ジェット出して！」

『分かりました！』

ステラはジェットを装着して廊下をさっきの三倍程の速度で進んだ。

「着いた！」

ピットに着くと、ステラはジェットを収納してカタパルトの先に立った。するとそこには、ボロボロになったセシリアと鈴、そして簪がいた。

「なに、してるの？ボーデヴィツヒさん……」

「ん？ステラ・ターナーか。こんな所で会うとは奇遇だな」

「ふぎけないで！何してるのって聞いているの！」

「なに、ただの模擬戦さ」

「模擬戦?どこが?ぱつと見、三人ともダメージレベルCは行ってるよ。」

淡々と答えるラウラに、ステラは拳を握りしめながら言った。

「三人が何かしたの?」

「いや、ただ私が少し挑発しただけさ。そうすると全員が噛み付いてきてね、それを「ふざけるな!」ん?」

「挑発しただけ?ふざけないでよ!あなたが三人の心を刺激するような事を言ったんでしょ?!それなのに、こんな!」

「どんな事があるうと、先に手を出した方が悪い。それが戦場の……いや、この世間のルールだろ?」

ラウラとステラが会話をしていると、後ろからシャルルも含めた男子メンバーも入ってきた。

「鈴?!てめえよくも鈴を!」

「待って一夏」

「ステラ、なんでだよ!」

「なんでかって?そんなもの決まってる」

ステラはそう言いながらギンギラを展開しながらアリーナに飛び降りて、着地した。

「ボーデヴィツヒさんは、私が倒す」

「面白い」

ステラはラウラを蒼い瞳で睨み、ラウラは邪悪な笑顔をラウラに向けた。

混乱と出会い    N i n e t e e n t h    E p i s o  
d e

「らああー！」

「そんな単調な攻撃では、この『シユヴァルツエア・レーゲン』には傷一つ付けられないぞ！」

ステラの全力の拳は、空中で静止した。

「っ?!動かない?!」

「驚いたか?これがシユヴァルツエア・レーゲンの停止結果、A I Cだ」

ラウラはそう言いながらレールガンの照準をステラに定めると、最大出力で放った。

「シフト、デイフェンス！」

ドカーンッ!

「ぐあー！」

ギリギリの所でシフトの能力で防御力を上げたが、あまりの反動に吹き飛んだ。

「なんだ、その程度か?」

「いつけえー！」

ステラはリングを投げつけると、ラウラはそれをA I Cで止めた。しかしステラはそれを分かっていたようにラウラの真後ろに回り込み、拳を振るった。

「予測済みだ」

「なっ?!」

ラウラが屈むと、その影からリングが飛び出してきた。

「くっっ！」

ステラはそれを操作して威力を殺したが、突如下からの衝撃にまたしても吹き飛んだ。

「実力差が、ありすぎるよ……くっっ！」

ステラの双眼は、レールガンを構えるラウラを捉えた。しかし、先

程腹部にくらった攻撃の影響で、ステラはよろめき、その場に膝をついた。

「貴様には失望した」

「え？」

「貴様の實力はこの誰よりも強いと確信していた。しかしあんな連中とつるんでいるとはな。これ程弱いのも合点がいく」

「どういう、こと？」

ステラはラウラの言葉の意味が分からずに困惑した。

「研ぎ澄まされた剣と猛き剣士と云えど、剣士が鈍ると剣も鈍り錆びる。貴様は甘いんだ。どうだ、今度のタッグマッチで私と組まないか？あんな連中よりも、私と組む方が賢明な判断だと思うがな」

「黙れ…」

「ん？何か言ったか？」

「黙れ——」

ステラの叫びはアリーナに木霊した。

「お前が……皆を語るな！お前なんかが！」

ステラの目は徐々に赤く染まっていた。

『マスター！いけません！』

「っ?!」

ステラはギンギラの声を聞いて、意識が戦いから逸れた。

『冷静さを欠いて勝てる相手ではありません』

「そう、だね……。ありがとう、もう落ち着いた。」

そう言ったステラの瞳はみるみるうちに青色に戻っていった。

「さてと、もう終わったか？」

「ごめんね。時々自分でもよく分からないくらいに感情が抑えられなくなるんだ。でも、もう大丈夫。これで貴方を倒せる！」

「それはどうかかな！」

ステラは拳を。ラウラはプラズマ手刀を構えて急接近した。しかし。そこに——

「そこまでだ！」

「千冬さん?!」「織斑教官！」

トリガーを纏った千冬が割り込んだ。

「これは一体何事だ！」

「はっ！模擬戦をしていました！」

「模擬戦？そうは見えないが？」

「千冬さん！これは！」

「織斑先生だ。それと、今日から学年別トーナメントまでお前たち二人のアリーナの使用を禁止する」

「そんな！千冬さん！話を聞いてよ！」

「織斑先生と呼べと言っている！」

千冬の表情は怒りに染まっていた。その理由が分からず困惑するステラに、シャルルは声をかけた。

「ステラ、今は引こうよ。これより重い罰が下されるかもしれないよ？」

「……………うん」

ステラはか弱い声でそう言い、ギンギラを解除してアリーナを出た。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。一体何のつもりだ？」

「全ては、貴方の為です。織斑教官」

「織斑先生と呼べと言ったのは、お前もだ。それと、私はこんな事望んではない！」

「それは知っています」

「ならば何故！っ?!」

突如千冬はラウラの傍から飛びのいた。

（なんだ今のは。殺気か？それにしても穏やか過ぎる！こいつに何があったんだ！）

「ラウラ、私が居なくなつて何があった」

「何もありませんよ。ただ、自分の存在価値に気付いただけです。これ以上話す事はありません。それでは」

「待て！ラウラ！」

千冬の声も聞いても、ラウラは止まる事無くアリーナを立ち去った。

「……………クソツ！」

一人残された千冬は、その場で地面を強く踏みつけた。

……………

「今日からよろしくね。数馬」

「ああ」

荷物を持ったシャルルの言葉に数馬は短く返事をした。

「それにしても、どうしてわざわざ僕と同じ部屋にしたの？元々は弾との相部屋だったんでしょ？」

「少し聞きたいことがあってな」

「聞きたいこと？何かな？」

「どうして男のふりをしている」

「え？」

数馬の言葉に、爽やかさに満ちていたシャルルの顔が固まった。

「何を言ってるのかな？僕は男だよ？」

「俺の提示出来る情報を示そう。」

一つ、お前は俺達に肌を見せる事を嫌がった。それだけならまだ見せたくない傷等があるのだと思えるが、それならば言えればいい。

二つ、体の作りだ。この年に男子が迎える程の声変わりを迎えていない。その証拠に、お前の喉ぼとけは出ていない。

三つ、少なくともデュノア家に15歳〜16歳の息子はいない」

「どうして？そんな事なんで君に分かるのさ！」

数馬の言葉に、シャルルは無意識にも激昂した。

「分かるさ。お前は覚えていないかもしれないが、俺は一度だけお前と会っているからな。『シャルロット・デュノア』、それがお前の真実の名前だ」

「会ってる？僕は君の事なんて知ら、ない……………。御手洗 数馬

……………。え？まさか、御手洗 宗吉さんの息子？」

「ああ、そうだ」

シャルルは……………いや、シャルロットは数馬の顔を見ながら一つの

答えに至った。

「そんな……………。じゃあ、最初から?」

「まあな。それで、どうする?」

「バレちゃったからね。どっち道、僕に未来は無いよ」

暗い顔をしながら言うシャルロットに、数馬はため息をついた。

「方法が無いのに、わざわざこうやってお前に言うと思っただか?」

「どういう事?」

「校則だよ。この生徒には原則としてどこの国であろうと干渉できない」

「そう、なの?」

「ああ。猶予は三年だ。その間に決めろ」

「……………ねえ、数馬」

泣きそうな声で絞り出すように喋るシャルロットの次の言葉を、数馬は静かに待った。

「どうして、私を助けてくれるの? たった一度だけなんだよ? 僕たちが会ったのは」

「そうだな、一度だけだ。だが、俺はそれでも覚えているぞ。お前の笑顔も、泣き顔も、怒った顔も、何故か頭に残っていた」

「でも、僕にはもう安心して笑える場所は無いです…」

「なら、ここにいろ」

「え?」

数馬の言葉は、シャルロットの鼓膜に響いた。

「居場所が無いなら、俺が居場所になってやる。だから、笑えよ。いや、今は泣いとけ」

数馬はシャルロットの泣きそうな顔を見て笑いながら、シャルロットの頭を撫でた。

「う、うう……………。あああああ!」

シャルロットは、大きな声を上げて泣いた。

「全く、お前は変わらねえな」

「うわああ! う、う、数馬のバカあ! そんな事言われたらあ…………うわああん!」



「分かった分かった」

数馬は苦笑いしながらシャルロットを抱きしめた。

.....

「えつと？それで、シャルルはシャルルじゃなくてシャルロットだったって事か？」

「ごめん、さっぱり分からない」

数馬の提案で、信頼出来る人間には話そうということになって今に至る。

「それで、校則を利用してシャルロットを匿おうと。考えたね数馬」

「ああ、まあな」

「そう言えば、あの三人は怪我が酷いから呼べなかったよ。簪はまだ軽い方だから、学年別トーナメントには出られるって」

ステラは一瞬だけ顔を強張らせ言った。

「そうか、なら仕方ないな」

「でも、そうしたらどうする？学年別トーナメントは急遽タッグマッチになったが、セシリア達が居ないのであればこの場のメンバーと簪でチームを決めなければいけないが」

簪の提案に全員が唖ったが、数馬だけはすでに何か決めているようだった。

「一夏とシャルロット、俺と弾、ステラと簪だ」

「まあ、それが妥当だね」

「え？でも簪はどうするんだよ？」

「私は他と組むさ。専用機持ちと組んで足手まといになっても申し訳ないからな」

「そつか.....。もし試合で当たったら、よろしくね」

「ああ」

ステラと簪はトーナメントでの事で盛り上がりようとしていた。だがそこに弾が口を挟んだ。

「でもよ。確実になんか起こるよな」

「そうだったら、俺達で止める。それと、今回は特にデストロに注意だ。俺達に存在が知れた今、遠慮の必要が無くなったからな」

「そうだね」

「ああ、そうだな」

「了解」

「分かった」

（え？デストロって誰？）

二日後、シャルロットの疑問を置き去りにして学年別トーナメントは始まった。

混乱と出会い    T w e n t i e t h    E p i s o d  
e

「まさか、初戦から貴様と当たるとはな。ある意味幸運だな」

「なんでお前が俺やステラに因縁みたいな物を感じているかは知らねえけど、三人を傷付けた事は絶対に許さねえ！」

ラウラの怪しげな笑みに、一夏は怒りを露わにしながら怒鳴るように言った。

「えつと、どうして箒はそっちにいるの？」

「いや、誰かと組もうとは思ったんだ！だが、流石に時期も時期で余っている人が居なかつたんだ……………」

「あー、そういう……………」

「しかし、身内だからといって勝負には変わりはない。全力で行くぞ」  
「分かってるよ」

箒とシャルロットの会話も終わり、場内は緊張に包まれた。

〈第一試合！織斑 一夏、シャルル・デュノアVSラウラ・ボーデ  
グイツヒ、篠ノ之 箒！〉

アナウンスが場内に響くと、両ペアとも身構えた。

〈試合……………開始！〉

「はああ！」

「フンツ、まるで闘牛だな！」

「行くよ！箒！」

「てりやあ！」

試合開始のコールと共に、一夏はラウラに、シャルロットは箒に攻撃を仕掛けた。

「はあ！てりや！おらあ！」

「ハハハッ！それでは掠りもしないぞ！」

一夏の剣戟を難なく躲すラウラ。一夏はそれでも剣を振るい続ける。

「そんな事、分かってんだよ！」

「ほう？ならば何故その当たらないと分かっている攻撃を何度も仕掛ける？無駄な足掻きにしか思えんが」

「そうだよ、足掻いてんだよ！俺の力じやお前に勝てないことなんて百も承知だよ！だからこそ、勝つ方法を探して足掻いてんだよ！それになあ！人間はどんなに弱くても、必死に努力すれば強者にだって勝てるんだよ！」

「フンッ！ならば、努力では越えられない絶対的な実力差を見せてやる！」

ラウラはそう言ってワイヤーブレードを構えて反撃を始めた。

.....

その頃、箒とシャルロットも白熱した戦いを繰り広げていた。

「やるねえ、箒！」

「そちらもな！シャルロ……シャルル！」

箒の剣戟を躲しつつ、地道にダメージを与えていくシャルロット。つい本名を言ってしまうようになったが、慌てて言い直しながら鋭い剣捌きで躲されながらもじわじわとシャルロットを追い詰める箒。

「くらえ！」

「うわっ?!」

箒に反撃の為に距離を置こうとしたシャルロットだったが、その隙を突いて箒は近距離でアサルトライフルの弾丸をシャルロットに打ち込んだ。

「剣術だけだと思ってたけど、まさかそれはフェイクだったなんてね」「篠ノ之流の剣術だけではいずれ限界が来る。そう思ったから私はひたすら拘っていた剣での正々堂々とした戦いを捨てた。父の剣に憧れた。父の背中を目標とした。だが、私は祖父にはなれないし、あの人の強さも無い。だから、私は他の何かで補って強くなると決めたんだ！」

箒は自らの決断を語りながら、右手に刀、左手にアサルトライフルをもってシャルロットを追い詰めた。

「これで！」

「…………正直、これはまだ使いたく無かったんだけどね」

そう言うと、シャルロットはシールドを箒に向けた。

『シールド・ピアーズ  
「盾殺し」！』

灰色の鱗殻、通称盾殺しと呼ばれるそれは、シャルロットの専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』の最強の武装。第二世代の中では最高クラスの威力を有している。故に「ガハッ?!」

量産機の打鉄でその威力は防げなかった。その威力で打鉄のシールドエネルギーは底を突き、箒は敗北した。だが、その表情には一片の曇りもなく、逆に晴れやかな表情だった。

「シャルル、ありがとう。全力でぶつかってくれて」

「それはお互い様だよ。でも、まさかこんな所で隠し玉を使う羽目になるとはね」

「それは、褒めの言葉と捉えていいのか？」

「うん、当然」

シャルロットはそう言いながら手を伸ばした。箒はその手を掴んで立ち上がった。

「先にピットに上がって観戦させて貰う。一応敵だが、頑張れよ」

「うん、ありがとう」

二人が笑顔で会話を終えたその瞬間、一夏とラウラのいる方向から咆哮の様な叫びが響いた。

……………………

「くっ！」

「らあ！」

一夏の剣戟は鋭くなっていき、その勢いは留まる事を知らなかった。そしてその勢いに、ラウラは押され始めていた。

(何故だ！何故私がかんな雑魚に！)

「そろそろ、終わりだあ！」

（嫌だ！嫌だ！こんな奴に負けたくない！私は強くないと存在価値はない！あの人の前で負けたくない！）

『願うか……？ 汝、自らの変革を望むか？ より強い、唯一無二の力を……』 否、望め！ 我の力を！ 全てを破滅させる最強の力を！』

「寄越せ！ 力があるならば全て寄越せ！ なんでもいい！ 力をくれ！ 誰よりも強い力を！」

「なんだ?!」

「ぐあああああああ！」

突然シユヴァルツエア・レーゲンがスパークしだした。一夏は異変に気付き飛びのいたが、異変は収まらなかった。

「ぐあ、ああ！ なん、だ！ これはあ！」

「おい！ どうしたんだよ！」

いくら敵といえど、自分と同じ年の少女の苦しむ様を見て心が動かない訳では無かった。

「痛い、熱い！ でも、これで力が手に入るのなら………がああ！」

「一夏！ 今すぐボーデヴィツヒさんのシールドエネルギーをゼロにして！」

「え?! どういう事だ?」

突如開かれたステラとのプライベートチャンネルに驚きながらも、しっかりと話を聞く一夏。そしてステラの口から語られたのは、衝撃の事実だった。

「それはヴァルキリートレースシステムって言って、簡単に言うとな盛期の千冬さんを再現するシステムなの。でもそれは、アラスカ条約で禁止されたシステムなの！」

「要するに、あれは禁忌の力ってことか」

そして、シユヴァルツエア・レーゲンから黒い液体の様な物が溢れ出し、それは正にラウラの心に宿る負の感情を表しているようだった。

「とりあえず！ あれを斬ればいいんだな！」

一夏はその言葉と共に瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で接近し、黒い何かを斬り裂こうとした。だが、それより先にラウラの右腕を黒い物体が包み込み、

その腕で零落白夜を発動させた雪片式型を受け止めた。

「なっ?!」

「……………」

「ぐああー!」

薙ぎ払うように振るわれた腕に、一夏は吹き飛ばされた。その隙に、黒い物体はラウラの体を包んでいった。そして飛ばされる最中に一夏が見たのは、その顔すらも飲み込まれそうになりながら、涙を流すラウラだった。

「くっそ…」

「一夏!」

ギンギラを纏ったステラが降りてきた事を確認した一夏は、立ち上がりながら零した。

「……………助きたい」

「一夏?」

「酷いことする奴だけど、助きたい」

「そっか、分かった」

そう言っただけステラは一夏の隣に立った。

「一夏。あの黒いのはシールドエネルギーの塊みたいなものなの。だから、零落白夜であれを切り裂いて」

「それしたら、ボーデヴィツヒを助けられるんだな」

「うん。でも、もうシールドエネルギー無いでしょ?」

「それなら僕が何とかするよ。一夏と組む時に、エネルギー切れの対策もしてあるんだ。僕のラファールから、白式にエネルギーを補給出来る」

「それならお願い。あれは私が食い止めるから」

ステラはそう言っただけ一夏たちの前に立った。

「他の皆は避難誘導をしてもらってるから、まだ来れない。私一人でどこまでやれるか分からないから、なるべく早くね」

「うん!」「おう!」

ステラの言葉と共に、全員が行動に移った。

.....

その頃指令室では。

「織斑先生！あれは！」

「ああ、VTシステムだな。クソッ！ドイツ軍は何を考えている！」

「織斑先生！」

その時、指令室に楯無が飛び込んできた。

「IS学園の裏通信に、デストロという男から織斑先生宛に通話です！」

「なんだと?!今すぐ繋げ！」

「はい！」

千冬の声と共に、真耶は操作パネルを操作してモニターの中心に一つの映像を映し出した。

〈やあ、千冬。一週間ぶりだね！〉

「黙れ！貴様か！ボーデヴィツヒの……ラウラの機体にVTシステムを積んだのは！」

〈違うよ。僕はあくまで技術提供したまでさ。それを彼らがそういう風に使ったのさ〉

「ふざけるな！そのせいでラウラは1傷ついているんだ！」

〈なら君に問おう。銃を作ったものは犯罪者か？違うだろう？銃の制作者にはなんの罪もなく、それを使って悪事を働く奴が悪い〉

「ふざけるなあ！貴様に、貴様に罪が無いだと？どの口が言うんだ！」

お前は、今まで殺した人間の数を覚えているのか！宗吉と純は、貴様が殺したんだろうがあ！」

千冬の荒ぶる姿に、指令室にいる職員は啞然とした。

〈なら君は、今まで食べたパンの枚数を覚えているのかい？〉

「なんだと？」

〈覚えていないだろう？僕にとつては、そういう事なんだよ〉

「……………いつか、必ず貴様を殺す」

〈ハハッ！楽しみにしているよ！〉

そう言つて通信は途切れた。そして千冬は通信機を取り出すと、ス



テラに通信を繋げた。

.....

〈聞こえるか、ステラ〉

「千冬さん？おわあ?!な、何？今凄く大変なんだけど?!」

〈よく聞け。今回の事には、デストロが関わっている〉

「え？」

〈VTシステムを完成系にしたのは、奴だ〉

千冬の声色から、ステラは千冬の果ての無い怒りを感じた。そしてステラは、立ち止まり腕の力を抜いてだらりとした。

「分かったよ千冬さん。私が、ボーデヴィツヒさんを助ける」

ステラはそう言つて千冬との通信を切り、目を閉じた。

「ねえ、ギンギラ。おかしいんだ。凄く怒ってるのに、頭がスーツとす  
る」

『?!マスター?!』

ステラが目を開くと、その目は暴走した時の様な赤黒い色ではなく、まるで炎のような深紅だった。

「人つてあまりにも怒ると、冷静になるものなんだね」

そう言いながらも、ステラは視線の先にいるVTシステムの発動したシュヴァルツェア・レーゲン（以下：VTレーゲン）に歩み寄っていた。

「リミット、ブレイク………」

その声と共に、ギンギラから放たれる光は一瞬にして膨れ上がった。

「なあ、ステラ」

声のした方を見ると、そこには白式を纏った一夏が居た。

「俺、考えたんだ。もしボーデヴィツヒが助けられる事を望んでいなかったら、俺たちは余計な事をしてるんじゃないかって」

「……………それでも救う。自己満足だとか言われようが関係ない。私はボーデヴィツヒさんを助けたい。それが私のいまやりたい事だから。」

完膚なきまでに救ってやる」

「そうか………っ?!ステラ?!」

一夏はここで初めてステラの目に気付き、驚愕した。

「お前、大丈夫なのか?」

「え?何が?」

『一夏さん。マスターは今いたって正常です』

「そう、か」

「二人とも何の話してるの?っ?!一夏避けて!」

ステラ達の会話を断ち切るように、VTレーゲンは斬撃を飛ばした。それに気付いて反応したステラは、一夏を突き飛ばして自分はバックステップで飛び退いた。

「どうやら、話はここまでみたいだね」

「そうだな」

「一夏、行くよ!」

「おう!」

二人とVTレーゲンの戦いの火蓋は切って落とされた。

混乱と出会い    Twenty first    Episode  
s o d e

「行くよ一夏!」

「おう!」

二人は全速力でVTレーゲンに突っ込んだ。

「はっ!らあ!」

「くらえ!」

二人の攻撃のスピードは、現行のどのISをも凌駕する。しかし、その攻撃をVTレーゲンはいとも簡単に躲していく。

「クソツ! やっぱり千冬姉のコピーだけあって速い!」

「でも、この動きは現役の千冬さんだから出来た動き。それをボーデヴィツヒさんの体でやるのは無茶だよ!」

会話をしながらも、二人の攻撃は加速し続ける。その攻撃を躲しきれないと感じたのか、VTレーゲンは高速でバックステップした。

「っ!今だ!」

「待って一夏!」

「っ?!」

ステラの声に止まろうとしたが、一度付いた加速はそう簡単に止まらない。一夏の動きに合わせて、VTレーゲンは右手をその方向に向けた。すると白式を纏った一夏の体は空中で停止した。

「VTシステムを発動しても使えるなんて!一夏を放せえ!」

ステラはAICで一夏を拘束するVTレーゲンに拳を振るう。しかし、今度はその方向に手を向けると、ステラの高速移動さえも拘束した。

「そんな…。AICは意識を一点に集中させなきゃ使えないんじゃない?!」

「な、なんだこれ!体がっ!」

「な、何?!」

ステラは驚愕しながらも次の攻撃に備えたが、次のVTレーゲンの

行動に更に驚愕した。A I Cで縛られていたステラ達の体は、空中で自分の意志とは無関係に大の字にさせられた。

「どう、して？ A I Cは空間自体を停止させるだけじゃないの?!」

ステラの疑問に答える者は無く、V Tレーゲンは静かに黒い物体で形成された雪片を構えた。そして雪片からは鈍い赤色の光が放たれた。

「まさか、零落白夜まで再現したの?!」

「ステラ!」

「ステラを、放せえー!」

その時、V Tレーゲンを大量のミサイルが襲った。

「はあ、はあ…。助かった、のか?」

「ありがとう簪」

「ううん。二人とも無事でよかった。それより…」

ミサイルの主は簪だった。簪は二人を立たせると、V Tレーゲンを見た。

「V Tシステムを使ってまで勝ちたいなんて」

「違うよ簪。ボーデヴィツヒさんは自分から望んだんじゃないと思う。起動させたのはボーデヴィツヒさんなんだろうけど、多分がむしやらだっただんじゃないかな」

「がむしやら?」

「負けるのが怖くて、もっと強くなりたくて。その心にあの人はつけこんだんだと思う」

「あの人って、誰?」

「その事はまた後で。今はとりあえず目の前の事でしょ?」

ステラが戦闘への集中を促すのと爆炎と砂煙をV Tレーゲンが切り裂くのは同時だった。

「さっきので無傷かよ」

「いや、きつと修復したんだよ。あれ形状定まってないから」

ステラの言葉を肯定する様に黒い物質を波打させた。

「さっきの攻撃で分かったけど、あれを削れるのは零落白夜だけじゃなくて威力の高い攻撃でもいいみたいだね。サーマルキャノンは

チャージに時間がかかるから、削るのは二人にお願いしたい。私が前衛で気を引くから、その二人は準備して、隙を見つけて攻撃して」

「うんー」「了解！」

「それじゃ、行くよー！」

ステラの掛け声と共に、二人は行動を開始した。ステラは目にも止まらぬスピードでVTレーゲンに攻撃を仕掛けた。VTレーゲンはその対処をしながらも二人にも警戒していた。だが、拳を一度振るう度に速く鋭くなる攻撃に、VTレーゲンの意識はステラ一人に向いていく。

「うっ、はあー！らあー！」

『マスター、あまり無茶を為さらぬ方が』

「無茶でもしなきゃ勝てないでしょ！」

『しかし！』

「あーもうー！うるさいー！」

そう言ったステラの顔は苦痛に耐える様な表情になり、目はだんだんと内側から赤黒くなつていく。

「仕留める！今度は逃がさない！シフト！スピード！パワー！」

リミットブレイクで強化されている上でシフトを使い、超強化状態になったギンギラのスピードとパワーは、VTレーゲンの能力をも上回っていた。

「ぐっ、はあ！はあ、はあ…。おらあー！」

ステラは息を切らしながらもその攻撃を止めなかった。しかし、その行動に一夏と簪は驚きを隠せなかった。

「ステラの奴、熱くなりすぎだろー！」

「これじゃあ、攻撃の隙が無いー！」

攻撃の合間を見つけられず動けずにいる一夏達はステラの行動に疑問と驚愕しか抱けなかった。ステラは基本的に独断では行動せず、常に利己的な感情を表に出さずに、組織や集団の一部として協調を優先する。そんなステラが、今は協調を捨てて自分勝手に行動している。その状況が、二人には信じられなかった。

「いい加減、止まりなさいよー！」

その時、VTレーゲンを追い込んでいたステラを不可視の一撃が襲った。

「なにすんの鈴！もう少しで倒せそうだったのに！」

「ドイツ軍のシュヴァルツエア・ハーゼっていう部隊から正式に要請があつたのよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長を助けてくださいって、必死な声でね。あいつ、その隊の隊長らしいし」

「それがなんなの?！」

「あいつを倒せば、その人達はもつと涙を流す！あんたはそれでいいの?!」

「っ！」

鈴の言葉を聞いて、ステラの目はだんだんと深紅に戻っていった。

「……………。ごめん、鈴。一夏と簪も、ごめん」

「別にいいわよ」

「うん、私も」

「それより早く助けようぜ。これ以上長引くとボーデヴィツヒがあぶねえんだろ?」

一夏のその言葉と共に、全員の視線はVTレーゲンに、そしてその内側にいるラウラに向けられた。

「役割決めなきやね」

「それならもう決まってるよ。私が囮として気を引いて、二人がその隙に準備してあの黒いのを削るの」

「一人足りないじゃん」

「え?」

鈴の言葉の意味が分からず、ステラは間抜けな声を上げた。

「削った後に、誰があいつ助けんのよ。アレ再生するんでしょ?」

「……………あつ」

「ったく…。本当に変なところ抜けてるわね。ステラは」

「う、うるさい！仕方ないじゃん！焦ってたんだもん！ていうかなんてここに鈴がいるの！ていうかその機体なに！」

「ああ、私もセシリアも怪我は大したことなかったからまだマシだった私が来たわけ。それでこの機体は甲龍の破損部分をブルー・テイ

アーズのパーツで補ってんのよ。まあ、応急処置だからチューニングもなにもしてないけどね」

ステラの苦し紛れの誤魔化しに、鈴はいつもの調子で飄々と答えた。

「それって大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃない？ 殆ど甲龍だからそんなに違和感無いし」

「えっと、それじゃあ役割どうする？」

会話に置いて行かれかけていた簪が本題を切り出した事により場に緊張が走った。

「私が囿代わるから、ステラが助けて」

「了解。でも、怪我大丈夫？」

「大丈夫に決まってるでしょ！」

ステラの心配を、鈴は一言で一蹴する。そしてその笑顔につられる様に、張り詰めていた三人の表情にも多少の余裕が生まれた。

「さてと、そろそろ作戦会議も終わりっぽいね」

鈴の言葉に三人はもう一度戦いに意識を戻した。しかし、四人は次の瞬間には困惑した。

「なん、だ？」

視線の先のVTレーゲンは突如苦しむようにもがきだした。

「不味いよ。ボーデヴィツヒさんが凄く危険な状態になってる！」

「どういうことだよステラ！」

「限界なのよ。あいつの体は本来出来る運動を大幅に超える運動を強要されている」

「それは、筋肉や臓器、そして脳にも負担をかけることになる。下手をすれば、命を落とす」

三人の言葉を聞いても未だよく状況を飲み込めない一夏。

「ガアアアアアア！」

次の瞬間、咆哮にも聞こえる様なラウラの叫びが、ステラ達しか居なくなったアリーナに木霊した。

「もう時間がない！」

「ボーデヴィツヒにかけられる負担を考えると、チャンスは一回ね」

「たった一回かよ」

「それでも、やるしかない！」

ステラの言葉と同時に鈴はVTレーゲンに突っ込み、一夏はその場で零落白夜を最大出力で発動出来るようにエネルギーをチャージし、簪は空中で山嵐をいつでも放てる様に待機した。

そこからの戦況は、VTレーゲンの防戦一方だった。一時的にでもラウラの意識が覚醒して、VTシステム発動時に起動したAIがエラーを起こした事により動きが鈍っていた。しかし、斬りかかる鈴を跳ね除ける程は出来るらしく、その腕を大きく振るい鈴を弾き飛ばしたが、その瞬間に大きな隙が出来た。

「一夏！簪！今よ！」

「零落白夜！最大出力！」

「山嵐！発射待機！」

「ウオオオオ！」

「行けえええ！」

一夏は瞬時加速を最小限のエネルギーで行い、簪は残りの山嵐を全て使い牽制と攻撃を行った。そこで生まれた隙に一夏が突っ込み零落白夜を発動させた雪片式型を全力で振り下ろす。だがVTレーゲンも火事場の馬鹿力を発揮し、黒い物体を必要なだけ残して右腕に集中させてそれを防いだ。

「往生際が、悪いのよ！」

その時、一夏の真後ろに移動した鈴が叫んだ。その髪は、無人機襲撃事件の時のセシリアと同じく白銀に染まっていた。そして鈴は雪片式型に狙いをつけて龍咆を最大出力で撃った。

ギギギイイ！

「ぐっっ…うおおおおお！」

その威力に耐え切れずに、雪片式型が鉄の軋む音を鳴らしたが、構わずに振るう。

「いつけえええええ！」

「らああああ！」

そのまま黒い物体は飛び散り、ラウラの上半身が現れた。



「ステラ！今だ！」

「ウオオオオオ！」

ステラは自身の限界を超えて、自身の体のダメージを忘れて、ただ目の前の涙を流す少女を助けるためだけに自分の体を捨てて、まさに音速すら超えてVTレーゲンに開いた穴が修復する前に手をねじ込んだ。

「う、おおお！」

『マスター！機体の耐久値が限界です！ディフェンスにシフトして下さいー！』

「くっ！ギンギラ！ごめん！」

『っ?!何ですか！』

「ごめん！約束破る！」

『マ、マスターお止め下さい！』

ギンギラの抗議の声を無視し、ステラは視界に映る項目を承認して叫ぶ。

「バランス、ブレイクッ！」

その叫びに呼応し、ギンギラからは膨大な光が放たれた。

『マスター！後できっちり話をします！』

「分かってる、よお！」

ステラは体の軋む様な痛みにも耐えながらも、常に上がり続ける出力を利用して黒い物体を押し広げる。

「ギンギラ！自立展開よろしく！」

『了解！』

ギンギラの返答と共に全ての装甲のロックが外れ、ステラは身を乗り出した。

「もう、泣かせない！貴方が絶望するなら、私が希望になる！何度だって手を伸ばす！だから！」

ステラは必死に手を伸ばす。その手を伸ばして救える者がいる。それならば、救ってやると。そして、その手は。

「届い、た！っ?!」

その瞬間、ステラの視界はブラックアウトして、次に見たのはどこ

かの研究施設の様な場所だった。そしてステラはそこで知った。ラウラが人工的に作られた命で在る事を。ISが彼女にもたらした苦悩を。千冬との出会いも。そして、本当の願いも。

「一緒に帰ろ」

ステラはそう言って大きなガラスの中に居る白髪の少女に語りかけた。

「何処に？私に帰る場所なんて、何処にも……………」

「此処にあるよ」

ステラはそう言って腕を大きく広げた。

「言ったでしょ？私が希望になる。貴方が望むなら、帰る場所にもなるよ」

「お前が？私はお前を一度傷付けたんだぞ？」

「だったら何？」

「え？」

「そんな事毎回考えてたら私きりが無いからいいよ。それに」

「それに？」

「私達、友達でしょ？」

「っ?!」

「だから、ほら」

ステラはそう言いながらガラスに触れる。するとガラスは砕け散り、ラウラはそのまま落下する。それをステラは受け止めて、抱きしめた。

「例え何があっても、私が最後の希望だよ。ボーデヴィツヒさん。いや、ラウラ！」

そこで、二人の意識は完全に途切れた。

混乱と出会い Twenty—second Ep  
isode

「んっ、んっは…」

IS学園の医務室。そこに備え付けられたベッドから起き上がったのは、ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生で、ある意味VTシステムの最初の被害者だ。

「起きたか、ボーデヴィツヒ」

「っ?!織斑教官!」

「織斑先生だ」

最早恒例になったやり取りを終え、不意に千冬が頭を下げた。

「すまない」

「なっ?!何故教官が謝るのです!」

「VTシステムを完成させたのは、デストロ・デマイド。私の宿敵とも言える奴だ。私があの日倒していれば、お前は苦しまずに済んだ!」  
「それでも!貴方は悪くない!」

千冬の自責を止めようと、声を荒げた。

「んっ、んっ…」

「っ?!」

その時、隣のベッドから声が漏れた。

「危ない、ステラを起こす所だった」

「ステラ・ターナーも、怪我を?まさか、私が…」

「いや、怪我は大した物ではない。戦闘の疲労が大き過ぎたらしい」

「そう、ですか…。良かった…」

「意外だな。お前はステラを目の敵にしていたのではないのか?」

千冬の言葉に、ラウラは一度俯いた。数秒の沈黙の後、ラウラは千冬の目を見て語りだす。

「はい、確かにそうでした。しかし、あいつは私を許してくれた。そして友達と呼んでくれた。……………希望になると、言ってくれた」

(そんな事があったのか。後でコアの通信のログでも確認するか)

「…あの、教官」

「先生だ。なんだ？」

ラウラの言葉を聞いて、これからの事を考える千冬に、ラウラはもう一度声をかけた。

「私は、あいつの友である資格があるのでしようか？ 傷付け、罵倒し、危険な目にも遭わせた。そんな私に、その資格があるのでしようか？」

「知らん」

「え？」

訓練で分からない所があれば、口下手ながらも常に回答してくれていた教官からの突然の拒絶。その事に驚くラウラに、千冬はいつもの、そしてどこか優しさを含んだ声で語りかける。

「正直、私は友情とかには疎い。親友も変人だらけだったからな」

そう語る千冬の顔はどこか遠くを見ているようで、いつもからは想像も付かない様に優しくかった。しかし、次の瞬間には怒りに燃える様な表情に変貌していた。

「傷つけた？ 罵倒した？ 危ない目に遭わせた？」それがどうした」「っ?!」

「私は友を殺した。手を掛けた訳では無い。だが、あいつらは私のせいで死んだ。だがあいつらは、死ぬ間際も、私を友達だと言った」

「ならば、私は「だが勘違いするな」え？」

「友である事に資格などいらぬ。ただ、共に肩を並べて馬鹿話が出来れば、それは友なんじゃないか？ それに友というのは許可を取つてなるものでは無く、いつの間にかなっているものだろうか？」

千冬の言葉に、ラウラは言葉を失った。まるで雷にでも打たれたかのように。

「ならば教官！ もう一つ聞いてもよろしいですか！」

「なんだ？」

「……………は？」

ラウラの言葉に、今度は千冬が言葉を失った。まるで、鳩が豆鉄砲を食らったかのように。

……………

V Tシステムが引き起こした事件は、一般生徒にはI Sのコアに起こったバグによって引き起こされた暴走とされ、この事件にV Tシステムが関与しているという事を知るのは校内でも限られた人間だけに絞られた。

「はい、皆さん席に着いてください……………」

「え〜つと…何から言うべきなんでしょうか？取り敢えず……………」

真耶がもごもごしていると、扉を開け、シャルロットが入ってくる。

「あれ？」「デュノア君だ。」「何で女子の制服着てるの？」

突然現れた女子の制服を着たシャルロットに、教室がざわつく。

「え〜、その、て、転校生のデュノアさんです……………」

「シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです。よろしくお願ひします。」

にこやかに挨拶を終えたシャルロットはいつもの自分の席に座る。  
すると……………

「ちよつと待って！デュノアく…さんが女の子ってことは、御手洗君は女子と同室だったってこと!?!」

「あ！そういうえば昨日は男子が大浴場使ったって聞いたんだけど?!」

「ってことは、男の子は皆デュノアさんと!?!」

「つておい、ちよつと待て！昨日はちゃんと時間分けて「い〜ち〜か〜!」り、鈴?!」

「とりあえず、死ねえ！」

「一夏危ない！」

その時、ステラは咄嗟に一夏を押しつけた。しかし、一夏は成人男

性程の体格があり、その体を押しした反動でステラはその場に留まってしまうた。

「あ、やばっ」

「ステラ?!ちよ、あぶな」

その時、振り下ろされていた双天牙月が急に空中で停止した。

「そうそう簡単に死なれては困るぞ。私の希望になるのだろうか?」

双天牙月を停止させたのは、シユバルツェア・レーゲンのA I Cだった。

「あ、ありがとう。ボーデヴィツヒさん」

「ラウラでいい」

「え?なら、ありがと、むぐう?!」

その時、ラウラが尻餅をついているステラの顎をクイツと持ち上げて、キスをした。

「むう?!ん、んー!んー!」

「んっ、ぷはあ」

「ふえ?にや、にゃんなの?／＼／＼」

突然のキスへの衝撃と、想定外の深いキスで呂律が回らなくなっているステラに、ラウラがとどめを刺す。

「ステラ、お前が好きだ」

「ふあ?!／＼／＼」

その言葉に、教室中も衝撃に襲われる。

「お前を私の嫁にする!異論は認めん」ぐすつ…馬鹿あ……」え?」

「ラウラの馬鹿あ!私初めてだったのにい!馬鹿あ……!」

ステラは叫びながら、教室を飛び出した。

「ちよ、待てステラ!ちゃんと私の告白を聞け!」

「知るかあ……!馬鹿あ……!」

逃げるステラの目は、暴走とは関係なく赤くなっていた。そして、頬も。

「えっと………」

急な展開に取り残された一組の生徒と鈴は、ぼかんとしていた。

「また騒がしくなりそうだな」

「そうだね。でも、楽しそうで良いじゃん」

数馬の眩きに、シャルロットは笑顔で答えた。

「まあな。それと、これからもよろしくな、”シャルロット”」  
「うん！」

IS学園は一時の安寧を取り戻したのだった。

.....

「何故あんな事をしたんだい?」

暗い部屋の中で、デストロが一人の人に向かいそう言った。

「あの小娘の過去を見せれば、お前の邪魔をする人間を一人を消せる  
と思っただがな。計算違いだったようだ」

「あまり勝手をされても困るよ、○○」

「分かっているさ」

デストロはそう言うとその部屋を立ち去った。そして、取り残された者は静かに近くに置いてあった帽子を被ると同じように部屋を後にした。その姿は、誰が見ても、

男だった。

混乱と出会い    T w e n t y    t h i r d    e p i  
s o d e

「え？理事長室？」

「ああ、理事長がお前達に直接話があるらしい。この後専用機持ちと篠ノ之、それとボーデヴィツヒを連れて来い」

「分かりました」

ラウラの告白から二日後。全ての授業が終わり、生徒達はそれぞれ寮へと帰る支度をしている最中に、千冬がステラに声をかけた。千冬は用件を伝えると、そのまま足早に教室を出て行った。

「なんなんだろう？」

「どうした、嫁よ」

「うん、それがさあ……って！私は嫁じゃない！」

「ふむ、これがクラリツサの言っていた“ツンデレ”という物か」

「違うもん！私デレて無いもん！」

感慨深そうにうんうんと頷くラウラに、顔を赤くしながら反抗するステラ。この二日間で最早定番となりつつあるこの会話だが、ステラは不意にハツとしてラウラに用件を伝える。

「それはそうと！この後理事長室に皆で行くよ」

「結婚の報告か？」

「いや、まだ早いよ！て言うか違うよ！」

「ならば一体なんなんだ？」

「ほら、この前の事件の事じゃない？」

「この前。ああ、あの事か……」

「あ、ごめん。そんな気じゃ……」

「ん？なんだ？私達の馴れ初めの話じゃないのか？」

「だからちーがーうー！むう……」

「どうしたんだ？」

ステラがラウラのボケに突っ込んでみると、専用機持ちと箒が集まってステラ達に話しかける。



「あ、皆。丁度良かった。今から皆で理事長室に来て千冬さんが  
「そうか。なら私は先に寮に帰っておくぞ」

「あ、箒も一緒に来て」  
「私も？」

立ち去ろうとする箒を呼び止めると、箒は怪訝そうな表情をした。

「私は避難誘導しかしてないぞ」

「それなら俺らもだ」

箒の言葉に賛同するように、そして少し嫌そうに言う弾。

「なんでそんなちよつと嫌そうなの？」

「今日はぶら☆くらの再放送開始日なんだよ！」

「ああ！忘れてた！どうしよう！録画してない！」

「ステラ」

「何、簪！」

「録画、昨日しておいたよ」

「ナイス簪！」

そういつてサムズアップする簪に、ステラは思いつき抱きつく。

「ちよ、ちよつと、ステラ！見てる！」

「別に見られても良いじゃん！やましい事ないんだし！」

「いや、そうなんだけど…」

「……………」  
「ジーーーーー……………」

(凄い形相でラウラが見てくる…)

抱きつかれる簪を羨ましそうに、ラウラはジツと睨む。

「つと、本題忘れるところだった。とりあえず、呼ばれてるから行こう  
よ」

簪から離れながら、ステラはそう言った。そのステラの言葉に従  
い、一同は理事長室に向かった。

……………

コンコンッ

「はい、どござい」

「失礼します」

室内からの返事を受け、ステラは扉を開いて室内へと入る。それに続いて一夏たちも室内へと入る。

「ようこそ。そんなにかしこまらなくても大丈夫ですよ」

奥の高そうな椅子に腰掛けるのは、柔らかな表情をする“男性”だった。

「私はこの学園を理事長として取り仕切る、「轡木 十蔵」です」

「男、性？理事長は確か女性のはずでは？」

「表向きは、です。彼女は私の妻ですよ」

セシリアの言葉に、十蔵はにこやかに笑いながら答えた。

「そうなんですの。失礼いたしました」

「いいえ、いいですよ。さて、そろそろ本題に入りましょうか」

コンコンツ

十蔵の言葉を、ノックが遮る。

「はい、どうぞ」

「失礼します。あら、ステラちゃん達もう来てたのね」

「楯無さんに、織斑先生？」

扉を開いて部屋へ入って来たのは、楯無率いる生徒会。そして千冬だった。

「すみません理事長。ドイツ軍のデータへのハッキングは成功したんですが、どこにもそれらしいデータは見当たりませんでした」

千冬の言葉を、十蔵は事前に分かっていたかのように頷く。

「そうですね……ラウラ・ボーデヴィツヒさん」

「はい。どんな処罰も受ける覚悟です」

「ちよ、ラウラ?!」

「良いんだステラ。私は処分されて当然の事をした。お前達も傷つけたんだ」

「でもー!」

「落ち着いてください。誰も処分する気はありませんよ」

「「えっ!」」

十蔵の言葉に、ステラとラウラは揃って間の抜けた声を漏らした。

「ボーデヴィッツヒさん。そもそも貴方は被害者の様なものなんですよ。ドイツ軍は貴方の知らぬところで暗躍した。VTシステムもその一環です」

「でも！発動は私が望みました！あの誘惑に負けて、私は！」

「ならば、仕方ないですね。貴方に処罰を与えましょう」

「理事長。本気ですか？」

そう言った楯無の目には、明らかな敵意があった。それを知ってか知らずか、十蔵は微笑みで返す。

「それでは、ラウラ・ボーデヴィッツヒ。貴方に処罰を言い渡します」

「はい……………」

十蔵の言葉に、理事長室に緊張が走る。

「校内全域の清掃活動です」

「「「え？」」」」

言い渡された処分の内容に、一同は驚きの声を上げた。

「おや？それだけと考えているのですか？この学園の敷地は広いですから、一人はきついですよ。ちなみに、協力は禁止です。見つけたら皆さんも一緒に掃除です」

そうにこやかに告げた十蔵は、立ち上がってラウラの方を見た。

「期待していますよ」

その言葉を残して、十蔵は理事長室を後にした。そして、ラウラの瞳からは涙が零れていた。

「ラウラ、良かったね」

「ああ、これでまた、お前を口説けるな…」

「もう、強がらないの」

無理矢理笑顔を作るラウラを、ステラは抱きしめた。そして翌日の放課後から、ラウラは掃除を始めた。

「ラウラー！手伝いに来たよー！」

「おい！お前も指導くろう気か！」

「え？うん」

「お前な……………」

ステラの当たり前前かの様な口ぶりに、ラウラは呆れた様な声を出し

た。

「ていうかラウラこそ、理事長先生の話聞いてなかったの？」

「どういうことだ？」

「手伝わたら罰で掃除なんですよ？なら皆でやった方が早いってなつてね」

「皆？」

ステラの言葉に、ラウラは首を傾げる。

「二」「私達の事だ（よ）！」「三」

「おわあ?!」

急にステラの後ろから飛び出してきた一組のメンバーにラウラは後ずさった。

「なんで俺まで…」

「おい弾。この期に及んで文句言うなよ」

「俺達は仲間だ。お前が罰を受けるなら、俺達も相乗りするぞ」

「御手洗…」

「数馬でいい」

数馬の言葉に、ラウラは涙ぐむ。そして涙を拭い、笑う。

「ありがとう、数馬。皆！」

「ちよつと！勝手に終わってんじゃないわよ！」

「あれ？鈴も来たの？」

「逆に来ないと思った？」

そう言って笑う鈴の後ろには、二組の生徒が居た。

「ううん！鈴大好き！」

鈴に抱きつこうとするステラを、後ろからラウラが抱き着いて止める。

「うえ？何してるの？ラウラ」

「ありがとう、ステラ。お前が居なかったら、私はきつとこんな気持ちを知れなかった。私はお前が大好きだ」

「うん。私も大好きだよ、ラウラ」

「ちよつと待って。まだ私達もいる」

「あ、簪だ！来てくれたの？それに、三組の人も？」

簪の後ろには、四組だけではなく三組の生徒達がいた。

「いや、ここで来ない訳には行かないじゃん！」

「そうだよ！皆でやる！」

三組の生徒達は勢いよく答えると、一斉に掃除道具を掲げた。

「ちよつと待ちなさい。私達を忘れていないかしら」

その雰囲気をも、一つの声が遮る。

「この声は、まさか！」

「天が呼ぶ。地が呼ぶ。人が呼ぶ。そして可愛いステラちゃんが私を呼ぶ！」

「何格好つけてるんですか会長」

そしてその声も遮る声。

「もう！せっかく決めてたのに！」

「楯無さん！来てくれたの?!」

「私達だけじゃないわよ？ほら！」

その声と共に、楯無の後ろから数え切れない程の生徒達が集まる。その胸のリボンの色はどれも、一年のものではなかった。

「うお?!」

「全校生徒、集めてみました！」

「な、なんか無駄に多いな」

「ハハハッ…」

箒の呆れた様な声に、シャルロットは苦笑する。

「でもまあ、こういうのも偶には良いんじゃない？」

「そうですね」

鈴の言葉に、セシリアは微笑む。

「それじゃあ！全校生徒による罰則、校内全体清掃！始めるわよー！」

「！！！！おー！！！！」

楯無の言葉に、全校生徒は掃除道具を空に掲げた。

そこからの掃除の速度は異常だった。かのIS学園の生徒達が、放課後の自主練すらも忘れて毎日掃除に明け暮れた。

そして、理事長室からその光景を見守る二人。千冬と十蔵だ。

「理事長は、最初からこうなると分かっていたのですか？」

「はて、何のことかさっぱり」

そう言う十蔵の顔は、穏やかだった。

「こんな日々が、いつまで続くんでしようね」

「それは一体？」

「今朝方、各I Sを保持する全ての国家に、脅迫文が送られました。そして(ここ)にも」

その言葉を発する十蔵の顔は、険しかった。

「っ?! 一体何者ですか？」

「デストロ・デマイド。貴方の友達ですよ」

「違います! あんな奴は、友達等ではありません! あいつは!」そこまで千冬「っ、し、師匠?」

激高する千冬を扉からの声が宥める。

「やつほー、ちーちゃん」

「束まで! 理事長、これは一体」

扉から入ってきたのは『篠ノ之 柳韻』と束。柳韻は箒と束の実の父親で、箒に剣を、束には力の使い方を教えた。

「お久しぶりです、十蔵さん」

「ええ、久しぶりですね」

「お二人は、お知り合いなんですか？」

「ええ、貴方達が小さい頃は、よく彼に稽古をつけていましたからね」  
「やめてください。あの頃はまだまだの未熟者でしたから」

(師匠が敬語を使っている…。理事長の顔はどれ程広いんだ)

(敬語使うお父さんとか新鮮すぎる…)

二人の關係に困惑する千冬達だったが、すぐに表情を正した。

「それで、今回俺を呼んだのは?」

「それは、三人が私の共犯者になってくれるという事でよいのかな?」  
「共犯者?」

十蔵の言葉に、千冬は疑問符を浮かべた。そして、十蔵の口から語られた言葉に、三人は戦慄を覚えた。

混乱と出会い Twenty fourth Ep  
isode

「こんな所に呼び出して、何の用？」

「あ、スコールにオータム。久しぶり」

「久しぶりだな」

「千冬もいんのかよ。一体何事だ？」

「ここは、束のラボ。以前ステラ達が訪れた人工島の地下にある施設だ。今は夜中で、束と千冬は十歳からの指示でここにスコールとオータムを呼んだ。」

「実は、デストロの目的が分かった」

「本当?!」

「聞かせろ、今すぐ!」

千冬の言葉に、スコールとオータムは身を乗り出した。

「落ち着け。奴は逃げるが、私は逃げん」

「そ、それもそうね。ごめんなさい」

スコールは身を引いて謝罪する。オータムも少し納得出来なさそうにしたが、引き下がる。そして、それを見て束は空中投影型のディスプレイで地図を表示する。

「昨日、世界のISを保有する全ての国とISに脅迫文が送られたのは、亡国企業にも情報が入ってるでしょ?」

「ええ。そのおかげで今こっちは大忙しよ」

「この気に乗じてか、テロリスト共も動き出したしな。何処から情報漏れたんだよ」

「まあ、十中八九デストロだろうな」

千冬は呆れた様に頭を抱える。

「けど、ならデストロはなんでそんな事を?彼の目的は世界のエネルギー支配だった筈よね?」

スコールは以前千冬から聞いたデストロの言葉を思い出しながらそう問いた。

「奴があの状況で本当の事を言った保証は無い。それに、“私達”の元に声明も届いているしな」

「声明？」

「これだ」

そう言つて千冬は、一枚の紙を取り出した。

「コピーだから自由に扱え」

「分かったわ」

スコールはそれを受け取ると、紙に書いてある文を読み出した。

《親愛なる友へ

やあ、君達に手紙を書くのは初めてだね。まあ書いても君達は受け取らないか。と言う訳で、今回は脅迫文という形で送らせてもらうよ。

僕が脅迫文を全てのIS保有国に送つたと言うのは、もう既に知っているよね？これは僕が本当に起こしたかった事だ。エネルギー支配なんてやろうと思えばいつでも出来たからね。そして、君達三人の共通認識を正そう。ベリアルは僕の作ったエネルギー発生装置では無く、意思あるエネルギーの塊だ。それをこの星におびき寄せるのが僕の目的さ。

ここからが本題だ。ベリアルは争いの産む負の感情を好む。僕が言いたい事、分かるね？

まあ、そんな訳だから、精々頑張つてね。

デストロ・デマイドより》

「要するに、デストロはこの星にベリアルというエネルギーを落としたい訳ね」

「何考えてやがる！そんな事したら、地球ぶっ壊れるぞ！」

「そうね。それが目的かもね」

オータムの激昂の声に、物陰から何者かが答えた。

「っ?!蓮！何故ここに？」

声の主は蓮だった。蓮の姿はトリガー装着時の状態で、手は何かを握っていた。

「お土産を持ってきたわ」



蓮の手に握られていたのは、ISのコアだった。

「れーちゃん。それを何処で?」

「安心して。これはどこの国にも属さないISよ。つまりはデストロの作った物ね」

「やっぱり、そっか。デストロは私のデータを見た事がある。だから作れるんだよ」

「見た事があるだけだろ?なら普通作れねえだろ」

「普通なら、な」

「どういう事?」

千冬の含みのある言い方に、スコールは反応する。

「あいつは、純でさえ読み解くのに三日かけたISの理論を纏めた資料を、一日で理解した。その頭脳は悔しいけど本物よ」

「純……………確か、どこでもドアの設計理論を考案した五反田 純よね?」

「ええ。そして、私が誰よりも大切だった人」

蓮の表情は穏やかだったが、その心はドス黒いもので支配されている。その事に気付いた四人は、少し後ろめたい物を感じて、自然と沈黙した。

「と、とにかく……………デストロは完成したコアを作れる可能性がある。警戒が必要だ」

「そうね」

「それじゃあ、今日は帰るわ。三人共、気をつけた方がいいわよ。今の世の中、いつ誰に狙われるか分からないわ」

「分かっているさ。二人も気を付けろよ」

「ええ」

「サンキュー」

二人はそう言ってラボを出た。

「……………蓮は、これからどうするんだ?」

「少し、旅でもしようかしら。あの子に倣ってね」

「ああ、あいつか。いいと思うぞ。もし会ったらよろしくな」

「ええ。それじゃあ、また」

蓮は、トリガーを解除しながら部屋を出た。

「さてと、私も帰るか。じゃあな」

「うん。バイバイ、ちーちゃん」

そして千冬も、その場を去った。

「さてと、クーちゃん！夜ご飯作ろー！」

東は大声でクロエを呼んだ。だがその声に答える声は、いつまで経っても聞こえない。

「あれ？クーちゃん？どこ行ったの？ねえ？クーちゃん?!」

いつまで経つてもクロエが応えない事に異変を感じた東は、少しずつ焦りだした。

「ねえクーちゃん！返事をしてよ！ねえ！どこ?!」

東は咄嗟にクロエの持つ I S 『黒鍵』の事を思い出し、GPS を使  
い場所を特定しようとした。

「……………え?」

だが、東島の何処にも、黒鍵の反応は無かった。

「どう、して?クーちゃん?クーちゃん!何処にいるの?!イタズラだ  
よね!そうなんだよね?!」

東の声は、たった一人しかない島に、木霊した。

……………

「なあ、スコール」

「何?」

帰りの船の中で、オータムは星を眺めながら呟いた。

「多分、戦争が起こるよな。そうだったら、また人が……………」

「そうさせない為に、私達がいるんでしょ?もうあの日の様には、させ  
ない為に」

オータムを抱きしめながら、スコールは慰める様に言う。

「そう、だよな。そうだ。もう、あんな事は起こさせない」

二人は、ゆっくりとキスをする。

「ようやく見つけたよ」

しかし、それを妨害するように、赤い光を纏った機体が降下してきた。

「貴方、何者?!」

「千冬達から聞いていないかい? まあ、彼女達が僕の写真なんて持つてる訳ないか。僕の名前は、デストロ・デマイド! 世界で最初の男性操縦者さ!」

「っ?! てめえがそうか! てめえが!」

オータムはそう叫びながらアラクネを展開しようとしたが、何故かアラクネは反応しなかった。

「なんでだ! なんで反応しない!」

「ここら一体にISを展開出来ない特殊なフィールドを作った。これで君達は、戦えない」

「何が目的?」

デストロの言葉に、スコールは何かを察した様に問う。

「スコール・ミューゼル。君には僕に付いて来て貰う」

「ふぎけん! なんでスコールを!」

「ちよつと黙ってくれ。君には用はない」

ドンツ!

「うわっ?!」

デストロは近くの水面に光弾を放ち、その衝撃でオータムを気絶させた。

「オータム! やめなさい! オータムを巻き込まないで!」

「別にいいけど、それなら…分かるよね?」

「……………行くわよ」

「物分りが良くて助かるよ」

ドスツ!

「うっ?!」

デストロはスコールの鳩尾を殴り気絶させると、抱えて空へと浮き上がる。

「さてと。これで二人目だ」

怪しい笑みを浮かべながら、夜の闇に赤い光だけを残して溶けて

い  
っ  
た。  
。

# 混乱と出会い Character introduction

ステラ・ターナー

本作の主人公。

EDN―3rdを救った英雄、ブレンとティキの間に生まれた女の子。アカデミーに新たに創設された小等部と中等部の内、小等部に所属していた。

組織内の内乱の際に戦闘センスを買われて戦闘要員として戦場に出た。そしてその際現れた未確認のVSとAKエイクリッドの内VSの討伐隊に選ばれ、その時にギンギラに新たに搭乗者登録して2代目の操縦者となった。

地球に来た際に束に拾われて、ギンギラの修理と自分の治療をして貰った事に恩義を感じてIS学園に入りたいと思う様になる。その後織斑家に預けられ、第2の家族として大切に思っている。

IS学園の推薦入試に合格する程の頭脳を持っているが、基本的に天然なため結構細々としたミスをする。

前述にあるブレンとティキの間に生まれたというのは、単に二人が愛し合った故ではなく、EDN―3rdにいた科学者が二人の血液等から作り出した人工生命体。

織斑 千冬

一夏の実の姉。

第1回モンド・グロツソの全部門優勝者。全世界の女性から世界最強と慕われているが、本人は嫌がっている。

ISの開発者の束とは親友で、学生時代に非常に高い身体能力を活かしてよくテストパイロットをしていていた。そしてもう一人のIS開発者のデストロの行方を常に探している。

使用するトリガーは「孤月」。グリップ型の待機状態から起動させて、実際の体を拡張領域の理論を応用して作られたエネルギーの体と

交換する。武装は刀型のビームソード二本。

五反田 蓮

弾の母親で、千冬と東の同級生。

明るい性格で、客からの人気も（蘭に次いで）高いが、東や千冬の前だと口調や性格がサバサバした物に変わる。

高校時代から付き合い、そして結婚した純をデストロに殺されてから復讐をその胸に誓っている。

使用するトリガーは「スコープオン」。武装はエネルギーで形状や出現させる場所を自由変更出来る。

五反田 弾

一夏の中学校からの友人。

アニメや漫画、ゲーム等が好き。ステラもその影響を受けてアニメや特撮をよく見るようになった。

赤髪に黒いバンダナがトレードマーク。

一夏がISを動かした事で全世界で行われた適性検査で、同様に起動させてしまった。

使用するISは「エクシア」。弾の見ていたロボットアニメからアイデアを取り入れて作られた機体。武装は多いが、東の製作時の拘りで武装は拡張領域では無く装甲等にマウントしてある。

御手洗 数馬

一夏の中学校からの友人。

常にハードボイルドを志していて、冷静さを欠く事は滅多にない。数馬をよく知る者からはハードボイルドだと認められているが、本人はそれを否定し「俺はまだただのハーフボイルドだ」と評している。弾とは幼い頃からの友人で、普段は言わないが互いを親友だと認めている。

一夏がISを動かした事で全世界で行われた適性検査で、同様に起動させてしまった。

使用するISは「フィリップ」。数馬の愛読する小説の主人公の名前から名付けられた。能力は三つの属性と三つの武器を組み合わせる事で発動される。

津上 翔一

一夏達のクラスの担任。

家庭科の教師で、料理の腕は一流。ダジャレをよく言うが、毎回スベる。

一夏がISを動かした事で全世界で行われた適性検査で、同様に起動させてしまった。

使用するISは「アギト」。束が翔一の為に開発した次世代型のIS。その性能は能力を完全解放すれば千冬にも勝るとも劣らない。

更識 簪

代表候補生でありながら自分の専用機が男性操縦者用のISの開発の煽りを受けて完成されず、ずっと専用機関係の行事へ参加できなかった。

かつて姉の楯無がそうしたように、専用機を自ら組み上げることでコンプレックスを解消しようと努力するもうまくいっていなかったが、クラス代表決定戦の夜にその事をステラに知られてそこから互いの得意分野を分けて担当してシステムの基盤までを二人で完成させた。

尚、その開発には整備科の手伝いや束の協力で本来の設計を大きく上回る性能となった。

轡木 十蔵

IS学園本来の理事長。表向きは彼の妻が理事長を務めている事になっている。

幼少の頃に一度だけ筈や束に会っており、二人の父親の篠ノ之 柳 韻とは師弟関係にある。

篠ノ之 柳韻

箒と束の父であり、篠ノ之神社の神主。また篠ノ之道場の当主でもある。

厳格な人物。箒が純粹にその力量に憧れ、目標としている人物。重要人物保護プログラムにより現在には行方不明となっていたが、束と十蔵の政府との交渉により、一時的に解放措置を施されている。

若い頃は十蔵に弟子入りし、力とは何たるかを学んだ。

デストロ・デマイド

千冬達が中学生の頃に突然現れた青年。

転入当時は好青年を気取り、殆どの生徒から好意的な印象だったが、束を除く物理研究部からの信頼はゼロだった。

使用するISは「ゼニス」。最初期に開発されたISの内の一機。ギンギラと同じくISとVSのハーフ機である事が判明したが、その機体の入手の経緯等は未だ判明していない。



確かな歪み

## 海上の激戦 First Episode

「もー！一夏遅い！皆待ってたんだよ!」

IS学園の校門で、ステラは頬を膨らみながらそう言う。その後ろには、一夏を除く全員が集まっていた。

「悪い悪い！途中でなんか千冬姉がこれ持っていけって」

一夏はそう言いながら小さな端末を取り出してステラに渡した。

「なにこれ？」

「束さんからステラにつて。なんか、ISのデータらしいけど」

「あー！あれね！流石、束さんは仕事が早いなあ」

「どんなデータなんですの？」

ステラが端末を起動させてデータを見ると、セシリアが覗き込みながら質問する。

「私達の戦闘データとギンギラの改修案。私が送ったデータで束さんに作って貰ったの」

「改修案？」

「うん。ギンギラのセカンドシフトを待つより、その方が良いかなつて」

『しかしマスター。私とマスターの相性は必然的に高くなります。私の感覚的にも、もうすぐだと思うので、その必要は無いのでは?』

ギンギラの言葉に、ステラは少し考えて少し儂げな目の笑顔で答えた。

「私には、倒さなきゃ行けない人がいるから」

「……………デストロ・デマイド、か」

「うん」

ステラの言葉に、ラウラは恐る恐る聞く。その声を聞いて、ステラは穏やかな表情で答えた。

「つと、こんな暗い話は置いて、早く行く?」

いつもの笑顔に戻ったステラは九人の前に立って先導する。

「そうだな。早く行かないと混むかもしれない」

「ああ、行こうぜ」

ステラ達はIS学園のモノレール乗り場からモノレールに乗り込み、市内最大のショッピングモール、レゾナンスに向かった。

.....

「いやー、ここに来るのも久しぶりだな」

「そうだな。IS学園にいる間は出かけられなかったしな。トラブル続きで」

「「うっ……」」

なんとなく心当たりがあるのか、セシリアとシャルロットとラウラは少し狼狽えた。

「あまり言っちゃるな、弾。別に望んでトラブルを起こしてた訳じゃ………いや、待てよ?」

「そ、それにしてもここは広いですわね!」

「そ、そうだな!ドイツでもこの手の場所はあったが、ここは頭一つ抜けているな!」

尚更に心当たりがあったのか、セシリアとラウラだけが変に話題を変えた。

「(今すっごい誤魔化した…)ほらほら、あんまり虐めないの。早くしないと水着売り場混んじやうよ?」

「そうだな」

十人の目的は、来週から始まる臨海学校への遠征に備えて水着を購入する事だ。

「あれ?売り場が男性用と女性用で分かれてる。前までこんなのがあったっけ?」

「どうせ女尊男卑の影響が出たんだろ」

「だろーな」

数馬が呆れたように言うと、弾もそれに同意する。

「とりあえず、買い終わったらここに集合ね」

「オツケー。じゃあ解散」

十人は、男子組と女子組で分かれてそれぞれのコーナーへと進んだ。

.....

「って言っても、水着とか大して拘りねえし」

「すぐに終わるよな」

「二人はどんなのにしたんだ？」

そんな雑談をしながら、一夏達は水着売り場から出てきた。

「俺のは、ただ黒いだけだ」

「俺のはエメラルドグリーンと白の柄つきだよ。なんとなくカラーリングエクシァに似てるし」

「そう言う一夏はどうなんだ」

「俺のは普通に白だよ。青いライン入った」

一夏の質問に数馬はそのまま返す。そして一夏もそれに答えて少し袋を持ち上げた。

「んじゃあアイツら待つか。どうせ時間かかるだろ」

「おう」

「だな」

弾の言葉に一夏と数馬が同意した所で、一人の女性が近付いてきた。

「ちよつとそこの男。これそこに戻しといて」

「は？なんでだよ」

「なんでって、あんたらが男だからでしょ」

「はあ……そんな事も出来ねえ様じゃダメ人間になるぞ？」

「やめろ、弾。もう遅い」

弾と数馬の二人がかりの毒舌。それを受けて女性はあからさまに機嫌を悪くしていた。

「な、何よ！あなた達、女である私に逆らうわけ？！ISにも乗れない男の癖に？」

(セシリアだ)

(またこれか)

(セシリアの再来だな)

その頃女性用コーナー。

「へっくしゅんっ!だ、誰か私の噂をしていますの?」

「ただの風邪じゃないの?」

「え?風邪?セシリア大丈夫?」

「ふふっ、大丈夫ですわ」

そしてその外。

「ならあんたはどれだけISを動かせるんだ?」

「動かせないわよ。あなた達知らないの? ISは国家代表候補生とかじゃないと「あれ?そんなに偉そうにしててIS学園行ってねえの?」……え?」

「そんなにISの事語つといて、まさかIS学園卒業してないって訳じゃ、ないよな?」

「そうだな。先程の熱弁っぷりでIS学園に行つてもいないとなるとただの知ったかぶりって事になるが、そんな訳がないよな」

「あなた達いい加減にしないと、警備員呼ぶわよ?!私が証言さえすれば、あなた達なんてすぐに捕まって「残念だったなあ。実に残念だ」「ああ、同意だ」何よ?!今度は何!」

女性が声を荒らげるが、弾と数馬はそれぞれ呆れたような仕草でそれを一蹴する。

「もう少し〃お勉強〃した方がいいぜ?」

「これを見れば、少しは気が収まるか?」

数馬はそう言いながらポケットから生徒手帳を取り出した。

「さて問題です。俺達は、だーれだ?」

「ま、まさか男性操縦者?!」

「さて、どうする?ここで警備員を呼んで社会的地位を下げるか。それともこのままその商品を自分で戻して帰るか」

「くっ!もういいわ!」

女性は、そのまま商品を棚に戻して逃げる様に人混みに消えた。

(俺、完全に空気だったな……)

.....

「うーん……どつちにしようかなー」

「ステラ、どうしたんだ？」

両手に水着を持って悩むステラに、箒が声をかける。

「あのね。このフリル付いてるのか、何も付いてないで星マークが書いてあるの。どつちがいいかなあつてずっと悩んでるの。箒はどんなの？」

「私のはこれだ」

箒はそう言いながら、白に黒のラインが入った水着を取り出す。

「なるほど。箒らしいシンプルなデザインだね」

「そうか？私としてはもう少し落ち着いたイメージの。それこそ学校の水着とかでも良かったんだが」

「待つて箒。それは箒の属性じゃない」

「何を言っているんだ？」

ステラの言葉に、箒は困惑する。

「ねえ、ステラ。私のどう思う？」

箒と話している所に、鈴が話しかける。その手には、オレンジ色の水着を持っていた。

「いいんじゃないかな。鈴はよく動くしそのくらいの方がいいと思うよ」

「やつぱりそうよねえ。ん？ステラのそれ可愛いじゃん。二つ買うの？」

「いや、私そんなにお金持ってないよ……」

「なら、私が買って差し上げましょうか？」

そこに、セシリアも加わる。

「いや、流石にそれは出来ないよ」

「ならば、私が奢ろう。先日軍からの配給があつてな」

セシリアに続く様に、ラウラも同じ様な事を言う。

「いや、だから」

「もし、二人ともそこら辺にしときな？」

「そうだよ。ステラが困ってる」

そこに、助け舟を出すシャルロットと簪。

「ですが、やはり欲しい物は我慢せずに買うべきです」

「そうだ。我慢しすぎるとストレスが貯まるぞ」

「そうだけどね。でも水着なんて着る機会滅多にないし」

「「「「んー……」」」」」

ステラの言葉に、全員が唖る。

「なら、夏休みにプールに行こう」

「プール？」

「なるほど、その時に持っていくのと今回臨海学校の。そういう事だよね？ラウラ」

ラウラの言葉の意味が分からずにぽかんとするステラの後ろでシャルロットが納得したような声を出した。

「あー！そういう事か！ラウラ天才！」

「ふふん」

ラウラはドヤ顔気味に鼻を鳴らす。

「それなら、夏休みの予定は空けとかないといけませんわね」

「そうだな。楽しみだ」

「それ考えると、僕も二つ買おうかな？」

「あー、私も」

「私も買いたいけど、今度発売のゲームの為に無駄遣い出来ない…」

「あ！忘れてた！どうしよう！」

女子組はまだ始まったもない夏休みに思いを馳せながら、談笑する。するとそこに

「おーい！そろそろ昼なんだけどー！」

「え？あ、ごめん！忘れてた！」

買い物が終わって二十分程待たされていた男子組からの催促の声が、水着売り場に響く。

「さてと、それじゃあ……………簪！今度ゲーム買ったら一緒にやら

せて！」

「うん、いいよ」

「よし！これで予算内でギリ行ける！」

「だから、私が奢ると」「それはダメ！」むう、頑固だな」

ラウラの申し出を断り、ステラは水着をレジに持つていこうとしたその時。

「ん？なんだ、お前達も来ていたのか」

水着コーナーの入口に、堂々たる立ち姿が一つ。

「え？千冬さん?!」

ブリュンヒルデ  
世界最強、織斑 千冬だ。

「ふむ、二つも買うのか。貸せ、私を買ってやる」

「いや、いいですよ！私のお小遣いで買えます！」

千冬の言葉に、ステラはやや不貞腐れた様に言う。

「私はお前のなんだ？」

「え？大切な人です」

「うむ。望んだ答えでは無いが嬉しいぞ。私はお前を束に任された、保護者の様な立場だ。それに、去年誕生日プレゼントを買ってやれてなかったしな。その分だ」

「うっ、それはセコい……」

千冬の言葉に、ステラは少し狼狽えるように後ずさる。

「お待ち下さい教官！ここは私がステラに奢ります！」

そこに、ラウラが割って入る。

「いえ、ここは私セシリア・オルコットが頂きますわ」

そしてセシリアも横から入る。

「ほう？小娘が、私と張り合うか？」

謎の火花を散らす三人に、ステラは首を傾げる。

「えつと、これは何の争い？」

「ステラは知らなくていいよ」

「うん、知っても多分分らないし」

「まあ、別に本気で争ってる訳じゃ無いから大丈夫だ」

「どーせすぐに千冬さん勝利で終わるしね」

「？」

四人の言葉に、ステラの疑問は深まるばかり。

「なあ！まだかー?!」

そして、男子組の不満も深まっていた。



## 海上の激戦 Second Episode

「おおー！海だー！」

バスの窓に張り付き、ステラが目を輝かせながら歓声を上げる。

「ねえラウラ！海だよ！ねえ海！」

「ああ。そうだな」

ラウラはそんなステラに癒されながらも、返事をする。

「そこ、ちゃんと座れ。小学生か」

「だって！海なんてまともに見るの初めてなんだもん！」

「そうなのか？」

ステラの言葉に、ラウラは不思議そうに首を傾げた。

「うん。一夏の家に入ってから私は私自身がドタバタして行く暇なかったし」

「ならいつか皆で行こうよ」

その会話に、後ろからシャルロットが参加する。

「それいいね！」

「いや、というより今から行くんだろ」

「もう！一夏は分かってないなー！臨海学校は学校の行事じゃん！皆で行くから良いの！」

一夏の言葉に、ステラは拗ねた様に言った。

「そろそろ到着する。全員しっかり席につけ」

「「「はーい！」」」」

千冬の言葉に、バスに乗っている全員が返事をする。そして程なくして、一行は宿泊する旅館『花月荘』に到着した。

「ここがお前達の宿泊場所だ。くれぐれも従業員に迷惑をかけないように！」

「「「はい！よろしくお願いします！」」」」

「うふふ。今年の一年生も元気があっていいですね」

そう言って旅館の女将は微笑む。

「あら、こちらが噂の……？」

一夏達男子組に目を向けた女将さんが千冬に尋ねる。

「ええ、まあ。今年は男子が教員を含めて四人いるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ございません」

「いえいえ、そんな…それに、三人共しっかりしているじゃないですか。それに、津上さんも」

「そう言つて貰えて助かります。三人共、挨拶をしろ。津上先生も」  
「そう言つて千冬は少し後ろに下がった。」

「織斑 一夏です！よろしくお願いします！」

「五反田 弾つす。よろしくです」

「御手洗 数馬です。よろしくお願いします」

「あ、俺も？津上 翔一です！」

「うふふ、ご丁寧にどうも」

「そう言つて女将はまた丁寧にお辞儀をした」

「出来ない弟と生徒がご迷惑をかけます」

「あらあら…織斑先生ったら、三人にはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので…ほら、お前たちも荷物を取つてっい」

「そう言われて男子生徒三人はバスから自分の荷物を取った。そしてそれを見て千冬は全員に指示を出した。」

「部屋割りは既に頭に入っているだろう。部屋で荷物を置いた後、自由行動とする。では解散！」

「「「はい…」」」」

「千冬の号令に、全クラスが動き出した。」

「なあ、千冬姉」

「ギロツ」

「…………織斑先生、俺達の部屋って何処ですか？」

「一夏は千冬に睨まれ、呼び方と態度を改めてからもう一度訊く。」

「貰つた部屋割りに書かれていないんですが」

「お前達の部屋は教員部屋だ。盛った女子生徒が夜布団に忍び込んできても困るだろう？」

「あー、そういう」

「あざーす」

千冬の言葉に、数馬と弾が答える。そしてそのまま四人は旅館の建物に入って行く。

.....

「ねえ、一番星ちゃん」

「ん？どうしたの？本音」

小さなバッグを肩から下げたステラに、後ろから本音がゆつたりと声をかけた。

「今から海行くの？」

「うん。そうだよ」

「一緒に行こう？」

「うん！いいよ」

本音の間に、ステラは笑顔で答えた。

そして、ステラと本音が更衣室に向かっていると、渡り廊下の横の地面に、うさ耳が刺さっていた。

「もうこれだけで分かっちゃう私は重症かな」

「わく、うさぎ博士だく」

あの食事会以来、本音は束の事をこう呼んでいる。

「抜こうかな…」

ステラが少し疲れた様に歩いて行き、うさ耳を引っっこ抜いた。

「ありや？」

キーーーーーンッ！

しかしそこに束の姿は無く、そのタイミングで上空から空気を切り裂く様な音が響いた。

「そっちかー…」

ステラの眩きと同時に、目の前に人と同じくらいの大きさのニンジンが突き刺さった。

「やっほー！スーちゃん久しぶりー！」

「うわあ?!」

突き刺さったニンジンの一部が展開し、そこから束が飛び出して来



た。

「さてと、行こっか！」

「うん！」

ステラは鈴と手を繋いで走り出した。

「一番星ちゃんもしよお？」

「うん！」

近くの砂浜では、本音達がビーチバレーをしていた。

「一番星ちゃんもしよお？」

「うん！やるやる！」

中にいた一人の生徒と交代して、ステラは構えた。

「いっくよー！」

それから三十分程、互いに拮抗した状態で試合をしていると。

「ビーチバレーか。中々活発だな」

「千冬さん！千冬さんも一緒にやろー！」

「織斑先生だ。まあ、今はいいか」

千冬は笑いながらコートの中に入った。

「おい、その男子三人も入れ。それと、津上先生もどうですか？」

千冬は近くにいた一夏達と翔一に声をかけた。

「え？いや、いいけど人数足りなくね？」

「大人二人とも子供四人。丁度いいハンデだろ」

（千冬さん、もしかして津上先生と一緒にやりたいだけなんじゃ）

ステラはそんな事を考えていた。何故ステラがこう考えたかと言

うと、それは臨海学校の二日前の夜。

.....

「なあ、ステラ」

「ん？どうしたの？千冬さん」

ステラが千冬の自室で荷造りをしていると、千冬が唐突に真剣な顔でステラを見た。

「最近、妙に津上先生を意識してしまっただ。確かにあの人に料理を

習いたいとは思いますが、ここまで意識するのはおかしいと思うんだ。そこから辺、お前の意見を……おい、何故そんなに目を輝かせている」自分の状態を話しながらステラの顔を見た千冬は、ステラの目がキラキラと輝いている事に気が付いた。

「それは恋だよ！千冬さん津上先生の事好きなんだよ！」  
「なっ?!」

「そうと決まれば、レッツアップローチ！」

「ま、待て！決めるのが早すぎるぞ！」

「あれ？否定しないの？」

千冬は顔を真っ赤にした。あのいつも冷静な千冬がだ。

「だとしても、私等では釣り合わんだろ！」

「世界最強ブリュンヒルデが何言ってるの?!大丈夫だよ！千冬さん綺麗だもん！」

「き、綺麗?!私がか?!こんな、戦いばかりの女がか?!」

「どれだけ自分を低く見てんの！」

千冬の自虐に、ステラは飽きた様に言う。

「あのね?そういう気持ちには素直になった方がいいんだよ？」

「そ、そうなのか？」

……

(とは言ったものの……素直になり過ぎでしょ)

ステラは構えながらも、心で苦笑した。

「皆、行くぞ！」

「ああ、叩き潰す！」

「俺達が終わらせる」

「なに、この無駄な決戦感……」

「フツ、お前達が私を倒す?寝言は寝て言え」

「あの、織斑先生？」

男子組と千冬のふざけに付いていけないステラと翔一はただ困惑するしか無かった。

「せーっの！」

一夏は、ボールを高く投げて飛び上がった。

.....

「おぉー！相当豪華だな！」

「ポテトはねえのか……」

「流石はIS学園が使用する宿、と言った所か」

「お、お刺身！それにこのマグロ、身が引き締まってる！超高級食！」

「それは中々、美味しそうね」

「うん。凄く美味しそう」

「わぁ、お刺身だぁ」

旅館の夕食はかなり豪華だ。その食事に日本料理に慣れた者は息を飲んだ。だが、セシリア等の外国から来た生徒達はその料理の気品と美しさに目を奪われた。

「なんと落ち着いた気品っ！」

「こんな料理、中々ありつけないよ」

「日本の料理とは、ここまで美しいのか」

「美味い！本わさが効いてる！」

「本わさ？ねえ数馬、本わさって何？」

「単純に言えば、国産のわさびだ。市販で売られているものは、輸入品や粉末にしたわさびを練ったチューブのものが多いからな。それと区別するための呼び方だ」

「ふーん……それじゃあわさびって？美味しいの？」

「ああ、美味いぞ」

「へー、この緑のがね……」

そう言いながらシャルロットは箸でわさびを掴み、口に運んだ。

「っ?!か、からひっ?!」

「ええ?!シャルロットそのまま食べちゃったの?!一夏みたいに、お刺身につけて食べるんだよ?」

「さ、さきにいつへ……」

「すまん。まさかそのまま食べるといふ発想に至るとは思わなかった」

「あ、でもステラも二年前に」

「わー！このお刺身美味しー！弾も食べてみて?！」

何かを言おうとした弾の口に、ステラが刺身を突っ込んだ。

「フフツ、ステラさんも可愛い所がおありなのですね」

「わざわざ察しないでよー！」

ステラは顔を真っ赤にしながら手をブンブンと振った。それを暖かい目で、千冬が見ていた。

「織斑先生、以前から気になっていたんですけど、ターナーさんとはどのような関係なんですか？」

「そうか。山田君には話していなかったな。知り合いに預けられたんだ。それ以来、家族として私の家にいる」

「そうだったんですか。大切になさってるんですね」

「ああ」

素っ気ない言い方ではあったが、千冬の顔は、普段より格段に穏やかだった。



## 海上の激戦 Third Episode

「ふっ、あつ、んん！バカっ、痛いよ一夏……」

「ごめんごめん。けど、気持ちいいんだろ？」

「そう、だけど、んあっ！」

ラウラは、耳を扉に付けて中から聞こえる声に肩を震わせていた。

「あら？ラウラさん、どうしたのですか？」

「そこ、織斑先生の部屋だよね？」

「あなたパツと見変態よ？」

「む、セシリア達も来たのか。丁度いい。扉に耳を当てろ」

後ろから声をかけられてラウラが振り返ると、そこには箒と本音を  
含んだ専用機持ちが集まっていた。

「ん？」

「なんですの？」

「別にしようもない様な事ですよ」

「は、あつ！痛い……一夏、そこはダメエツ！」

「我慢しろよ。溜まってたんだろ？」

「でも、んにゃあー！」

「……………」

「おおお、一番星ちゃんもおさかんだねえ」

扉の向こうから聞こえる声に、本音を除いた全員が絶句した。

「えっと、この声って、一夏とステラ？」

再び訪れた沈黙をシャルロットが辛うじて破る。

「一夏、後で私にもしてくれ。私も最近溜まっているんだ」

「……………」

次に聞こえた千冬の声に流石の本音でも驚いたのか、元々殆ど閉じていた目を半開きにした。

「今はステラの番だろ？後でな」

「全く、相変わらずだな」

「そうだな。あー、寝みい」

「ちよっと！数馬と弾もいるじゃない！」ヒソヒソ

「どういう状況なんですの?!」ヒソヒソ

ドアの前で小さな声で話すセシリア達は気付いていなかった。

スタツスタツスタツ

ドアの向こうから聞こえる足音に。

バタンツ!

「盗み聞きとは、いい趣味をしているな」

「わあ?!数馬!」

扉を開いたのは、数馬だった。その後ろには、半眼で怠そうにしてる弾も居た。

「お前ら何してんの?」

「ンハツ!ソコツ、いい!」

「……………ああ、そういう事か」

数馬は察した様に少し避けて、奥の光景を晒した。

「ちよっ!一夏痛いつて!」

「だから、仕方ないだろ。そんなに言うなら疲れとか溜めるなよ」

「……………」

「ん?皆どうしたの?」

畳に寝転がるステラは、入口で固まる七人を見て首を傾げた。

……………

「ハハツ!私と一夏がそんな訳ないじゃん!もー!皆早とちりなんだから」

ステラは笑いながら言った。

「そ、そもそもステラさんがあんな勘違いされる様な声を出すのがいけないんですわ!」

「え、私のせい?」

『しかし、マスターには思いを向けている相手がいらつしやいますから、一夏さんへのその心配はありませんよ』

「……………っ?!」

ギンギラの一言に、部屋にいた全員が驚愕に染まった。

「ちよつ、ギンギラ?! あつ、い、今のは「誰だ! 相手は誰だ!」うわつ!  
千冬さん離して!」

「言うんだ嫁よ! 何処の輩だ! お前を誑かしたのは!」  
次の瞬間にはステラに千冬とラウラが詰め寄った。

「私まだラウラの嫁じゃな—い—!」

「そんな事今は……………まだ?」

「あつ」

「ス、ステラ? 今のは、どういう」

「わああああああああ! 知らなああああい!」

千冬の問いに、ステラは大声を出しながら部屋を飛び出した。

「……………えつと、ラウラ。これって」

「……………シャルロットよ。私は今、死んでもいい」

「うわあ?! ラウラ?!」

ラウラは鼻血を大量に流して倒れた。

……………

ザツザツザツザツ

「はあ、はあ、はあああ……………私、言っちゃった……」

ステラは浜辺に座り込み、呟いた。

「何してんだろ……」

ステラは、いつもラウラの好意を受け流していたが、その心には確実に積もっていた。それに気が付いたのは、千冬の姿を見たからだ。

「千冬さん、楽しそうだったなあ……………」

千冬の思いのブレーキを無くしたかのような翔一へのアピールを見て、必然的にラウラを思い浮かべた。

「君も思いをぶつければいいじゃないか」

「っ?!」

突然聞こえた声に、ステラは跳ね起きた。

「誰!」

「僕だよ。忘れたのかい?」

「……デストロ・デマイド」

そこに立っていたのは、デストロだった。

「ギンギラ！」

『はい！』

ステラは即時にギンギラを展開して、デストロに殴りかかろうとした。だが。

「残念。それでは僕を倒せないよ」

「っ?!ギンギラ!どうしたの!」

『分かりません!ただ、何かに押さえつけられる様に、展開が不可能です!』

ステラとギンギラの会話を、デストロはにやけながら見ていた。

「それは、僕のGNフィールドの効果さ」

「GNフィールド?!なんであなたがそれを!」

「簡単な事さ。束が作ったGNドライブを解析して、それを再現しただけの事さ」

「GNドライブを、再現?!」

「戦うなら、君自身の力を使いなよ」

「くっ!」

ステラは唯一生きていた拡張領域からジェットとアサルトライフル、ショットガンを取り出した。

「はあっ!」

ガガガガガガガガガッ!

ステラはジェットでデストロを攪乱させる様に動きながら、アサルトライフルの弾丸をデストロに撃ち込んだ。

「甘い!」

ドカアアン!

「きやあ!」

『マスター!』

デストロの放った光弾で、ステラは吹き飛ばされた。

「もういい。君にはがっかりだ。ISでもなんでも好きに使うがいい」

『っ！マスター！展開可能です！』

「分かった！」

その瞬間ステラの体を光が包み、光が止むとステラはギンギラを身にまとっていた。

「はああ！」

ステラはギンギラ最大の武器である拳をデストロに振るった。

「だから、甘いつて、言ってるだろ！」

「うわあ?!」

「その程度で僕を倒せるのか?!」

「クツ！ハア！」

「そんな戦い方では、僕を倒すなんて出来ないぞ！ゼニス！」

デストロはゼニスを展開して反撃する。

ギユンツ！

「グツ！グアア！」

ステラはデストロの放つ光弾をもろに食らい、吹き飛ばされた。

「これで、終わりにする！」

デストロはステラの腕を掴み、上へと投げた。

「っ?!シフト、ディフェンス！」

「オメガシユート！」

「キヤアアアア！」

『マスター！』

ギンギラは体を反転させ、ステラへのダメージを最小限に押え、全速力でエネルギーの激流から逃れた。

「次に君達が戦うのは僕の集大成の一部だ。今の君に、倒せるかな？」

デストロの声を聞いたのは、ギンギラだけだった。

「ちっ、気絶したか。失敗作が」

『待て！お前は、マスターの何を知っている』

「全てさ」

ゼニスを展開して、デストロは飛び去った。その後物音に駆けつけた千冬達に、ステラは保護された。

## 海上の激戦 Fourth Episode

「ん、んんー。あれ?ここは?」

座敷の中心に敷かれた布団の上に横たわっていたステラは、目を擦りながら起き上がった。

「ステラ、大丈夫か?」

「え?うん」

「お前、砂浜で倒れてたんだぞ?ギンギラを纏って」

「っ?!ギンギラは大丈夫なの?!」

ステラは目を見開き一夏の肩を揺らす。

「ああ、束さんが修理してるよ。新武装のテストもするって」

「私、行かなくちゃ!」

「安静にしてろよ!束さんのナノマシンで修復出来るけど、お前骨折してたんだぞ?!」

「それでも、強くならなくちゃ。GESTROを倒す為に!」

ステラは立ち上がって部屋を出た。

「お、おい!待てよステラ!」

一夏はステラの腕を掴もうと立ち上がった。だが、その瞬間に一夏は妙な悪寒を感じ、その方向を睨んだ。

「なんだ?なんか、嫌な予感がする」

一夏は、旅館の窓から見える海に、敵意を向けた。

.....

「束さん!」

「え?スーちゃん?!」

駆け寄ってくるステラを、束は驚きの表情で迎えた。

「もう痛みは残ってないの?」

「全然!もうこんなに肩回しても」グリツ!

「いったー?!」

「痛いんじゃん...」

ステラは大丈夫な事を証明しようと肩を思い切り振り回したが、変な音が鳴った後に急激な痛みに襲われた。

「……………」

「あ、いつくん！なんでスーちゃんを止めなかったの?!」

「……………」

「い、いつくん？」

束の問いかけを一夏はまるで聞こえてない様に無視して、一夏は歩きながら白式を展開した。

「……………千冬姉、俺と戦ってくれ」

「何故だ」

「強くなりたい」

「理由になつていないぞ」

一夏を見据え、千冬は呆れたように言った。

「多分、何か来る」

「何か？」

「あ、そうだ！昨日デストロも言っていました！次に君達が戦うのは僕の集大成の一部だって」

「集大成？待て。だとしても、何故お前に分かる」

「さあ、分かんねえよ。けど分かるんだ。どす黒い何かが、こつちを見てる」

一夏の言葉に、誰もが首を傾げた。

「とりあえず、今日は色々やる事がある。そんな暇は無い」

「そっか」

「そうそう、箒ちゃんに渡す物もあるしね」

「渡す物？」

「ハイ！カモン！」

束が上へと手を向けると、上空から赤色の金属の塊が落ちてきた。ドゴオオオオン！

塊は砂埃をあげて着地した。砂埃が晴れると、その塊の正体が分かった。

「……………ISS?」

「そのとおり！箒ちゃんの専用機！第四世代機『紅椿』だよ！」  
「……『第四世代?!』……」

東の言葉に、各国家代表候補生とステラは驚嘆の声をあげた。  
「束さん！何作ってんの！」

「そもそも、私はそんな物欲しいなんて一言も！」

「うん、言っていないね。けど貰って。何も考えなくていいから」

「……………分かりました」

箒は若干納得していなさそうな表情のまま、紅椿に触れた。

「よしっ！それじゃあテスト始めよっか」

それから、紅椿とギンギラの新武装のテストを開始した。それからしばらく経った時、真耶が血相を変えて走って来た。

「織斑先生！大変です！」

それから、ハワイ沖でアメリカ・イスラエルの共同開発の軍用IS

『銀の福音』が暴走。こちらの方へ向かっているという事が伝えられ、事態は急変した。

……………

「シルバリオ・ゴスベル銀の福音は超高速移動中。チャンスは一回が限界だ。今回は織斑の零落白夜とターナーの力が不可欠だ。しかし白式の燃費の悪さから超高速移動用のパッケージを持つブルーティーズに運搬させる」  
千冬は緊急事態にも関わらず、冷静な声色で作戦を告げる。だがセシリアはその作戦に苦い顔をした。

「織斑先生。ブルーティーズのパッケージ換装には時間がかかります。ここは、ギンギラさんではいけないのですか？」

「今回の作戦では、ギンギラの新能力と新武装が零落白夜を外した時の保険となる。なるべく余計なエネルギーは使いたくないんだ」

「なら、俺のトランザムで」

「それも考えたが、制限時間内に遭遇しなければ意味が無いだろう」

「……………あまりオススメはしないけど、紅椿ならその問題を全て解決出来るよ」



それぞれがそれぞれの考え等を話し合っていると、東が少し嫌そうな顔をして言った。

「どういう事だ？」

「紅椿は第四世代って言ったよね？第四世代には、展開装甲っていう、要である可変装甲があるの。両の腕肩脚部と背部に装備されていて、その一つ一つが自動支援プログラムによるエネルギーソード、エネルギーシールド、スラスターへの切り替えと独立した稼動が可能なんだ。この展開装甲を利用すれば、パッケージ換装をせずに超高速移動が出来る。調整には七分もかからないよ」

東の説明に、男子以外の専用機を持つ者は驚愕に染まった。

「それなら、今の状況を完全に打破出来る！」

「ええ、流石は篠ノ之博士ですわ」

「……でも、一つだけ欠点があるの」

「篠ノ之の経験か」

千冬の言葉に、東は沈黙を持って答えた。

「…私は反対です。初心者も同然の私では、足でまといになります」

「箒。そうは言ってられないよ。この作戦には人命もかかっている」

「そうだ。東、調整を頼む。時間が無いんだ。使える手は何でも使うくらい覚悟は必要だぞ」

「……………そう、だよ。分かった！急ピッチでやる！」

東はそう言いながら空中にキーボードとディスプレイを呼び出し、作業を始めた。

「戦いになったら私と一夏が前に出るから、箒は心配しなくても大丈夫だよ」

ステラは笑顔で箒に言う。その言葉に、全員が頷いた。

「最悪の場合を想定して、二人程後から向かわせる。お前達は安心して戦え。何も一人で戦う訳じゃないんだ」

千冬の言葉に、箒は覚悟を決めた様な表情でステラに向き直る。

「分かった！任せろ！」

「うん！」

ステラと箒は互いの手を取り、決意を決めた。

## 海上の激戦 Fifth Episode

「ギンギラー！」

「白式！」

「紅椿！」

砂浜に、一人の少年と二人の少女が立つ。三人の体は光に包まれ、やがてISを身にまとった。

〈三人共聞こえるか。作戦の最終確認だ〉

三人の耳に響いたのは、千冬の声だった。千冬は冷静な声で、三人に作戦を伝えた。

〈篠ノ之は織斑と白式をポイントまで運び、ターナーは簡易ブースターでポイントまで移動。敵機と遭遇した場合、そのままお前達の判断で戦闘を開始しろ〉

千冬は一拍置き、静かに続けた。

〈お前達子供に戦いを強いてすまない。だが、ここでお前達が負ければ多くの命を危険に晒し、最悪の場合死者が出る！それだけはなんとしても避けなければならない。だから、頼んだぞ〉

「了解！」

「おう！」

「はい！」

千冬の声に、三人は一気に気合を入れた。

「ステラ・ターナー！」『ギンギラー！』

『「出ます！」』

「織斑 一夏！白式！行きます！」

「篠ノ之 箒！紅椿！参る！」

三人の雄叫びと共に、ISは飛びたった。

「別に今のいらなかったんじや」

その姿を見ながら、鈴は呟いた。それに後ろで弾と簪が飽きれた様な声で言った。

「あのな、あーいうのは気持ちの問題なんだよ」

「そう。あれがあるのと無いのじや、登場の時の迫力に差がある」

「あつそ」

鈴は尚も三人が飛びたつた方を見る。だがそこにはもうただ二つの光の線が見えるだけだった。

「私達も準備するわよ！」

「おう」

「うん」

別働隊である三人は、砂浜に仮設されたマストドライバーに設置された青いコンテナの様な物の整備を始めた。

.....

「一夏、箒。そろそろ遭遇予測ポイントだよ」

「ああ、分かった」

「絶対を守るぞ。俺達の後ろの命」

「当然」

三人は高速で飛行しながら、互いに士気を高め合った。

『っ！マスター、超高速でこちらに向かうISの反応が一つ！  
銀の福音です！』  
シルバリオ・ゴスベル

「分かった！箒、止まって！」

「了解！」

ステラの声を聞き、箒は空中で急停止した。

「あれが福音か」

「みたいだね。一夏、準備はいい？」

「いつでもいいぞ！箒！」

「行けっ！一夏！」

「おう！」

紅椿に捕まるようにしていた一夏が、真っ直ぐ福音ゴスベルの元へ飛んで行く。福音ゴスベルも接近する一夏に気付いたのか、真っ直ぐ一夏の方へ向かって行く。

「っ！喰らえ！」

一夏が零落白夜を発動させた雪片式型を振るう。しかし、その渾身

の一撃は福音ゴスペルにいと簡単に躲かれてしまう。

「外した！くっつ！」

「……………！」

一夏の剣を躲した福音ゴスペルは、そのまま回転し、無数の光弾を放った。  
「うおつとつと！」

一夏は自分に直撃するであろう光弾を、雪片式型で打ち払うと、後退し、箒とステラの傍に寄った。

「ステラ！頼む！」

「分かっているって！ギンギラ！」

『はい！フリーダムカノン！』

ギンギラの声と共に、ギンギラの背部と腰部に砲台が現れた。

「行つけえー！」

ステラの叫びで、四つの砲門からビームが放たれる。

「……………っ！」

福音ゴスペルは自身の光の翼で体を覆うとそのままステラの攻撃を受け、爆煙があがった。

「やったか！」

箒は勝利を確信し、拳を握った。だが、爆煙を切り裂いてゴスペルは襲いかかってきた。

「クツ！一夏と箒は下がって！コイツは私が食い止める！」

「でも！」

「いいから！それと千冬さんに連絡して応援を呼んで。私一人じゃ、長くはもたないから！」

ステラはそう言いながら高速で迫る福音ゴスペルに向かって飛んだ。

「ギンギラ！チェンジ！」

『はい！ディステイニーソード！』

ギンギラが叫ぶと四つの砲台は消えて、手元に水色のブレードの様な物が現れた。そしてブレードは展開して、空白部分にビームが走る。

「ハアア！」

ステラはそれを振り、福音ゴスペルに斬り掛かる。

「クッソ！」

ギユンツ！ギユンツ！

しかしそれも躲され、ステラは苛立たしげに腕部のビーム砲で福音ゴスペルを狙い撃つ。

ガキンツ！

『マスター。シフトの使用を提案します』

「うん。確かにこのままじゃ、ジリ貧だし、ね！」

ステラは一度距離をとると、デイスティニーソードを構え直した。

「シフト、スピード、パワー！」

ギンツ！

その瞬間、ギングラは福音ゴスペルの視界から消えた。

「ハアア！」

ステラはゴスペルの後ろに回り込み、デイスティニーソードを振るった。

「……………」

だがその瞬間、今度は福音ゴスペルがステラの視界から消えた。紫の稲妻を残して。

「え？ど、どこに！」

ギンツ！

「なっ?!」

ガンツ！

「キャア！」

突如ステラの目の前に現れた福音ゴスペルは、ステラを殴り飛ばした。  
「な、なに?!」

突然変わった福音ゴスペルの動きに、ステラは困惑した。

『マスター、エイクリッドの反応です！』

「え?!どこから?!」

『反応は、銀シルバリオ・ゴスペルの福音からです！』

「……………え？」

ギングラの言葉に、ステラは間の抜けた声を出した。当然福音ゴスペルがそ

の際を見逃す訳もなく、その拳を振るう。

『マスター！』

「っ！」

すんでのところまでギンギラが躲し、福音の姿をその目で捉えた。その姿は、本来の福音とは異なっていた。

翼の色は紫へと変色し、装甲の所々に黒い鱗の様な物が付いていた。

「……なに、あれ」

『マスター。照合が完了しました。銀の福音にはエイクリッドXの細胞が埋め込まれている様です』

「まさか、集大成って……っ！ギンギラ！」

『はい！リミットブレイク！』

ステラの声に応え、ギンギラはリミットブレイクを発動させた。その瞬間、ギンギラと福音の姿は消え、空間に青と紫の稲妻が走った。

ガンツ！ガキンツ！ギユンツ！

ただ、その場には音と光だけが漂っていた。

「ギンギラ！一か八か、この一撃に賭けるよ！」

『分かりました！』

突然空に、福音を押さえ込んだギンギラが現れ、フリーダムカノンを展開した。

『フルバースト！』

ギンギラは、全ての砲門からエネルギーを全力で放った。それと同時に、そこを中心に爆煙が広がった。

「これなら！」

『マスター！回避を！』

「え？」

これで決まった。そう確信したステラは、戦いから意識を逸らしてしまった。

ドゴツ！

「ガッ?!」

ステラの胴体に、福音の膝蹴りが決まった。

「……………!!」

そこからは、福音ゴスベルのワンサイドゲームだった。ダメージで怯むステラに、連続で攻撃を叩き込み、着実にステラの命を刈り取りにかかっている。

だが、その時。

「ステラを離せえ!」

白式を纏った一夏ゴスベルが福音ゴスベルに斬りかかった。

「…ッ!」

福音ゴスベルはそれをギリギリで躲し、距離をとった。

「おい、ステラ!おい!無事か!」

「い、一夏?」

「ああ、俺だ!しっかりしろ!」

一夏はステラを受け止めて必死に声をかける。

「一夏!」

一夏の後ろから、フィリップを纏った数馬が現れた。

「数馬!ステラを頼む!」

「お前はどうかする!」

「アイツを、倒す!」

一夏は瞬間イグニッション・ブースト加速を使い、一瞬で福音ゴスベルへと近付いた。

「お前一人で勝てるわけないだろ!」

「加勢する!」

「おい!箒!」

一夏も箒も、数馬の制止を聞かずに福音ゴスベルへと向かっていく。

「数、馬……………」

「どうした。どこか痛むのか?」

「いや、もう、大丈夫だよ」

ステラは数馬の腕を抜けると、デイスティニーソードを展開して構えた。

「やめろ!無茶をするな!」

「無茶でもしなきゃ勝てないでしょ!」

ドカアアアアアアン!

「一夏——！！」

その瞬間、ステラと数馬の耳に、爆発音と箒の悲鳴が響いた。

「ギンギラ！」

『シフト、スピード！リミットブレイク！』

ギンギラは、自身に残るエネルギーを使って一夏を受け止めた。

「数馬！一夏をお願い！私が福音<sup>ゴスペル</sup>を食い止めてる間に逃げて！」

「何言ってるんだ！お前を置いて行ける訳ないだろ！」

「お願い！私が、まだ私でいられる間に……っ！」

ステラは笑いながらも、その表情は苦悶に歪み、目も赤黒く染まりつつあった。

「っ?!お前！」

「いいから！」

「くっ！すぐに戻る！それまで持ち堪えろ！」

数馬は一夏を抱えたままサイクロンを使い最高速度で戦場から離れる。その後ろには、俯いたまま箒が付いて来ていた。

「……………さあ、始めようか……………叩き潰す！」

ステラの目は、既に赤黒く染まりきっていた。



## 海上の激戦 Sixth Episode

「それで、帰ってきたわけ？ステラを置いて？」

砂浜のマストライバーの脇で、鈴が箒の胸ぐらを掴んで壁に押し付けていた。

「ああ、そうだ……」

「ふざけんじやないわよ！アンタ、何したか分かってんの?!」

「やめる鈴！箒は悪くない！」

激昂する鈴を数馬が宥めようと腕を掴んだが、鈴はそれを乱暴に振りほどいた。

「悪いわよ！一夏に怪我させて、ステラを置いて来て！コイツのどこが悪くないって言うの?!」

鈴の感情は、ブレーキを無くしたかの様に溢れ出す。鈴はそれを自覚しながらも、止めなかった。

「コイツがあの場合で調子に乗らなきや、こんな事にはならなかったでしょ！」

それは、ステラが数馬と話していた時に起こった事。

.....

「加勢する！」

「箒は援護頼む！」

「任せろ！」

二人は息の合った攻撃で、福音ゴスペルを追い込んでいた。だが、それもつかの間だった。

「箒！そっちに行った！」

「ああ！」

一夏の言葉に反応して、箒は紅椿のメイン武装の雨月あまつぎと空裂展開からわれし、斬り掛かる。だが、それはいとも簡単に躲された。

「クッ！ならばこれで！」

「箒、待て！」

箒は空裂の能力で斬撃を飛ばそうとした。だが、そこで一夏がそれを止めた。

「なんだ！何故止める！」

「海に船がいるんだ！もし当たらなかつたら当たっちゃう！」

一夏が指をさした方向には、漁船サイズの船が一隻だけ漂っていた。

「今ここは封鎖されている！どうせ密漁船だ！放っておけ！」

「何言ってるんだ！人が乗ってるんだぞ！」

「あんな不逞の輩に構う暇は無い！」

「そんな事、っ！箒！避ける！」

「ハッ?!」

ゴスベル 福音が二人の言い争いを待っている筈もなく、近くにいた箒へと  
シルバー・ベル 銀の鐘と呼ばれるエネルギー弾を撃ち込んだ。

「箒！間に合ええ！」

一夏は瞬間加速を使い、箒と福音の間に割り込んだ。

ドカアアアアアアン！

「一夏ーーーーー！」

.....

「……それでも、俺達は箒を責められない」

先の戦いの事を思い出して、少し黙った後に、静かに言った。

「なんで！」

冷静な数馬に痺れを切らして、鈴は箒を突き放して数馬の胸ぐらを掴もうとしたが、数馬がその腕を掴んで止めた。

「俺達は戦ってすらいないんだぞ！その俺達が、戦いに身を投じた者を責めるのは、筋違いだ」

「そんなの.....」

鈴は、砂浜に崩れ落ちた。

「じゃあ、この怒りは、誰に向ければいいの？」

「.....二人とも来い」

「数馬？」

数馬は一度驚いた様な表情をして、二人に聞こえるくらいの声で言った。

「千冬さんが呼んでる」

数馬は振り返らずに歩く。それを見て、鈴も立ち上がって歩き出したが、ふと振り返って箒を見下ろした。

「来るかどうかはあんた次第よ。もし、心に悔しさや後悔が残っているなら、来る事を勧めるわ」

鈴はその言葉を残して、旅館へと向かって行った。

「……………私は、戦っていいのか？私に、後悔する権利なんて、あるのか？」

……………

「……………全員集まったか」

「はい」

千冬の問いに、数馬が答える。

「篠ノ之はどうした」

「あいつはまだ来ません」

「まだ、か」

数馬の言葉に、千冬は少し考える様な表情をした後に、いつもの表情に戻った。

「今回お前達を招集したのは他でもない、ギンギラからの連絡があったからだ」

「っ！一体どんな！」

「落ち着けよ」

千冬に詰め寄ろうとした鈴を、弾が制止する。

「敵の詳細な情報と、作戦だ」

「作戦、ですか？」

千冬の言葉に、セシリアが疑問の声をあげた。

「…………ステラが暴走状態に入る前に、辛うじて考えていた作戦だ」

「教官！聞かせて下さい！」

「その為に集めたんだ」

千冬は大きなモニターに、二つの資料を映し出した。

「右側が、福音ゴスペルの詳細な情報だ」

「え？しかし、作戦開始前はここまで詳しい物は国防的に見せられないと」

「生徒がここまでやられて、私が黙っていると思うか？」

千冬の声に、全員が怯えた。その声に、明らかな怒りと殺意が見えたからだ。

「とにかく、それは後回しだ。今はこっちだ」

千冬はそう言うのと、もう一つの資料を拡大して映した。

「ステラが考えたのは、ギンギラのエネルギーの全てを費やして作ったエネルギーのフィールドに福音ゴスペルを閉じ込める。それは長くて一時間、短くて三十分程閉じ込めておける様だ。だがギンギラの備考によると、今の福音ゴスペルであれば二十分が限度らしい」

「たったの二十分、ですか？」

「それだけで、必要な戦力を揃えて出撃なんて、無理じゃない！」

千冬を通して伝えられたステラの作戦に、全員が絶望に染まった。

「……………GNアームズだ」

その時、弾が顔を上げながら言った。

「GNアームズ？なんだそれは」

「エクシアのサポートユニットだよ。束さんが作ってくれたんだ。あれなら一番早く着けて、時間稼ぎも出来る」

弾の言葉に、全員が驚愕した。

「本当か?!」

「本当だよ。さっき最終調整が終わった。強襲用コンテナも取り付けた。行くならもう行けるよ」

突然部屋に入って来た束に、全員が驚いた。だが次の瞬間、束を含めた全員が更に驚愕に染まることとなる。

「織斑先生！ギンギラさんの反応が消えました！」

真耶の言葉に、誰もが耳を疑った。

「なに?!今すぐ通信を繋げ!」

「もう何度も試みてます!ですが!繋がりません!」

「貸せ!私がやる!」

千冬は真耶からインカムを奪い取り、自分の耳に当てた。

「おいギンギラ!ターナー!応答しろ!おい!ステラ!」

千冬はだんだんと焦り始め、呼び方も普段通りに戻っていた。

「頼む、応答してくれ!ステラ!」

ザザツ、ザーツ

その時、インカムから小さくノイズ音が鳴った。

〈千冬、さん?〉

「っ?!ステラか!無事なのか!」

〈千冬さん、ごめんね?〉

「何故だ!何故謝る!」

〈私……………勝てなかった〉

ブツツ

ステラの言葉を最後に、通信は途絶えた。

「……………」

千冬は、腕をだらつと下げて、インカムを落とした。

「……………山田君、この場は任せた」

「何処へ行くんですか?!」

「決まっているだろ」

千冬は、スーツのポケットからトリガーを取り出して、握りしめた。

「銀の福音を破壊する」  
シルバリオ・ゴスベル

「あれには人が乗ってるんだぞ?!」

数馬は、千冬を制止しようと今回の作戦の難易度を上げた最大のポイントを突いた。

「だからどうした。アイツは、ステラを殺したかもしれないんだぞ?」

だが、千冬の心はその程度の正論で揺らぐ程穏やかではなかった。

「だとしても!アンタは知っているだろ。親父がいつも言っていた言葉」

「人を殺すという行為は、どんな理由があろうと皆等しく悪である、

か」

「そうだ。アンタは今その悪になろうとしてるんだぞ！」

数馬はありったけの言葉で千冬を止めようとする。だが、千冬的心が変わることは無かった。それどころか

「安心しろ、その必要はない。何故なら」

千冬は酷く冷酷な表情で

「既に私は人を殺しているからな」

ひたすらに冷たく、人一人殺せそうな眼光で数馬を睨んだ。

「……………させねえよ。んな事」

数馬は小さく零した。だが、その声は静寂に包まれた室内に、木霊した。

「させてたまるか。俺は約束したんだよ、誰にも殺しなんかさせないってな！」

数馬はそう言いながら拳を振りかぶった。だがその時。

ビーーツ！ビーーツ！ビーーツ！

「っ！こちらに接近するISの反応あり！」

「話は後だ。今はこっちの対応を急ごう」

千冬は瞬時に切り替えて、教師としての織斑千冬に戻った。

「ちーちゃん！これ私の作ったコアじゃない！」

「ならばデストロの無人機か？」

「いえ、生体反応は感知できません」

千冬の疑問に、真耶がデータを見ながら答えた。

「この状況で未確認機か。偶然にしては出来すぎている。これも奴の計画の内か」

「俺が出る。他はステラの救出と福音ゴスペルの撃破にまわしてくれ」

「勝手に決めるな……と言いたいが、今回作戦の要となる五反田とそのサポートが抜けるのは困るからな。デュノア、お前が御手洗のサポートにつけ」

「はいー」

数馬の提案に千冬は乗り、シャルロットに声をかけると、シャルロットは待っていたかのように返事をした。

「今一度作戦を説明する。五反田、凰、オルコット、ボーデヴィツヒ、更識の五人は銀の福音シルバリオ・ゴスベルの討伐とターナー、並びにギンギラの救出だ。そして御手洗とデュノアは先程出現した未確認のISへの対応だ」

「「「「はい！」「」」」」

「東。いざと言う時は私も出る。それは変わらんぞ」

「うん。分かってるよ」

千冬は握りしめていたトリガーを仕舞った。

「作戦は一刻を争う！動ける者はすぐに動け！」

そこからは全員が全力を尽くした。友達や家族同然の者を傷つけられたという事が、彼女らの心に火をつけたのだった。

「御手洗、デュノア、お前達は先に出る。敵は動きを止めているが、いつ動き出すか分からん」

「はい」

「分かりました！」

数馬とシャルロットは自身のISを身に纏い、マストドライバーとは逆方向の砂浜に飛んだ。

「そろそろ遭遇する筈だよ」

「分かった」

数馬は砂浜に降り立ち、ISのハイパーセンサーで敵を探した。

「そんなに探さなくても、俺はここに居るぞ」

「っ?!誰?!」

振り返ると、そこにはISを纏った一人の人間が立っていた。

「今の声、まさか男性操縦者?!」

「ご名答。俺は男だ」

世界に四人しか居ない筈の男性操縦者の、五人目が目の前にいる。その事実だけでシャルロットの心に焦りが生じた。

「……………何でだ。何でアンタがそこにいる」

「数馬?」

そんなシャルロットを他所に、数馬は敵を睨んだ。

「久しぶりだな、数馬。大きくなったな」

「知り合い、なの？」

シャルロットの声は、今の数馬に届かない。

「何でアンタがそこにいるんだよ！」

数馬は尚も叫ぶ。そして、数馬が次の叫びをあげると共に、敵は顔を覆っていた装甲を解除した。

「なんでだ！親父！」

男の名前は、御手洗 荘吉。数馬の父親だった。



## 海上の激戦 Seventh Episode

「オラア！」

「……………」

ガンツ！ゴンツ！ガキンツ！ドンツ！

ギンギラの反応が消滅したという報告から十分前。ステラと福音<sup>ゴスベル</sup>の戦いはもはや考えなんて存在しなかった。本能と本能がぶつかるだけの、獣の様な戦いだった。

ギユンツ！ギユンツ！

そこにギンギラが稀に隙を作る為にビームを撃つ。

「消しとべ！サーマルキャノン！」

エネルギーの残量なんてステラは意識していなかった。それをギンギラは常に大気中のサーマルエナジーを吸収し続ける事でエネルギーの問題をなんとかかしていた。だがその時、不意にステラは攻撃をやめた。

「……………ねえ、ギンギラ」

『?!マスター、意識が戻ったのですか?!』

「うん。多分もう、大丈夫」

ステラは息を絶え絶えにしながらも答えた。

「ねえ、ギンギラ。あの作戦、やれる？」

『今の福音<sup>ゴスベル</sup>であれば、二十分が限度です』

ギンギラの言葉に、ステラは驚くこと無くただ構えた。

「そりゃ、あの状態だしね……………ギンギラ」

『なんででしょうか?』

「最悪の場合、エネルギーフィールドは任せたよ！」

『?!マスター！おやめ下さい！』

ステラはイグニッション・ブーストで福音<sup>ゴスベル</sup>の目の前へと飛んだ。

「ごめん、ギンギラ！」

ステラは振るわれる福音<sup>ゴスベル</sup>の拳を掴んで、叫んだ。

「サーマル、エクスプロージョン！」

ステラの叫びと同時に、ステラの体の周りに黄金の光が漂い始め

た。

「これで！終わり！」

ドカアアアアアアン！

次の瞬間には、辺り一帯に爆風が吹き荒れた。

『マスター……！』

その場に残ったのは、中破した福音と、VSの状態で大破したギンギラだった。そしてステラは

「……………」

海へと、落ちていく。ギンギラはステラの言葉の意味を理解し、エネルギーのほとんどを使ってゴスペルをエネルギーフィールドで包み込んだ。

『マスター！』

ギンギラはギリギリの所でステラを受け止めた。

「……………」

だが、福音をエネルギーフィールドが完全に包む直前に放ったシルバールベルを背部にモロに食らって、その状態を保てずに待機状態であるゴグルに戻ってしまった。

へた……む……応し……れ……ステラ……

その時、辛うじて生きていた通信機能が、ステラの耳に千冬の声が届かせた。

「千冬、さん？」

ステラは声を絞り出して声を出した。

へっ?!ステラか！無事なのか！

ノイズ混じりの声に、ステラは少しだけ泣きそうになった。

「千冬さん、ごめんね？」

へ何故だ！何故謝る！

「私……………勝てなかった」

最後の言葉を呟いたステラの声は、涙に濡れていた。

ザパアアアアアアン！

ステラは、飛沫を上げながら海へと落ちた。

.....

時間は流れ、弾達は既に出撃の準備を終わらせていた。

「五反田 弾！エクシア、GNアームズ！行くぜオラア！」

「凰 鈴音！甲龍！行くわよ！」

「セシリア・オルコット！ブルーティアーズ！行きますわ！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！シュバルツエア・レーゲン！出る！」

「更識 簪！打鉄式式！行きます！」

弾は強襲用コンテナにエクシアごと入り、マスドライバーを使って勢いをつけて飛びたった。

それに続く様に四人も自分のISに出せる最高速度で遠くの福音<sup>ゴスベル</sup>へと飛ぶ。

「ダン君！そろそろ見える筈だよ！」

「おう！」

弾がメインモニターを見ると、そこにはエネルギーの膜に包まれて身動きがとれない福音<sup>ゴスベル</sup>がいた。

「見えた！エクシア、目標を駆逐する！」

弾は強襲用コンテナを飛び出してGNアームズを纏い、福音<sup>ゴスベル</sup>へと突撃する。それと同時にエネルギーフィールドは崩れて、福音<sup>ゴスベル</sup>も弾に向かった。

「ハア！」

「.....！」

福音<sup>ゴスベル</sup>の拳とエクシアのGNソードが衝突し、戦いの火蓋は切つて落とされた。

.....

「アンタは、八年前に死んだ筈だ。なのに、どうして生きている」

数馬は先程までの高ぶった感情をなんとか抑えて問う。

「簡単な話だ。俺達は死んでいなかった」

「俺達？まさか、純さんもののか？」

莊吉の言葉に数馬は驚きつつも、冷静に質問を続ける。

「俺達はその日、奴に殺された筈だった。だが俺も純も気付けばラボの様な所にいた。そこで分かったんだ。奴は最初から俺達を殺す気は無かったんだ」

莊吉は続けて話す。

「俺達はその日から手を組んだ。それが今俺がここにいる理由だ」

莊吉の告白に数馬は驚き、シャルロットは未だに困惑していた。

（数馬のお父さんって、御手洗 莊吉さんだよな？どうして、襲撃なんか……）

「お前はデュノアの娘か」

「そう、ですけど」

突然話しかけられたシャルロットは少し動揺しながら答えた。

「まさかあの日の少女が俺の前に立つ障害となるとはな」

シャルロットが身構えた瞬間、数馬がそれを止めた。

「お前は下がってろ。親父とは俺がやる」

「でも！一人じゃ危険だよ！」

「黙れ！いいか、これは俺の問題だ！お前はいいから下がってろ！」

普段とは違う数馬の剣幕に、シャルロットは怯えた。普段ならこの時点で冷静さを取り戻すのだが、今の数馬にその余裕は無かった。

「親父。昔よく賭けをしたのを覚えているか」

「ああ、よくやったな。勝った方が負けた方から一つ命令権を得る、だったな」

「そうだ。俺が勝ったら、言う事を聞いてもらおうか！」

「ああ、構わない」

莊吉の言葉を皮切りに、数馬はシャフトとマグナムを構えて攻撃を仕掛けた。

.....

「おーおー、ムキになってやってんなー」

数馬達の戦いを、崖の上から眺める者がいた。

「そろそろ戻るよ」

「ん？デストロカ。了解」

その者は立ち上がり、数馬達に背を向けて歩き出した。だが、ふと立ち止まり海を見た。

「次は俺達の番かもな」

その者は、後ろで赤い髪を後ろで纏めて赤いパーカーの上から白衣を着ている男だった。

「ラスボスは親父だった、なんてRPGじゃ使い古してるが」

男はニヤリと笑い、海にも背を向けた。

「お前レトロゲー好きだろ」

「なに語ってんだよ。早く行くよ、純」

「おう」

男の名前は、五反田 純。今まさに命をかけて戦っている弾の父親だ。

## 海上の激戦 Eighth Episode

「ここは……どこだ？俺、確か箒を庇って……もしかしてここがあの世って奴なのか？」

『それは違うよ、ちよつと近いかもだけど』

「誰だ？」

一夏の目の前には、白いワンピースを着た少女が立っていた。

『あなたは、力が欲しい？』

「え？いきなり何だよ！」

少女の言葉の意図が分からず、一夏はつい怒鳴ってしまった。

『欲しいの？欲しくないの？』

「そりゃ、あればいいだろうけど……ていうか、ここがあの世じゃないなら夢か何かなのか？」

『それは今答えるべきじゃないかな。それで、力がいるの？』

「んー、よく分からないんだけど、皆を守るためになら欲しいけど……どんな力なんだよ？」

『力は、力だよ』

少女がそう言うと、どこからともなくISを纏った女性が現れた。そのフォルムは、世界で最初に作られたIS。白騎士に酷似していた。

『力はあくまで力。どう使うかは君次第だよ』

白騎士と少女はじつと一夏を見る。

『君はちゃんと使いこなせる？』

「力、か……昔の俺なら変な自信だけ持って直ぐに飛びついてたな」  
一夏は苦笑しながら頭を抑えた。そして顔を上げて表情を引き締めめた。

「使いこなせるかどうかは分からない。でも、やり残したことがある。仲間を守りに、そして助けに行きたい。力があるなら、貸してくれ」  
『なら、行ってあげなくちゃね？』

少女がそう言うと、背後に白い光の穴が開いた。

「そこから外に出られるのか？」

『うん。そうだよ』

「分かった。ありがとう！」

一夏は走って少女とI Sの間を走り抜けて光を目指す。

『それから、白い彼によろしくね』

「え？それって」

一夏が言葉を発するより早く、光が一夏を包んだ。

.....

「ハア！」

「ハッ！」

数馬と荘吉は激しくぶつかり合う。その衝撃は砂を巻き上げ、辺りに突風を巻き起こしていた。

「ルナー！」

数馬が叫ぶと、持っていたシャフトが鞭の様に変わった。

パシイーン！

「グウツ?!トアア！」

荘吉は一度だけそれを食らったが、その後は殆どの攻撃を躲し、それ以外は捌いていた。

「その程度か、数馬」

「黙れ！」

「数馬！落ち着いて！」

数馬は怒りに駆られ、いつもの冷静な戦い方を全く出来ていなかった。

「冷静さを欠けば、真っ先にやられる。俺はお前にそう教えた筈だが？」

「うるさい！お前が、裏切った癖に！」

「残念だ」

「っ?!」

数馬の攻撃は簡単に避けられ、がら空きになった背中に荘吉の持つマグナムの銃口が押し当てられた。

「お前を殺したくは、なかったがな」

その瞬間、数馬の意識はある場所に飲み込まれた。

.....

「っ?!」

数馬は目を見開いて起き上がった。そこは先程いた砂浜とはかけ離れた、ただただ白い本棚が無数に、そして空中にすら並ぶ不思議な空間だった。

「ここは、どこだ?」

数馬の声はその空間に木霊することなくまるで溶ける様に消えて行った。

「ここはISのコアの中の空間。要するに精神世界さ」

「っ?!」

数馬は背後から突然響いた声に飛び退いた。

「お前は何者だ。ISのコアの中というのはどういうことだ。そしてここはどこだ」

「質問は一つずつ答えよう。まず、僕はフィリップ。君が身に纏うISが人格化した者さ」

フィリップ。そう名乗った緑色のローブの様な服を着た青年に、数馬は疑念を抱いた。

「どういうことだ。フィリップはただのコアの筈だ」

「ISのコアには大小様々ではあるけど、意思がある。代表的な例が彼、ウッドベルネクストさ」

「ウッドベルネクスト?確か、ギンギラの正式名称だったか」

「その通り。彼はイレギュラーではあるが、ISのコアと融合しながらもそのAIを変わず運用している。僕らの様に表に出ることが出来ないISは、どうにか彼とコアネットワークを接続して方法を得ようとした。その過程で生まれたのが、このデータの中継地点。つまりこの本棚だ」

フィリップの説明に、数馬は驚愕した。普段自分たちが使っている



ISに意思があり、ましてやその意思を確立させようとしていると言  
うのだから。

「僕は彼の近くにいるイレギュラーだから、僕にも彼の記憶や、この地  
球の歴史やデータが流れてきている。ここにある本は俗に言うその  
データのフォルダ達さ」

「星の本棚、といったところか」

「まあ、そんな所さ」

フィリップがそう言うのと同時に、本棚が一斉に動き出した。そし  
て一つ。また一つと、本棚が虚空に消えて行き、最後に一冊、空中に  
浮遊し残っていた。

「これは？」

「僕が探した中で、今の君でも扱える。そして最もこの機体に馴染む  
能力のデータだ」

フィリップの言葉と共に本に題名が浮かび上がる。

「F a n g ……牙、か」

数馬は本を取りながら呟いた。

「その能力はこの機体に掛けられたリミッターを最大まで解除でき  
る。だが、その代わりに理性を失う危険性がある。ちょうど、君が見  
たステラ・ターナーの様にね」

フィリップはそう言いながら数馬の持つ本を奪った。

「それでも、君はこの力を使うかい？」

フィリップの言葉に、数馬は一瞬葛藤した。

（親父の裏切りだけで我を忘れた俺に、使えるのか？後ろにはシャル  
ロットもいるんだぞ？）

「あ、ちなみに言うが」

その言葉に、数馬は顔を上げた。

「こうしている間にも時間は進んでいる。まあ、人間に観測出来る程  
の速度ではないけど」

「っ!」

その瞬間、数馬の心は決まった。

（迷っている暇は無い！俺がやられたら次はシャルロットだ！ダメ

だ、それだけは！」

「今すぐ力を貸せ！理性を失うだけなら、後ろの奴がきつと止めてくれる！」

「そうか。分かったよ」

フィリップはそう言うのと、本を差し出した。

「一ページ目を捲りたまえ。そうすれば現実に戻る」

「ああ」

数馬は躊躇わずにページを捲った。

「そろそろ、自分を許してあげなよ」

「っ?!」

フィリップの言葉に反応した数馬だったが、既にフィリップは光の中に消えていた。

.....

「おいおい、こりゃわざとらしいタイミングだなあクソが！」

エクシアを纏った弾が、苛立たしげに言う。ここは海上。目の前には光に包まれた福音ゴスペルがどんどん形状を変えていた。

「まさか、このタイミングで二次移行?!」  
セカンドシフト

「そんなっ！あと少しだったのに！」

「皆さん！一度距離を「セシリア危ない！」へ？」

鈴の声を聞いて正面を向いたセシリアだったが、そこには既に福音ゴスペルの拳が迫っていた。

ガンッ！

「ガハッ?!」

セシリアはそれを回避できずに、その拳をまともに食らってしまった。

「セシリアー！この野郎！」

弾はGNソードを展開し、福音ゴスペルに切りかかる。だがそれは予測していたかのように避けられた。

「ラウラー！ステラはまだ見つからないの?!」

「もう少しだけ待ってくれ！生体反応が見つからないんだ！」

ラウラの言葉に、場の緊張感が増した。生体反応が見つからない。それはつまりステラの死亡したという確率を上げる証拠になり得るからだ。

「なに下らねえ事考えてんだよ！あの生命力魔王並みのアイツがそう簡単にくたばるかよ！」

「っ！そうよ！ステラはそう簡単に死んだりしない！絶対生きてる！」

「まだ、一緒にやってないゲームもたくさんある！ステラは約束を絶対に破らない！」

「私も！まだステラさんとお料理を一緒にする約束を果たしていませんわ！」

「わ、私もまだプロポーズの返事を貰ってないぞ！」

各々が、自らに言い聞かせる様にステラとの記憶を頭に巡らせる。

「さっさとコイツ倒して！ステラ連れて帰るぞ！」

「当ったり前よ！」

「うん！」

「はい！」

「了解した！」

全員が心に火をもう一度付けたのを見計らったように、福音は紫電を纏い始めた。

「アイツの高速移動は俺が何とかする！皆は俺が抑えた瞬間に一斉攻撃だ！」

弾はそう言いながらエクシアのコンソール画面を呼び出して、一つのプログラムを起動させる。

〈TORANZ—AM SYSTEM LADY?〉

「じゃあ！行くぜ！トランザム！」

弾の叫びと共にエクシアが紅蓮を身に纏った。

ギンツ！

二つの光は、風すらも追い越すスピードで空を駆けた。だが、時間が経つに連れて福音の力は増していき、もはやエクシアのトランザム

ですら、目で追うのがやっとになっていた。

「これも、リミッターなんかあるから！」

弾は苛立たしげにGNソードを振るうが、それは空を切り、逆に隙を生んでしまった。

ガンツ！

「グアア?!」

弾はそ<sup>ゴスベル</sup>福音の攻撃を諸に食らい、空中で体制を崩してしまった。

「クソが！」

<sup>ゴスベル</sup>福音はそんな弾に最後の止めを刺そうと、弾へと向かう。

「っ?!」

弾がそれに気が付いたのは、拳が目の前に迫った時だった。弾は一瞬死を覚悟した。だが次の瞬間、弾が目を開くと先程とはまるで違う場所にいた。

「ここって、どこだ？」

そこは、まるで戦争でもあったかのように荒れ果て、壊れ果てていた。

「ここは、俺とお前の精神世界だ」

「あ？」

弾が振り返ると、そこには黒い上着と赤いマフラーを巻いた青年が立っていた。

「アンタ誰だよ」

「俺はエクシア。お前が乗るISのコアだ」

「へえ、あーそう」

弾は至って普通に返す。

「驚かないんだな」

「まー、最近非常識続きだったもんでね。感覚狂ってんのかもな」

エクシアに、弾はまるで旧知の仲かのような口調で語りかける。

「ところでさ。俺をここに呼んだのは理由があんのか？」

「ああ、そうだ」

弾の問いに、エクシアは間を空ける事無く答える。その表情に、弾は肩を竦める。

「お前は、何の為に戦う」

その言葉に、弾は思わずエクシアの顔を見た。

「お前は、何を見て戦う。何を目指して戦うんだ」

「……………そうだな」

弾は近くにあった瓦礫に腰掛けると、オレンジに染まる空を目を細めながら眺めた。

「未来って奴は光が強すぎて見えねえよ。だから俺は今を見る。必死に足掻いて、今の目の前の障害をぶち壊す……………って、思ってた。でも、結局はただ未来を見るのが怖かったんだ。変えられない過去と、見えない未来に蓋をして、今やりたいことをやればいいって。でもよ、アイツらのせいでそうも言っていられねえんだよ」

そう語る弾の表情は、とても穏やかだった。

「仲間を、守る為か？」

「は？ 違えよ。アイツらは仲間じゃねえよ」

「ならば一体「友達だよ」…友達？」

弾の言葉に、エクシアは不思議そうな表情になった。

「アイツらは仲間なんてそんな大層なものじゃねえよ。ただの友達だ。だから助けてえし頼りてえ。これが、俺の戦う理由だよ」

弾は、そう言ってエクシアに笑いかけた。

「……………分かった」

「お、おい！ ちよつと待てよ！ 何なんだよ今の！」

「お前に本当に力を託して良いのか、試したんだ」

「それ、結果は？」

「無論合格だ」

「いよっしゃー！」

エクシアの言葉に、弾は派手にガッツポーズをした。

「あれに乗って行け。そうすれば外に出られる」

エクシアが指差した方向には、巨大な人型のロボットの様な形をしたエクシアが片膝を付いていた。

「お、おい。嘘だろ？」

「やり方は、分かるな？」

「あつたりめえだろ！」

弾はそう言いながら瓦礫を伝って建物の屋根に上り、そこから開いた胸のコックピット部分に飛び乗った。

「五反田 弾！エクシアダブルオー！行くぜ！」

弾がそう叫ぶのと共に、エクシアは姿を変えた。そしてそのまま夕暮れの空に羽ばたくように舞い上がった。

「頼んだぞ、エクシア」

エクシアと名乗っていた青年は穏やかな笑顔でそう言いながら、姿を変えて飛び立ったエクシアを見上げた。

「五反田 弾。お前が、ガンダムだ」

## 海上の激戦 Ninth Episode

「さらばだ」

壮吉は、マグナムの引き金に当てていた指に力を入れた。

バアアアアアン！

だが、引き金を引く寸前に、それは起こった。

「このタイミングで、セカンドシフト二次移行か」

「ウオオオ！」

数馬は、雄叫びをあげた。その声に、シャルロットは啞然とした。

「数、馬？」

「力が大きすぎて、制御出来ていないのか。冷静ではなかったが理性があつた先程とは違い、今度は理性すら無い。ある意味先程より厄介だな」

壮吉はそう呟いて構えた。

「ウガアアアア！」

数馬が再び雄叫びをあげると、フィリップの機体にラインが入り、そこを境に装甲が開いた。

「展開装甲、だど？」

それは本来、白式の雪片式型と紅椿にしか搭載されていない筈の能力だ。そのシステムは束以外に作れる者はいない。それを数馬のフィリップはセカンドシフト二次移行を経ただけで作り出したのだ。この戦闘を監視カメラ越しに見守る千冬や束は驚愕していた。

「束、あれはお前がやったのか？」

「そんな筈無い！ いくんの白式は雪片式型だから使えているんだし、箒ちゃんの紅椿はそれ専用設計と開発したんだ！ フィリップに展開装甲を入れる隙間なんて！ ……まさか、自己学習？」

束は一つの答えに辿り着き、啞然とした。

「何？ どういう事だ？ まさか、コアネットワークを介してフィリップのコアが展開装甲のシステムを理解して再現したとでも言うのか？！」

千冬は束の言葉を聞き、驚愕した。

「理論上は可能だけど、あそこまでの再現は計算外だよ！」

束は混乱しながらも頭の中で計算を続ける。そしてそんな中でも変化は続いていた。

「ウガアアアアアア！」

数馬が右腕を振り上げると、腕の装甲から光の刃が伸びる。それは真っ白な光を放ち、まるで牙の様だった。

「面白い、来い」

壮吉はブレードとマグナムを構えると、もう一度構えを取った。

「ウウ…ハア！」

数馬はまるで獣の様に体を撓らせながら壮吉に迫る。

「ラア！」

その攻撃は無秩序で、全ての動きがバラバラだった。

「クツ！トアア！」

壮吉の振るうブレードをギリギリのタイミングで避けると、今度は距離をとって腕部か伸びていた光の刃を抜いて投げた。

「遠距離も射程圏内か」

刃はまるで生き物かのように縦横無尽に動いて壮吉を翻弄する。それに痺れを切らしたのか。壮吉は手榴弾の様な物を取り出した。

「今回は退く。次に相見える時はその力を制御しておけ」

壮吉はそう言いながら地面に手榴弾を叩き付けた。それが弾けるのと同時に、数馬とシャルロットの視界は強い光に阻まれた。

「ウウウウ…」

数馬は、小さな呻き声の様な声を出しながらシャルロットを睨んだ。

「数馬？戦いは終わったよ？だから、もう休みなよ」

シャルロットは怯えながらも数馬に一步一步歩み寄る。

「ウウウウ、ガア！」

数馬はシャルロットに飛びかかろうとした。だが、その瞬間、シャルロットは数馬の懐に飛び込んだ。

「盾殺し！」

シャルロットは自身の最大の武器である盾殺しを、数馬の胴体に



打ち込んだ。

「グアアッ?!」

数馬はその衝撃で吹き飛び、ISも解除された。

「数馬!」

砂浜に倒れた数馬に、シャルロットはISを解除して駆け寄る。

「シャル、ロット…」

数馬は、腕を震わせながらシャルロットに手を伸ばす。

「何?」

「俺は、弱いな」

「そんな事無いよ。だって、止まってくれたじゃない」

シャルロットは、数馬の手を掴みながら優しく微笑んだ。

「あの時、数馬が止まってくれなかったら、僕はそのまま死んでたかもしれないんだよ?」

シャルロットが言うあの時とは、数馬がシャルロットに襲い掛かりシャルロットが盾シールド・ピアース殺しを打ち込む僅か一瞬の事だった。

「声が、聞こえたんだ。お前や、皆の声が」

数馬は起き上がりながら言った。

「皆が必死に戦っているのに、俺はこんな獣のような本能を曝け出してただ暴れている。そんなの、俺が許さない」

シャルロットの肩を借りて立ち上がった数馬は、フィリップの待機状態である指輪を見た。

「あの力は、この事に気が付かせる為だったのか」

「何の事?」

「気にするな。お前は知らなくていい」

数馬は自分の身に着けていた帽子をシャルロットに被せると、微笑んだ。そしてシャルロットから離れて砂浜を歩き出した。

「どこ行くの?!」

「アイツらの所だ」

「アイツらって、まさか戦場に行くつもり?!ダメだよ!盾殺シールド・ピアースしをまともに食らったんだよ?!その体じゃあ!」

シャルロットは数馬の腕を掴もうとした。だがその手は数馬の腕

を掴む事は無く、逆に数馬に腕を掴まれた。

「機体の性能を最大まで引き出せば、今の俺でも戦える。そして」

数馬はシャルロットの目を見て、続けて言った。

「お前の力も必要だ。俺が止まれなくなったら、お前が止めてくれ」

「そんな事、出来ないよ」

「今出来たじゃないか」

「そう何度も上手くないか」

数馬を行かせまいと、シャルロットは自分には出来ないと否定する。

「多分、福音は弾達だけじゃ倒せない。弾がもし二次移行セカンドシフトをしているとしても、恐らく拮抗がいい所だろう。俺達が行かないと戦闘が長引いて、弾達が消耗して敗北する。それじゃあダメだ。死なせない。アイツは俺の親友だ」

数馬は海の方こうで起こる閃光を睨み、指輪を見た。

「でも、エネルギーが足りない。これをどうにかしないと、行こうにも行けない」

「数馬！」

その時、浜辺を走る一つの影があった。

「一夏？お前、怪我はどうした」

「よく分からねえけど、なんか治ってたんだ」

一夏は白式の待機状態であるガントレットを見た。

「多分、コイツのおかげだ」

「お前も、二次移行セカンドシフトしたのか」

「ああ、多分」

その言葉に、一夏と数馬は頷き合った。

「エネルギーは、どうするの？」

「それなら、宛てがある」

一夏はそう言いながら、マストライバーを指差した。

「あそこに箒が居る。箒の紅椿なら、エネルギーをどうにか出来る筈だ」

「なるほどな」

一夏と数馬は並んで歩き出す。その後姿を見て、シャルロットは叫んだ。

「どうして戦えるの?! 戦えば死ぬかも知れないんだよ?!」

「ああ、死ぬかもな」

「勝てたって、名誉や報酬がある訳でも無いんだよ?!」

「確かに無いな」

「それなのに、なんで?!」

シャルロットの問いに一夏と数馬は顔を見合わせて少し笑い、その笑顔のまま二人は答えた。

「友達だからだよ」

「え?」

二人の答えの意味が分からずに、シャルロットは間の抜けた声を出した。

「手が届く所で困ってる友達が居るんだ。助けなきや、一生後悔する」

「それに、死ぬかもしれないのはアイツらも同じだ。結局リスクしか無い賭けなら、相乗りするだけだ」

「……………二人だけじゃ、行かせられないよ」

シャルロットは消え入りそうな声で言った。

「だから、僕も行く」

シャルロットの目には、強い意志があった。

「ああ、来てくれ」

数馬は笑い、シャルロットに手を伸ばした。シャルロットはその手を取り、帽子を取った。

「あの、これ」

「持ってきてくれ」

「え?」

数馬は帽子を返そうとするシャルロットの腕を掴み、それを止めた。

「本来、男の目元の冷たさと、優しさを隠すのがこいつの役目だ。でも俺はまだ半人前だ。だから、未熟さを隠したくて、こいつを被っていた。だが、今は必要ない」

「どうして?」

「なんでだろうな。親父と戦って、その最中に思い出したんだ。弱さは隠すものじゃなく、受け入れるものだってな」

数馬は自嘲する様に笑った。

「数馬、お前の親父さんって死んだんじゃ無かったか?」

「その筈だったんだがな。生きていたらしい」

「そう、か。でも、とにかく今は」

「ああ、弾達とステラだ」

数馬は、マスドライバーの方へと歩き出した。

「さあ、終わらせよう。この戦いを」

「うん!」

「ああ。本当の戦いはここからだ!」

## 海上の激戦 Tenth Episode

「箒」

「……………一夏、か？なんだ、私を責めに来たのか？」

俯いていた箒は、一夏の顔を見てもう一度俯いた。

「んな訳ないだろ。一緒に行くぞ」

一夏は呆れた様に言うと、手を差し出した。

「私にそんな資格は無いさ。お前を傷付け、ステラを見捨てたんだぞ？」

「今はそんな事言ってる場合じゃ「力があつたんだ！」…箒」

「確かに、お前達の役に立てる力が！なのに私は！お前達に迷惑をかけ拳句の果てに大怪我まで負わせたんだぞ！こんな私に戦う資格など無い！誰の役にもたてない私なんて、死んだ方が！」

バキッ！

その時、ずっと黙っていたシャルロットが箒の頬を殴った。

「うつ?!何をする！」

「ふぎけないですよ。死んだ方がいいなんて、言っちゃダメだ。確かに僕も、生まれて来なければ良かったって思った事もあったよ。でも、それでも必死に生きてる！」

「何が言いたい！」

「うるさい！」

ガンッ！

箒は激昂し、シャルロットの胸ぐらを掴んだ。シャルロットはその腕を掴み、箒に頭突きして箒に後退りさせた。

「数馬が言ったんだ。人の命を奪うという行為は、皆等しく悪だっただったら、自分を殺すのも悪だよ！」

「それでも！私みたいなのはいい方がいい！」

「いい加減にしろ！」

その時、一夏が大声を出しながら箒の肩を掴んだ。

「お前が死んだら、どれだけの人が悲しむのか分かってんのか?!俺や千冬姉、東さんに鈴や皆。そしてお前が見捨てたステラも悲しむんだ

ぞ！お前はそれでいいのか？！

「だったらどうしろと言うんだ！こんな取り返しのない事をしたんだぞ？私は、どう償えばいいんだ…」

箒は、溜め込んでいた感情を昂らせて涙を流す。そんな箒を見て、数馬は先程戦った父親の言葉を思い出していった。

「人は生きる限りは必ず罪を犯す。だがその一つ一つの罪を数え、その数だけ人を幸せにすればいい」

「え？」

数馬の言葉を理解出来ずに、箒は顔を上げた。

「親父の言葉だ。人は欲に生きるもの。生きていれば過ちの一つや二つあるさ。そうだな…」

一つ、俺は親父が生きていた事に動揺した。

二つ、力を制御出来なかった。

三つ、そのせいで守るべき者に守られた」

「数馬…」

シャルロットは心配そうな目で数馬を見る。だが、数馬の目に曇りなどは一切なかった。

「俺は自分の罪を数えたぜ。箒」

数馬はそう言いながら右手で箒を指差すと、鋭い眼光で、尚且つ優しさの籠もった表情でその泣き顔を見た。

「さあ、お前の罪を数えろ」

その言葉に、箒の涙はなお一層零れた。

「私は…私！力を過信し、人の命を軽んじた。拳句の果てにはお前を傷付け、ステラも置き去りにした！これが、私の罪だ…！…つ！」

「箒。お前の過ちを取り返せる機会がある。どうだ。俺達と一緒に罪の分だけ人助けをしないか？」

数馬は指差していた手を開いて、その手を差し出した。

「ああーやらせてくれ！」

箒は笑った。その笑顔にはもう迷いなど無かった。

「あ、忘れた。ほら、やるよ」

その時、一夏が懐から一つの小さな袋を取り出した。

「これ、は？」

「こんな状況で言うのはなんだけど、誕生日おめでとう」

一夏からの祝福に、箒は頬を染めた。

「お、覚えていたのか？」

「忘れる訳ねえだろ？ 幼馴染なんだから」

一夏は箒に笑いかけるが、それを見て数馬がため息を零した。

「こんな所でイチャイチャしてんじゃねえよ」

「え？ それ言ったらお前だろ」

「?」

(あー、ダメだこの二人)

奇跡的に、男子二人と女子二人がそれぞれ考えが一致した。そんな日常的な風景が流れた後、四人は準備を始めた。

弾が出撃に使ったマストドライバーに遠距離飛行用のパッケージを装備したラファール・リヴァイヴをセットし、その後ろに紅椿がしがみついて展開装甲で一夏と数馬を守りながら飛ぶという、簡単な様で高度な技術が必要となる作戦だった。

「シャルロット。俺達の事は構わず全力で飛べ」

「いいの？ 私達はISがあるから平気だけど、相当なGがかかるよ？」

「大丈夫だ」

「分かった。箒、二人を頼んだよ！」

「ああー！」

シャルロットの言葉に、箒は力強く答えた。

「カウント行くよ！ 3、2、1、GO！」

シャルロットの掛け声と共にラファールリヴァイヴと紅椿のスラストスターが全開放された。そこからエネルギーが爆発する様に吹き出て、二機は高速で空へと飛び出した。

.....

「ウオラアアアア！」

「…………?!」

弾の異変に気付いた福音<sup>ゴスベル</sup>は、高速で後方に飛んだ。その瞬間、エクシアから膨大な光が放たれた。

「な、何なのよ?!」

「まさか、これって!」

「エクシアが、二次<sup>セカンドシフト</sup>移行したの?」

弾達の高速戦闘への援護の機会を伺っていたセシリア達の目の前で、突如エクシアが膨大な光を放ちながら現れた。

「ハアア!」

弾がその光を切り裂くと、そこにはすでにダブルオーの機影はなかった。

「え?」

「食らえや!」

弾はGNソードII<sup>ゴスベル</sup>で福音へと斬り掛かる。その速度はトランザムを使ったエクシアに迫る程のものだった。

「……………?!」

ブンッ!

「流石に躲すか!でもなあ!俺にはまだ上があるんだよ!」

弾はそう言いながら心でエクシアに語りかけた。

(なあ、お前リミッター外せねえか?)

『やれない事も無い。だが、リミッターを外すとお前への負担が上がるぞ!』

(その程度、覚悟の上だよ!)

『分かった。リミッターを外してやる。シールドエネルギーが20%をきいたら強制終了だ。いいな』

『そうなる前に終わらせてやる!トランザム!』

弾の叫びと共にダブルオーは赤く染まり、GNドライブから放出されるGN粒子の量が爆発的に増した。

「エクシアダブルオー!五反田<sup>ゴスベル</sup> 弾!」

弾は全速力で福音へと迫る。福音も最高速で迎え撃つ。その戦いはまさに神速の域に達していた。



「行くぜオラアアアア！」  
弾の雄叫びは、海へと響き渡った。

## 海上の激戦    Eleventh Episode

「ちっ！当たらねえ！」

弾はGNソード――を振りながら、苛立たしげに言った。

『そんなに我武者羅に振っても無駄だ。相手は最早ISという次元に居ない。半分は生物だ』

そんな弾を見かねて、エクシアが弾に語りかける。

「は？生物？どういう事だ！」

『銀の福音の急激な進化の理由だ。恐らくあの機体には生物の細胞、又はデータが組み込まれている。そして、その生物は少なくともこの星の生物では無い』

「所謂、あれはエイリアンの何かと融合してるって事か？」

弾はトランザムの予測制限時間を確認しながらも福音へと切りかかる。

『簡単に言えばそうだ。しかしそれは強制的な物だ。福音も搭乗者も望んでいない』

「デストロ・デマイドか」

『その可能性は大きいだろうな』

弾はエクシアと話している内に落ち着いたのか、声のトーンが元に戻った。

『奴を倒す為の最低条件は、ウッドベルネクストと白式、フィリップ、そして俺だ』

「さつき連絡が入った一夏達は何とかなるが、ステラが厳しいな」

『安心しろ、死んではない』

「んな事分かってんだよ。問題は復帰までのスピードだ」

弾はGNソードの刀身を折りたたみ、ライフルモードにして福音を狙い撃つ。

「クソッ！こういう状況にはデユナメスが欲しいぜ！」

『武装だけなら再現可能だ』

「武装だけあってもなあ！って、いるじゃん！使える奴！」

弾はエクシアの言葉を聞いて仲間の元へと戻った。

「おい！セシリア！」

その中からセシリアを選んで近付いた弾は、スナイパーライフルの様な武装を展開した。

「な、なんですか？」

「これを使い！エネルギーはそんな中にあるから、気にしなくてもいい！」

「は、はい！」

セシリアはGNスナイパーライフルを受け取ると、自身のスナイパーライフルを仕舞った。

「あ、そう言えば。セシリア、撃つ前に言っただけいい事があるんだ」  
「……………はい？」

弾の言葉に、一瞬訳の分からなそうな表情になったセシリアだったが、既に飛びたっていた弾に抗議のしようもなく、セシリアに残された選択肢は一つだった。

「ブ、ブルーティアーズ、セシリア・オルコット！目標を狙い打ちしますわ！」

「うおお！テンション上がるなあ！クソが！おい！銀野郎！」

弾は高ぶった様な表情を引き締め、福音を睨んだ。ゴスベル

「今の俺は、負ける気がしねえ！」

「なーに遊んでんだ馬鹿」

弾がGNソード――を構えて叫んだ時、背後から呆れた様な声が聞こえた。

「はあ?!誰が馬鹿だ！」

「お前だよ」

弾が振り返ると、そこにはラファール・リヴァイヴの掌の上に立つ数馬と、紅椿の掌の上に立つ一夏が居た。

「弾！無事だったか！」

「ああ、俺はな。でもステラが見つからねえ。死んでねえとは思うがな」

弾の言葉に、二人の顔に緊張が走る。

「とにかく、今は奴だ」

数馬はそう言いながらフィリップを展開した。

「時間経過で少しは動けるが、やはりエネルギーが心許ないな」  
「任せろ」

箒はそう言って数馬の肩を持った。すると紅椿は黄金に輝きだし、数馬も光に包まれた。

「……………これで行ける」

数馬がエネルギー残量を見ると、そこには「Full Change」と表示されていた。

「さーて、そんじゃ俺も！」

一夏は白式を展開する。するとその姿は以前の物とは違っていた。

「あ、遠距離武器ある」

「どうせ燃費悪いんだろ」

「エネルギー馬鹿みたいに使うんだろ」

一夏の言葉に、数馬と弾がすかさず煽る。

「いや、そうとも限らねえだろ！ていうかもしそうなくても箒がいるし！」

「え?!」

その瞬間、箒の頬が真っ赤に染まった。

「お前って奴は…………」

「ハーレム野郎」

「はあ?!なんだよ!」

一夏は訳が分からずに怒鳴り声をあげた。

「……………っ!」

その時、何も無い所から突然福音が現れた。

「え、今何処から」

「気を付けろ! アイツトランザム並に早いぞ!」

「なるほど、それなら問題無い」

数馬は前に出ると、鋭い眼光で福音を睨んだ。

「相手が強いなら、それ以上に強くなればいい。それにさっきお前が言ったんだろ。負ける気がしねえってな」

数馬はニヤリと笑いながら振り返った。

「ああ、そうだな！」

弾は笑いながら前に出る。そして数馬の隣に並ぶ。

「俺も、負けていられねえ！」

そう言つて一夏も弾と反対側の数馬の隣に並んだ。

「銀の福音。シルバリオ・ゴスベル さあ、お前の罪を数えろ！」

「今の俺らは、負ける気がしねえ！」

「え？あ、えーつと……………織斑 一夏！タイマンはらせてもらうぜ  
！」

「三対一だけどな」

「仕方ねえだろ！思い浮かばなかったんだから！」

まるで、今からゲームでも始めそうな雰囲気の一夏達だが、それもこれも目の前の敵への潜在的恐怖を拭う為だった。

「さーてと。奴さん、もう待つてられねえみたいだぜ」

「分かっている。ステラを助ける為に、早く終わらせるぞ！」

「おう！」

数馬の掛け声と共に、三人は福音ゴスベルへと攻撃を仕掛け、その他は自分  
に出来る事を始めた。その時、弾の脳裏にはエクシアの言葉が蘇つて  
いた。

『奴を倒す為の最低条件は、ウッドベルネクストと白式、フィリップ、  
そして俺だ』

(あ、順序逆じゃん)

そんな事を思いながらも、弾はGNソード――を振るつた。

## 海上の激戦 T w e l f t h E p i s o d e

「トランザム！」

「フアング！」

「零落白夜！」

三人は、自分に出せる最大の力で福音<sup>ゴスベル</sup>へと迫る。

（フィリップ。俺は理性を保ったままで、どのくらい戦える）

（『それは君次第だ。大きな力を望めば、それ程リスクが高まる』）

（要するに、なるべく前衛に偏らない方が良いという事か）

数馬はフアングで強化されたスピードとパワーを駆使して、福音<sup>ゴスベル</sup>へと攻撃を仕掛ける。だがそれらは全て受け止められるか受け流されるかで、まともなダメージが入らない。

（だが、それは奴に躲す余裕が無くなったと考えれば状況は段々と此方に傾いていると思える）

「一夏と弾は俺の合図で指定したポイントに全速力で攻撃を仕掛けろ！」

「おう！」

一夏と弾の応答を得ると、数馬は腕部から光の刃を出現させそれを引き抜いて投げた。

光の刃が何かを追うように飛行し始め、やがて一定の場所を囲んで飛行し始めた。

「そこに奴がいる！紫電が走った時が奴の出現のタイミングだ！」

数馬の言葉の数秒後、それは現れた。

「今だ！」

「うおおおお！」

「シヤラアアア！」

一夏と弾は二方向から攻撃を仕掛けた。

「……………っ?!」

福音<sup>ゴスベル</sup>は現れると、二人からの攻撃の回避を始めたが、時は既に遅かった。

「くらえー！」

一夏の零落白夜が福音<sup>ゴスベル</sup>の右腕に命中し、弾のGNソード――の斬撃が左翼に命中した。だが

「…」

「えっ?!なんで!」

「今の、最大威力なんだぞ?!」

一夏と弾の刃は装甲の上に張られた膜の様な物に阻まれて止まった。福音<sup>ゴスベル</sup>にとつても予想外なのか、福音<sup>ゴスベル</sup>は少し戸惑った様な様子を見せた。だがすぐに切り替えて反撃に転じた。

ドゴンツ!

「っ?!グアア!」

まず福音<sup>ゴスベル</sup>は右側に居た一夏を回し蹴りで蹴り飛ばして近くの島の森に叩き込んだ。

ギユンツ!

「ゴハッ!」

そして左側に居た弾の腹部にゼロ距離でビームを放ち、島の崖に激突させた。

「お、おいおい!ンなのありかよ!」

「あの膜、シールドエネルギーじゃねえのか?」

「計算外だ。ここまでの力があるとはな」

弾は落ちてきた細かい岩を退かしながら苛立たしげに言った。そして一夏は、自身にのしかかる木と絡みつく草等を払いながら困惑した。

「数馬!大丈夫?!」

「一夏!」

「弾!エネルギー残量は?!」

「なんか俺だけ心配され方のベクトルが違くない?」

シャルロットは数馬の傍に寄り、鈴と箒は一夏の元へ最高速で寄った。そして簪は弾の近くに寄りながらテータリンクを開いた。

「皆さん!来ますわ!」

それぞれが心配な者の所に寄っていると、セシリアがGNスナイパーライフルを構えながら言った。

「ラウラ！ステラは！」

「ダメだ！見つからない！どうして……………どうして見つからない！」

ラウラは泣きそうな声で叫ぶ。だが、その声は突然止み、ラウラは静かに立ち上がった。

「そうだ。お前が悪いんだ。お前がステラを落としたんだ」

ラウラの声は酷く冷たくなり、その目はかつて一夏を見ていたそれより、遥かに冷え切っていた。

「お前が！ステラを傷付けたんだ！」

瞬間、ラウラは瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速を使って福音<sup>ゴスベル</sup>に迫った。

「お前がああああ！」

ラウラの攻撃は、まさに獣の様だった。怒り狂い、憎しみに溺れた姿は、ステラの暴走すら甘いと思わせる程だった。

「ダメだラウラ！冷静さを欠いて勝てる相手では無い！」

「……………っ！」

だが、それでも圧倒的な実力差を埋めるには足らず、福音<sup>ゴスベル</sup>はその攻撃を悠々と躲し、ラウラの背中に大量のビームを撃ち込んだ。

「グアアアアア！」

そのダメージにシュヴァルツエア・レーゲンは強制的に解除され、ラウラは重力に抗う術を無くして海へと落下していく。

「ラウラ！」

箒は紅椿の最高速を出してラウラの下に回り込もうとした。だがそれを許す程福音<sup>ゴスベル</sup>は甘くは無かった。

「くっ！邪魔だ！」

箒の振るった刃は空を切り、その隙に福音<sup>ゴスベル</sup>は箒の横腹を蹴った。

「ガハッ！」

箒はその衝撃でよろめく。普段ならその隙は僅かな一瞬。だが、ラウラが海に落ちるには、充分過ぎる時間だった。

「ラウラアアア！」

箒の悲鳴と共に、ラウラは海へと落ちた。

……………



「あれ、ここは？」

ステラが目を開くと、そこは真っ白な空間だった。

『マスター』

「ん？ギンギラ？」

振り返るとそこには、本来のV Sの姿のギンギラが立っていた。

「ここはどこ？私、戦いに戻らなきゃー！」

ステラの目に、赤い光が宿りかけた。だがその時。

「ステラ」

「っ?!」

ギンギラの後ろから、桃色の髪の男と、ステラと同じ白髪の女が現れた。その姿に、ステラは信じられずに手を口にあてた。

「お父、さん？お母さん？」

「ああ、そうだぜ」

「そうよ、ステラ」

二人はステラの父親と母親。ブレンとティキだった。

「お父さん！お母さん！」

ステラは二人の元へ走り、抱き着いた。

「よく頑張ったな。ステラ」

「ええ、本当に」

そんなステラを撫でて、微笑みながら語りかける。

「でも、なんでいるの？二人ともEDN-3rdにいるんじゃない？」

「ああ、そうだな。だから、魂だけこっちに飛ばしたんだよ」

ステラの疑問に、ブレンはウインクをしながら答えた。ステラはそれに一瞬納得したが、次にその表情は驚愕に染まった。

「はあ?!いや、どういう事?!」

「もう、ブレン。その言い方だとステラが困惑しちゃうでしょ？」

「え？あー、悪い悪い」

ブレンは少し笑いながら謝る。その姿にステラとティキはため息をついた。

「全く……………。とにかく今は説明してられる時間は無いわ。貴方に

伝えたい事があるの」

「伝えたい、事？」

ティキの言葉に、ステラは首を傾げた。そんなステラを微笑ましそうに見つめて、ティキは話を始めた。

「あのね。ステラは、一人で頑張り過ぎよ。もっと友達の力も信頼してあげて？」

「え？私は信じてるよ?!」

「確かに信じてる。でも、お前は心の中で守らなきゃいけないって思ってる。もっと周りに目を向けて、一緒に苦難を乗り越えろ」

「でも！私は皆より戦いの経験もあるし、機体の性能だって上なんだよ?!私が守ってあげなきゃ」「馬鹿野郎!」キヤツ?!」

ステラが焦った様に言う中、ブレンがステラに頭突きをした。

「お前、そんなに強いかな？」

「え？」

ブレンの言葉に、ステラは間拔けな声を出した。

「あのな、お前は小さい時に俺達に二人はすごく強い!って言ってたけどな。俺達は、一人だと実はそんなに強くねえんだよ」

ブレンの語り方は、まるで昔話でもするかのような口振りだった。その口は微笑み、目は慈愛に満ちていた。

「そうよ。私達は一人じゃ戦えない。分かりやすく言うと、エクササーマルレゾナンスは一人じゃ使えないでしょ？」

「そうだけど、それは今関係「あるぜ」、え？」

ステラの言葉を遮り、ブレンは静かに言った。

「俺達一人一人の力はそれぞれに違う。だから弱点だって皆違うんだ。だから互いが互いにその弱点を補い合う。それが仲間……いや、友達だろ？」

ブレンの言葉に、ステラの目に涙が浮かぶ。

「でも私、皆と違う星で生まれて、力だってたまたま落ちたのが束さんのラボだったから手に入っただけで、私なんか皆とは友達になんて！」

「……………じゃあ、お前と皆は何だ？」

「え？どういう事？」

度重なる疑問に、ステラの頭は混乱していた。

「支え合って、助け合って、背中を預けて、笑い合って、泣き合って、言い合って、でもすぐに仲直りして……これが友達じゃ無いなら、なんなんだ？」

「っ！」

もうステラには、声を出す余裕は無かった。それからステラが声の代わりに漏らしたのは、涙と嗚咽だけだった。

「私、私！皆と友達でいたい！生まれなんて関係無く、一緒にいたい！」

「そうだ、それでいい」

「ステラ。迷ったら、立ち止まってもいいのよ？」

「私！もう誰も失いたくないって思っ！あの子を守れなかった日から、ずっと！」

ステラは泣きながら叫ぶ。その脳裏には、ステラがEDN—3rdで過ごした日々の記憶が鮮明に映し出されていた。

「お前は、一つだけ間違えてる」

「一つだけ？違う、私は沢山間違えた。だからあの子も死んだの！」

「死んでねえよ」

「……………え？」

ステラは伏せていた顔を上げて、キョトンとした。

「あの子は死んでない。それを伝える前にお前がどっかに行っちゃまって、伝える暇は無かったけどな」

「そんな！あの子はお腹を貫かれたんだよ?!」

「その後、数台のハーモナイザーを使って彼女の再生治療を行ったのよ。意識ももうじき回復するわ」

テイキの言葉に、ステラは更に涙を流した。その涙は、先程の涙とは根本から違っていた。

「良かった……………良かった！死んで無かった！」

ステラは顔を手で覆った。その端からは涙が絶えず溢れ、ステラの頬を濡らしていた。

「ステラ。あの子が助けられた様に、貴方には助けられる子がいる」

「その子はきつと放っておけば死んじゃまう。助けるか？」

「うん！あつたりまえじゃん！」

ステラが顔を上げると、そこに悲しみや絶望は無く、満開の花の様に輝く笑顔があつた。

「おう。行つてこい！」

「頑張つてね。でも、時にはしつかり休むこと」

「うん！行つてきます！」

ステラはそう言つて二人の間を通り抜けると、ギンギラのコックピットへと飛び乗つた。するとギンギラは閃光を放ち、ISの姿へと変わった。

「ギンギラ！ステラの事、頼んだぜ！」

『分かつています。ブレン！』

ブレンとギンギラは拳をぶつける。それが合図だったかの様に、ギンギラは飛び立った。

光はやがて青く染まり、光を抜けると海の中だった。

「っ！ラウラ！」

ステラは海に沈むラウラを受け止めてバリアでラウラを包むと、全速力で浮上した。

「ギンギン！」

海面がどんどん近付く。その度に海上で行われる激戦を肌で感じる。

「ギラギラ！」

ステラは笑う。それは気が狂った訳でも、何かが面白かった訳でも無い。では何故か。

「一番星だアアアアア！」

ヒーローは、どんな時にでも笑つて誰かを助ける。その言葉を教えてくれた友達がいるから。

「皆、お待たせ！もう大丈夫！」

ステラは海を抜けて、空へと昇る。

「何でかつて？」

「私が来た！」  
ラウラを両手で抱え、とびきりの笑顔で叫んだ。

## 海上の激戦 Thirteen Episode

ダメだ。勝てない。

「グッ！」

零落白夜も、トランザムも、ファングも効かない。

「ハァ！」

紅椿のスピードから繰り出される攻撃も躲される。

「私達が囷をするから、ラウラを助けてあげて！」

シャルロットのラピッドスイッチによって繰り出される攻撃も、効果が無い。

「山嵐！」

打鉄式最大の武器である山嵐すらも躲していく。あんなの、どうやって倒せばいいんだ？

「何ボーツとしてんだ一夏！」

弾が俺に叫ぶ。じゃあどうしろって言うんだ？こんな化け物、どうやって倒すんだよ。

「っ！」

その時、俺の頭に何かが駆け巡った。

それは無人機襲撃の時に感じた様な無機質な物や、今戦ってる福音ゴスペルから感じる負のオーラの様な物でも無い。俺は……いや、俺達はこれを知っている。

〈ギンギン！〉

その声は、皆に勇気を与えた。

〈ギラギラ！〉

その声は、皆に希望を与えた。

「一番星だアアアアア！」

海から飛び出したその光は、空中で弾けた。するとそこには光の翼を生やしたギンギラを纏ったステラがいた。

「皆、お待たせ！もう大丈夫！」

その顔は笑っていた。まるでこんな状況をなんでもないと蹴散らす様に。

「私が来た！」

その言葉が、俺達の心にもう一度火をつけた。

.....

ステラとラウラの復活。それはその場に居た全員と、司令室から見ていた千冬達にも希望を与えた。

「ステラ！」

簪が涙目になりながら抱き着いた。ステラはそれに驚きながらも、しっかりと微笑んで返した。

「おかえり！」

「うん、ただいま！」

二人は笑顔で挨拶を交わしながら、腕の中に居るラウラを見た。

「大丈夫なの？」

「うん。気絶してるだけみたい。体には打撲以外に外傷は無いし、内蔵とか脳にもダメージは無いみたい」

ステラの言葉に、全員が安堵した。だが、それと同時に福音ゴスペルの放った攻撃が意識を戦闘へと戻した。

「状況は？」

「福音ゴスペルがセカンドシフトした。それと、一夏と弾と数馬も」

「大方予想通りだね。それから？」

ステラと簪は、福音ゴスペルの攻撃を躲しながら会話を続けた。

「一夏と弾が最大出力で放った攻撃が、膜みたいな物でガードされた。今あれの突破口を模索してる所」

「膜？零落白夜が効かないって事は、少なくともシールドエネルギーじゃ無いって事か。あ、ラウラをお願い」

「いいけど、そう言えばその光の翼何？」

「ん？あ、これ？なんかセカンドシフトしたら武装欄にあったから使ってみた」

ステラは簪にラウラを預け、拳を引いて構えた。

「ギンギラ。やれる？」

『はい、いつでも』

ギンギラがステラに答えると、光の翼は更に光を強くした。それと同時に、肩の上に浮遊していたリングが正面に移動した。

『サーマルキャノン！』

ステラが拳を前に突き出すと、エネルギーがリングを伝って巨大なビームを発射した。

「……………っ！」

<sup>ゴスベル</sup>福音はそれをガードせずに躲す。それを見てステラは確信した様に笑った。

「皆！突破口見つけた！」

「え?!本当?!」

「うん！でも、その為には一夏とセシリアの力が必要なの！」

ステラの言葉に、二人は驚いた様にステラの顔を見た。

「お、俺達？」

「そうだよ。私の機体にサーマルエナジーっていうエネルギーが使われてるっていうのは、前にも言ったよね。サーマルエナジーっていうのは、本来この星に無いものなの。数十年前に遠い宇宙から来たもの。そして私も、四年前にこの星に来た」

「え？それ、どういう事？」

鈴はステラの言葉の意味が分からずに聞き返す。

「そのままの意味だよ。私はこの星で生まれたんじゃない。簡単に言うと、私は……………」

そう言ってステラは目を閉じる。ステラの心に迷いが生まれた。先程決めた筈の覚悟も、拒絶される恐怖心で掠れていく。でも、言わなければならぬ、ステラは目を開き、今まで隠していた秘密を打ち明ける。

「私は！宇宙人みたいな物なの！皆とは違うの！見た目は同じだし、言葉もなんでか分からないけど同じだけど、でも私は！〈関係無い〉、千冬、さん？」

その時、オープンチャンネルで千冬の声が全員の耳に届く。

へお前がどの星で生まれていようが、私にとってお前は、かけがえのな



い家族だ。お前がなんと言おうが、それは変わらない」

千冬の声は、戦闘中だと言うのにとても穏やかで、その声にステラは涙を一筋零した。

「いいの？私が、家族で居て、いいの？」

「お前は、今まで私達に多くの者をくれた。お前のおかげで東は救われた。お前のおかげで私は過去と向き合えた。お前のおかげで一夏達は強くなれた。そして……お前に救われた人間はこれからももっと多くなる。大丈夫。誰がなんと言おうと、お前はお前だ」

ステラの涙は、頬を伝ってギンギラの腕に落ちる。

『マスター。そして貴方には、救える人が目の前にいます。ならば、救いましょう。私達の持つ力で！』

「……そうだね。今は生まれなんて関係無い！とにかく、あの人を救う！」

ステラはそう言って福音<sup>ゴスベル</sup>を指した。

「私が一夏とセシリアにサーマルエナジーの力を渡す！その間皆は時間稼ぎを！」

「分かった！」

数馬はファングの出力を暴走するギリギリまで上げて福音<sup>ゴスベル</sup>に向かう。

「クソが！俺もそつちが良かったぜ！」

弾は愚痴を言いながらGNソードⅡを構えて福音<sup>ゴスベル</sup>へと仕掛ける。

「行くわよオ！」

鈴は龍砲を撃ちながら双天牙月を振りかぶる。

「私が攻撃を捌くから、皆は気にせず戦って！」

簪は山嵐の砲門を解放し、いつでも放てる状態にした。

「参る！」

簪は雨月と空裂を構えながら福音<sup>ゴスベル</sup>に連撃で迫る。

四人が四人に出来る事をしている。その最中にステラは、準備を進めていた。

「一夏、セシリア。二人とも私の前に来て」

二人はステラの言葉に従い、ステラの前に行った。

「力を渡すって、どうやるんだ？」

「拡張領域を利用して擬似的にギンギラと二人の機体のエネルギー回路を繋げる。白式は零落白夜を強化して、ブルーティアーズは無人機襲撃事件の時の力だよ」

「あの時の、力………ティアーズとスターライトmkIIIの併用ですの？」

セシリアの問いに、ステラは頷いて肯定した。

「最悪の場合は弾と数馬、鈴にも同じ事をする。でも、正直ゴスペルの学習能力を考えると一発で決めたい。やれる？」

「当然ですわ！」

「やんなきゃ、皆を守れねえ。俺もやるぞ！」

セシリアも一夏も、覚悟を決めた。いや、既に決めていた。

「なら、行くよ！ギンギラ！」

『分かりました。エネルギー回路、接続開始』

ギンギラの腕部装甲が白式とブルーティアーズに触れる。すると、そこから金色の線が機体の装甲に沿って描かれる。

『接続完了。擬似サーマルエナジー回路、精製完了』

「一夏！セシリア！内側に芽生えた力を感じて！」

(力………)

二人は目を閉じる。すると、体の底から湧き出る力を感じる。二人はそれを感じ取り、目を開く。

バアアアアアンツ！

その時、二人の機体から光が爆ぜる様に発せられた。

「ウオオオオ！」

一夏は叫ぶ。すると青く光っていた雪片式型のエネルギーの刃が、金色に光り輝く。

「ハアアアア！」

セシリアも叫ぶ。すると髪は銀色に染まり、それと同時にビットも動き出す。セシリアはスターライトmkIIIで狙いを定め、引き金に指をかける。

「ギンギラ！私達も！」

『はい！』

『バランスブレイク！』

ステラとギンギラもまた叫ぶ。その叫びと共にギンギラから膨大な光が溢れ出し、ステラとギンギラの内に眠る力が、どんどん高まっていく。そしてステラの瞳は、真紅に染まった。

「二人とも、行くよ！」

ステラの掛け声と共に、一夏とステラがスラストを吹かし、セシリアは引き金を引いた。

「ウウオラアアアア！」

「シャラアアア！」

<sup>ゴスベル</sup>福音に降り注ぐビームの嵐を背に受けながらも、ビームは意志を持つように一夏達や元から戦っていた鈴達を躲し、<sup>ゴスベル</sup>福音に迫る。その後から一夏が斬りかかり、それに続くようにステラもデイスティニーソードを振る。

「……っ?!」

それをギリギリ躲した<sup>ゴスベル</sup>福音だったが、周囲をビットが取り囲んでいることに気付いた。

「ハア！」

セシリアが引き金を引くのと同時に、ビットとスターライトMKIIから大出力のビームが放たれた。

「……っ！」

<sup>ゴスベル</sup>福音は必死にそれらを躲そうとするが、生物の様に動くビームの動きが予測出来ず、数発当たってしまう。

「……っっっ！」

「シフト、スピード！」

<sup>ゴスベル</sup>福音は高速移動を始める。ステラがそれを追うためにスピードにシフトする。それでも、一対一となると分が悪く、苦戦を強いられた。「トランザム！」

辺りにその声が木霊した。それと同時に空中で衝突を繰り返していた光の中に、紅蓮の光が混ざる。

「シャラア！」

トランザムを使った弾とダブルオーが、GNソードⅡを振り、鱗を切り裂いた。それを危機と感じ、福音は距離を置いた。

「逃がさない！」

それと同時にステラはデイスティニーソードを収納し、フリーダムカノンを出現させた。

「フルバースト！」

二人の掛け声と共に、四つの砲門からビームが放たれる。そして、高速移動を使用できない者は、そのタイミングを逃さず自身の武器を最大で放つ。

「山嵐！」

簀は残していたミサイルの半分を。

「龍咆！」

鈴は最大出力の龍咆を。

「ティアーズ！」

セシリアは一時的に使える様になっているフレキシブルで追尾するビームを。

「ファング！」

数馬はファングの能力で生まれたビームの刃をブーメランの様に作った投擲武器を。

「ハァ！」

簀は空裂から発せられるビームの刃を。

全員の攻撃が命中し、福音の動きが鈍る。

「今だ、一夏！」

「ああ！零落……いや、金色白夜！」

一夏は金色に光り輝く雪片式型を構えて、福音に向けて瞬間加速を使い高速で迫る。

「ウオオオオオ！」

一夏の叫びと共に振り下ろされた雪片式型は、福音を覆う膜に阻まれた。だが、それも一瞬の事だった。

「もう一回！トランザム！」

「限界まで行くぞ！ファング！」

「行くよギンギラ！」

『はい！マスター！』

その時、限界以上の速度で、それぞれの力を持って、弾と数馬、そしてステラが攻撃を仕掛けた。その攻撃を弾く為に、福音は膜を作る為のエネルギーをそちらに回してしまった。結果的にステラ達は弾かれたが、福音の防御力は格段に落ちた。

「いつけえええ！一夏アアア！」

「これで、終わりだアアアアア！」

一夏の振り下ろした雪片式型が、エネルギーの膜を斬り裂いた。

「っ！見つけた！」

一夏は操縦者とコアを見つけると、両方を抜き取って急速でその場を離脱した。

「ツツツツツ！」

コアを抜かれ、本能だけが残された鉄塊は、その場でもがき苦しむ。「ごめんね」

ステラは一言呟くと、サーマルキャノンでそれを吹き飛ばした。

「皆、ありがとう……………私達の、勝ちだアアア！」

ステラの声は、激戦を終えた海上に響き渡った。

海上の激戦 Fourteenth Episode

「スーーーーーちャーん！」

「ん？ごはつ?!」

ゴスベル 福音との戦闘を終えた一行は砂浜に降り立った。そしてギンギラを待機状態に戻したステラに、束がいつかの様に抱き着いた。

「良かった！本当に良かった！スーちゃんが生んでなくて！すつごく心配だったから！」

「束さん、知らないんですか？私はそう簡単に死にませんよ」

「何度も死にかけてるでしょ?!」

「うっ！それを言われると……」

ステラと束がそんなコントを繰り広げていると、千冬が歩き寄り、尻もちをついたままのステラの頭を撫でた。

「よく頑張ったな、ステラ」

「……はい！」

ステラが満面の笑みで答えると、その場の雰囲気が一気に解れた。

ザツ

その時、抱えられていたラウラが砂浜に足をつけた。

「ステラ、その、ありがとう」

ラウラは少し照れくさそうに、頬を掻きながら言った。

「ううん。元々は私が落ちたんだし、お相子だよ」

「それと、だな。出来れば、あの日の答えを聞かせてくれ……あ、出来ればでいいんだぞ?!」

あの日とは、ラウラがステラにキスをした日だ。それ以来、ステラはその答えをずっとはぐらかしていた。その答えを、ラウラは求めていた。

「私はね。ラウラの事、likeの方で好きだったんだ。でも、いつの間にかそれが変わっちゃってさ」

ステラは頬を赤らめながら言う。

「私ね、ラウラの事、好きだよ」

ステラの言葉に、ラウラ以外の全員が微笑む。

「あ、ああ……」

ラウラは膝から崩れ落ちて、そのままステラに抱き着いた。

「やつと、やつと通じた！もう無理だと、諦めなくてよかった！」

「ごめんね、ラウラ。そして、ありがとう。私を好きになってくれて」

二人を、全員が優しく見守る。そしてそれを見守る様に、空に一番星が煌いていた。

.....

「「「「「「おかえりなさい！」「「「「「」」」」」」」」

戦闘を終え、旅館の広間に戻ったステラ達を待っていたのは、臨海学校に参加していた生徒全員からの歓迎だった。

「ただいまー」

それに対して、ステラが満面の笑みで応えた。すると、生徒達は一斉に雪崩の様にステラに駆け寄った。

「ステラさんが危ないって聞いた時はビックリしたけど、無事ではなかった！」

「え？なんでその事知ってるの？作戦の内容は皆には秘密だったんじゃない」

ステラは疑問を抱き、それを問う。

「あ、実はね。あの後皆でここに集まっていたの。そしたら急に頭に声が響いて。自分だけじゃなくて皆だったから驚いたよ！」

「しかもその声が『ステラが死にそうなんだ！誰か、誰でもいい！アイツの為に力をくれ！』って。ビックリしたけど、なんか妙に信じたくなって。だって、『ステラが一番星になる為なんだ！』なんて言うんだもん」

ステラの瞳孔が大きく開いた。その目は驚愕に染まり、何かを悟った様だった。

「そんな事言うの、ステラちゃんの知り合い以外にあんまりいないで

「しよ?」

皆がクスクスと笑い出した。それを見て、一夏達も笑い始めた。

「確かに、絶対ステラの身内だろうな」

「ああ、だろうな」

広間を笑い声が包む。それに釣られて、ステラも笑い出した。その後、翔一と旅館の従業員渾身の料理を食べた後、少しの間旅館内で休憩時間となった。

「なあ、ステラ見てないか?」

「いや、見てないが。嫁がどうかしたのか?」

旅館の廊下で、一夏が通りかかったラウラに声をかけた。

「いや、どこを探しても居ないんだよ。今回の詳しい話を聞きたいって千冬姉が言ってたから探そうと思ってたんだけど」

「っ!まさか、外に出て警備でもしているのか?」

「それなら連れ戻さない!」

一夏とラウラは急いで千冬に事情を話し、共に旅館を飛び出した。

「くっそ!どこだよ!」

「ステラ!何処だ!」

一夏とラウラが大声を上げる中、千冬は静かに一点を見つめていた。

「歌声が聞こえる」

「歌声?」

「ギンーギンーギラーギラー……闘ー志がー燃ゆるー。俺ーらのー誓ーいは、血の契り」

不思議な歌だ。一夏達のイメージは総じてそうであった。

「ステ……」

一夏は声をかけようとした。だが、それは叶わなかった。突然現れた銀髪の男によって。

「よっ、ステラ」

「あ、お父さん。本体も来れたの?」

「なんか来れたわ」

一夏達は困惑した。その男が何も無かった所から現れた事や、ステ



ラがそれに驚いていなかった事もだが、最も一夏達の耳に残った言葉は、ステラの「お父さん」という言葉だった。

「そっちでの戦いって、どうなの？」

「今は、あの謎のI Sとエイクリッドとの戦いの傷跡の深さを見て停戦状態だ。奪い合うにしても、その星が壊れちまったら元も子もないだろう？」

「それは確かにそうだね。お母さんは？」

ステラが尋ねると、男は苦笑しながら頭をかく。

「向こうで待つてる。だから早く帰らねえと拗ねちまうかもな」

「そっか。わかった」

ステラは笑いながらそう答えた。

「そろそろ時間っぽいわ。じゃあまた今度な」

男はそう言いながら、体に光を宿す。

「うん。私が帰るか、お父さんが来るか。まあ、どっち道また会えるよ」

「おう！そうだな！まあ、なんだ。元気だな」

「うん！」

ステラの答えを聞き、男は満足そうに光の粒となって夜空に消えていった。

「フーツ。まさかEDN―3rdに帰らずにお父さんに会えるとはね。まあ、意識の中だけならお母さんにも会ったけど」

ステラの呟きは、暗闇に溶けていく。だが、一夏達の耳には鮮明に焼き付いていた。

「……………ステラ」

その時、静寂を切り裂いて千冬が声をかけた。

「ん？あ、千冬さん！あ、そのえつと、これはなんて言うか、別に千冬さんの言う事を聞いてなかったとかそういうのじゃ無くて「お前は、本当の家族の元に帰りたいか？」え？」

ステラは怒られると思ったのか、必死に言い訳をしようとしていた。だが、千冬はそれを気にせずステラに問いかけた。

「お前は、本当の家族の元に帰りたいか？もしそうなら、束に言えばそ

れなりの物を作ってくれる筈だ。それにギンギラの性能も加われれば、お前の星にも帰れる筈だ。そうだろ？」

千冬の言葉に、ステラや一夏達は目を見開いた。ステラは想像もしなかった言葉に、一夏達は触れる事を避けていた言葉に。

「どうなんだステラ」

千冬の目に迷いや偽りが無いと感じ、ステラはニコリと笑いながら千冬の顔を見た。

「帰りませんよ。私、まだこの星でやる事も、やりたい事も、一緒に居たい人も、会いたい人も居る。私は帰らない。いつか帰るとしても、私はまだ帰らない」

ステラの目にも、迷いは無かった。

「いいのか？父親や母親に、会いたくないのか?!」

親と居れない寂しさを知っているから、千冬はそう言わずには居られない。誰にも見せなかつた弱い部分。それを千冬はステラに見せていた。

「……………お母さんが言っていました。そばにいない時は、もつとそばにいてくれるって。私の心に二人は居ます。会えなくても、心は繋がってます。だから、帰らなくなつていいんです」

「でも！「うつさい！」っ！」ガツンッ！

千冬が尚も反論しようとしたその時、ステラは頭突きでそれを止めた。

「いったあ……………千冬さんは、鈍感なんですか？少しは察して下さい」

「どういう、事だ？」

ステラはため息をつきながら、千冬を抱き締めた。

「私は、この星で千冬さん達と一緒に居たいんです。いつか帰るとしても、私の中に千冬さん達との思い出を刻みたいんです。寂しくないように」

ステラの言葉に、千冬の瞳から涙が零れる。

「私には足りない物が多過ぎるから、誰かにそれを貰いながら生きていく。この星に来て、私はいっぱい貰った。だから誰かに何かを返したりあげたり出来るまで、私はこの星で生きていくよ。確かに辛い事

も多いし、正直逃げ出したくもなるよ。でもさ、逃げたら格好悪いじゃん？」

ステラはニコリと笑った。

「私が目指すのは、誰の目にも輝いて見える一番星。何よりも早く輝いて、皆が見つけられる一番星。誰よりも輝かなくても、皆が知っている一番星なんです。だから、逃げたくない。逃げたら、一生後悔しちゃうだから」

ステラは、目に少し涙を浮かべた。過去の逃げた記憶が、ステラの心を蝕む。

「でも私弱いから、今まで沢山逃げて来た。一番星になんか、なれっこないよ……」

ステラの涙は頬をつたい、地面に落ちていく。その涙を、ラウラが受け止めた。

「逃げてもいいんだ」

「らう、らう？」

ラウラの言葉に、ステラは間の抜けた声を出した。

「逃げる事を、誰も否定はしない。お前はそれだけ頑張ったんだ。それを誇れ」

「でも！頑張っても届かないんだ！一番星になる為には、まだ全然足りないんだ！」

「でも、お前東さんに言ったんだろ？」

その時、木に寄りかかって聞いていた一夏が問いかけた。

『例え離れる事になっても、一番星みたいに強く輝いてれば、その回りには沢山の人が集まる。そうやって光を繋いで大きく輝け』って親父さんが言ってたって。なら、一人で頑張らなくてもいいんじゃないか？一人じゃ光は繋がられないだろ？俺の憧れの人が言ってたんだ。『光は絆。誰かに受け継がれまた光り輝く』って。これってさ、お前の親父さんの言葉と似てないか？」

「どういう、事？」

一夏の言葉の意味が分からずに、ステラは問い返す。

「結局さ、誰も一人じゃ輝けないって事だろ？お前がいて、俺や皆がい

て、そのそれぞれにも繋がりがあって、それって多分、いつか自分に帰ってくると思う。そうやって皆が繋がって、星って光ってんじやねえかな。なんか、自分でも何言ってるか分かんねえけどさ。なんていか、あれだ」

一夏はしやがみ込み、ステラの頭を撫でた。

「結局は皆、一人じゃねえって事だろ？」

その言葉と共に、ステラの感情の壁は決壊した。

「一人じゃない……。私、一人じゃ、無いの？」

「ああ、一人じゃねえよ。友達の俺達がいる。大人の千冬姉達がいる。そして、お前の好きな人がいるだろ？」

そう言つて一夏は、ラウラの背中を押した。

「うわっ?!」

「うえ?!ふぎやつ!」

ラウラは変な声を出しながら転んだ。千冬は反射的にそれを躲したが、ステラはそうは行かずに、ラウラと一緒に倒れ込んだ。

「ほら、一人じゃ無いだろ？」

一夏は、イタズラを仕掛けた子供の様に笑い、二人を見た。千冬は立ち上がりながらそれに続く様に言った。

「ステラの保護者として、お前はまだ足りないが、ステラが好きなら否定は出来んさ」

「っ!ステラ!教官の許しが出たぞ!これで心置き無く嫁と呼べるぞ!」

「だから、まだ嫁じゃない!」

ステラはラウラを突き飛ばさない程度に勢い良く起き上がった。

「なら、私の事が好きじゃないのか?」

ラウラがニヤニヤと笑いながらそう問う。

「う、うう……。好きだよオ!もう訳わかんないくらいにラウラの事が好きなんだよ!／＼／＼」

「っ!／＼／＼」

顔を赤く染めながらそう言うステラに、ラウラも顔を赤く染めて言葉詰まらせた。



ングを見計らった様にバスの扉が閉まり、四人の怒りは矛先を失った。

そんなこんなで、波乱だらけの臨海学校が幕を閉じた。

それぞれの心に数々の物を生み出して。

夏休み！GinGira Summer time  
反撃！ステラの告白返し

「んん……」

皆さん初めまして。ステラ・ターナーです。最近私には困っている事があります。

「んー……」

「んもー……」

毎朝、ラウラが裸で私の布団に入ってきてきます。非常に恥ずかしいです。そりゃ付き合ってますけど、そういうのはまだ早いと思うんです。いや、キスはしましたけど。

「ん？あ、おはよう。嫁よ」

これも恥ずかしいです。ラウラは私の事をたまに嫁と呼びます。愛情表現なのは分かってますし、嬉しいんです。けど、反射的に照れてしまうのは仕方ないと思います。

「お、おはよう。ふふ、服着たら？」

よし、完全に冷静に装えた。これならラウラも気付かないでしょ。「フツ、また照れているのか。可愛い奴め」

そんな、まさか、バレた？なんで?!完璧に隠せた筈なのに！

「おはよう。ステラ、ラウラ。朝ご飯食べに行こ」

なんで？なんで簪は平気なの?!

「流石にもう慣れた」

「心読まれた?!」

うう……仕返ししてやる。仕返ししてやるんだからああ！

……

作戦1！質問で照れさせる！

「ねえラウラ」

「ん？どうした？」

ここは食堂。そして私とラウラが向かい合って二人用のテーブルに座ってる。視線が凄い。

((((ステラちゃんに、彼女が出来るなんて！私も狙ってたのに！))))

リボンの、先輩達？やっぱ、女子同士のカップルっておかしいのかな？

「おいステラ。どうしたんだ？俯いて」

「うえ？あ、ああなんでもない！」

な、何考えてるの！私はラウラの事が好きなの！それで十分！ウンツ！という訳で、作戦開始！

「ねえラウラ。私の事どう思う？」

さあ照れろラウラ！流石にこんな人前で言うのは恥ずかしいですよ！

「うむ。可愛く愛らしい。私の大好きな嫁だ」ニコツ

うわああ！言われたああ！なんで?!なんで照れないの?!

((((なるほど、そういう事か……))))

「うわあああ！もう知らない！」

「え?!なんで?!待てステラ！」

その後、二人仲良く遅刻して千冬さんに怒られました…。

.....

作戦2！ドキドキ、ポツキーゲーム！

「あうああー」

教室のラウラの席に手をつけて顔を近付ける。口にはポツキー。

そう！これこそまさにポツキーゲーム！

「ん？おお、ポツキーゲームか。いいぞ」

ん？あつさり？けど、ここからだよ。私はギリギリまで止めないし

！ラウラも流石にこんなに大勢の前でキスなんてね。フフフツ。

パキツパキツパキツパキツ

あれ？全然スピードも変わらない？



パキパキパキパキッ

なんか早くなってる?え、え?!

「ん、んん!」

とにかく止めなきや!このままじゃ本当にキスしちゃう!

ガシッ、パキパキパキパキッ

ちよ、頭抑え「んむ」

「んんん!」

キス、された?!え?!恥ずかしくないの?!……………そう言えば私の  
ファーストキスって、教室での公開キスだったっけ……………。

……………

作戦3!とりあえず、お昼ご飯でアーンツてやる!

ここは食堂。ラウラのご飯美味しそう……………。って、そうじゃなく  
て!今度は私がやる番だ!

「ねえラウラ。そのご飯美味しそうだね」

「ん?そうだな。この料理は私の国の料理に似ているからな」

「そうなんだ。私のと一口ずつ交換しない?」

「いいぞ」

「分かった。はい、アーン」

……………ここまででは上々。さてさて、どうやって弄ろうか。(ニヤニヤ  
もぐっ、んん……………おお、これは美味しいな」

あれ?食べてる?照れてない?

「ほら、私のも一口やろう」

あ、ヤバい。無理だった時の事を考えていなかった。

「え、あ、その……………やっぱいいや。もう無くなりそうだし、最後まで  
で食べていいよ」

うう、私ってなんでこう上手く出来ないかな……………。

でも、次はしっかりとやろう!もう何がなんでもやるんだ!

……………

作戦4！ちよつとエツちな感じでラウラに迫る！

「ラウラあ……」

ラウラの部屋に、ちよつとエツちな感じな下着を身につけていく。そして、部屋に入れて貰ったら、入口を閉めてすぐに脱ぐ。ラウラを呼んで、振り返ったら私の姿が目に入る。

「ん？」

よし！ラウラが振り返った！

「この下着姿、似合うかな？」

ハハハッ！これ流石に照れるでしょ！

「おお、お前に似合っているぞ。だが」

照れてない?!というか

「だがって、何？」

「それはお前の趣味じゃ無いだろ？今日は朝からおかしいぞ。どうしたんだ？」

は？ラウラは何を言っているの？これは私の……違うよ。違う。こんなエツちな下着、私着ない。え？じゃあ何の為に私は……ラウラを照れさせる？もう途中で無理だって分かったのに？

「ねえラウラ。なんで私が何をしても照れないの？私の事好きなんですよ？」

分かってる。こんなの一方通行で迷惑な事くらい。でも、止められない。私は、ラウラを好きになっちゃったんだ。

「そういう事か。あのな、私はお前のする事全てに心を弾ませていたんだ」

「嘘だ！だって、焦ったりして無かったし、全然照れたりしてなかったじゃん！」

「ポーカーフェイスだ。軍人では基本だぞ。私はお前に格好悪い所は見せたくない。だから、私はそういうのは心に秘めておいているんだ」

そんなの、そんなのって……。じゃあ私の頑張り何だったの？気付かなかっただけで、私はラウラの照れる姿を……あつ、そうだ。

「ねえラウラ。ラウラって、照れてる時の癖ってある？」

「ん？そんなのあったら、多分拷問を受けたらすぐに口を割られてしまう。そういうのも抑えているさ」

今、少し長く瞬きした。それだけなら気が付かなかった。けど、それは今日に限ってよく見られた。しかも、私がおかをした時。少し驚いたりしているのかなとか思ってたけど、これは……。

「ラウラ、照れてる？」

「言ってるだろ？心ではドキドキしているさ」

瞬きが、長い！照れてる！多分これは照れてる！

「ねえ、ラウラ」ボソツ

「んひゃ?!」ビクツ

試しに、前にクロエさんにやってみたみたいに耳元で話してみた。どうやら効果覿面。計画通りい。(ニタア)

「あのね、私、ラウラに言わなきゃいけない事があるの」ボソボソ

「うひゃつ……なんだ？」

うひゃつ、だつて。ラウラ可愛いなあ。あ、ヤバい。変なスイッチ入ったかも。まあ、いつか。

「好きだよラウラ」チュツ

「んな?!す、ステラ?!な、何を！／＼／」カーツ

「キスだよ？ラウラだつてして来たじゃん」

「いや、そうだが……」

動揺してる。なんだ。こうすれば良かったのか。

「ねえラウラ。今夜は寝かさないよ？」

「ふ、ふええええ？」

蕩けた顔、可愛い。色々忘れてる気がするけど、まあ、いいよね。

…………… (三人称視点)

／／／／／／／／

「どうしたの？ラウラ」

朝の食堂で、頭から湯気を出して机に突っ伏しているラウラを見

て、シャルロットが声をかける。ラウラはそれに答える様に顔だけをシャルロットに向けた。

「シャルロットか／＼／＼」

「うわっ！ラウラ顔真っ赤だよ?!風邪ひいたの?」

「いや、ステラに一晩中愛を囁かれた。あと、耳も舐められたり／＼／＼」

「ごめんちよつと何言ってるかわかんない」

シャルロットは理解出来なかった。あのステラが、そんな事をするなんて。だが、次に目に映った手で顔を覆って机に肘をついているステラを見て理解した。

「ああ、暴走ね。ある意味で」

その日以来、ステラとラウラの距離は一気に縮まり、食堂等で砂糖を吐く生徒が続出したとの事。

尚、数馬の淹れたコーヒーマシンの人気はうなぎ登りで、数馬も満更ではなかった。そして、シャルロットはあからさまにそんな数馬に怒っていたのだった。

## 何故の愛

私は、恋をしてしまった。

「よっ、虚」

あの軽薄な態度。本来私が一番苦手とする人の筈。けど、私は彼に惹かれていた。

「おはよう、弾君」

私はなるべく彼にそれを気取られないように気をつけながら答える。一応暗部の一家に仕える者として、その位のポーカーフェイスは身につけている。

「一緒に朝飯食わね？一夏も数馬も誰かと食うみたいでさ」

これは、思ってもみなかった好機。彼を食事に誘う度胸の無かった私としては、彼のこの気楽さが時に羨ましく感じる。

「ええ。私も相手が居なかつたので、いいですよ」

「おい、また敬語出てんぞ？」

「何度も言いますが、これは癖なんです。どうしようもありません」

私は微笑みながらそう言う。

「あつそ。まあいいや。飯だ飯」

こういう性格だから、肉をよく食べそうだけど、意外にも彼の好物は野菜炒めだったりする。なんでも実家が食堂で、その一番の料理が野菜炒めだそう。一度行ってみたいとは言ったものの、彼は帰るのが面倒だと言って連れて行ってはくれない。でも好物の由来が実家の一番人気料理と言うのが、彼が家族を大切に思っているのだな、と感じられる。

「さーてと、今日は何にするかねえ」

「そういえば、昨日から新メニューで玉子とじ肉うどんと言うのが入ったらいいですよ」

「そうなのか？あ、この鯖味噌ってのも美味そうだな迷うな」

「そうですね。私も迷ってます」

最近この学園では物騒な事が続いている。この前の臨海学校ではアメリカとイスラエルの共同制作の軍事用ISが暴走し、それを止め

に入ったのが一年の専用機持ちらしい。ステラちゃんに至っては死に掛けたらしい。

この事で轡木学園長がそれぞれの軍に対して抗議を申し立てたが、責任はどちらの国にも問われないと、IS委員会から判断されたらしい。お嬢様から聞いた所、多額の金銭のやり取りがあつたらしい。正直に言う、私はそんな人達を殴り倒してしまいたいとその日から思っている。

「おい、虚？おーい」

そして、その戦闘の際に、彼を含む男子生徒のISと、ステラちゃんセカンドシフトのギンギラさんが二次移行をしたらしい。唯でさえ彼らは世界中から狙われているのに、彼らはそうなる事も厭わずにその力を望んだ。

「すみません。少し考え事をしていました」

「なんだ？まだ決まらないのか？」

本当に、彼は鈍感すぎる。少しは気付いてくれないのに。ステラちゃんとラウラちゃんも臨海学校の最終日から付き合ってるらしい。そういうえば、同級生や先輩方にはその光景を複雑な顔で見ている人が多々いた。恐らく彼女達もステラちゃんの事を可愛がっていたから、離れていく様で悲しくなったのかもしれない。

「そうですね。どっちにしましょうか」

でも、決めていないのは事実だから、彼の言葉もある意味間違いではない。

「じゃあ、俺が鯖味噌食うから虚はうどん頼めよ」

「え？」

「そうすりゃ、互いに分ければ両方食えるじゃん」

彼は本当に鈍感だ。そういうのを異性とする場合は好きな相手以外には普通申し出ない。しかし彼にそんな素振りはないし、恐らく彼にとつてはこういう事は友達と良くしているから、そのテンションで言っているのだろう。

「分かりました。そうしましょう」

ここで変に断つても、彼に不信がられるだけだ。それに、こういう

事を彼としたかったという思いも、無かった訳では無いし……。

「お、あそこ空いてるじゃん」

彼が指差すのは、食堂でも一番見晴らしのいい席だった。普段はあそこは三年生の先輩方が陣取っているのだけれど今日はいない。

「しかし、あそこには予約の札が」

「あ？うお、マジじゃん」

予約してあるなら仕方が無い。そう思い、私が辺りを見回そうとした時、弾君に誰かが話しかけた。

「ちよつとアンタ、そこ私達の席なんだけど？」

「いや、だから座ってねえじゃん」

何故彼は喧嘩腰で返すのだろう。いや、そういう性格である事は重々理解しているけど。

「男のアンタが何近づいてんのって言うてるの」

なるほど。彼は彼女達がそういう人間だと判断したから喧嘩腰だったんだ。

「貴方、そういう方は無いんじゃないんですか？」

いくら先輩と言えど、私にも限界の許容量と言うものがある。

「なによ二年の癖に生徒会だからって偉そうに！」

その時、彼女らの内の一番前にいた先輩が私に平手を放ってきた。私は咄嗟に従者として鍛えてきた防衛術を使おうとした。だが、それよりも先に私の幾ら鍛えても細いままの腕よりも二倍はある様な腕がそれを阻んだ。

「俺の大事な奴に手え出そうとしてんじゃないやねえよ、クソ尼が」

私は、本気で怒っている彼を初めて見た。今まで怒っているとしても、冗談半分だったりした。けど、今の彼は本気だ。

「な、何よ！アンタ、女の私に手を出して、ただで済むと思ってるの？」  
「確かに現代じゃ、女が声を上げて名をさせばそいつはその瞬間から犯罪者扱いになる。女の味方をしとかなないと後々面倒になるからと、警察もまともに調べねえ事もある。けどなあ、ここはIS学園なんだ。俺もお前も一生徒でしかない。学園長に言えばあそこにある監視カメラの映像で確認も取れるだろうさ」

彼は、こういう時に非常に頭が冴える。いや、普段も真面目じゃないだけで、頭はいいんだ。けど彼はそれを何故か抑えている。しかしこういう時には無意識にそれが無くなるのだろう。彼に口で敵うのはこの学園でも会長や数馬君だけだ。

「くっ、分かったわよ！この席使えばいいじゃない！」

「は？使わねえよ。ここアンタらの席だろ」

「え？」

「俺は単にここが空席だと思って近付いただけだ。予約してあったんなら、そこに座っていいのは予約したアンタらだけだろ？」

「こういう所だ。私が彼に惹かれた理由は。」

「けど、ならなんでさっき私達に」

「そりやアンタらが間違ってると思ったからだ。俺は自分にとって間違ってる事を認めない。それを認めちまえば、俺は俺じゃねえからな」

「自分が、自分じゃない？」

「こそ。俺にとつて間違ってる事は自分にも他人にもやらせねえ。けど、それが正しいと思えたらそれ以降はどうでもいいんだよ。それがやりたいことしかできない

Y D って生き方だ」

彼の一番の魅力は、あの身勝手さだ。あの身勝手が周りを巻き込んで、皆を繋いでいく。そしてこれがまた、無自覚なのがタチが悪い。

「……………そう。ならこの席は貴方達に譲るわ」

「は？お前俺の話聞いて「聞いてたわよ。その上でよ」どういうことだよ」

「私もその、やりたいことしかできない Y D って生き方を実践してみたくなつてね」

彼女はそう言ってテーブルに置いてあった札を取って一緒に居た女子生徒たちを連れて何処かへ行ってしまった。

「……………感染しちゃいましたね、やりたいことしかできない Y D 病」

「させる気無かつたんだけどな…」

やっぱり、私はこの人が好きだ。無自覚に、人の生き方を変えてくれる。まるで、アニメの主人公の様な彼が。

「ま、いつか。食おうぜ虚」



この人の隣に居られるなら、たとえそこが戦場でも、私は平気だ。だって、私はこの人の事が。

「大好きですから」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、なんでもありません」

まあ、気付いて貰えるのはもっと先になりそうですがね。

舌に残る甘酸っぱさ

「ねえねえ数馬。今日一緒に出掛けない？」

朝、食堂で軽く朝飯を済ませてコーヒーを飲みながら本を読んでいた俺に、シャルロットが声をかけてきた。

「俺も今日はフィリップを束さんに任せているから暇だからいいが。何処にだ？」

俺の愛機フィリップは、セカンドシフト時に発現した能力であるフアングの暴走のリスク軽減の調整の為に束さんの所に預けてある。確か弾も預けてた筈だ。二機とも、ISの通信機能を介せばコアの人格と会話が出来らしく、他のISへの導入の為にデータをとりたいという思いもあるらしい。

「実は、あのレゾナンスの近くの城址公園にあるクレープの屋台があったって、そののミックスベリーが人気らしいんだ。食べてみたいんだけど、一人で行くのも寂しいし、誰か一緒に行かないかなって」「なるほどな。いいぞ」

ちようど暇だったんだ。それに……いや、これ以上は無粋か。

「あ、でも、その前にレゾナンスで買い物したいんだけど、いい？」

「ああ。程々にな」

レゾナンスか。最近頻繁に行くようになったな。まあ、大概はアイツらのお守りみたいなものだが。

.....

さてと。来たはいいが、俺は別に買いたい物がある訳では無いから、シャルロットの隣に立つくらいか。

「ねえ数馬。ここの近くにコーヒーの豆を売ってる店があるって聞いたんだけど本当？」

「ん？ああ、あるぞ。月に一度程行くが、落ち着いた雰囲気の内と気の利いた店主のいるいい店だ」

実際に俺はその店に豆を買いに行く。あそこにある豆は、常に最高

の状態に保たれている。そのまま店内で淹れば、最高のコーヒーが生まれるだろう。

「それがどうしたんだ？」

「今度僕もコーヒーを淹れてみたいんだ。数馬ならどんな豆がいいと分かるかなって思ってたさ」

なるほど。いつもコーヒーを淹れている俺に聞こうと思った訳か。

判断としては正しいが、俺としては答えられないな。

「……なるほど。だが生憎、俺はどれが良いかは分からない」

「そつかあ流石に数馬でもそこまでは「豆を選ぶというのは本を選ぶのと変わらない」え？」

「親父の言葉だ」

今や敵となった親父の言葉を自然と零す。あの人の言葉は俺の中にいつまでも巣食っている様だ。

「人は本を選ぶ時、その題名や表紙。そして不思議と惹かれる何かを感じる物を選ぶ。豆も同じだ。その豆の名前やその置かれ方。そしてこれだという不思議な感覚。俺が初めて自分の豆を選んだ時はそうした」

結局は借り物の言葉だ。シャルロットの心に何かを刻めればいいんだがな。

「そつか……じゃあ、数馬には道案内をお願いするよ。豆は僕自身で探してみる！」

「ああ、分かった」

俺たちはそんな会話をしながら歩みを進め、一つの店の前に着いた。

「ここは？」

「ここはアクセサリーショップだよ。流石にピアスとかは無理だけど、ネックレスくらいならいいかなって」

ネックレスか。そういえばコイツのISの待機状態もネックレスだったな。

「ねえ数馬。せっかくだしペアリング買わない？」

「ペアリング？俺とか？」

「うん。僕は数馬のおかげで諦めなかった。だから、お礼の気持ちと、これからもよろしくって意味も込めて」

なるほどな。確かにいいかもしれないが、問題は値段だ。高校生の俺達に買える値段だといいが。

「えつと…お、これなんていいんじゃないかな？値段も安いし、デザインもいいし」

「それか」

なるほど。片方が青いイルカで、もう一つが桃色のイルカ。それらを合わせれば見事にハート型に…待て。

「これは恋人同士が買うものじゃないか？」

「え？あ、そ、それもそうだね！流石にこれは無いか！他の探そっか！」

俺としては別にいいのだが。まあ次はシャルロットが選ぶ物に任せればいい。

「じゃあ、これとかは？」

それは指輪だった。赤い宝石の物と、青い宝石の物だ。

「これ店の人に言えばネックレスにもなるみたいだよ？」

「なるほど中々凝った装飾だな」

これはいいかも知れない。シャルロットも気に入っているようだし、これにするか。

「これにしよう。俺もこれが入った」

「本当に？じゃあ店の人呼んでくるね！」

その後シャルロットとネックレスを買い、レゾナンスを後にした俺達は先程話に出たコーヒー豆を扱う店。"origin"に来了た。

「ここだ」

「凄い。こんな店って本当にあるんだ」

驚くのも無理は無い。この店は薄暗い路地の中にひっそりと隠れるようにその店先を構えている。普通はヒント無しにここへ辿り着くのは難しい。確かここを見つけたのは、中二の冬休みだったか。

「中では大きな声を出すのはご法度だ。まあ普段通りで大丈夫だから

気を張る必要は無い」

「う、うん」

まだ何処か緊張気味のシャルロットを連れて、俺は店の中へと入る。扉を開けると、微かなコーヒー豆の香りが、照明が醸し出す独特の温度に乗って鼻腔を擽った。

「ん？おや、数馬君か。今日は彼女さん連れかい？」

「いえ、学友です」

俺がそういうと、シャルロットは前に出て会釈をした。俺に話しかけてきたのは、ここの常連の城嶋さんだ。俺より長くここに来ていて、よく色んな話を聞かせてくれる。

「マスターなら奥の倉庫だよ。なんでも数馬君に渡したいものがあるそうだな」

「そうですか。ありがとうございます。来週あたりにもう一度来るので、その時は色々な話を聞かせてください」

「いいよ。今回は結構面白い話があるんだよ」

それは楽しみだ。俺は城嶋さんに会釈をしながら横を抜ける。すると、コーヒー豆特有のなんともいえない香りが更に漂ってきた。

「倉庫って、ここ？」

シャルロットに聞かれ、俺は頷く。俺は目の前にある扉を開き中へと入る。

「マスター」

俺がそう言うと、店の奥から少し物音がした。

「ん？おや、数馬か。いらっしやい」

棚の陰から出てきたのは、まるで探偵映画に出てくるカフェのマスターをそのまま抜き出した様な人物だった。

「この人が？」

「ああ、この店の主の結城 信也さんだ」

彼は、俺の憧れる人のうちの一人だ。その立ち姿や、客との間にあ  
る不可視の壁。男として持ち合わせるべき物を、この人は持っている。

「ほほう。数馬も隅に置けないな」

「違いますからね」

やはり、女子を連れて歩くとかこういう事を言われて苦手だ。それが例え、好意的に思っている相手でもな。

「そういえば、俺に渡したい物があると聞いたんですが」

「ああ、そうだったな。これだ」

マスターはそう言いながら近くの棚から一つの箱を取り出して俺に手渡した。

「これは？」

「開けてみる」

俺は言われた通りに箱の蓋を開けた。そこには、一つの帽子が入っていた。

「これは？」

「壮吉が居なくなる間際に私に渡した帽子だ。もしもの時は、これをお前にとな」

「もしもの時？なら、何故今なんですか？」

俺には、この人の考えが読み取れなかった。いつもそうだ。この人は、他人との間に確固たる壁を築いている。それは拒絶ではなく、ボーダーラインだ。親父はそう言った物を持っている人間のそれより先を“心の不可侵領域”と呼んでいた。

「実は先日、一人の男が尋ねて来てな。彼は最近壮吉と会ったと言った。アイツは死んだ筈だ。葬儀にも出たから事実確認は済んでいる。それが今になって何故か。そう考えた時に、アイツの言葉を思い出した」

ここを訪れた男。恐らくはデストロ・デメイドだ。奴の思考は俺には読めない。読みたいとも思わないが。

「さて。こんな暗い話は終わりだ。今日は何の用だったんだ？」

「ああ、コイツがコーヒーを淹れてみたいと言うんで、ここに連れてきたんです」

「なるほどな。なら店内に戻ってくれ。あそこにある物の方がいいだろう」

俺達は再び店内に戻る。そこに並んだコーヒー豆達が、今か今かと

待ち侘びている様に見える面白。

「数馬から選び方は聞いたかい？」

マスターが豆を眺めるシャルロットに声をかける。するとシャルロットの手には一つの瓶が納まっていた。

「これだと感じた物、でしたよね？」

シャルロットの手の中にある瓶のラベルを見て、マスターが目を少し見開いた。

「数馬。お前自分の豆の名前を教えたのか？」

「いえ、教えてませんけど」

俺はまさかと思い、シャルロットの手の中の瓶のラベルを見た。そこには“*The heart of truth*”と書かれていて、それは俺が始めてからずっと使い続けている物だった。

「これは俺の知り合いが作ったんだ。これでこれを選んだのは四人目か」

「ねえ数馬、これでいいかな？」

「決めるのはお前だ。どうする？」

俺が聞くと、シャルロットは笑いながらすぐに答えた。

「これにするよ！」

.....

「すみませーん、クレープ二つ下さい。ミックスベリーで」

そして場面は変わって城址公園クレープ屋。もう日が沈みかけているな。

「あぁー、ごめんなさい。ミックスベリーはもう終わっちゃったんですよ」

「あ、そうなんですか。残念……。数馬、どうする？」  
なるほど。随分と意地の悪い店主だな。

「ストロベリーとブドウをくれ。一つずつな」

「はい、分かりました」

少し笑った。やはりか。俺はそのまま料金を払い、近くのベンチに

腰掛けた。

「どつちがいいんだ？」

「うーん。じゃあイチゴ」

シャルロットはそう言いながらイチゴのクレープを受け取った。

「これ美味しいな。今度アイツらにも教えてやるか」

「そうだね。ラウラとかが食いつきそうだよ」

笑いながらクレープを頬張るシャルロット。その頬に、クレープのクリームが付いているのを見つけて、俺はそれを指ですくった。

「うわあ?!なに?!／／」

「いや、クリームが付いていたんでな」

俺はそれを舐めて、再びクレープを食べる。

「気を悪くするな。はら、俺のもやるよ」

「いいの？」

聞き返すシャルロットに頷く事で答えた俺は、それを差し出した。

「んっ……………こっちも美味しいね」

笑いながら言うシャルロットに、俺は答えを教えることにした。

「シャルロット。ミックスベリーは美味かったか？」

「え?」

気付いてはいなかったか。まあ、その方が面白いか。

「このクレープはブドウだ。厳密に言えば違うが、ブドウによく似ていて、ベリーと名のつく果物はなんだ？」

「え?……………ああ、ストロベリーとブルーベリー?!」

「ご名答」

俺の言葉に、シャルロットが納得したようにウンウンと首を振る。

「そっかあ。ブドウをブルーベリーに見立ててそれでミックスベリーか」

「そういえば、これは恋人とする願掛けの様な物だったな。俺とで良かったのか？」

「…もう。人の気も知らないで」ボソツ

その時、シャルロットが小さく何か言った。

「ん?何か言ったか？」



「ふえ?!あ、なな、なんでもないよ?!」

俺が聞き返すと、シャルロットは慌てて否定する。だが次には急に静かになり、しっかりと俺の目を見て口を開いた。

「いや、あるよ………。僕は、数馬の事が好きなんだ」

聞き間違いかと、一瞬耳を疑った。だが、目の前のシャルロットの赤く染まった顔を見るに、どうやら違うらしいな。

「俺は半端者だ。お前を幸せにすることは出来ない」

「半端者だとか、そんなの関係ない!僕はただ、今日の前にいる数馬が好きなんだ!」

そうか。コイツはこんな思いを抱えていたのか。ならば俺も、それに答えなければならぬな。

「さつきも言ったが、俺は半端者だ。俺一人の力でお前を幸せにすることは出来ない」

「だから、そんなの!「まあ聞け」え?」

「俺が幸せにするんじゃない。二人で幸せになろう」  
「え?」

シャルロットの顔から緊張が抜ける。それと同時に間の抜けた声も出てきた。

「このミックスベリーだつてそうだ。例え一つ一つが完成していても、二つ揃わなければ意味を成さない。だから、俺たちも一人で完成である必要は無いんだ」

「どういう、こと?」

「あー、つまりだな」

「ここまで言つて伝わらないのか。まあ、シャルロットも困惑しているだろうから仕方が無いか。」

「俺が少しでも完成形に近付ける様に、俺と一緒にいてくれ」

この言葉を聞いた瞬間、シャルロットの目頭から一筋の涙が流れた。

「いい、の?」

「ああ、むしろこちらから言うべき事だったのにな」

シャルロットは泣きながら、俺に抱きついてきた。

「ありがとう、ありがとう！」

「こちらこそ、ありがとう」

俺は、シャルロットや皆を守りたい。今その気持ちが高まった。今までより強く、そして高く。

「数馬……大好きだよ」

「ああ、俺もだ」

俺達の舌には、ストロベリーとブルーベリー。ミックスベリーの甘酸っぱさが残っていた。それは俺達を表している様で、今この瞬間、この甘酸っぱさをもっと長く感じたいと強く思った。

半端者のハーフボイルド？上等だ。ならば俺は足りない物をシャルロットや皆が補う。皆の足りない何かを俺が補う。きつとそれが、俺達の完成形であると信じて。

## 姉妹の事情

「んっ……もう朝？」

ゆっくりと目を覚ました簪は、カーテンから漏れる光に目を細めた。

「ラウラ、またいる」

隣のベッドには、もはや恒例となった光景がある。そんな微笑ましい光景を見ながら、簪は頭の中で今日の予定を確認していた。

「まずは本音と一緒に実家に帰る。そして、家で食事をして、倉持技研によつて、ホテルに泊まって……この先は別に何も無いか」

そんな事を呟きながら、洗面所に入り歯磨きや洗顔、軽いメイク等をしていた。その時。

「うわああ?!ラウラ?!／／／」

同室のステラが目を覚ました。そして、布団に忍び込んでいたラウラに気が付いたのだらう。間拔けな声で叫んだ。

「ステラ、おはよう」

「あ、簪!おはよう!って、そうじゃなくて!なんでラウラがいるの!言ってくれなかったの?!」

一瞬普段通りに戻ったと思いきや、また騒ぎ出す。とても忙しい様だ。

「寝てたから」

「なら起こしてくれればよかったじゃん!」

「起こしてもその時点でラウラに気が付いて同じリアクションをとるでしょ?そのパターンはもう、五回くらいやってるよ」

「でもでも!でもお……／／／」

反論は返って来ないと分かったのか、簪は着替えの為にクローゼットを開いた。

「あれ?今日、どこかに出かけるの?」

「うん。久しぶりに家族で食事。本音も行くから、今日はラウラと一日イチヤイチャしてもいいよ」

「っ?!／／／」

反応を楽しんでいるのか、簪の口角が少し上がる。

「簪。あまり私の嫁を弄ってやるな」

その時、ラウラが体を起こした。それだけなら問題は無かった。しかし、その格好が完全にアウトだった。

「だから、なんで毎回裸なの！／＼／＼」

そう言われたラウラは、少し不機嫌そうな顔になりながら反論した。

「ムツ、失敬な。今日はちゃんと下着は着ているぞ。裸ではない」

「そういうことじゃないの！ちゃんと服着てよ！」

普段から何度も経験しているのだが、ステラは一向に慣れない。元が純粹だからか、それとも恋人を意識し過ぎるが故なのか。

「夫婦だからいいだろ」

「まだ夫婦じゃないってば！」

「まだ、な？」ニヤニヤ

「なっ?!／＼／＼」

これまた恒例となった会話だ。それを聞き流しつつ、簪は着替えを終えた。

「簪、その服新しく買った？」

「うん。なるべく整った格好で来なさいって言われてるから、この服にしたの」

「なるほどね。とりあえず、頑張つてね！」

「ステラもね」

「その話はもういいの！／＼／＼」

ステラを茶化しつつ、内心で心を固めていた。

(確かに、頑張らなくちゃね)

簪はステラの声を背に、部屋を出た。そして校門のあたりで本音と合流し、モノレールで本島に戻る。そこから新幹線に一時間程揺られ、そこから迎えの車に乗って、二人は更識家の家に着いた。

「四ヶ月ぶりだねえ」

「うん」

簪は短く返すと、そのまま門を潜って屋敷内に入った。

「お嬢様。おかえりなさいませ」

「ただいま、虚さん」

そこには、着飾ってはいないものの、どこか華やかさを感じさせる着物を着た虚が立っていた。

「お姉ちゃんは？」

「執務室にいらつしやいます」

「ありがとうございます。本音は先に行つてて」

「いやあ、先にお姉ちゃんと話してから行くよお」

本音は、そう言いながら虚と一緒に奥の部屋へと入つて行つた。

.....

本音と別れた簪は、執務室の前に来ていた。

「……ええ、分かっていきます」

ノックをしようと手を上げた時、部屋の中から声が聞こえた。

「ステラ・ターナーの監視は、引き続き行います。未登録のＩＳを持つ彼女は、政治的にも軍事的にも、無視できませんから」

「っ?!」

簪は思わず耳を疑った。学園であんなにステラを可愛がっている姉が、そんな任務を受けているという事を示唆する言葉が、信じられなかったからだ。

「いいえ。彼女のＩＳには人工知能が搭載されているので、データの入手は不可能です。男性操縦者のＩＳにも、コア人格の発達が見られます。同様にデータの入手は困難です。……ええ、ではまた」

ガチャツ

「お姉、ちゃん？」

「っ?!」

突然声をかけられて、楯無は扉の方を見た。そこに表情を強張らせた簪が立っている事に、更なる衝撃を受けた。

「簪ちゃん……今の、聞いたの？」

「ねえ、ステラを監視ってなに？どうして監視する必要があるの？ス

テラが、テロなんかすると思ってるの?」

簪の問いに、楯無は表情を曇らせた。

「簪ちゃん。私達は日本の影そのものの様な家系よ。日本政府が危険視する者が例え身内でも、私にはそれを徹底的に調べて、真実を明らかにする義務がある。そこに、私情を挟む余地は無い。それが、楯無の名を継ぐという事なの」

楯無は、そう言いながらステラの資料を取り出した。

「分からないよ。そこまでして、この国を守る意味はあるの? 一人まとも信じられないような国に、信じる価値があるの?」

「……だから、それは楯無を継いだ者として「違う!」っ: 簪、ちゃん?」

楯無の返答を、簪が遮り、更に続けた。

「私は、更識 楯無に聞いているんじゃない。私の姉の、更識 刀奈に聞いているの!」

「っ!……: 更識 刀奈は、もういないわ。その名前は、捨てたの」  
「それでいいの?! お姉ちゃんには、約束があるんじゃないの?! 希望を捨てないって、約束したんでしょ?!」

簪の感情は、更に昂ぶる。その熱は静まる事無く、簪の心を業火の様燃え上がらせた。

「楯無の名を継ぐ前に、誰かと約束したんでしょ?! 何があっても、名前を捨てたとしても、絶対に希望だけは捨てないって! その約束を、お姉ちゃんは無視するの?!」

「その事は今、関係無いでしょ?」

「あるよ! 名前を捨てたから何? お姉ちゃんはお姉ちゃんでしょ?! 私のため一人のお姉ちゃんだよ!」

その瞬間、楯無の……: 刀奈の中で何かが弾けた。そのまま立ち上がり、簪に詰め寄って感情を爆発させた。

「簪ちゃんに何が分かるの?! 次女と言うだけでこの責務を逃れた貴方に、私の苦悩が分かるの?! 私だって、普通に生きたかった! それすらも私には許されない! 私には、そんな権利は無いの……」

姉の絶叫に、簪は啞然とした。そこにいたのは、常に含み笑いを浮

かべて、誰に対しても親しく接する楯無ではなく、笑顔の仮面の下で苦しむ刀奈だと気が付いたからだ。

「私には、お姉ちゃんの気持ちは分からないよ」

簪はか細く、だがはつきりとそう言った。

「この世の誰も、誰かの気持ちになる事は出来ない。けど、思いやる事は出来る。私の大好きなヒーローは、そう言うんだ」

簪の言葉の真意が、刀奈にも、楯無にも分からなかった。

「つまりね……………辛いなら、私に吐き出しても良いんだよって、事」「っ?!」

簪は姉の目をしっかりと見て言った。それは刀奈でも楯無でもない。ただ一人の自らの姉の目だ。

「私だけじゃない。虚さんや本音、ステラだって受け止めてくれる。だから、苦しくなったら、いつでも泣いたっていいんだよ」

「あ、ああ……………あああああ!」

少女は、その場に崩れ落ちた。嗚咽を漏らし、涙を流す。決してもう誰にも見せまいと封じてきたその全てを、目の前の妹に晒した。

「辛かったね。頑張った事は、皆が知ってるよ。だから、今日は思う存分、泣いても良いんだよ」

少女は、ひたすらに泣いた。今まで溜め込んだ全てを吐き出す様に。

「……………これで、やっと仲直りだねえ」

「そうね。これで、お二人はまた姉妹に戻れた……………全く、不器用なんだから」

その従者は扉越しに、その感情をしっかりと受け止め、抱きしめた。

## 真夏の特訓 ―越えようとする者―

「お前ら。用とはなんだ？」

第二アリーナの中心で、千冬が一夏と弾、そして数馬に問う。その左右に、束と蓮を連れて。

「もつと、強くなりたい。手に入れた力を、もつと上手く扱えるように。だから、俺達三人に訓練を付けて欲しいんだ！」

その言葉に、千冬は分かっていた様に順番に三人の目を見た。

「……私達の予測では、夏休み明け頃にデストロは大規模な攻撃を行う筈だ。それまでに、お前達が強くなれる保障は無い。だからお前達を鍛えるより、代表候補生を鍛えた方が遥かに効率的。これは私達で出した結論だ」

「けどー！」

千冬の言葉に弾は、感情を露にした。しかしそれを蓮が制止した。

「私達は、デストロを倒す為に尽くせる手は全て尽くす。今、その手の中にあなた達三人は含まれて居ないわ。だから私達に、切り札となれると判断しうる力を示せたら、その時は検討してあげる」

「ごめんね皆。でも私達はこれ以上、何一つだって失うわけにはいかないんだ」

千冬達の言葉を聞き、一夏達は冷静さを取り戻した。

((そうだ。戦うのは、俺だけじゃないんだ……))

一夏達の思考が交差し、その感情を一番に示したのは、一夏だった。「分かっているつもりだった。けど、今やっと分かったよ。それでも俺は、やっぱり強くなりたい。銀シルバリオ・ゴスベルの福音の時みたいに、なりたくないんだ」

その言葉に、千冬は頷いた。

「ならテストだ。今からお前達にはある一人と戦って貰う。そいつに勝てない様ならお前に戦力価値は無い」

千冬はそう言いながらインカムで誰かに連絡をとった。

「分かりました。けど、俺達は三人だ。それに対して一人では不公平ではないんですか？」



数馬は少し不満げにそう言った。その言葉に反応したのは、千冬達ではなかった。

「何言ってるの？私が三人に負ける訳無いじゃん」

その言葉とともに、アリーナに青い閃光が舞い降りた。

「…………ステラか」

数馬は納得した様にその名を呼んだ。

光が弾けると、そこには白銀の鎧を纏ったステラが浮遊していた。

「そう。千冬さんに頼まれてね。今日はラウラとデートだから、さつさと終わらせちゃうけど、いいよね？答えは聞いてないよ」

『マスター。集合に間に合う為には、一時間が限度です』

「分かってるって」

その言葉に、弾が怒りを露にした。

「へえ。俺達はデート以下ってか」

しかし、その表情は笑っていた。怒りを闘志に変換し、心を燃やす燃料にしたのだ。

「それでは、制限時間は三十分だ。その間にステラを倒せたなら、お前達を認めてやる」

「分かってる…………白式！」

「フィリップ！」

「エクシア！」

いつの間にかアナウンス室に移動していた千冬の言葉に、三人はそれぞれのISを展開した。そして武器を展開して構えると、にやりと笑うステラを見た。

「来なよ。負けてあげる気はないけどね！」

その声とともに、三人が同時にステラに攻撃を仕掛けた。

「ハアアア！」

「動きが直線的だよ！それじゃあ私すら倒せないよ！」

一夏の攻撃を避けながら、ステラはそう言った。そしておまけと言わんばかりに、鳩尾を殴って一夏を壁まで吹き飛ばした。

「オラアア！」

「弾も変わらない！少しは考えて動いて！」

ひたすら斬りかかる弾にイラつき、蹴り飛ばそうとするステラ。その時、視界の端から黄色の光弾が迫るのを確認して急速でその場を離脱した。

「へえ、やるじゃん。最初の一夏の動きから釣りだったとはね」

「俺達だって、いつまでもお前に頼ってる訳にはいかないんだよ」

数馬がそういうのと同時に、数馬の背後から黄色の光弾がさらに放たれた。

「っ?!」

ステラはそれに気が付き、避けながらもそれらを撃ち落していった。

（一度放って、それをコントロールして放つタイミングを遅らせた？  
フリリップの演算能力、凄い）

「まあ、その攻撃ならもう見切ったんだけど、ね！」

デイスティニーソードを展開し、腰を捻って全ての光弾を打ち消す。その過程の中で、ステラは次の動きを考えていた。

（この間に動かない二人が不気味だ。あからさまに次の攻撃への備え……いや、これも釣りだ。読みが正しければ次は）

「シヤラアアア！」

ステラが思考を巡らせている刹那、赤い閃光が視界に入り込み、それと同時に覇気を孕んだ咆哮が響いた。

「っ！」

ステラはそれを紙一重で避けながらも、更に思考を巡らせた。

（やっぱり。てことは次は当然）

「ウオオオオオオ！」

ステラの想像通りに、一夏が零落白夜を発動させて斬りかかる。

「二人とも、単純！」

ステラはそれすらもかわし、手元に小さなエネルギー弾を作り出して、一夏の背中に撃ち込んだ。

「グアア！くっそー！」

一夏は感情を露にし、零落白夜の能力を完全開放する。しかし、それを見たステラは、表情を曇らせた。

「私、一夏には期待してた」

ステラはふと、そんな言葉を漏らした。

「は？何の事だよ！」

だが当然、一夏にはその言葉の意味が理解できなかった。

「もう忘れたの？クラス代表決定戦で、私を斬ったこと」

「っ?!」

言葉の意味に気が付き、一夏の脳裏に記憶がフラッシュバックする。

「私は覚えてるよ。凄く痛かった」

ステラは一夏を睨みながらそう言った。

「そんなの、今関係ないだろ！」

「あるよ。この先もし、デストロ以外と戦う事になって、それがもし有人機の場合、一夏は斬れるの？生きてるんだよ？」

「っ?!」

ステラから放たれた冷たい一言に、一夏は動きを止めた。

「隙だらけ！」

その一瞬を突いて、ステラは一気に間合いを詰めた。そして、ディステイニーソードの切っ先を一夏に目の前に突き立てた。

「お前、卑怯だぞ！」

そう言いながら、一夏は雪片式型を振り抜く。だがステラは、その攻撃をいとも簡単に避けた。そしてそのまま、話を続けた。

「卑怯？戦場では真面目に戦う人間から死んでいくんだよ。実際に、私は見た。昨日馬鹿話で盛り上がった友達が、ミサイルの爆発に巻き込まれて、全身が丸焦げになって、苦しい苦しいって呻きながらも苦しみむ様を！一夏に、そんなものを見る覚悟があるの?!」

涙を流すステラの言葉が、一夏の心に突き刺さる。

「一夏！集中しろ！」

その時、緑色の風の様な粒子を纏ったエネルギーの弾丸が、ステラと一夏との間を割った。

「邪魔しないでよ、数馬」

ステラは、低い声で唸るように言った。

「弁舌戦とは、お前らしくないな」

数馬はそんなステラに、いつもの様に語りかける。

「そうだね。でも、デストロはこうする。あなた達が、それに引つかかる様なら、対デストロ戦には連れて行けない」

その言葉に、全員が苦虫を噛んだ様な表情になる。

「私は、あの人に勝たなきゃいけない。絶対に。そこに足手纏いになるような人がいるのは、正直言って邪魔なの。この意味、分かるよね？」

「分かってる。だからこそ俺達は、強くなりてえんだろうが！」

弾が、トランザムを発動して斬りかかる。

「っ?!」

(動きが変わった！)

今までの直線的な刺突や斬撃ではなく、ステラの周りを高速で回るだけの動き。

「っ！そうか！」

数馬は弾の行動の意味に気が付いたのか、風の力を乗せた弾丸をステラの周りの地面に打ち込んだ。そして弾はその銃撃で発生した瓦礫を蹴って、更に早く、そして不規則に飛ぶ。瓦礫が崩れては数馬がそれを補充する。その繰り返しの中で、ステラは苛立ち、構えた。

(ピンボールアタック………こんなの意味は！)

「いい加減にしなよ！」

そして、地面と平行に衝撃波を放つ。それは瓦礫を吹き飛ばし、足場を失った弾は勢い余って地面を転がる。

「そんな事に何の意味が！『マスター！上です！』っ?!」

その時、ギンギラの声が響く。それと同時に響く警告音。その正体は

「ウオラアアアア！」

零落白夜を発動させて斬りかかる、一夏だった。

「シールド！」

ステラはシールドにシフトし、機体性能を防御に全て振り、エネルギーシールドを展開した。しかし、それは数馬と弾の立てた計画の内

だった。

「フアング！」

数馬の声と同時に、ギンギラの装甲を、何かが切り裂いた。

「これ、数馬の「こつちもいるんだよ！」えっ?!」

そこには、エクシアに積まれていない筈の荷電粒子砲を構える弾の姿があった。

「消し飛ばす有象無象！ギャラクシー！キャノン！」

弾の言葉に、ステラは驚き半分呆れ半分で叫んだ。

「それは別のシリーズでしょうが！」

しかしステラは、一夏の零落白夜を防ぐのに殆どのエネルギーを使っている。つまり、この攻撃を防げない。それが、弾と数馬の作戦だった。狙い通り、ステラはシールドを使えない。ギンギラの補助でも、この出力は防ぎきれない。

そのはずだった。

バアアアアアアアアアンツ！

「「っ?!」」

ギンギラから、膨大な量の光が発せられる。その光はやがて小さくなり、ステラの背後にあるウイングユニットの元で形が整い、翼となった。

「福音戦で得た、新たな力か」

「そう。この翼は、触れたエネルギーを自分の物にする力がある。弾のエネルギー、貰ったよ」

ステラはイタズラが成功した子供の様に笑う。しかし、三人の心中は穏やかではなかった。

「今の、防ぐかよ…」

「まずいぞ。俺達は殆どの攻撃にエネルギーを必要とする武器を使用している。明らかに不利だ」

その会話を聞きながら、アナウンス室にいる千冬は呟いた。

「さあ、どうする? ガキ共」

一夏は、ステラの光の翼を睨む。

(エネルギーを吸収するなら、俺の零落白夜のエネルギーも吸収され

ちまうって事か？でも、零落白夜はエネルギーを斬れる……でも、ギンギラにはサーマルエナジーを乗せた零落白夜じゃないと通じない……ああもう！)

「考えるのはやめだ！今はとりあえず、やってみるつきやねえ！」

「っ?!待て一夏！」

一夏はスラスターを全開にし、ステラに突っ込む。

(自爆覚悟の特攻?いや!違う!)

「行くぜステラ!お前に貰った力で、お前に勝つ！」

そう言つて一夏は、精神を研ぎ澄ませ、体の底に眠る力を、呼び覚めます。

「金色白夜！」

雪片式型から、黄金の光が放たれる。その光はシールドエネルギーではなく、サーマルエナジーによるものだった。

「っ!完全に、使いこなしてる?!」

『マスター!あの刃に触れれば、光の翼も崩壊します!』

ギンギラの言葉を聞きながら、ステラは考えた。

(この土壇場でモノにした……これなら、もしかしたら……)

「でも!結局エネルギーの消費が激しいのは変わらない!このまま逃げ切れば、私の!」「俺達も、いるんだよおおお!」「うえ?!」

その時既に、ステラに逃げ道は無かった。

(こりゃ、一本とられたよ……)

決着は、ステラの思考と同時だった。

.....

「本当にごめん！」

「「え?」」

ピットに戻ると、ステラは先程の態度から一変させて、申し訳なきように頭を下げた。

「千冬さんに、三人に実力の差を見せ付け、尚且つ心を揺さぶりながら戦えって言われて、あんな事を……」

「そっか、全部本心じゃなかったのか……」

一夏は安心した様にそう言った。

「あ、痛かったって言うのは本当だから！反省してよね！」  
「うっ……」

そんな会話をしていると、千冬がピットへと入ってきた。そして入るなり、ステラに声をかけた。

「ほう。ではデートの約束は嘘だったのか？」

「え？……あああ！やばい！あと三十分！どうしょ！今から部屋に戻ってシャワー浴びて着替えてメイクして……あああ！時間足りない！急がなきゃ！それじゃあまた後でええええ！」

ステラは、あたふたとしながらピットを飛び出して行った。取り残された一夏達は、ただ唾然としていた。

「さて、お前達」

その時、千冬が真面目な声で、三人に声をかけた。

「試験は合格だ。明日から我々が鍛えてやろう」

「本当か?!千冬姉！」

一夏が千冬に詰め寄る。

「織斑せんせ……いや、夏休みだからいいか……ああ、本当だ」

その言葉に、弾はガッツポーズをとり、数馬は帽子を傾けて、息をついた。

「それでは、今日の所は解散だ。明日のために休んでおけ！」

「はいー！」

三人は、揃って部屋へと戻っていった。明日から始まる訓練に、それぞれの思いを馳せながら。

ステラ、なんだかんだ初デート

「ラウラー！」

ステラは走りながら、恋人の名を呼ぶ。呼ばれた少女は、頬を膨らませて、不機嫌そうに振り向く。

「遅いぞステラ。集合に十分も遅れている。これでは、今来たぞ、と言えんでは無いか！」

どうやらラウラの怒りは、遅れたことに対する事ではないらしい。

「いや、だって、千冬さんに、一夏達の試験を頼みたいって言われて……」

「ムツ。お前は恋人である私より、一夏達を優先するのか？」

ラウラは冗談交じりに、意地悪な質問をする。

「そんな訳無いじゃん！だって……」

「だって？」

ラウラが聞き返すと、ステラは少し涙目になりながらも答えた。

「汗掻いたままだったし、メイクもしてなかったし……ラウラとの初デートなんだよ？ちゃんと、準備して行きたかったんだもん……」

「っ?!／／／」

そう言ったステラが、ラウラにはとても美しく見えた。それ故に、顔を赤らめ、目を逸らした。

「そ、そうか……それなら、許してやらんでも、ないぞ?」

ラウラがそう言うと、ステラの顔は笑顔に染まり、ラウラに抱きついた。

「ありがとう、ラウラー！大好き！」

「んなっ?!／／／」

いつもは恥ずかしがって、好きなどの言葉を使わないステラが、今耳元で大好きと言った。その言葉を聞いたらラウラは、更に頬を赤らめるのだった。

……………

「ねえラウラー！次はあっち見てみようよ！」



ステラはそう言いながら、ラウラの手を引く。ラウラは驚きながらも、笑顔でそれに従う。

「この服、きつとラウラに似合うよ?」

そう言つてステラは、ショーウィンドウに飾られている一着のワンピースを指した。

「ん、そうか? こういう可愛い系の服はお前の方が似合うのではないか?」

ラウラもその服を見るが、思い浮かべるのは自分ではなく、ステラの姿だ。

ステラはその言葉を聞き、同じ服を着た自分とラウラを思い浮かべる。その時、ステラの視界の端に、商品の説明が入った

「んーっ……あ、そうだ!」

そしてステラは、何かを閃いた様に顔を上げた。

「どうかしたか?」

「二人で一着ずつ買おうよ! ちょうど、色は白と黒、私達の機体カラーと同じで良くない? それに黒なら、ラウラのクールな性格も相まって、カッコカワイイよ!」

ステラの饒舌な説明に、ラウラは少し動揺した。だが、せっかくの機会だと思い、まず試着を試してみる事となった。

「すみませーん。表のショーウィンドウのワンピース試着してみたいんですけど、出来ますか?」

「っ! はい! ごいませー! どちらの色を希望ですか?」

ステラが店員に声をかけると、店員は目を輝かせながら答えた。

「えっと、白と黒両方がいいんですけど、試着室で二つ並んでるのとかありますか?」

「お二人でお試しになりますか? それでは、一緒に靴や帽子、小物類もどうですか? この店では、衣類など、ファッションブランドを幅広く取り扱っておりますので!」

商売根性なのか、二人の姿を見たいのか、店員はカタログを見せながらステラに詰め寄る。

「そうだなあ……あ、このサンダル可愛い! それにこの帽子も……」

それじゃあこれとこれ、それとこのバッグを、それぞれこのワンピースの合うように色違いで一つずつ、お願いできますか？」

「はい！少々お待ちください！」

ステラの言葉を聞き、店員はすぐに店の裏に行き、在庫を確認し始めた。

「お、おい、ステラ。そんなに買って大丈夫か？」

「大丈夫！私、今日一夏達の試験したじゃん？その時に千冬さんと束さん、蓮さんにお小遣い貰っちゃったから！」

ステラはにこやかに言う。それと同時に、ラウラは冷や汗を流した。

（教官からお小遣い?!や、やはりステラは凄いな…）

ステラはそんなラウラの心情には気が付かず、先程貰ったカタログを眺めていた。

「あ、この髪留めもいいかも。私とラウラと一緒に……いや、何もかも一緒にじゃつまらないか……ねえラウラ。ポニーテールとツイントール。どっちがいい？」

「え？なんだ急に……」

急な質問に驚き、少し戸惑うラウラ。だが、自分がその二つの髪型をしている所を想像し、答えを出した。

「ツインだな。なんかそっちの方がしっくり来る」

「そっか！じゃあラウラは赤の髪留めで、私は青の髪留め。それでいい？」

「ああ、いいぞ」

その会話を聞いていたのか、近くにいた店員が先程の店員と同じく店の裏へと向った。

それから三分間程経った頃、先程の店員が帰ってきた。

「お待ちせいたしました！それでは、こちらでのご試着ください！」

店員は、そう言って試着室へと案内し、そこで服を渡した。

「それじゃあラウラ、着替えたら言ってね。同時に出よ？」

「ああ、分かった」

二人はそう言い、試着室へと入った。そして外では、美少女二人が

おそろいの服の試着をしていると言う噂が広まり、多くの女性が、二人の着替えが終わるのを待っていた。

「ラウラあ、終わった？」

「ああ、私はいいぞ」

ステラが声をかけると、ラウラは答える。

「じゃあ行くよ？セーの」

ステラの掛け声と共に、二人は同時に外へと出る。

「っ！」

二人は、息を呑んだ。周りの人の多さもだが、お互いに、その可愛さに見惚れたからだ。

「「「キヤアアアア！」」」

ステラ達が飛び出した二秒後。辺りに黄色い歓声が響いた。

「可愛い！お人形さんみたい！」

「天使！まさに天使だわ！」

「あの子達、何処のモデル?!」

「やばい！あれであの二人が付き合ってたら完璧なのに！」

その声で我に返ったのか、二人は急激に頬を赤らめる。そしてラウラは、恥ずかしがるステラの為に、ステラの前に出た。

「わ、私の嫁をジロジロ見るな！」

しかし、それは更なる着火剤となってしまう。辺りの女性達にも、ステラの頬にも。

「嫁?!い、今嫁って！」

「つまり、あの二人は結婚を前提に付き合っているって事?!」

「ああ、神よ……」

「今死んでも、悔いは無いわ……」

そしてラウラは、どうしていいか分からず、アタフタし始める。

だがそこに、救世主が現れた。

「あれ、二人とも何してるの?」

それは、先日から数馬と付き合いだした、シャルロットだった。

.....

「アハハ、それは災難だったね」

三人は、近くの公園に来ていた。そこは、シャルロットが数馬に思いを告げた、あの公園だった。

「けど、仕方ないよ。二人とも凄く可愛いもん」

シャルロットは、そう言いながら二人を見た。

二人は、会計を済ませ、あのままの格好で今ここに居る。

「そうか？ステラは分かるが、私は可愛くないだろ」

「もー、何言ってるの？ラウラの方が可愛いよ」

ラウラの言葉に反対するステラ、その会話を聞いていてムズ痒くなったのか、シャルロットは二人を抱き寄せた。

「もー！二人とも可愛い！」

突然の事に二人は驚いたが、そのまましばらく三人でじやれていた。

そして日が傾き始めた頃、三人は学園への帰路に付いた。

そして学園に戻り、もう一度同じ騒動が起こったのは、また別のお話。

メガネの目！

「ねえ簪」

ある日、ステラと簪は自室で夏休みの課題を進めていた。そんな中で、ステラが唐突に簪に声をかけた。

「何？」

簪も手を止めてステラに応える。

「前から思ってたけど、簪のメガネって度は入ってるの？」

ステラは首を傾げながらそう聞く。

「入ってるよ。あまり強くないけど」

簪はそう言いながらメガネを取る。

「予備あるけど、かけてみる？」

「え？いいの？」

ステラは少し嬉しそうにそれを受け取ると、メガネをかける。

「うおっ、視界がぼやける。」

「どう？似合う？」

ステラは簪の方を向くと、にこりと笑ってそう聞いた。

「うん。似合ってる」

「ありがと、えへへ／＼／＼」

ステラは少し恥ずかしそうに頬を赤く染め、簪はそれを笑顔で見る。

「そうだ。前に本音が部屋にオシャレ用の伊達メガネ置いて行ったのがあるから、そっちかけてみなよ」

簪は机の引き出しを開けながらそう言うが、ステラは少し曇った表情になる。

「でも、本音の物を勝手に使うのはちよつと…」

「後から言えば大丈夫だよ。それに本音はこのくらいで怒らないし、なんなら乗ってきてくれるよ」

ステラの悩みを即座に解決すると、簪は一つの黒縁のメガネを取り出した。

「はいこれ」

ステラはそれを受け取りながら簪のメガネを取る。そしてそれを簪に返すと、今度は本音のめがねをかけた。

「おお、こっちは見える」

ステラはそう言いながら立ち上がる。

「ねえねえ。これで食堂行こうよ。ちやうど昼時だし」

ステラの提案に、簪は頷いて立ち上がった。

「そうだね。そろそろお腹空いてきそうだし、行こう」

二人は部屋を出て、話をしながら食堂へ向かった。

「おおー。結構いるね」

ステラが食堂を見渡すと、そこには生徒達が色々なグループを作って食事をしていた。

「あら、簪お嬢様にステラちゃん。お食事ですか？」

そこに、後ろから虚が声をかけた。

「あつ、虚さん！どうですか？」

そう言ってステラは顔を向ける。

「とても可愛らしいです。よくお似合いですよ」

虚はそんなステラの頭を撫でる。するとステラは目を細めて気持ちよさそうに笑う。

(( (羨ましい) ))

それを見つめる生徒達。その中には、虚の事を羨ましく思う者もいる様だが、二人はそれに気が付かずに微笑みを交わす。

「良ければ、お食事ご一緒しませんか？会長もいらっしやいますよ」

虚がそう言って手で示すと、そこには食事をする楯無の姿があった。

「あ、本当だ。簪どうする？」

「行く。みんなで食べた方が楽しいし」

簪がそう言うと、ステラは顔を明るくして簪と虚の二人と腕を絡めた。

「んじゃ、行くー！」

ステラはそう言いながら二人を引っ張って楯無の席へと近付く。

「楯無さん！一緒に食べましょ？」

食事をとる楯無に、ステラは声をかける。

「あら、ステラちゃん？いいわよ……ん？ステラちゃんメガネなん  
てかけてたかしら？」

楯無は振り返ってステラの顔を見る。しかしいつもと違いステラ  
はメガネをかけており、それを珍しそうに見る。

「伊達メガネです。どうですか？」

「うん。可愛いわよ」

楯無は、先程の虚と同じ様にステラの頭を撫でる。ステラも先程の  
様に嬉しそうに目を細める。

「えへへ／＼／＼」

ステラはそんな声を漏らす。その声に、辺り一帯が和やかな空気に  
包まれる。

だがその時。

「ステラのメガネ姿が見れるとは本当か?!」

食堂へと、千冬とラウラが勢いよく飛び込んで来た。

「ラウラに千冬さん?!」

ステラは驚いて駆け寄る。

「どうしたの？そんなに慌てて」

ステラがそう聞くと、二人は勢いよく顔を上げた。

「ステラがメガネかけて歩いてると先程相川から聞いたんだ！」

「私は一夏から話題になってると聞いてな！」

二人の勢いが強く、少し後ずさりするステラ。

そして、後ろからその肩を虚が優しく支える。

「お二人とも落ち着いて下さい。ステラちゃんが怯えています」

「え？」

虚の言葉に、二人はステラの顔を見る。その顔は、確かに少し怯え  
ている様だった。

「その、すまんステラ。お前のメガネをかけた姿が見たくて、少し興奮  
してしまった…」

ラウラは申し訳なさそうに謝る。

「私もだ。少し取り乱していた…」

千冬も同様に気まずそうに目を逸らしながら謝る。

「私は大丈夫だよ？それより、皆でござ飯食べようよ！」

ステラは二人が気にしない様に言うと、さらに二人を食事に誘った。

「いいのか？」

少し遠慮げに聞くラウラに、ステラは笑顔で答える。

「うん！」

ステラの答えを聞くと、二人の表情は柔らかくなる。

そして、全員で料理を受け取って席に戻る。

その間にも、シャルロットと数馬、そして弾と合流し、更に席に着いた時に近くにいた一夏と、それを挟む様に歩く箒と鈴、そして樽を聞いて見に来たセシリアと本音が集まり、いつの間にか大所帯になっていた。

その後も、ステラ達の会話は弾み、笑顔も咲き乱れる。

ステラ達は、この大切な一時を噛み締める様に精一杯笑うのだった。

そして、夏の終わりも近づいて来ているのだった。



## 大人の覚悟

ガコンツッ！ガコンツッ！

「さて、これで最後かな」

アリーナに立つ黄金のIS。乗り込んでいるのは、一年一組の副担任、津上翔一。

「ステラちゃんや一夏達が戦っている時、俺は何も出来なかった。でも、次は」

ステラ達が命懸けで戦った臨海学校の二日目。彼は学園長からの依頼で、倉持技研へと赴いていた。

依頼の内容は、篠ノ之 束の機体のデータが取りたい、という物だった。その所長が、束の旧友だったこともあり、その依頼は承諾されたのだが、その間に、あの事件は起こってしまった。その事を聞き、データの解析を途中で中止して駆けつけた翔一だったが、着いた頃には、戦いは既に終わっていた。

「まあ、次が無いのが一番だけどね」

翔一はそう言って、訓練を再開した。

「津上、先生……」

それを、ピットから眺める千冬。彼女は彼の名を呟きながら、拳を握った。

「何も出来なかったのは、私も同じ……いや、近くにいた分、私の方が愚かだ。津上先生は、偶々間に合わなかったんだ。それだけ、なんだ……」

千冬は、その場に座り込み、涙を流した。

「何が、ブリュンヒルデだ……何が世界最強だ……私なんて、ただ、友に恵まれていただけなのに……」

誰にも、その声は届かない。訓練を続ける翔一にも、千冬の言った、友人にも。

「……ちーちゃん」

ただ一人、偶然IS学園にステラの様子を見に訪れていた束を覗い

て。

.....

「トリガー、オン」

そして、IS学園から遠く離れた、紛争地域。そこにもまた、同じ痛みを分かっ物が、戦っていた。

「スコープオン！」

蓮はエネルギーの刃を形成し、黒いISを切り裂く。

「ここまでの数の無人機。アイツは何の為にこんな事を？」

蓮は呟きながら、背後から迫る無人機にスコープオンを突き刺す。

「よお、久しぶりだな。蓮」

その時、頭上から声が聞こえた。

「っ?!」

蓮にとってそれは、久しく聞いていなかった声。もう一度聞きたいと願っていた声。

そして、もう二度と、聞く事が無かったはずの声。

その声に釣られ上を向くと、そこには一機のISが赤い粒子を放出しながら浮遊していた。

「その、声、どうして?」

「なんだよ。俺が生きてんのがそんなに不満か？」

そのISは、ゆっくりと蓮の前に降り立った。

「お前の旦那が、生きてんだぜ?」

目の前に降り立ったのは、弾や蘭、そして蓮と同じ赤髪の男。メガネをかけ、髪を後ろで纏めたその姿は、蓮が見知った“五反田 純”そのものだった。

「どうして……………どうして純が生きているの?!デストロに、殺されたんじゃない?」

「さて、なんでだろう、な!」

そうやって純は、大剣とも呼べる程大きなブレードを振り下ろした。

「ッ?!」ダッ!

蓮は瞬時にそれを躲し、戦闘態勢に入る。

「ひっでえなー。お前、自分の旦那に武器向けるなよ」

「先に仕掛けたのはあなたでしょ?!」

蓮は叫びながらも、冷静に考えていた。

(もしあれが、本物の純だったとして、私と戦う理由は何? 洗脳されている? でも、あの純が、大人しく洗脳なんて受ける?)

蓮の疑問は尽きない。だが、蓮の思考を他所に、純は面白そうに蓮を見る。

「相変わらずだな、蓮」

「どういう意味?」

純の言葉の意味が分からずに、蓮は困惑する。

「昔からお前は表情を作るのが上手かったよな。それを見抜けるのは、あの時物理研究部にいたメンバーくらいか」

純は懐かしそうに言った。

「……………貴方を相手に、偽るのも無駄ね」

そう言っただけで蓮は、その顔を一気に冷徹なものへと変えた。

「あなたは、本物の純? それとも、あの子達の様な作られた人間? 答えなさい」

蓮が掌を純に向けると、そこに黄緑色のキューブが現れ、それは四つに分かれ、更に小さく分かれて宙に浮く。

「オイオイ。旦那に対して脅しとは……………相変わらずやる事一つ一つが鬼畜だな」

純は尚も余裕を崩さず、蓮に対してライフルを向ける。

「お前が動けなくなる方法は知ってんだよ」

純はそう言っただけで、蓮に向けていたライフルを自らのこめかみに押し当てた。

「っ?!」

蓮はその行動に動揺し、戦闘から意識が逸れた。

その瞬間を、純は見逃さなかった。

「悪いな、蓮」

純はその言葉を呟くと、ライフルを蓮に向け、エネルギー弾を放つた。

ドカアアアアンツ!

「キヤアアアアツ?!」

爆炎が上がり、当たりが煙に包まれる。

「……さてと、帰るか」

純はそう言つて、雨雲がかかり始めた空へと消える。

「………純っ!」

そこから10メートル程離れた場所に、蓮は横たわっていた。

純の放ったエネルギー弾は、蓮に直撃した訳では無い。

蓮は先程掌に出現させていたエネルギーを全てぶつけ、目の前で威力を相殺したのだった。

だが、結果的にそれは二つのエネルギーの衝突という結果に変わっただけであり、蓮は相応のダメージを負っていた。

「………私は………私はアツ!」

蓮の叫びは、誰の元へも届くことは無かった。

そうだ、お祭りに行こう

「そうだ、お祭りに行こう」

ある日食堂で、ステラは唐突にそう言った。

「お祭り？」

隣に座るラウラが、不思議そうに聞き返す。ラウラはドイツ軍に所属し、少し前までかなりストイックに暮らしていた。

その為にこういったイベントに参加した経験が無く、イメージが湧かなかった。

「うん！毎年私達の町であるお祭りなんだけどね。毎年沢山人が来て、最後には打ち上げ花火もあるんだよ！」

ステラが興奮気味に言うのと、向かいに座る弾があー、と声を出す。

「そっかや明後日か。完全に忘れてたな」

弾がそう言いながらポテトを頬張ると、次にその隣の虚が口に含んでいたサラダを飲み込み、ステラの方を向く。

「お祭りですか。しかし、夜遅くなるとIS学園へ戻るモノレールは止まってしまいますよ？」

「あ、そっか。やっぱりダメですよね……」

ステラが落ち込んでいると、弾が何かを思いついた様にポテトを食べる手を止めた。

「俺ん家泊まるか？」

その一言に過剰に反応した虚。

「でもさ。もし皆で行くことになったら、弾の家に入るかな？」

「その時は一夏とか数馬の家に泊まればいいじゃん」

ステラの不安に、弾は無責任に答える。

その後ろから、本人達が近付いている事に気づいていながらだ。

「勝手に決めるな、と言いたい所だが、最近はトラブル続きだったからな。俺は構わん」

「俺もいいぜ。どうせ部屋は何個か余ってたんだ」

二人の承諾を得た事で、ステラも迷いが消えていた。

「それじゃあさうしようよ！皆でそれぞれお泊まり会！だね！」

ステラの絵顔に誘われ、皆が笑顔になる。

そうして、ステラ達の夏休み最後の一大イベントが始まった。まず、多くの人を誘った。

「専用機持ちちに、生徒会役員。それに千冬と翔一。」

「まともだと少なく感じるが、総勢合計すると12人にもなる。」

「一先ず全員がそれぞれ準備をしてから一夏の家に集まる、という事で決まり、家が近い者は祭りの前日にそれぞれ帰り用意を済ませ、遠い者は寮か誰かの家に行く事になった。」

「さてと、それじゃあ、浴衣どうしようか」

ステラは久しぶりに戻った自分の部屋で、浴衣を選んでいた。

「普通、浴衣は一人一〜二着程度なのだが、ステラの部屋にはそれが二十着程あった。」

その訳は、毎年夏祭りの時期になると、束から送られてくるからであり、更に千冬が買ってくるからである。

「ステラ。祭りにはその、浴衣という物を着て行かなくてはならないのか？」

「こういった文化に疎いラウラは、昨日と同じ様に不思議そうにそう問う。」

「別に着て行かなくてもいいんだけど、着た方がなんか祭りっぽいかなって」

ステラは笑いながら振り返ると、自分の体に浴衣を重ねてラウラに見せる。

「どう？」

「ふむ。やはりステラには白が似合う。だが、聞いた話だと祭りでは零しやすい食べ物が多く出るのだろうか？大丈夫なのか？」

「ラウラは事前に聞いていた料理を調べており、それによってステラの浴衣が汚れてしまうのを懸念していた。」

「それもそっか……でもまあ、私染み抜き得意だし、なんとかなるよ！」

「今は後のことより明日の祭りを楽しみたい。ステラはラウラにそう答えた。」

「ふむ。ならば一着貸してくれ。私はステラとお揃いで楽しみたいからな」

笑顔で言うラウラに、ステラは目を輝かせながら頷く。

「うん！とびきり可愛いのを用意するからね！」

ステラはそう言つて、浴衣を手にとつて考え込む。

(不味いな。これは地雷を踏み抜いた様な気がするぞ)

ラウラはそう感じたが、時すでに遅し。

ステラは二着の浴衣を持ってラウラに詰め寄る。

「それじゃあまずこの二つから行つてみよう！」

(……………まあ、ステラが楽しそうだから良しとしよう)

ラウラは、私も温くなったものだなと少し笑い、浴衣の試着をするのであつた。

……………

「ジャジャーンッ！どう？似合う？」

一夏の家の前で、ステラくるりと回つて自分の浴衣を見せる。

「ええ、とってもお似合いですわ」

セシリアはそんなステラを微笑みながら撫でる。

「もお、撫でないでよ子供じゃないんだからー／＼／＼」

満更でもないステラ。それを後ろから引つ張つてラウラが抱き締める。

「こら！私の嫁だぞ！横取りとは趣味の悪い！」

ラウラが冗談半分、本気半分でそう言つと、セシリアは少し笑つて答える。

「いえいえ。私はステラさんのお姉さんというポジションが気に入っていますから、大丈夫ですよ」

その言葉にステラは目を輝かせる。

「セシリアがお姉ちゃん?! いいねそれ！それじゃあ、千冬さんはお母さんかな？」

ステラが冗談めかして言つと、玄関が勢いよく開き、そこから千冬

が飛び出してきた。

「私は大歓迎だぞ！」

ステラの肩を掴んでそう言う千冬の顔は、どこか興奮気味であった。

「私が母親なら父親は……津上先生、とかがいいんじゃないか？／＼」

最後の言葉、小さくてラウラとセシリアには聞こえなかったが、すぐそばに居たステラにはハッキリと聞こえていた。

「んもおお！千冬さん可愛いんだからあ！」

今度は逆にステラが抱き着き、千冬の頭を撫でる。

「それじゃあ、私はステラさんの妹がいいな」

家の門から、ステラにとって久しい声が聞こえた。

「蘭ちゃん！久しぶりー！」

ステラは蘭に抱き着くと、スリスリと頬ずりをした。

「んふふー、相変わらずのすべすべ肌だねえ」

ステラの突然の行為に驚くセシリアとラウラ。

「ああ、またか。ステラは昔から蘭に会うとまずこれをするんだ」

その後ろから現れた弾が二人にそう説明していると、更に後ろから浴衣姿の虚と簪、それと本音が現れた。

「ステラちゃん。とても似合ってますよ。それとお姉さんポジションは私も立候補します」

「ステラ、いつもと違う感じで可愛いね。私は親友ポジで」

「ええ？それなら私は一番星ちゃんのペットになるう」

三人が冗談めかして言うと、ステラは目を輝かせそうになったが、本音の言葉を頭の中で反復させ、「ダメじゃん」という結論に至った。

「流石にペットはダメだよ?!ペットポジは多分ギンギラだし！」

『マスター……』

この発言に流石のギンギラも思う所があったのか、いつもはプライベートではほぼ声を発さないギンギラが、その声を発した。

「冗談だって。とりあえず、他は距離的に遠回りになるから先に行ってるって」



ステラはさりげなくギンギラが表示したメールの内容を皆に伝えると、浅く履いていた下駄を、少し深めに履く。

「それじゃ、行こっか！」

ステラの一声で、全員が祭りの会場へと歩いて行くのだった。

## 愛が故に

「いやあ、いつ来ても賑わってるねえ」

ステラの言葉通り、祭りに使われる神社の境内は、初詣の時よりも賑わっていた。

「篠ノ之神社の祭りは、毎年巫女の舞があるからな。確か小さい頃に箒がやりたがってたよな？」

一夏がそう言うのと、箒は高台にある舞台を見て、まるで年端もいない少女の様に目を輝かせる。

「ああ、あの時はあの舞にただ憧れていたからな。」

あの様に美しく、それでいて勇ましく舞えたらと思うと、心の底からワクワクするだろう？」

一夏に向かって笑顔で答える箒。その箒のとなりで、セシリアは興味深そうに箒に寄る。

「その舞とは、一体どの様なものなのですか？」

こちらもやや目を輝かせ問う。その言葉に箒は軽くウインクして答える。

「見てからのお楽しみだ」

普段は見せない茶目つきに、その場にいる全員が少し驚く。だが、それ程までにこの舞を愛しているのだと言う事が分かっているから、全員がっつられて笑顔になる。

「とにかく、舞までは時間がある。それまでは屋台を回ろう」

箒が先頭に立って歩く。ステラは歩きながら、辺りを見回していた。

「あら、ステラじゃない」

その時、ステラの背後から低めの女性の声が聞こえた。

ステラが振り返ると、そこには背の高い若い女性が立っていた。

「ん？あ、小夜子さん！」

ステラは嬉しそうな声を出して、小走りで駆け寄る。

「お久しぶりです！」

笑顔でそう言うステラに対し、小夜子は笑いながら答える。

「そうね。半年ぶりくらいかしら。ちよつと大人になったんじゃない?」

「もお、そんな事ないですよお／＼」

ステラはデレデレとしながら謙遜する。その姿に、ラウラは少し面白くなさそうな表情を浮かべていた。

それに気が付いたのか、そうでないのか。小夜子はラウラに視線を向けながらステラに、あの子は?と尋ねた。

「あのね、あの子はラウラって言って、その……私のね、恋人なの……えへっ／＼」

ステラは少し恥ずかしそうに、そして嬉しそうに伝える。

「へえ。カップル揃って白髪で可愛いなんて、お似合いじゃない」

小夜子はステラの前を通り過ぎ、ラウラの前に立つ。

「ラウラ、ね」

「っ?!」

小夜子の、全てを見通す様な目に、ラウラは後ずさった。

「そんなに身構えなくても別に取って食おうって訳じゃないわ」

いたずらっ子の様に笑う小夜子に、少し呆気にとられていた。

「そちらは?」

セシリアが手で小夜子を指して言うと、ステラは小夜子の隣に立った。

「冴島 小夜子さん。私がここに住み出してすぐに知り合った人で、心奏かなでっていうカフェのマスターなの」

「よろしくね」

ステラの紹介に、手をヒラヒラと振って応じる。

「あと、私の料理の先生なんだよ」

「「ええ?!」」

一夏以外の三人は、その言葉に目を剥いて驚いた。

「ステラさんの、先生という事は……」

セシリアには、小夜子の料理がどれほどの物なのか、計り知れなかった。

「あまり過剰な言い方はやめなさい。私は別に料理自体を教えた訳

じや無いんだから」

小夜子の放った言葉に、三人はさらに困惑する。

「ステラ、うちに来たばかりの頃、手伝い以外で料理する事があまり好きじゃなかったんだ」

一夏が横から説明を入れる。

驚く三人を他所に、一夏に続く様に小夜子も話を始める。

「皆、この子の故郷のことは？」

「知っていますわ」

小夜子の問い、セシリアが答える。

「そう。この子のいた星では、調理の際に使う肉類は全て人工のものだったらしいの。」

だから、料理が命を頂くものという認識は無かったらしいの。だから私が、その事を悪では無いと教えて、奪ってしまった命なら、せめて最高の料理にして大好きな人の為に作りなさい、と教えたわけ。

少し話しすぎたわね。今から店を開けなきや行けないからもう帰るわね」

小夜子はそう言うと、神社とは反対の道へと向かう。

「あれ、でもお店はもう閉店のはずじゃ？」

ステラの問いに、小夜子は少しだけ振り返って答える。

「少し、古い友人と会う約束があつてね」

小夜子はそれだけ言うと、ニコリと笑い立ち去った。

.....

カランカラン...

「いらつしやいませ...と言っても、時間外だし客でも無いわね」

レトロな雰囲気のお店に、女性の声が鈺響する。

「久しぶりだな、小夜子」

開かれた扉から、少し低い女性の声が聞こえる。

「ええ、そうね。あなたから集まりたいと連絡を貰った時は驚いたわ」

小夜子は、扉の方を向きながら、古い友の名を呼ぶ。

「千冬」

そこに立つのは、いつものスーツを着込んだ千冬だった。

「コーヒーでいい?」

「ああ、頼む」

千冬はゆっくりと席に着き、一枚の写真を取り出した。

「懐かしいな、あの頃が」

そこに写っていたのは、千冬達の物理学部のメンバーとISスーツを着た20人の女性達だ。

「……………私は、あなた達を許した訳じゃないわ」

小夜子は、ステラ達には見せなかった、まるで仇を見る様な目で千冬を見る。

「待て小夜子!私を恨むのはいい!だが、束は悪くない!」

千冬は席を立ち、そう言った。

「……………初期型のIS、そのテストパイロット。

私達は、あなた達の盾や爆弾になる為にその役目を引き受けた訳じゃ無いわ」

淡々と語る小夜子に、千冬は少したじろぐ。

だが、千冬も負けじと声を張って答える。

「確かに、お前達を危険に晒してしまった。だが、私はお前達の事を大切に「20人も死んだのよ?!」

——小夜子、それは……………」

千冬 of 言葉を遮り、小夜子が18つのネックレスを手に持って叫んだ。

「あの日、あの場所で!」

あなたを守って2人死んだ!

デストロの攻撃を受けて11人死んだ!

——そして、奴を倒す為に、7人が自爆した……………」

小夜子は、そのネックレスを、そつとテーブルに置いた。

「皆、死ぬ前に笑っていた。

後はお願ひ、だとか……………絶対に勝つてね、とか……………」

小夜子の目の端に涙が溜まる。

千冬はそれに気が付き、目を見開く。

「私は許せない。」

皆を殺したデストロが許せない。

皆を見殺しにしたあなた達が許せない。

——そして何より、皆の犠牲を無駄にした、私が許せない……」

「小夜子……」

最後に零した言葉が、明かりが付いている店内に、影を落とした。

千冬はそう感じていた。

「小夜子……私は……」

ドカアアアアアンツ!

千冬が何かを伝えようとしたその時、爆音が響き、窓ガラスが揺れた。

「っ?!」

二人は即座に反応して店外へと出た。

「あつちは、篠ノ之神社の方角か?!」

千冬はその顔を驚愕の色に染め、小夜子は焦燥に駆られていた。

「祭りがあつてる! あそこにはステラ達もいるわ!」

「なんだと?! クソツ! 偶然とは思えん!」

千冬は舌打ちをしながら店を飛び出した。

「お前は避難している! 私は様子を見て来る!」

トリガーを握り締めた千冬が、後ろを振り向きながら叫ぶ。

そして返事を待たずに、ステラ達がいるであろう場所へと駆ける。

「っ、私は……」

小夜子は、唇を噛み締めながらテーブルに置かれたネックレスを睨んだ。

……

数分前、祭り会場。

「いやー、楽しかったね。舞も綺麗だったし」

ステラは少し崩れた木造の建物

——旧篠ノ之神社の縁側に腰掛けていた。

「ああ、そうだな。まさか箒が出るとは思わなかったが」

隣に座るラウラが答える。

祭りでは色々であった。

急に休みが出て、人手が足りないからと、ステラ達が巫女のバイトをしたり、射的でセシリアが景品を獲りすぎたり、これまた人が足りないからと、箒が舞に出たり…

「今日は本当に楽しかったよ。あとはここで皆と花火を見るだけなんだけど、みんな遅いなあ」

ステラは足をぶらつかせ、そう呟く。

「……………なるほど。全員、人混みで中々進めないらしい」

ラウラは、スマホを操作しながら答えた。

「……………ねえラウラ」

「どうした？」

普段とは違うステラと声色。

赤く染った頬と、不自然に擦り合わせる足。

「トイレか？」

「違うよ！／＼／＼」

ラウラは見当違いの解釈をし、ステラが仕方ないといった雰囲気  
で、震えながら言う。

「キス、しょ？／＼／＼」

「……………え」

ステラの言葉を聞いたラウラは、完全にフリーズし、そして直後に  
ステラと同じ様に頬を赤く染めた。

「なっ?!お前、何を?!／＼／＼」

二人にとって、これが初めてのキスではない。

ラウラが初めてステラに告白したあの日、ラウラはステラへの不意  
打ちのキスで、互いにファーストキスを終わらせていた。

「ど、どうしたんだ?いつも、そういう事はお前から来ないでは無い

か」

ラウラは混乱している。ステラが言ってくれた事は嬉しいのだが、唐突すぎたのだ。

「別に、なんか、こうやって浴衣で、お祭りで、二人しかいないって、少女漫画じゃキスの定番だよ?」

ステラは口早にそう言った。

「……………するか?」

「……………したい」

二人は、言葉を短く切り、お互いに向き合った。

そして声を出さずに、ゆっくりと顔を、それぞれ愛しいと思うその顔へと近付ける。

「ステラ様」

不意に、声が聞こえた。

「っ?!」

二人は同時に、その方を見た。

ラウラにとって、初めて聞くその声。

しかしステラにとってその声は、とても聞き慣れた声だった。

「ク、クロエさん?!」

声の主は、クロエだった。クロエは静かにステラへと歩み寄る。

「あ、ここに、これは、その、ていうか束さんは?!／／」

ステラは人に見られた恥ずかしさからか、頬を先程以上に赤らめていた。

「ステラ、彼女は?」

ラウラは困惑気味にステラにそう聞いた。

ステラは少し落ち着いたのか、普段通りの声で答えた。

「あ、ラウラはまだ会った事無かったね。この人はクロエさん。私の大切な家族!」

そう言ったステラは心底嬉しそうで、そしてそれを聞いたラウラは、ハツとした様な表情になった。

「そうか。それでは私も名乗ろう。私は「知っています」、え?」

ラウラの声を遮り、クロエはステラの知らぬ低めの声でそう言っ



た。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍のIS部隊、シュバルツエア・ハーゼの隊長にして、ドイツの国家代表候補生。愛用機はシュバルツエア・レーゲン」

「よ、よく知っているな」

ラウラの顔に、警戒の色が浮かぶ。

「そして、ドイツの研究施設で作られた試験管ベイビー」

「っ！貴様、それを何処で！」

ラウラの警戒レベルは、戦闘待機にまで登り詰めた。

「ある方から教えて頂きました。」

まあ、そうでなくても、同族というのは不思議とお互いをそうだと認識し合うものです」

クロエが放った言葉に、ステラもラウラも、思考が混乱で満たされる。

「私も同じ研究で作られました。まあ、あなたと比べれば失敗作もいい所です」

クロエは淡々と語る。

「以前はその事を思い、悔しさや虚しさに襲われていました。ですが、それもあの日に、終わりました」

段々と早口になるクロエ。ラウラは警戒を解かず、ステラは理解不能な状況に完全に吞まれていた。

「ステラ様が私の元に現れて、私の家族になって……」

——私は、それだけで十分でした。それなのに……」

クロエの纏う雰囲気、一瞬で変わった。

「それなのにあなたは！私からステラ様まで奪った！

軍で認められただけで良かったじゃないですか！

どうしてあなたは！私から何もかも奪うのですか！」

「ク、クロエ、さん？ど、どうしたの？」

ステラは、クロエの心が見えなかった。

そしてラウラは、一つの答えに辿り着いた。

「お前も、ステラを愛していたのか？」

クロエが、ラウラを睨みつける。

「私、もう…ふざけているのですか？」

感情が熱を帯び、炎を吹き上げる。

「私が…私の方が先に、ステラ様を愛していた！」

あなたがドイツで、軍の駒として生きていた頃から、私はステラ様を愛していた！

私を愛してくれないステラ様なんて！

——死んでしまえ」

終わり、そして始まる日

「っ！ステラー！」

ラウラは咄嗟に、シユバルツエア・レーゲンを展開した。

「きゃっ?!」

そしてステラを突き飛ばし、クロエがいた方向に目を向ける。

「遅い」

声は、背後から聞こえた。

「っ?!」

ラウラは振り返りつつ裏拳を放つ。

その最中見たのは、今まで見たことのないISに乗るクロエだった。

クロエはそれをいなしつつ、ラウラの腹部に手を当てる。

「邪魔です」

僅か。

ほんの僅かだけ手を動かす。それがインパクトを生み、ラウラの体内へとダメージを浸透させる。

「カハッ?!」

ラウラは口から血を吐き、その場に倒れた。

「なんだ、今のは……っ!」

二人の戦闘を見ながら、ステラは動揺と隣り合わせに、冷静に分析していた。

（あれはクロエさんの持っていた黒鍵ではない。

多分、デストロがあの機体を作ったんだ）

ステラはゆらりと立ち上がった。

「クロエさん。それ何？東さんに貰ったの？」

しかし、ステラの口から零れたのは、現実逃避とも言える言葉だった。

（待って。私は何を言っているの？）

ステラは困惑していた。

今言葉を発したのは、本当の自分なのか、と。

「あなたにも分かっているはずですよ。これはデストロ・デマイド様が作ったIS。その名も影忍。」

本来、暗殺特化の機体なのですが、少々改造を施しました」  
にこやかに語るクロエに、ステラは戦慄した。

（これはやばいかな。戦うしか…）

「待ってよ！なんで、そんな！どうしてよクロエさん！」

（は？私は何を言っているの？ちよっと、黙ってよ！）

思考と発言が噛み合わない。

ステラの意識と思考が、バラバラになる。

「……………なるほど。そういう事ですか」

クロエが、いつも通りの目でステラを見る。

「あのお方が言っていた通りですね。」

自分を解き放つてあげて下さい、ステラ様。それは紛れもなく貴方です。怖がる事はありません」

慈愛に満ちた目でステラを見付けるクロエ。

ステラは困惑の瞳でそれに応える。

「どういう、事？」

「分かっているのでしょうか？」

自分の中に、もう一人、自分がいるということに」

クロエの言葉を聞いたステラは、動揺はしたが、驚きはしなかった。  
「始まりは二年前です。ご友人に危害を加えた輩に対する怒りで、それはあなたの中で目覚めた。」

二度目。あのお方との初戦闘であなたは、蓮さんへ行われた攻撃に怒り、再び目覚めた。

三度目。あなたはそこのラウラ・ボーデヴィツヒの暴拳に対し怒り、覚醒しかけるも、直前でそれを押さえ込みました。

そして数日後、再び戦闘となった際に、あなたはその力を理性を保ちつつ発動させた。

そして四度目。あなたは銀の福音シルバリオ・ゴスペルとの戦闘の際に今までとは比にならない程の暴走状態となり、その際に一度”死亡しました”が、エクササマーの覚醒によりあなたは海の中から再

び舞い戻り、更に能力を完全と言える程に制御しました」

「……………え？」

語るクロエ。だがステラは、とある一言が頭の中に思考を支配されていた。

私が死んだ？

頭の中で不鮮明に訝響するその言葉に、ステラは思考を手放した。

「ああ、面倒臭い」

苛立たしにそう言ったステラは、目を閉じ、そして開く。

その目は、血の様に赤く染っていた。

「ああ。頭がスッキリした。ようやくアレが消えてくれたよ」

ステラは、その顔に似合わぬ邪悪な笑顔を浮かべる。

そして闘志を漲らせ、クロエへと歩み寄る。

『マスター！落ち着いて下さい！相手はクロエさんです！』

ギンギラの制止の声にもステラは歩みを止めない。

「だったら何？今は敵でしょ？」

今までとは違うステラの変わり様に、ギンギラは動揺していた。

『（今まではただ気性が荒くなるか、理性を失うかのどちらかだった。』

しかし今回の暴走は明らかに違う！まるで、別の誰かと入れ替わった様な……………）』

ギンギラの意志を無視して、ステラはギンギラを展開した。

「ステラ様。私と戦うおつもりですか？」

「だったら何？」

クロエの間に、間を開けずに答えるステラ。

その拳は、強く握られている。

「いえ、とても嬉しいですよ」

微笑むクロエ。邪悪に笑うステラ。

不意に木の枝にとまっていた鳥が飛び立った。

「っ！」

それを合図に、二人はスラスターを起動し音を超えるスピードでぶつかった。

『マスター！落ち着いて下さい！』

「ハアアア！」

ギンギラの言葉は、ステラには届かない。

『(私の体が、止まらない?!何故?!)』

それどころか、自らの体である機体の制御を、ギンギラは行えていなかった。

「流石ですよ、ステラ様。一突き一突きが精錬されています。

努力を重ねたのですね」

「うるさい！今は黙って戦ええ！」

ステラの心は、最早戦いへの欲求で支配されていた。

そして、素早く動き回るクロエに対して、苛立ちをおぼえた。

「まどろっこしい！」

ステラはリングを前方に展開し、拳を構える。

『っ！待ってください、マスター！ここでサーマルキャノンを撃てば、

祭りの会場に被害が及ぶ可能性があります！』

「関係無い！敵を倒す！今はそれだけでしょ！」

ギンギラの制止を聞かずに、ステラはその拳を突き出す。

「サーマルキャノン！」

そして光が一直線に進み、そこには移動の合間のクロエが通りかかっていた。

「くっ！」

クロエは濁流の様に押し寄せるエネルギーを、シールドを展開する事で防ぐ。だが、それでも溢れる光は爆発し辺りに散らばり、木々を押し倒しながら辺り一帯を炎で包む。

.....

ステラのサーマルキャノンの起こした爆発と炎こそ、千冬達が見たものであり、その余波は、一夏達のいる祭りの会場に及んでいた。

ゴオオオオオオオ！

轟音と共に迫る光。

それがエネルギー波であると判断したセシリアは、瞬時にISを展開してそれを狙い撃ち軌道を逸らす事で被害を防いだ。

だが、絶え間なく続く光。

一夏達も自らのISを使い、人々に被害が出らぬ様に尽くす。

「あれって、IS?!」

「それに男性操縦者もいる!」

人々は逃げ惑いながらも、スマホで彼らの姿を写し、世界へと広めていた。

「クソ!なんで皆早く逃げねえんだ!」

一夏達と合流した弾は、愚痴を零しながらトランザムを使い、落とし損ねたエネルギー波を潰していく。

「ここにいる大半が、ISを過信しすぎているんですわ!」

セシリアはBT兵器を使い、それぞれをサポートを行いながら苛立った様に言う。

「かつての私の様に、ISがあればどうにかなると。ISがあるなら平気だと、勘違いしているのですわ!」

ステラ達と出会う前の自分を現状と重ね、苛立ちを隠せないセシリア。

それを見ながら、鈴が焦った様に辺りを見渡す。

「こんな状況でステラが出てこないなんて、変よ!」

「確かに、ステラならこの事態を見過ごすはずが無い。それに、ラウラも見当たらないな」

トリガーの弾丸にルナの力を付与し、光を撃ち落とす数馬。

その目は、光の出処を掴んでいた。

なあ!気になってんだけどさ!」

その時、一夏が光を睨み叫んだ。

「これ、多分ステラのサーマルキャノンじゃねえの?!」

一夏の言葉に全員が、怒りや焦りを感じていた。

「あんたバカ?!ステラがこんな事する訳ないでしょ!」

真っ先に否定したのは鈴だった。

「そうですわ!何か証拠がありません?!」

「証拠なら、十分すぎるほどにある」

それに続く様にセシリアも否定するが、その言葉を否定する声も上

がる。

その声は数馬の物で、迎撃をフィリップのオートに任せ、一夏の持つ雪片式型を指した。

「通常のエネルギー兵装なら零落白夜で斬れる筈だ。だが、あの通り弾く事は出来ても打ち消せていない。なら答えは一つしかない」

「このビームが、ギンギラのサーマルキャノンって事か」

数馬の分析に、弾が答えを結びつける。

だが、鈴やセシリアは納得していなかった。

そして同時に、二人は理解していた。理論的に考えるなら、それが最も正しい答えだということ。

「私が行く。この光の先にあるものを見なければ、結局の所全てがただの憶測のまま。確かめなきゃいけない」

どこまでも冷静に、簪が告げた。

セシリアはその生い立ち故に、常に他人を疑って生きてきた。だからこそ、一度信じた者たちを再び疑う事を怖がる。

鈴は、精神的に見ればこの中でもトップクラスの凶太さの持ち主だ。だが、この中で最もステラと長い時間を過ごしていた。それが故にステラを信じ過ぎている。

それに対して簪は、暗部の家系で育ち、優秀な姉と比較されながらも己を高め育ってきた。ステラの事を信じていない訳では無い。だが、時には疑わねばならない事を理解していた。

セシリアや鈴と比べて、簪の思考に感情論は存在していなかった。

「ああ、任せた」

数馬がそう告げると同時に、簪は光に逆らい進み出した。

迫り来る光を、時に弾き、時に躲しながら前へと進む。

そして、唐突に光が止み、簪はその隙に更に進む。

そしてその先に広がっていた景色は、簪が予測していたよりも数段酷い状況であった。

「はあ……はあ……はあ………簪？」

予想出来ていたにも関わらず、そうであって欲しくなかった。

簪の予想通り、ステラの瞳は赤黒く濁り、好戦的な笑みを浮かべて



いた。

「何？簪も私とやるの？」

まるで友達とゲームをするかの様に笑うステラに、背筋が凍った。「今ね？やっとクロエさんが止まったんだ。多分死んではないと思うけど、それでも私の勝ち。それで、簪はどうする？私とやり合う？」

躊躇わずに、リングを再び正面に展開するステラ。

簪は、もはや声は届かないのだと割り切り、構える。

「そう言えばさ、知ってる？」

ステラは唐突に、簪に語りかけた。

「私のサーマルキャノンは、競技用に威力を落としてたって事」

「っ！」

簪も気付いていた。

初めてステラの暴走を見た時、デストロに対して放った一撃。

束の作った、IS学園のアーリーナの装甲よりも強度の高い壁を、その熱量で溶かしてしまう程の力。明らかに自分と模擬戦をする時とは違う、相手を実に仕留める為の一撃。

それが今から、自分に放たれる。

「あっ、ああ……………」

覚悟はしていたつもりだった。

だが、足の震えが止まらない。体が思う通りに動かない。

「……………はあ。冷めるよ簪。なんでここでビビっちゃうの？」

ステラは明らかに機嫌を損ねた。しかしその手から放たれる光は、消える所か尚一層強くなる。

「もういいや」

たった一言だ。

「死んじやえよ」

たった一つの言葉が、簪の心を砕いた。

光が簪に届くその一瞬。白い光がその間に割り込んだ。

「金色白夜！」

光の壁がそこにはあった。

それに触れた瞬間、ステラの放った光は霧散し消える。押し寄せる

光が、尽く。

「……………一夏、邪魔しないでよ」

「悪いなステラ。お前にこれ以上、こんな事はさせねえよ」

睨み合う二人。

そこに次々と、ISが降り立つ。

「ステラ？まさか、本当にあんただったの？」

「……………はあ」

鈴の語りかけに、ステラは苛立った様にため息をついた。

「ステラさん！何か言つて下さい！」

「あーあ。白けたよ……………」

セシリアの叫びに、呆れた様に声を漏らした。

「ス、テラ……………」

「ラウラ……………うっ?!」

ラウラを見た瞬間に、ステラは突然地に膝をつき、頭を抑えた。

「ぐっ?!待て、出てくるな！まだ、私は……………」

私は……………何を、していたの?」

その目が、いつもの透き通る様な青に戻った。

「ラウラ?それに、皆……………っ?!クロエさん!どうしたの?!」

ステラはクロエに駆け寄り、その体を抱き寄せる。

まるで自らの行いでは無いかの様に。

「誰?!誰がクロエさんにこんな酷いことをしたの?!ねえ!!」

いや、事実そうであると、ステラは思い込んでいた。

ステラを深く知らぬ者なら「どの口が言うのか」と糾弾しただろう。

だが、ここにいるのは皆ステラの友であり、それを告げる事で、ス

テラの心を壊してしまうのではないかと恐れていた。

友ならば恐れる。友ならば、だ。

「まだ分からない”ふり”をしているのかい?」

唐突に、男の声が響いた。そしてステラのすぐ側に赤い光が舞い降りた。そして光が爆ぜる。

「デストロ……デマイド！」

そこには、今までステラと数度衝突し、戦った男が黒い I S を纏い立っていた。

「お前がやったのか！クロエさんにこんな！」

ステラはそう叫び、クロエを抱き締める手に力を込める。

「何を言っている。確かに彼女を焼き付けたのは僕だ。けど彼女を傷付けたのは「やめろ！」「それ以上言うな！」、はあ……邪魔だな」

デストロの言葉を止めんと駆ける弾と数馬に、デストロは赤い光弾を放ち動きを止める。そして同時に動きの遅れていた者達にも牽制の光弾を放つ。

「もう一度言おう。クロエ・クロニクルを傷付けたのは、ステラ・ターナー。君自身だろ」

「……………え？」

デストロの言葉に、ステラは間の抜けた声を漏らした。

「違う！ステラは悪くない！」

一夏が必死にステラの意識を引き戻そうとするが、その耳には今までの音も聞こえていなかった。

「……私が？私がクロエさんを、傷付けた？」

「なんで、そんな、だって……………」

ステラは必死に、考えた。

誰が悪い、誰のせいだ、と。

果てのない思考の末に、ステラは己の中の封じていた記憶を鍵を、開いてしまった。

「そんな、私が……………」また、なの？」

「またって……………ステラお前、まさかあの日の事を?!」

数馬が問う。

だが、その問いに帰ってきたのは、答えではなく困惑だった。

「ねえ、数馬は知ってたの？」

もしかして、皆は、知ってたの？」

困惑は疑惑に変わり、心は疑心に覆われた。

「どうして、私だけが、知らなかったの？去年のクリスマスに、一体私

に何をしたの?!」

何も信じられなくなっていた。

どうして誰も否定してくれないのか。

どうして自分だけが何も知らないのか。

どうして自分だけがこんな目に遭うのか。

「ステラ!」

その時、力強い声が響いた。

その声にデストロは舌打ちをし、ステラから離れた。

「ステラ無事か?!おい、どうした!」

千冬はデストロに構わず、ステラを抱き締める。

「ねえ、千冬さん。私ね? 思い出したの!」

「何の事だ? 何を言ってるんだ?」

千冬は優しく問いかける。だが、顔を上げたステラの顔は、絶望に染まっていた。

「あの日、鈴が殴られた事に怒って、あの人達に酷いこと、した…」

「っ?! 何故、その事を!」

千冬は、デストロを睨んだ。

「貴様か……貴様がステラの記憶を!」

睨まれた本人は飄々と答えた。

「皆して僕を悪者扱いかい?」

そもそも、君と束が記憶を封じるなんて事をしなければ、彼女は今傷付いていなかったはずだろ? 彼女なら乗り越えられない出来事では無かったはずだ」

デストロは大振りな仕草で、あえて千冬を煽る様に語る。

「だが君達は彼女を信じる事をせず、その記憶を封じた。

だが人間の脳はそう都合よく出来ていないんだ。封じた記憶は何かの拍子に蘇る。特にその時に近い状況だとね」

デストロの言葉に、千冬は先程まで燃え盛っていた心を鎮め立ち上がり、スーツの内側のポケットからトリガーを取り出した。

「デストロ・デマイド。貴様を斬る!」

「前にも言っただろう。君では無理だ!」

デストロが次の言葉を発するより前に、不可視の刃がゼニスの装甲の表面に傷を入れた。

「っ?!空気の刃、だと?」

フツ。まさかそんな不完全な兵器で白騎士同等の力を使うとは……  
トリガーを展開していた千冬が、孤月の切っ先をデストロに向けて低い声で唸る様に告げた。

「七年前にも言ったはずだ。

貴様を、私のこの手で斬ると」

悪魔と剣鬼が、今ここに衝突する。

## 剣鬼と悪魔と復讐の騎士

「ゼアア！」

ガキンツ！

「ハアツ！」

ドゴンツ！

千冬とデストロの音すらも置き去りにした戦い。

繰り出される拳や剣戟、銃撃等の全てが、一夏達には認識出来ていなかった。

この中で唯一、弾はトランザムで音速を超えた戦闘を経験しているが、それでも捉えられたのは動きだけだ。衝突の際に行われる幾多もの攻防が見えている訳では無い。

「くっ！ハア！」

そして、千冬が押されだしているという事にも、気付いていなかった。

「フツ。やはりトリガーは未完成の様だな。この程度では僕に勝つ事なんて土台無理な話だよ！」

そう言いながら回し蹴りを放つデストロ。

咄嗟に腕をクロスするが、生身同然の体格とISの衝突だ。いくらトリガーで身体能力が上がっていると言っても、物理法則を無視できる訳では無い。

「かはっ?!」

木の幹にぶつかり、肺の中の酸素が一気に吐き出される。

しかし人間の体は酸素を欲するもの。無くなった酸素を取り込む為に、肺の活動が活発になり、そうなれば苦しくなり咳き込むのは当然の事であった。

「全く。君は変わらないな。毎度毎度同じ事の繰り返しだ。次は誰を盾に生き残るつもりだい？」

「なん、だど？」

デストロの言葉に、千冬は立ち上がりながら睨みつけた。

「だってそうだろう？あの日死んだ者は皆君の代わりに死んだんだ」

デストロは先の挑発と同じ様に大振りな仕草で千冬を煽る。

「初期型インフィニット・ストラトス、そのテスター達。一人一人は大した力も無かったけど、彼女らの連携は素晴らしかったよ。上手く立ち回れば僕を殺す事も出来たかもしれない。

けど、それも君がいたせいで失敗した。

君はあの時、感情に任せて連携を怠り、そこから連携は乱れた。そして君を守る為に純と荘吉は犠牲になり、その他も君が健在なら死ぬ事は無かっただろう。

全て君が招いた事なんだよ。

確かに直接手を下したのは僕さ。でも、君があの日あの時、少しでも己を抑えていれば、被害は少なく済んだんだ。

本当に、愚かだよ」

見下す様に、デストロは言った。

千冬は俯き肩を震わせながら、孤月を杖の様に使い立ち上がった。

「……まれ……」

「なんだい？聞こえないよ」

千冬の掠れた声に、デストロは敢えて大きな声で聞き直す。

「だ、まれ……黙れ、黙れ黙れ黙れ！

貴様を殺す！ここで！今すぐ！」

千冬は激昂し、旋空を放つ。

だがデストロはまるで虫を跳ね除ける様にそれを弾き飛ばした。

その先には、動けずにいた一夏達がいた。

「っ?!メタル！」

咄嗟に数馬がフィリップのメタルを発動させて前に出る。

だが、如何に防御力を上げようと、研ぎ澄まされた一閃は、フィリップの装甲にいと也容易く切込みを入れた。

「ぐあっ?!」

そしてそれは数馬の腕にも傷を入れ、ダメージで解除された装甲の下から出た腕から血が滴っていた。

「数馬！」

一夏達が駆け寄り止血等をする。

しかし千冬は、その光景をただ眺めていた。

「相変わらずだね。すぐにそうやって力を振るう。そして誰かを傷付ける」

「わ、私は……違う、私じゃない！お前がその方向に飛ばしたんだろ！」

千冬は必死に否定する。

だが、デストロはさらに続ける。

「君は馬鹿かい？動けない者が居る場で、遠距離系の技を使う事自体が愚策だろう。それなのに君は、守るべき物を見失い、それにとどまらず守るべき物を傷付けた。」

いい加減気付いたらどうだい？

君の力は、壊す事にしか使えないんだよ」

苛立った様に、デストロは言う。

まるで期待していた物に裏切られたかの様に。

「君は僕が殺すに値しない。外野でただ見ている」

そう言いながら、今度は一夏達の方を向いた。

「さて、次は誰が僕の相手をしてくれるんだい？」

デストロはにこやかにそう問うた。

しかし、一夏達は千冬すら勝てなかったという事実と、この中で最も冷静である数馬が倒れた事により、その心から戦意はとつくに失われていた。

「なら、私が相手になるわ」

「っ?!」

一夏は、聞き覚えのある声だと、その方を見た。

「なるほど。確かに君なら、相手になるだろうね」

そこに立っていたのは、祭りで見かけた時には想像もつかない程に、憎悪に塗れた表情の、小夜子だった。

「初期型のISなら、現在の軍用ISよりも高い出力を持っているからね。唯一の欠点は、BT兵器や展開装甲等の特殊兵装が無い事と、体への負担が激しい事くらいだ。」



しかし、幾ら出せる力が大きくても、結局は旧世代機だ。広大なスペース差を埋められるかな？」

「私がこの七年間、何もしなかったと思う？」

独自に研究を重ね、機体を強化したわ。あなたを殺す為に」

デストロは笑った。好敵手が現れた事を嬉しそうに。

小夜子は、ネックレスを握り締めた。覚悟を求める様に。

「行くわよ、皆……………」

そして、ネックレスの紐をちぎり、先端に付いている宝石を握り締めた。

「竜騎士」

小夜子がそう呟くと同時に、その体を鎧が包み込む。

右手には大振りな槍を、左手には盾を装備した、紅の全身装甲タイプのI Sが、そこには立っていた。

「これは凄い。」

まさか一人でここまでの改造をほどこすとはね」

「あなたを殺す為に、努力も時間も惜しまなかった。」

あの日何も出来なかった自分を、変える為に！」

小夜子は、腰を落としたかと思った瞬間、既にデストロの懐に飛び込んでいた。

「っ！瞬間爆速か！」

瞬間爆速とは、小夜子が得意としていた瞬間加速の発展技だ。

特殊な技術などは必要無く、瞬間加速を超えるスピードを持つ反面で、加速がつきすぎて減速し終わるか何かに衝突する以外に止まる方法が無いというデメリットがあるのだが、小夜子にとってはそれはデメリットにならなかった。

何故なら、つまりは何かにぶつかりさえすれば止まるのだ。

このフィールドでならそれが容易に可能であり、更に言えば敵にぶつかれば止まれるのなら問題は無かった。

「ハッー」

小夜子は盾を前に突き出してデストロを殴った。

勢いの乗った盾はデストロを弾き飛ばし、狙い通り小夜子はその場

に静止した。

だがこれで終わるはずもなく、再び瞬間爆速を使い間合いを詰める。

「ハァー！」

右手に持っていた槍を突き出して、デストロへと突撃する。だが正面から来ると分かっている攻撃に対処出来ない程デストロは弱い。

「フンッ！二度も同じでは食わないよ！」

肘と膝で槍を挟み威力を殺す。

しかし小夜子は狙っていたかの様にすぐ様槍を手放し離脱する。

「竜爆ー！」

小夜子が叫ぶと、槍は爆発を起こした。

デストロはその事に気が付き、槍を咄嗟に話して蹴り飛ばそうとするが、あまりに距離が近過ぎたせいで、決して浅くは無ダメージを負った。

「くっ、グウウッ！」

右足を抑えて、デストロは苛立った様に声を漏らす。

「チッ。ここは引くか……クロエ・クロニクル！」

「……はい」

デストロはクロエを呼び、クロエはそれに応えた。

自分を抱き締めていてくれたステラを名残惜しそうにその場に残り、デストロの近くに移動する。

「逃がさない！」

再び瞬間爆速を使用するが、クロエの影忍の能力で、二人は一瞬の内に姿を消した。

「クソっ！また、逃がした……」

小夜子は盾を地面に投げ捨て、膝をついた。

「まだ、届かないの？」

小夜子の悔しそうな呟きが、辺りに染み渡る。

その後、通報を受けた駆けつけた警察や軍関係者による事情聴取が行われたが、大した情報は得られなかったという。

## 後悔の中で

「……………ステラ」

銀色の髪が、風に揺られる。

ベッドで未だ眠り続けている最愛の人の頬に、白い掌がそつと、まるで陶器を扱うかの如く優しく触れる。

篠ノ之神社で起こった事件。市街地でのIS同士の戦闘。

当然その情報はネットを通じて世界中に広まった。

またその戦闘の当事者の殆どがIS学園の生徒である事も、世間を賑わせた。

いくら情報規制をしても、一度出てしまった情報は消えないのだ。しかし、その中で唯一隠されたのは、デストロ・デマイドの存在と、ステラの暴走の事だった。

この事がもし一般人に広まれば、ステラは必ず非難の的になるだろう。いや、なっても仕方ない様な事をしたのだから当然だ。

だが、何も知らない者達の心無い言葉で、この無垢な少女の心を、砕いてしまったいいのか。

いい訳が無いと、ラウラは唇を噛み締めた。

「ラウラ、そろそろ帰らないと……」

考え込むラウラに、シャルロットが語りかけた。

「……私はどうすれば良かったのだろうか。あの時、容赦せずにクロエと名乗った彼女を殺せばよかったのだろうか……」

いや、きつとそれではステラの心を壊してしまうか？

では、デストロという男を殺せばよかったのだろうか？

……無理だな。私と奴では力の差があり過ぎる」

ラウラは自問自答を繰り返す。

ここ数日、シャルロットが何度も見た光景だ。

「私は結局、誰も守る事は、出来ないのか……」

「ラウラ……」

諦めた様に俯くラウラに、シャルロットはかける言葉が見つからなかった。

「ただステラを傷付くのを、黙って見ていた。教官が打ちのめされるのを、黙って見ていた。」

一般人ですら立ち向かい戦っていたのに、私はただ見ているだけだった」

ラウラの声が、虚しく病室に染み渡る。

シャルロットはそつと肩に手を置くが、そこで初めて、ラウラの体が小さく震えている事に気が付いた。

「何故なんだ。」

何故ステラばかり辛い目に遭うんだ？こいつばかり不公平では無いか……」

未だ瞳を閉じたままのステラの頬を、ラウラは再び優しく撫でる。

「弱さは悪、か……」

「ラウラ？」

自虐する様に笑うラウラ。

シャルロットは、その鋭く冷たい視線に、体が凍りついたと錯覚する程に、動けなかった。

「テストロという男、何処かで見た事が思っていたのだ。だが、今はつきりと思い出したよ」

まるで、学園に来た頃のラウラの様だと、シャルロットは感じていた。

男子であると偽り、悟られる事が無いようにと周りを観察していた時にいつも感じていた、あの感覚だと。

「奴は私のヴォーダン・オージェの手術をした男だ。」

きつと、VTシステムも奴が仕込んだのだろう」

淡々と語るラウラに、シャルロットの心は追いついてはいなかった。

「奴は何をしようとしている……」。

今までの状況を見るに、恐らく教官や篠ノ之 束と浅からぬ因縁がある筈だ。それが一体何なのか……」

ラウラは瞬きを忘れた様に、ただ黒く染った空を睨んでいた。

「……IS学園の無人機襲撃。篠ノ之 束がそれを行う理由が思い当

たらない。ステラを大事に思っている以上、そのステラが危険に見舞われる様な真似はしないはず……。

しかし、デストロ・デマイドが行っているとすれば、全てが繋がる。シルバリオ・ゴスベル銀の福音の一件も奴が関わっているとすれば合点がいくが、何故態々そんな面倒な手段をとる必要があるんだ？」

思考の渦に囚われるラウラを、シャルロットはただ不安気に見守ることしか出来なかった。

そこにふと、ガラガラと扉の開く音が聞こえた。

その音にシャルロットは振り返り、ラウラは意識を現実に戻した。

「なんだ。まだいたのか」

そこに立っていたのは、腕に包帯を巻いた数馬だった。

「数馬、怪我は大丈夫なの？」

「大丈夫も何も俺はただ腕に切り傷があるだけだ。

逆に入院させられている事に驚いているくらいだ」

シャルロットの問いかけに、数馬は苦笑しながら応えた。

「数馬、お前は今回の件をどう思う？」

いや、今回だけでなく今まで奴が……デストロ・デマイドが関与していると思われる事件全てに対してだ」

「」

ラウラの問いかけに、数馬は聞かれると分かっていたかのように、ノートパソコンを取り出し、病室の脇にある机で画面を開く。

「これは俺の親父のものだ。家にあつたのを祭りの前に回収した」

「そう言えば確かに、そんな事を言ってたね。けど、それがどうしたの？」

シャルロットは開かれたディスプレイを覗き込むが、そこに書かれていた文章に、目を見開いた。

「こ、これって、どういうこと?!」

「っ！見せろ！」

ラウラはそれに飛びつき、ディスプレイを見た。

「……………なん、だと?」

そして膝から崩れ落ち、愕然としていた。

「恐らく、奴もステラと同じ星から来たのだろうな。奴のISがギンギラに似ていたのもそのせいか」

「そ、そんなことより！これが本当なら、ステラは……………」

数馬はパソコンを閉じ、拡張領域にしまいながら頭を抱えた。

「ああ、そうだ」

そして、未だ起きぬ友を眺め、言葉を漏らした。

「アイツは、作られた人間って、事になる……………」

深い闇夜とラウラの心に、数馬の言葉が闇を落とす。

## 終わりの始まり

### 赤き瞳 First Episode

「さて。皆おはよう。夏休みは楽しめたか？」

千冬は、いつも通りの声でそう問うが、クラスからは返事はなく、暗く淀んだ空気が空間を支配していた。

「……恐らくこの場の全員が知っているだろうが、私も教師として説明する義務があるのでな。

数日前、市街地でIS同士での戦闘が行われた事は、皆知っているな？」

千冬はそれから、戦闘について大まかに語った。

無論、学園の生徒や自分自身が関わったとは一言も口にはせず。

「織斑、先生……」

誰もが黙り込んでいる中、相川 清香が遠慮気味に手を挙げた。

「どうした相川」

それに対し千冬は、またもいつもと変わらぬ様子で返す。

清香は僅かに怯んだが、それでも聞くと言わんばかりに震えながらもその声を振り絞った。

「……全て、話してくれませんか？」

突然の言葉に、千冬は少し驚くが、清香はなおも続ける。

「ネットでは、織斑君達が戦っている動画が出回っています。調べてみたけどフェイク動画でも無かったですし……」。

それに、ステラさんが急に休学なんて、おかしいじゃないですか！」  
前のめりになりつつ、清香はそう叫んだ。

そして千冬は教室を見渡す。クラスのほとんどが、同じ顔をしていた。

「はあ……私から言えるのは一つだけだ」

「なんでもいいんです！聞かせて下さい！」

必死な顔に千冬は折れたのか、ため息を零しながら言った。

「私は、何も言えない」

「……………え？」

想定していたどの言葉よりも、重く鋭く、教室にいる全ての人間を等しく射抜く様な声色に、清香は押し黙った。

そしてその言葉通り、誰もが理解した。

「聡明な諸君ならば分かるはずだ。

私は”何も言えない”んだ」

千冬の口から、そして当事者達から、答えを得る事は出来ないのだと。

「…分かり、ました」

清香は静かに席につき、千冬はそれを見届けて手を叩いた。

「さて、朝礼は終わりだ。各々一時間目の準備を忘れぬ様に」

千冬の言葉を聞きつつも、誰もその場を動こうとは、しないのであった。

……………

「……………はあ」

閑散とした砂浜に、銀髪の少女は寝そべっていた。

その名はステラ。ここ地球においては異星人であり、今世界で起こっている混乱の中心で心の闇と直面し、目の前の海に溶けて消えてしまいたいと願うほどに、彼女は憔悴しきっていた。

「私は、一体誰なんだろう」

普通の人間であれば、まず口にしない言葉。己が存在を疑い、自分が自分であるという確証を、見失ってしまったていた。

「今の私と、赤目の私…」

認めたくなかった。認めるのが怖かった。自分の中の闇を、いつまでも気付かないままでいたかった。

そんな少女の願いは、つい先日、ある男によって砕かれた。

名はデストロ・デマイド。ISの開発に携わった一人であり、束をも上回る頭脳と身体能力を持つ、正しく天才だ。



しかし、その頭脳は束の夢を汚し、多くの命を奪った。

白と黒、光と闇。正しく対極に立つ二人だ。

いや、もしかしたら自分もあちら側では無いのか、等と考えていたその時、ふとステラの顔に影が差し込んだ。

「どうしたんだいお嬢さん。そんな所に居たら、少し強い波が来たら攫われてしまうよ」

「え？」

影の正体は、帽子を被った男だった。

「まるで、今の君の心の様だな」

「っ!」

突如放たれた言葉に、ステラは飛び起き身構えた。

自分を知っている人間はそう居ない。それなのにこの男はまるで今現在の自分の状況を知っているかのような口ぶりだ。

「俺の名前は御手洗 荘吉。会議で名前くらいは聞いた事があるだろう」

「数馬の、お父さん。亡くなつてたはずなのに、突然数馬の前に現れて襲撃した、デストロの仲間」

ステラは知りうる情報を並べ、整理する。

荘吉はその様を眺めながら少し笑った。

「奴の仲間、か」

その言葉に、ステラは顔を顰めた。この人は何を言っているのか、と。

「まあ、そう思われても仕方ないな。

俺は奴と共に行動し、君達を攻撃したのだからな」

自嘲する様に語る荘吉は、ステラの隣に腰を下ろした。

「……………何故、あなたは彼と共に？」

怒りを曝け出したい。感情のままに動きたい。

だが今のステラには、少し前まで出来ていたそれが、また暴走に繋がるのではないかと、怖くて仕方がなかった。

「俺達の目的を語る事は出来ない。

したとしても千冬が信じないだろうしな」

「……それでも知りたいです。あんな事をしてまで、あの人は何をしようとしているんですか？」

なおも食い下がるステラに、莊吉は帽子を抑えながら苦笑した。

「知らなくてもいい事も、世の中にはあるんだよ」

優しく諭す様に、肩に手を当ててそう言った莊吉に、ステラは激昂した。

「誤魔化さないで！教えて下さいよー！」

そして手を振り払い、立ち上がった。

目が少し、赤く染る。

「ギンギラー！」

そして自らの相棒の名を叫ぶ。

だが、応える声は無い。

「整備中、だろ？」

君の無茶な戦い方に巻き込んだんだ。そうなくても仕方がない」

ステラの首元に、ゴーグルは無い。

先日の戦闘でその体を酷使した事が原因で、ギンギラの体は様々な部分で不具合が出ていたのだ。

その事実が、ステラの心を再び砕き、その心は再び冷えきってしまった。

「では君の無茶に免じて、一つヒントをあげよう」

そう言って莊吉はISのコアの様な物を一つ投げた。

「その中のデータを束に見せろ。そうすれば戦いは加速するだろうな」

「っ?!どうして……どうして戦う必要があるの?!私達が戦う事に、一体何の意味があるの?!」

ステラの叫びを背に受けながら、莊吉は立ち去る。

しかしふと立ち止まると、振り返り呟いた。

「全てはベリアルをこの星に呼び寄せる為だ」

そして今度こそ立ち止まらずに、その姿を消すのであった。

## 赤き瞳 Second Episode

「これは、ISの宇宙空間稼働シミュレーション？」

これをそーくん……いや、デストロはなんで私に？」

ディスプレイを睨む東の目の下には、濃い隈が刻まれていた。

これだけで、東がここ数日まともに睡眠をとっていない事を悟るには十分すぎる程だ。

「ふーっ。少し休憩しよつと……」。

クーちゃん、ちよつとコーヒーを……」。

東の呼び掛けは、虚しく虚空に溶けていく。

「そっか。クーちゃんはいないんだ……」

そう。東は今、このラボにただ一人で住んでいた。

もつと外の世界を見て欲しくてステラを千冬に預けた。だが、それは結果としてステラを深く傷付け、その心の闇を暴走という形で表してしまった。

そして、クロエのステラへの愛を歪ませてしまった。

「私のせいだ……私が、スーちゃんとクーちゃんを苦しめたんだ……」

普段ならここで、ステラやクロエの慰めで心を保つ事が出来た東は、その二人の声が無いだけで、ただの少女の様に泣く事しか出来なかった。

止むことのない涙と嗚咽。

壊れてしまった東の心の壁は、そこから溢れる感情を抑える事が出来なかった。

〈東、そこにいる？〉

そこに響いたのは、東にとって、久しく聞いていなかった親友の声だった。

「……え？恵美ちゃん？」

〈そうよ。久しぶり〉

まるで昨日話したばかりの様に答える声。

「今までどこにいたの?!心配してたんだよ?!」

東に恵美と呼ばれたその声の持ち主は、その大声を無視して続けた。

〈そんな事より、莊吉からデータは受け取った?〉

「……知ってるの?」

恵美の言葉に違和感を感じた東は、なるべく冷静に問う。

〈そりゃ知ってるわよ。だって私も作るの協力したもん〉

東が最も恐れていた言葉が、あっけらかんと放たれる。

あまりに温度差がありすぎる会話。

例えばこれが中学の頃ならこの後は笑顔で終わっていただろう。

だが、今は暫定的とは言え敵対状態にある2人には、笑顔を向ける程今は余裕が無い。主に東には。

「どうして?! デストロは、そーくとじゅんくんを殺したんだよ?!」

〈いいじゃない。今は生きてるし〉

「あのねえ?! 私はそういう事を言ってるんじゃない! ……今は?」

恵美の言葉に、東はまたも違和感を感じた。

それも先程よりも圧倒的な程に。

〈あら、口が滑った〉

「ねえ、今のどういう意味?! 答えて恵美ちゃん!」

ようやく答えにたどり着く足がかりを見つけた。

その事実には、東は自然の声が大きくなる。

〈私が言えるのはただ一つ。切り札はもう既にあなた達が持っているわ〉

「切り札? 今そんな話はしてない! ちゃんと答えてよ!」

ブツッ

東の声は誰に届くことも無く、ただ部屋にひびくのみだった。

「……………どうすればいいの?」

そしてその悲しみも、誰かに届く事は無かった。

## 赤き瞳 Third Especial

「なあ皆、文化祭の事なんだけど……」

教室の教壇に立つ一夏は、真剣な目でクラスの全員を見た。事の始まりは、前日の昼に遡る。

……………

「なーんか、最近パツとしないわね」

いつもの屋上で昼食を取る一夏達。

だがそこに、ステラとラウラの姿だけがなかった。

その中で、唐突に鈴が気の抜けた声で言った。

「……………ステラが、居ないからかもな」

今日、一夏達の間では会話の途中に妙な間が空くことが多かった。

いつもならば、その間はステラが答えたり、繋いだりしていたのだが、そのステラが今、この場に居なかった。

「ステラ今、何してるんだろうな」

誰もが気にしているが、口には出来ないその言葉を、弾が呆気なくこぼす。

それを聞いた一夏は、弁当と箸をそつと置いて、その場の全員を見た。

「なあ、皆はステラの事、どう思う？」

その言葉に、全員が一夏を睨む。

特に、ステラと最も深い友情で結ばれた鈴は、詰め寄る勢いで一夏の胸ぐらを掴んだ。

「それどういう意味よ！まさかアンタ、ステラの事嫌いなわけ?!」

「んな訳ねえだろ！俺はアイツの家族なんだぞ！」

誰もが、ステラの事を信じていたい。だが、それでもあの光景を、あの出来事を無かったことには出来ない。

故に、その疑心を刺激した一夏に対して、鈴は感情の限界を迎えていた。

「じゃあ何よ今の！家族とか言つて、実はアンタが一番ステラの事を邪魔だつて思つてんじゃないの?!

そういえばアンタ、初めての戦闘でステラを切つたんだつてね。それも本当はわざとじゃないの?」

「はあ?!ふざけんなよ!誰がそんな事!」

一夏はたまらずに鈴を突き飛ばす。そしてそのまま、シートの上に広げてあつた弁当を散らしてしまった。

「……………本性が出たわね。所詮アンタは気に入らないものはそうやって傷付けて、消えて無くなればいいて思つてんじゃないの?!」  
「違う、俺はそんな事!」

激昂する二人はいつしか、周りの誰もその目に映つてはいなかった。

「だいたいアンタはいつもいつも!」

「なんだよ!」

「いい加減にしろ!」

その時、二人の腕を何者かが捻りあげた。

「お前達は、そんな醜い姿をステラに見せるつもりなのか?なら、私はアイツの友として、お前達を全力で、殴つても止めるぞ!」

二人の腕を掴むのは、箒の力強い腕だった。

そしてその表情は、一夏が小さな時に見ていたものとも、IS学園で再開してから見ていたものとも違う、酷く険しいものであった。

「……………わりい」

「ごめん。私も、冷静じゃなかった…」

箒の言葉に、一夏と鈴は頭を冷ました。

それを確認すると、箒は手を離して座り込む。

「いや、いいさ。お前達が冷静さを欠くのも分かる。ステラは自身が言つた通り、私達の一番星だったんだ。それが無くなれば不安になるのは当然だ」

「ステラは、どうしてこんなに辛い世界に生まれちゃつたんだろう……………」

何処か気の抜けた声で語る箒。

それに続く様に、簪が暗く言葉を零す。

そして、その言葉に数馬とシャルロットが僅かに反応を見せるが、その事に、誰もが気付かなかった。

「お前ら何うだうだ考えてんだ。答えはシンプルだろ」

唐突に弾が、そう言つて自分の端末の画面を見せる。

「俺達が、この笑顔を取り戻すんだろ。」

アイツが落ち込む暇もない程に、笑われてやるんだろ」

そこに写っていたのは、夏祭り前に一夏の家の前で撮った集合写真だ。

そしてそれを見た一夏達は、何処か決意の漲った様な瞳で立ち上がる。

「そうだ！俺達がステラの心を元に戻してやるんだよ！」

「だがどうするんだ。」

今のステラの心は、そう簡単に癒せるものではないぞ」

ここで数馬が、冷静にそう問いかける。

しかし、これはステラが憎くて言っている訳では無い。

誰かが冷静にならなければ、いずれはまた先程の一夏と鈴の二の舞となる。それだけは、防がなければならなかった。

「……………文化祭、なんてどう？」

控えめに言つた簪に、一気に視線が集まった。

「そうよ！文化祭よ！」

「そうだ！それならステラだってきつと楽しめる！」

鈴が立ち上がり言うと同時に、一夏もそれに賛同する。

「そうなったら、今も部屋でずっとズル休みしてるラウラも出てきてくれるよね！」

そこにシャルロットが乗つかった事により、この会話は更に加速し、そして次々と案を出していった。

「しかし、本当に大丈夫なのか？」

唯一、不安そうに呟く簪を除いて。

……………

そして話は冒頭へと戻る。

「なあ皆、文化祭の事なんだけど。」

皆も知つての通り、今ステラはずっと学園に来ていない」

一夏の言葉に、クラス全体の雰囲気は暗くなる。

それは一夏も予想していた事だ。だから一夏はその空気を砕く様に叫んだ。

「いつまでももうだうだしてても仕方ないだろ！」

いつもと違う一夏の声に、クラスのほとんどが呆気にとられた。

「今ステラは心に傷を負ってる。それは簡単に治せるものじゃないけど、それでも俺が、俺達がステラの心の傷を少しでも軽くしてやれないのかって、ずっと考えてた。」

けど、俺一人じゃ思い付く事には限界があるし、数馬や弾だけでもダメなんだ。

だから頼む。俺に、力を貸してくれないか？

いや、力を貸してくれ」

一夏は深く頭を下げる。そこに恥などありはしない。

「何言ってるの織斑君。そんなの当たり前じゃん！」

清香が机を叩きながら立ち上がる。

「私達だって、いつも織斑君やステラちゃんの後ろにいるだけじゃないー！」

「そうだよ！今度は私達がステラちゃんの星になろうよ！」

「別におりむーが言わなくても、きつとこうなってたよお」

同調する声。

どんどんと増えていく声に、一夏はふと、目頭が熱くなるのを感じた。

「皆、ありがとう！」

そしてそれから、クラスのはぼ全員が進んで意見を出し、次々と候補が上がって行くが、逆に多すぎて決めあぐねていた。

「教室をゲーセン化、カフェ、レストラン、お化け屋敷……数も種類も多すぎて、こりやちよつと迷うな……」



一夏は困った様に呟く。

尚、背後ではそれぞれの意見のいい所を出し合ってそれぞれの客観視し評価するという工程を行っているのだが、それでもまだ決まらない。

「つたくよ。お前らまどろっこしいんだよ」

ふと、弾がそう言って頭をかいた。

「お前ら馬鹿か？」

アイツを笑顔にしてえんなら、まず俺達が笑っているべきだろ。

少なくともそんな思い詰めた表情じゃアイツが笑える訳ねえだろ」  
そう言われて、クラス中がそれぞれ顔を見合わせた。

「アイツは、誰かが笑っていると、別に自分は楽しくもねえのに笑ってやがるんだ。」

誰かが笑っていられるなら、それで自分は満足だつてな」

呆れた様な声で、弾はそう言った。

「アイツはそんだけアホなんだよ。だから俺達が笑っていられりゃ、必然的にアイツも笑顔になんだろ」

その言葉に、クラスの生徒全員が少し笑った。

「確かに、ステラちゃんなら有り得るね」

「そうだよ。いつも誰かの為に頑張って、自分の事は後回し…。」

だから、ステラちゃんの事は私達がやってあげなきゃね」

「全く、世話が焼けますわね」

苦笑混じりのその声に釣られて、一夏も自然と笑みが零れた。

「だよな。確かにそうだ。」

まず俺達が楽しまないと始まらないよな！」

そこからは話は順調に、という程は進まなかったが、それでも先の様な何処か影を孕んだものでは無くなっていった。

「それじゃあ、俺達の企画はメイド執事喫茶で決まりだな」

「」「異議なし！」「」

クラスほぼ全員より放たれたその言葉に、一夏は満足そうに提出用のプリントに書き込んでいく。

だがそこで一人、手を挙げる者がいた。

「ちよつといいかな?」

シャルロットだ。

そして、それを見た数馬が目を見開く。

「シャルロット、まさか」

「安心して。その事じゃないよ」

少なくともこの教室内では、二人しか知りえぬ事。

その会話に、微かに聞こえた数人が反応するが、シャルロットは聞く暇を与えぬ様に語り出す。

「確かにそれだけでもステラは楽しめると思う。

けど僕はそれだけじゃなくて、ステラを元気づける為になにかしたいんだ」

シャルロットの声が、誰も心に響く。

「その為に、僕、やってみたい事があるんだ」

シャルロットがある映像をタブレットに映し出す。

「こんなの、どうかな?」

それはある学校の文化祭の映像だ。

そこには、演劇やバンド演奏を行う生徒達が映されていた。

「こんな風に、ステージで何かできないかな?」

これならきつと、ステラももつと楽しめると思うんだけど……」

後半になるにつれて声が小さくなるシャルロット。

僅かな緊張と共に、その頭の中の言葉を整理する。

「皆も、ステラが別の星から来たって事は知ってるよね」

全員が首を縦に振るのを確認して、シャルロットは言葉を続ける。

「ステラが今までやって来た事や、言ってきた言葉を、歌にしてみるのはどうかな?」

それと、前にギンギラから聞いたステラのお父さんの話も織り交ぜて。それなら僕達も楽しめるし、きつとステラも楽しめると思うんだ」

必死に訴えかけるシャルロット。

それを聞いて一番に反応したのはセシリアだ。

「素晴らしい提案ですわ!それなら、ステラさんもきつと笑顔になっ

てくれますわ！」

その声に釣られて、次々と賛同する声上がる。

「うん！それがいいと思う！」

「メイド執事喫茶に歌。忙しくなりそうだな」

「しゃーねーな。これが一番面白そうだ。乗っかるぜ」

「お前がやるなら、俺が支えるのが道理だ。無論協力するぞ」

「数馬、それに皆、ありがとう！」

シャルロットが笑い、誰もがやる気に満ち溢れていた。

もしかしたら起こるかもしれない悲劇を見ない様に。

赤き瞳      F o u r t h      E s p e c i a l

コンコンツ

またか。今度は誰だ。

そう思いながら私は丸まっていた体を更に小さく丸める。

「ねえ、ラウラ」

シャルロットか。

毎日毎日よくもまあ飽きずに来るものだ。

「聞いて。文化祭でメイド執事喫茶をやる事になったんだ」

文化祭？こんな時期によくやる物だ。

いつ敵が襲ってくるか分からないと言うのに。

「それとね。バンド演奏もする事になったんだ。

まあ、提案したのは僕なんだけどね」

呆れる。

ステラの居ないそんな行事に私がわざわざ参加するつもりも思っていないのか？

「ねえ、ラウラ」

うるさい。うるさい。

私に構わないでくれ。私に何が出来ると言うんだ。

愛した者の為に何も出来ない私に、一体何を求めているんだ。

「……はあ、仕方ない。お願い箒」

「あぁ」

なんだ、箒も来ていたのか。

何人来ようが私の考えは……。

「はぁー！」

ん？なんだ？今の声は。

ガタンツ！

「っ?!」

なんだ、今の音は。

まるでドアが外れた様な。

私はベッドから飛び起き、音がした方を見る。

「久しぶりかな。ラウラ」

そこには、真つ二つに斬られたドアと、ドアがあつたはずの場所に立つシャルロットと箒が居た。

「何のつもりだ。言っておくが私は、私は文化祭には出ないぞ。お前達と遊んでいる程、私は暇じゃないんだ」

「そんな事言わないでよ。友達でしょ？」

友だからなんだと言うんだ。最も愛した者を無くした私に、もう何もする力など残っては……………。

「ステラを連れ戻す。だから手伝ってよ」

今、何と言った？ステラを連れ戻す、だと？

「ふざけるな！アイツを、ステラをまたこんな辛く苦しい世界に連れ戻す気か！」

どうして、ステラばかり苦しまなければならぬんだ。

「そうだね。連れ戻すよ。こんなにも辛くて、醜い世界に」

シャルロットならば分かってくれれば、思っていたのに。

「けどねラウラ。」

それだけの世界じゃない事を教えてくれた人がいる。僕にとってそれは数馬。

じゃあ、ラウラにとって、それは誰？」

私に、辛く醜いだけの世界では無い事を、教えてくれた人……………。

以前の私なら、迷いなく織斑教官だと答えただろう。

だが今はどうだ？

確かにあの人に希望を貰った。あの人ののおかげで私は、シユヴァルツェ・ハーゼの隊長として恥ずかしくない軍人となれた。

だが、私が真に人としての心を持てたのは、紛れもなくステラのおかげだ。

いや、ステラだけじゃない。シユヴァルツェ・ハーゼの者達や、目の前にいるシャルロットと箒、そしてここで出会った全ての人間だ。

それでも、きっかけをくれたのは、やはりステラなのだろう。

ステラには、人を惹きつける魅力がある。

ステラを中心に、多くの絆が生まれた。

かつては対立していたセシリアや、私まで許し、仲間に入れてしま  
う。

私は、そんなステラが、大好きなんだ。

この世界は醜く、一人で生きていくには過酷すぎる。

だから私には、ステラが必要だ。そして今のステラに、私は必要で  
あると思ってもらいたい。だから、私は。

「いいだろう。私も乗ってやる。だがやるからには、必ず成功させる  
ぞ。今度は私が、救う番だ」

私の戦いが、始まる。

## 赤き瞳 Fifth Episode

「見つけた」

不意に、声が聞こえた。

聞き慣れて、凄く会いたくて、けど会いたくなかった人の声。顔を上げると、私の大好きな人が立っていた。

「ラウラ……」

「さあ、帰ろう」

手が、差し出された。

この手を取れば、私はまた誰かを傷つけてしまう。

私は首を振って、また俯く。

「どうしたんだ？もしかして、どこか痛いのか？」

優しい声。本当に、心配してくれてるんだ。

私なんかを、本気で……。

「帰ってよ。私は、もう誰とも会いたくない。

ダメなんだ。

私がいたら、皆が不幸になる。

私がいたら、皆が傷つく。

それなら、もう会わない方がお互い最善の選択でしょ？」

そうだ。私がいなければ、全て上手くいく。

きつとそうだ。そうに違いない。

「それは、本当にお前が思っている事か？」

今更何を言ってるの、そんなの、決まってるじゃん。

「思ってるよ！私がいたらダメなんだって、知ってたのに、知らないフリしてさ……」。本当に馬鹿みたい。私なんて、私なんていなければ良かった！」

言ってやった。これでもう、ラウラも帰ってくれるよね？

そう思っていた、そんな時。

パシンッ！

私の右頬を、柔らかな痛みが走る。

「違うだろ。」

お前が何をしなければならぬか、では無い。

お前が何をしたいのか。私はそれが聞きたいんだ」

なんなの？なんでラウラは、こんな簡単な事を聞くの？そんなの……。

「皆に会いたいに決まってるじゃん！」

私は、何を言っているんだろう。

違うよ。私はこんな事言いたいんじゃない。

「会いたいよ！皆に会いたい！」

でも、私にそんな権利、無いよ……。」

「権利だとか義務だとか、そんなものは関係ない。

お前が会いたいなら、皆は必ず答えてくれる。

というより、今は皆がお前の為に色々考えてるんだ。行ってやらないと可哀想だろ？」

少し苦笑交じりにラウラはそう言った。

皆が、私の為に？

「だから行こう。私達の学び舎に。」

私達が帰る場所に」

どうしてだろう。あんなに硬く決意していた筈なのに、私は、こうも簡単にラウラの手を握ってしまう。

「うん！」

仕方がないよね。こんなに心配かけちゃったんだもん。

ちゃんと謝って、お礼言って、文化祭を楽しもう。

私は、今まで起きてきた悲劇から目を背け、目の前の娯楽に身を投じることにした。

これから起こる、更なる悲劇の足音に気付く事無く。

……

「ね、ねえラウラ。本当に大丈夫かな？急に入って、変な目で見られない？」



「そんな訳ないだろ。というか、何分そこでビクビクしているんだ？」  
うわ、今明らかに呆れたって顔した。

だってしようがないじゃん！皆にちゃんと会うのはこれが一ヶ月ぶりだし、それにあんな事した後なんだもん……。

「はあ……。気持ちは分かるが、堂々としていれば大丈夫だ。私の時を思い出せ」

ラウラの時……………。

（「お前を私の嫁にする！」）

うん。これは堂々としている。けどねラウラ……。

「堂々とキスするのはどうかと思うよ?!」

「何を言う。あれが無ければ私達は付き合っていないんだぞ？」

それを言われると、弱い……………。ん？いや待って。

「それ今関係ないよね?!」

「ばれたか」

ダメだ。ラウラ完全にふぎけモードになってる…………。

「とにかく飛び込んでみる。それがお前のやり方だろう」

…………そうだよね。弱気になってうじうじしたってしようがないんだ。

「ありがとうラウラちよつとだけ勇気が湧いたよ」

「それじゃあ「でもね…」ん？どうした」

扉を開けようとするラウラの袖を引っ張る。

「少しだけ緊張するから…………手、握っててもいい？」

私の言葉を聞いたラウラは少し驚いて、すぐに微笑んだ。

「無論だ。ほら、行こう」

差し出された手を、私は今度こそしっかりと掴んだ。

「うん！」

そして私達は二人で教室の扉を開いた。

「「「おかえり！ステラ（ちゃん！）！」「」」」

教室に入った私を迎えたのは、宛ら本当の喫茶店の様に様変わりした教室と、温かい目をした一組の皆だった。けどなんでメイド服？

「ステラ。おかえり」

「つたく。おせえんだよ」

「ああ、全くだ」

「心配してましたのよ？」

「そうだよ。皆心配してたんだよ？」

「ステラが、帰って来ないんじゃないよ？」

「全く！アンタはいつもいつも！心配ばかりさせてんじゃないわよ！」

私が聞き取れたのは、そこまでだった。

急に、泣き声があった。目頭が熱くなつて、頬を涙が伝つたのを感じて、その声が自分の物だと初めて気がついた。

「あれ、私、なんで涙なんて…」

分からない。皆に会つただけで、こんな…。

「ステラちゃん、大丈夫?!」

「どこか痛い?!」

「救急箱持つてこようか?!」

いや、違う。皆に会えたからなんだ。

それに気がついた私は、自然と笑顔になっていた。皆も釣られて笑顔になる。

そうだ。私はこんな日常が大好きだったんだ。だから、壊したくなくて、遠ざかつて、触れない様に、けど違つたんだ。私はこんな日常が大好きで、守りたくて、けど私は壊す事しか出来なくて…。なんて考えてたけど、違つたんだ。

私なんか守らなくても、この日常は続いていく。だから、もし私が暴走しそうになつても、私を止めてくれる人はここい沢山いるんだ。

大丈夫。私はここに居ても大丈夫。皆が大好きのまま、大丈夫なんだ。

「ステラ」

その時、私の後ろから声が聞こえた。いつもは厳しいけど、二人きりの時は沢山甘えさせてくれる、大好きな人。

「おかえり」

ああ。そうだったんだ。私は、皆に会いたかったんだ。皆に心配かけた分、それを吹き飛ばせるくらいの笑顔で言おう。

「皆、ただいま！」

もうこの温もりを、絶対に離さないと、私は決めた。

.....

「ねえラウラ！次はあれ見ようよ！」

私はラウラの手を引いて、人が溢れた廊下をすり抜ける様に走る。

こんな楽しいのはあの夏祭り以来で、私の心は凄く高鳴っていた。

「待てステラ。落ち着け！どの出店も逃げないぞ！」

腕を引かれるラウラが、慌てた様子で声をかける。けど、今日ばかりはどうか見逃して欲しい。だって、ここはこんなにキラキラしたもので溢れているんだ。ワクワクが止まらなくなっちゃって仕方ないよね。

「出店は逃げなくても時間は迫って来るんだよ?!私は今日全部の店を最大限に楽しんで遊び尽くすんだから！」

余裕がない訳じゃないけど、どの店がどの時間帯に並ぶのかは内容や出来栄えを開始前にある程度確認して予想してる。だからとりあえず移動と僅かでも並ぶ時間を考えたら、店を楽しみながら回るならこの移動速度が最適だって言う事はもう計算してある。そう、ちゃんと考えたんだ。

「少し待ってくれ！もう少しで一組の出し物がアリーナで始まるんだ。それを見てからじゃダメか？」

「一組の出し物？メイド喫茶だけじゃないの？」

私何も聞いてないんだけどな.....

「いや、私も詳しくは聞いてないんだ。どうやら、お前へのサプライズらしいんだが、私は口を滑らせてしまいそうだからと教えて貰えなかった。軍人だから他の生徒よりはそう言ったことには自信があったのだが.....」

ラウラも知らない？それに私にサプライズって一体？

「とにかく行くこう。さつきまでのペースで行けば余裕を持って着ける筈だ」

今度はラウラが私の手を引く。これなんか、デートみたいだな。なんか、少しだけ懐かしく感じる。

夏は皆で沢山遊んだ。

海や山や、プールや遊園地。そして、夏祭り……。

「?どうしたステラ。もう着いたぞ」

「ほえ?あ、ああ、ごめんね」

うん。今はこんな暗い事考えても仕方がない。

せっかく皆が私の為に色々してくれてるんだ。私が楽しまなきゃ、失礼だよな。

「ううん。なんでもないよ」

「そうか。つと、もう始まるようだ」

一体なんなんだろう。楽しみだな。

へお待たせしました!皆さん、今日はお集まり頂きありがとうございます!ごぞい  
ます!〜

この声、薫子さん?え、一組の出し物じゃ?

「どうやら、一組以外の協力者もいるらしいな」

ラウラが納得したように言うけど、一体なんなの?

へこれより、一年生専用機持ちによるバンド演奏を披露したいと思  
います!

さあ皆の衆!準備はいいかああああ!〜

なんかテンションが一気に上がった?!

へそれではメンバー紹介から!〜

その言葉と共に、ステージの一部分に照明が当たる。つて、ええ?!

「まずは、冷静沈着なキーボード!更識 簪!」

コールと共に大声援が起きる。ていうか簪が出るなんて…。

こういうノリ苦手そうなのに。

へ続いて、荒ぶる龍の如きドラマー!鳳 鈴音!〜

またもや大声援。ていうか今のところ一組の要素がゼロなんだけ  
ど?!

〈お次は！ハードボイルドなアコースティックギター！御手洗 数馬！〉

声援のタイプがまた変わった。まさに黄色い声援って感じの物に。へしかし彼には交際の相手がいるのでファンの皆さんはご了承ください

あ、一気に空気が重くなった。

〈さあまだまだ行くぞ！やりたいことを貫くベースリスト！五反田 弾！〉

まさか弾まで…。

〈バンドとしては異色のバイオリニスト！セシリア・オルコット！〉  
セシリアまで?! っていうかバンドでバイオリンって、普通そういうの大きいライブの時とかにオーケストラとコラボするとかそういうときの奴じゃ…。

〈これまた異色の三味線奏者！篠ノ之 箏！〉

もはやバンドで滅多に出ない奴が来たよ！いや確かにそういうバンドは居るけど！

〈そして遂にメインボーカル！シャルロット・デュノア！〉

シャルがボーカル?!

〈さらにもう一人！この学園の中で数少ない突っ込み役！織斑 一夏！〉

ええ?! 一夏も?! っていうか紹介文が一人だけおかしくない?

ていうか、バンドにしては人数凄いな。

「えーつと、今紹介された織斑 一夏です。多分今、バンドの割には人数多くないかと思っただけの人がいると思うんですけど」

エスパカーかな?

「これには訳があつて……元々このバンド演奏は、俺達の、落ち込んで不登校になつた友人を励ます為にしようって事で出来たんです。

そいつは、人一倍頑張り屋で、自分の事より常に相手のことを考えてる様な奴なんです。そのお陰で救われた人も、この会場にはいると思います。

そいつは、俺達にとって一番星そのものみたいな奴で、迷つてし

まった時、辛い思いをした時に、誰よりも真つ先に輝いて、俺達の行く末を照らしてくれます。

けど、俺達はそれに甘えて、そいつが傷ついて、心をすり減らしている事に、気が付いてやれてなかったんです。

だから今日は、その時間を取り戻す為に、この曲をそいつに……。

俺達の一番星に送ります！」

ダメだ。これは、泣いちゃうな。

「ステラ」

ふいに、肩を抱き寄せられた。

「私があの中に入られなかったのは、きつと涙で目の前が見えなくなるなんて事を、防ぐ為だったんだろ？」

そして、私の目頭の涙を指で拭った。

「しつかりと見て、聴こう。お前の為の歌だ」

「うん！」

そこからは夢のような時間だった。

一夏が意外と歌が上手かったり、シャルロットの綺麗な声も凄く心地よかった。

数馬と弾がラップ調の曲を歌ってたのはビックリしたけど。

でも、本当に楽しかった。

遊びに来てた蘭ちゃんと蓮さん、厳さん達とも沢山お喋りして、あの日以来会ってなかった小夜子さんとも話した。

箒のお父さんが来てたのには驚いたけど。

確か要人保護プログラムで日本中を転々としているって前に聞いたんだけど、まあ束さんが手を回したんだと思う。

「にしても、今日は本当に楽しかったよ。皆ありがとう」

もうすぐ文化祭は終わる。私の知り合いの皆はギリギリまで遊んで帰るらしいから、また後で会いに行こう。けど、今は皆だ。

「お前が楽しめたんなら、俺達の目的は達成だな」

数馬が優しく語り掛けてくる。

「実はバンド演奏を最初に提案したのはシャルロットなんだ」

「ええ?! そうなの?!」

シャルロットが……。なんか、意外だな。

「うん。昔からこういうのに憧れてたつてもあるけど一番は、思いを伝えるのに、音楽なんかいいんじゃないかなって思ってた」

「そっか。ちゃんと伝わったよ。皆の思い。凄く嬉しかった」

「それなら良かった。そういえば、束さんからこれ預かってたんだ」

一夏はそう言いながら、私にアタッシュケースを渡した。

「何これ？」

私は開きながら一夏に聞いた。

「お前の大事な相棒だよ」

その言葉を聞いて、アタッシュケースの中身を見る。するとそこには、一つのゴーグルが収まっていた。

「これって……」

『お久しぶりです。マスター』

そうだった。私、もう戦いたくなくて、ギンギラを束さんに預けたんだった。

「……ごめんね、ギンギラ」

『謝る必要はありません。マスターは心そのままであればいいんです』

そっか。私、こんなにも多くのものから目を背けてたんだ。

これからは、ちゃんと向き合おう。

これからは、ちゃんと前を見て歩いていこう。

皆がいれば、もう怖くない。

そう思った時だった。

ズドオオオオンツ！

学園の外れにある大きな広場で、爆発が起こった。

「っ！総員警戒態勢！」

とつさにラウラが叫ぶ。

それと同時に、その場に居た全員がISを身に纏った。

「くっ、まだ学園には一般人も残っている！人命優先だ！戦闘はなるべく避け、防衛に専念しろ！」

ラウラの言葉と共に、皆はそれぞれ散っていった。

私も、まずは爆発のあったポイントに向った。

「……………これって」

そこには、地面にクレーターげ出来ていて、その中心あたりにブースターの様な物が落ちていた。

「まさか、誰かがISで侵入したの?!」



『その可能性は否定仕切れません。しかし、それよりも大きな問題があります』

そう言ったギンギラが、周囲のマップを開く。

「嘘でしょ?!」

『いえ。再三にわたり学園のレーダーのデータと照会しましたが、反応はどんどん増えています』

マップに映っていたのは無登録のISのコアの反応だ。10や20じゃない。もっと、それこそ百を超える無人機の軍団がこの学園に迫っている。

このままじゃ、皆が危ない!

「ギンギラ!一夏達に連絡!私が反応の正体を探るから、皆は学園に侵入した敵をお願いって!」

『了解しました』

私はディステイニーウィングを展開して反応が一箇所密集しているポイントに飛ぶ。

そしてポイントに到着した私は、あたりを見渡す。

「何も、無い?」

そこは一面が海面で、ISの機影すら確認できなかった。

「どういう事?」

その時、真下から何かが迫ってきている気配がした。

『マスター!下です!急速で接近するコアの反応を探知!!』

「了解!」

私は横移動でその場から離れる。すると、海面から通常のISより一回りほど大きい人型のロボットが現れた。

「うっそでしょ?!」

私は100メートルほど距離を置き、その全体像を確認する。

『マスター。あの機体から複数のコアの反応を感知。恐らくあの中に複数のコアが使用されています』

一つの機体に複数のコア?そんなことが出来るのって東さんか、または……。

「デストロ・デマイド……」

『っ！マスター！敵が動きます！』

ギンギラがそう言うのと同時に、敵機がスラスターを吹かせて私の元に迫る。

「っ?!」

速い。久しぶりだけど、はじめから飛ばさなきゃまずいね。

「行くよギンギラ！」

『はいー!』

一気に行くよ!

『リミットブレイク!シフト、スピード!パワー!』

私は一瞬で敵機の背後に回りこみ、拳を脳天に振り下ろす。

しかしそれはいとも簡単に回避される。まるでこっちの動きを知っているかの様に。

「くっ、デイスティニーソード!」

手元に現れたグリップを掴み、折りたたまれていた刀身を展開してエネルギーが刃を作る出す。

「はあー!」

私はデイスティニーソードで最低限の動きで斬りかかる。

今度は数回攻撃があたり、敵機の装甲に傷を入れる。

「ねえギンギラ。そろそろ分かった?」

『ええ。やはりあの機体からは生体反応は確認されません。あれは無人機です』

やっぱりそうか。それじゃあ遠慮はいらないね。

「ギンギラ。あの技を試そう」

『了解しました。威力計算はこちらで行います』

「ありがとう。放てる様になったら教えて」

私は再び無人機に斬りかかるけど、さっきより回避される頻度が上がっている。やっぱり、私の攻撃を知っているんだ。

なら、敵の知らない攻撃を使えばいい。

「はあっ!」

けどまだダメだ。ギンギラの計算が終わるまでは、使えない。

「ザアッ!」

回し蹴りで相手を弾き飛ばすと、ようやくそれは終わる。

『お待ちしました。いつでも撃てます!』

「オーケー!フリーダムキャノン!」

私の両腰に砲身が形成される。私はそれに手を沿え、更にリングユニットを銃口の前に配置する。

「デュアルサーマルキャノン!」

私達の掛け声と共に、二つの砲身から膨大な量のエネルギーが放出される。そしてそれはリングを通る事で更に威力を増し、凄まじいエネルギーの奔流となって無人機を襲う。

そして無人機は軋む音を立てながらそれに飲み込まれた。

「……………逃げられた、よね」

『ええ。これで学園に迫る脅威の内、一つを排除しました。しかし、まだ終わっていません』

そうだ。他の反応もあつたんだ。それも、今回みたいに一つに集まった物でも、複数の無人機だとしても、どっち道脅威に変わりはない。

「とにかく急ごう。学園に侵入したかもしれない敵の搜索は?」

『現在、一夏さんと箒さんが行っています』

一夏と箒ならよほどの事がない限りは大丈夫かな。

とにかく、私達は速く学園に戻らなきゃ。

「飛ばすよ、ギンギラ!」

『はい、マスター』

……………

ステラが強化無人機を相手にしている間に、学園には100を超え  
る無人機が迫っていた。

〈学園内に居る専用機所有者、教員に通達!〉

これより学園敷地内におけるISの自由使用を解禁する!

いいか、防衛が今回の任務だ。最低限の戦闘で、死傷者を出さず、必ず生きてこの局面を乗り越えろ!〈

学園内に響く千冬の声。あるものには希望を与え、あるものは戦意を高めていた。

「まったく。相変わらず無茶な要求しやがる」

弾はそう言いながらGNスナイパーライフルで敵を屋上から狙い撃っていた。だが、それでも敵は一向に減らず、前線で戦う友の事を考える。

(死ぬなよ、お前ら)

弾は尚も黙々と敵を撃墜し続ける。

「はああー！」

覇気の籠った声とともに大振りな武器が振り下ろされる。それは敵を叩きつけ、海へと落下させる。

「まったく、なんなのよこの量はー！」

鈴は苛立ちの声を上げながらも、的確に敵を倒していく。だが、それでも減らない。それどころか増え続ける敵に危機感を覚えていた。

「数馬！こつちに敵が迫ってる！指示を！」

シャルロットの叫びに答えるように、オープンチャンネルで数馬の声が響く。

へシャルロットは敵をポイントFに敵を出来るだけ陽動。山田先生はそのポイントでクアッド・フアランクスで敵を殲滅。溢れた奴をラウラが頼む

「了解(です)ー！」

数馬の声に答える面々。その数馬はというと、楯無共に作戦室で敵の位置等を確認しつつ、それぞれが受け持つ仲間へ指示を飛ばしていた。

「これだけの数、一体どこから？」

楯無がそう呟くと、数馬は視線を常にマップやそれぞれの機体の損傷具合等を確認しながら答えた。

「考えても仕方がないだろう。それよりあの人はまだか？」

「いえ、もう準備は終わっているわ。後は、皆を対比させればいいだけ

よ」

「分かった」

数馬はそう言うのと、今まで三人にしか開いてなかったチャンネルを戦闘中のＩＳに繋ぐ。

「総員退避！こちらの大技を放つ！巻き込まれなければ敵を抑えながら今すぐそこを離れろ！」

数馬の指示聞いた全員が、一斉に退避し、それを追おうとする者を弾と、別ポイントに居るセシリアと簪が迎撃する。

そして、弾がいる屋上に、杖の様な物を持った一人の男が現れた。

「お疲れ様です、弾君」

「うつつ、学園長」

学園長と呼ばれた壮年の男、轡木 十蔵は穏やかな笑顔で弾と挨拶を交わした。

「そんじゃ一発頼みます」

弾はそう言って、屋上から出て行く。

「戦いに身を投じるのは、もう何年ぶりになるだろうか」

先程の表情とは打って変わって、その目はまるで幾千もの戦場をかけた戦士の様であった。

「トリガーオン」

手に持つ杖を前に突き出すと、その体は光に包まれ、次の瞬間には灰色のマントを纏った老戦士がそこにはいた。

「美しき花々を散らし、私の生徒達に危害を加えたその罪、万死に値する」

老戦士は低い声で、静かにそう告げる。

「貴様ら木偶人形がここに踏み入る権利などない事を、そのない頭と心に刻み込め」

そして、僅かに光を放ち始めた杖を掲げる。

「オルガノン  
星の杖」

その言葉と共に、無人機は一つ残らず切り裂かれていた。  
「うわ、やっぱ」

実はちよつと興味があつて戻つてきて見ていた弾は、ついそんな声を漏らしてしまつていた。

「あんだけやって、学校には一切当てないって、逆にどうなってんだよ」

その声に反応し振り返った十歳の顔は先程の穏やかな物に戻っていた。